
真・恋姫†無双 真ルート 妄想してみた。

とまと餅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 真ルート 妄想してみた。

【Nコード】

N7643I

【作者名】

とまと餅

【あらすじ】

恋姫無双無印と真の三国ルート（魏、呉、蜀）全てを経験した一刀が再び初めから大陸に降り立ったという妄想を書いたものです。

前回の記憶を持つ恋姫達と天の御遣いでは無くなった一刀が紡ぐ最後の物語

未来を知る三国はどのような行動を起こすのか？

三国志ではない、北郷一刀から派生した外史が始まる

…みたいな感じで話は進みます。無印の奴との決着を含め、原作とかなり違う展開がありますがエロゲーなら全クリ後はハーレムハッピーエンドでないかね

更新は月5本ペースでやっていききたいと思います。

序話

因縁との再会

始まる最後の突端（前書き）

初小説書きです

難しい

主に日本語が

三月二十日 加筆修正しました

最新話と投稿当初のお話を見比べると大分書き方が変わってるので
ご注意を

北郷一刀は凡人だった。

能力値は中の中。

例えるならエルフの剣士とかポツポとかそんな当たり障りの無い感じのノーマル属性

使えないわけではない。彼らだってやれば出来る子なんです

……それはともかくとして、まずは自己紹介から

名前は先の通り北郷一刀

性別 男

体型は中肉中背がけど最近は少し筋肉もついてきたので学生にしては見事なプロポーション 中の上くらいはあるんじゃない？

肝心要の顔立ちは一応整ってこそいるが、おしゃれ関係に気を使う性格ではないのでこれも中の中レベルぐらいで留まっている

それらを加味した上で運動神経が高いわけでも勉強が出来るわけでもないの、ごく普通の人生を歩んでいる一般的な青少年といっても差し支えないだろう

自分に不満は無かったし、誰かに迷惑を掛ける事もないから人畜無害

もしそんな自分が仮にゲームのような物語に登場するとしたら町人Aあたりが妥当な線だと思う

「ようこそ旅人さん　ここはアリ　ハンの町です」

なんてテンプレセリフをその場で足踏みしながら繰り返す役回りが相応しい一般庶民。いわゆるモブキャラ、NPC

だけとただ一点、他の人間と違う事情が俺にはあった

それは普通だった人生を大きく変化させるほどの影響力を持ち、その他大勢の人間を巻き込むような一大事件

場所は大陸　時代は西暦184年頃、いわゆる三国志を舞台にした荒唐無稽で突拍子もない夢物語に俺は何時の間にか巻き込まれていったんだ

そして今度もまた、本人の与り知らぬところで幕は上がり、女の子が主役の三国英雄伝に役者として出演する

ただ、今回は少し事情が違うらしい

俺はいつもより一年遅く舞台上上がり、天の御遣いという肩書きをなくした凡人の状態だという

しかも過去の演目内容全てを記憶したまま、他の登場人物もそれぞれ過去の出演題目を覚えているという異質さ

発案者は誰なのか？演出家はどこにいるのか？さりとて疑問は尽き

ないがすでに采は投げられ、開幕ブザーが鳴っている

……今度こそは自分の意思で、もう一度と掴み損ねるものがないように……

例え舞台を用意した人物がその真逆を望んでいたとしても、それを曲げる事はできない

俺は彼女達と約束したのだから……

これからお話するのは少し前、俺がまだ正体不明の夢という過去に翻弄され、期せず一年の準備期間を経た後の出来事

物語の始まり、プロローグといったところだ

この日、北郷一刀という凡人は再び舞台を用意され、壇上にかかる
いまだ内容を知らされない中で果たして今回は何の役に選ばれるの
だろうか？

天の身遣いとして自らの名を冠した国を築くのか

指導者となり信頼する仲間とともに生きる人生か

それとも気儘と真面目な二人の王の下で活躍する軍師？

もしかしたら霸王と呼ばれる少女の側で天下統一の夢を見るかもしれない

はたまた、これらとはまったく違う未来が待ち受ける可能性もある

今、全てを内包していた緞帳がゆっくりと巻き上げられ、最後の舞台に光が灯る

華やかで煌びやかな西洋様式で建てられた聖フランチェス科大学園

現在は共学だが、元は女子校というこの学校はどこに目を向けても清潔感が漂う独特の雰囲気がある

その中で一際目立ち異彩を放つのは純和風趣を持つ建物

北郷一刀が所属する剣道部の道場が軒を構える

実家の剣道場と違い、あらゆる箇所が磨き上げられ板の間が音を立てる事も無いしっかりとした造り

当然部員は女生徒がほとんどで一般に思い浮かべる汗臭いイメージとはかけ離れた、華やかな練習風景もまた特徴の一つに上げられるだろう

しかも今着ている胴着も含め、全ての防具が毎回学校側で洗濯され、体臭への配慮なのか、ほのかにジャスミンの香りを漂わしながら手元に帰ってくるのだ

まさにセブレイター。実家にある古臭い道場とは大違いだ

この前の夏休みに帰省した折にじいちゃんとの話をしたら、怒ってこの匂いでも付けとけ！とトイレの消臭剤を投げつけられた

…違うんだ、じいちゃん。俺がほしいのは置いて引くだけの超強力消臭じゃない

言っても許してもらえずその日はいつもの三倍辛い鍛錬を課せられ、しごき抜かれた

飯抜きで

「ふっ！ はっ！」

そんな修行の毎日を経て、今は普段の生活通り部活時間が過ぎ去った剣道場で一人汗を飛ばしながら、剣道の基本動作である素振りを繰り返す日常を過ごしている

正面素振り

上下素振り

左右素振り

傾く日差しに晒されながらのこの状況にいい加減慣れてもいいと思うのだが、無音の空間というのはどこか恐怖を感じさせる

その主な原因は普段練習に使用する竹刀と違い、本物の刀剣。模造刀でもない鋼鉄で打たれた刀を使用しているからだ

一振りする度に竹刀の三倍近い重量である鋼の重さが両腕に押し掛かり、その度に空を切るかのような鋭い音が聞こえてくるのは本物の武器である事を無理にでも実感させられる

実戦の為の武器、人を殺す事を目的とした武器

そういった事実が心にさえ負担をかけるのだろうか

「はっ！、たあ！」

そんな危険物をこの一年間、特例として竹刀より多く振り、学校で許可が出るまでは先の実家がタイ捨流剣術の道場という事もあり祖父に教えを請いながら修練を重ねていた

日常生活で絶対に使用しないはずのものに全力を傾ける日々は青春に身を傾げるこの年頃にとつてあまりに似つかわしくもないかもしれないが、今の俺はとにかく強さがほしいという焦燥感に晒されていた

「……ふっ」

一通りの動作を終え、乱れた呼吸を整えながら残心。意識を緩めなのまま二呼吸程置いてから慎重に腰に差した鞘へ刀を戻す

流れるように収まっていく刀身はゆっくりと鯉口を通過し、鰐の所でキンツと澄み切った金属音を道場全体に響き渡らせる

一瞬の快音は訓練でざわめいた心を落ち着かせるのに丁度良い

俺はいつものように収めた鞘を自分の前に平行に置き、その場で座禅を組みながら精神集中を始めた

本来ならこの場所に危険物を扱う俺の監督役代わりでもあり、実際に刀を貸してくれる不動先輩が同席していなくてはいけないのだが、本日は公然のさぼりで席を外している

その理由は恋人とのデートのため。今時ござる口調で堅物の先輩を射止めたのは同世代の男子で毎回頬を緩ませて出かけていくあの姿から推測するに大事にしてもらっているのだろう

しかしあの男、名前は忘れたがものすごい恵まれた奴である

能力的には俺とそう変わりはないはずなのに、黒髪美しい不動先輩と恋人同士になった後も、可愛らしい妹さん、同じ年の幼馴染、子犬のような後輩、息の合う同級生、美人の上級生ときやつきやつうふふな毎日を送っているらしい

.....それなんてエロゲ？

正直羨ましすぎて恨み言の一つでも言っただけ

.....

ん？ 今急に「お前が言うなっ！！」「お前もだろ！」「エロゲ脳乙w」みたいなつつこみを大量に感じたんだが、.....気のせいだろうか？

仮にそんなフラグあるならとくに恋人の一人や二人いてもおかしくないはずだ

叶うならツンデレ委員長が風紀の為とかいって一緒に通学するイベントとか、俺に思いを寄せる素直クールな後輩や八宝菜好きなヤンデレ妹、キミがキスな展開も無ければアマにガミ的な恋...ラブがプラスな事がこの先待ち受けていてほしい

.....

なんか今度は「これ以上増やしてどうするんだ！アジアの種馬のくせにっ！！」「むしろ東方不敗の種馬の方が相応しくね？」「オウ

フ、テラウマスww」なんて怨念めいた恨み節がはつきりと聞こえてきた

俺がなにか悪いことでもしたか？ あと会話すんなお前ら、特に最後の一人自重しろ

確かに今まで何度か女性とそういう仲になりかけた事はあるが全て結果を出せずに終わっていた

しかも毎回振られる理由は俺が原因

デートに及ぶ事数回、いざ据え膳という事態になる度にさっきみたいな謎の気配に襲われて気を逃してしまっ

正確にいえば殺気の部類に入るくらい強い念が身を硬直させてしまい、気味悪がれてしまっ

その度になぜか緑で黒髪な女性が頭を過ぎる

彼女はきつと怒らせてはいけない人に違いない

もし彼女とフラグが立っていたら浮気は許されないはずだから……
……………ガクガク、ブルブル

一抹の不安を振り払うかのようにかぶりを被って再度、精神を集中させる

最初に思い浮かんだのはこの状況に至るまでの経緯

そうちよつと一年前、学園に……………

「早く本編行けよww」「ちよつw男だけの回想とか無いわぁww
w」「バカなの？死ぬの？」

もう出てくんなお前ら

特に三人目、さっき自重しろと言ったばかりなのに、何で前の人間
感染させてるんだよ

そのうち視界の右から左へコメントを流すつもりか？

頭の中でF5キーを連打して彼らを強制終了させる 原始的な方法
だが一定の効果はあったらしい。戦闘機二台落とした気分で勝ち誇る

改めて

ちよつど一年前からだ。俺が女性と関係ももたず、剣の道を志しな
がら勉学に励む毎日を送るようになったのは……

あの夜、学園へ忘れ物を取りに行く途中で俺は突然意識を失い、道
の真ん中でうつ伏せに倒れてしまった

原因は不明。短い時間の後、眼を覚ました俺には前後の記憶がはっ
きりせず何が起こったのかさえ分からずじまいだった

とりあえずその日は釈然としない気持ちのまま寮に帰って寝たんだ
が、次の日、俺は自分に起こった最初の異変にようやく気付いた

「……………なんで」

なんで俺は泣いているのだろう

頬を伝い、乾く先から零れ落ちるのは瞳から止め処なく落ちる涙

その原因だといわんばかりに胸に去来する正体不明の切なさと後悔の念の嵐

感情の奔流に巻き込まれ茫然自失になった俺の口から無意識に出たのはたった一言だけ

「約束を……………守れなかった……………」

ひしゃげて霞んだ声に自分でびっくりする

誰かの側にずっといると誓ったはず……………

言葉の真意は今なお分からないままだが、この時の俺は確かにそう思い返していた

その後なんとか気持ちに整理をつけ学校には時間通り登校できたが、異変は止らずこの日の授業から困惑する事態ばかり起こるようになった

歴史の時間

やたら中国の歴史に眼が移る 特に過去、三国志の舞台と呼ばれた西暦184年以降の出来事に興味が沸き、なぜか放課後も図書館で関連した資料を読み漁っていた

体育の時間

バスケの試合等、身体能力は変わらないはずなのになぜか異様に相手の動きが良く分かり活躍できる機会が多くなった。以前もつと早く強い人間を相手していたかのように

他の授業に関しても今まで以上に集中力を発揮し、すらすらと内容が頭の中に入っていく

そんな異変に知り合いの及川曰く

「なんや急に人が変わったみたいなきり方になったな。あれか？恋が人を変えるつちゆう話か、だから頑張ってるの？まさかアツキーに続いてかずピーまでもが裏切るやなんて……」

よよとわざとらしく泣き崩れる及川を言葉通りの意味で一蹴するが、こいつの言う事に一理あるかもしれない

恋は人を変える

その表現が一番無理なくしっくりと自分の胸に収まっていく

もしそうなら俺をこれほどまで変える思いはどれほどの大きさだったのだろう

あの日あの時失った数瞬がとても大切なものに思える

だからこそ北郷一乃は日々を懸命に生きているのかも知れない

カララッ

迷いのある思考に陥ろうとした最中、乾いた音が静寂の中で大きく響き渡る

「? 誰か来たのか?」

突然の遮りで目を開けるとどうやら道場の入り口が開かれたみたいだ
真剣を使つての練習は危険な為、関係者以外立ち入り禁止のはずな
んだけど誰か迷い込んで来ちゃったのかな?

不動先輩は恋人とまだまだデートのはずだし、他の部員は全員帰宅
したはず

いや、それにしたって何かがおかしい気がする、玄関を抜けこちら
に近づく足音は空気がピリピリするような感じを纏っている

「この感じ…どこかで…」

足音は限りなく小さく、すり足のよう滑らかさを持つ、どう考え
ても一般人ではない歩法

ごくりと喉を鳴らし、何時の間にか溜まった唾を飲み込む

やがて謎の人物は道場の襖ので停止し

そして

「
久しぶりだな、北郷……………再演の時間だ」

知らないはずの男が親しげに話しかけ、襖を開け放った

見たことも無い白装束を身に纏い、背格好からすれば同世代の青年がどこか暗い笑みを含みながら真っ直ぐ俺を見据えている

ほの暗いその瞳と銀髪に目が合った瞬間

俺の中で何かが警報を鳴らし、体が理解を超えて危険を知らせる

「お前は一体……!？」

弾かれたように足元の刀を拾い上げ、抜く

見ず知らずの相手に俺は無意識に人殺しの武器を構え対峙していた

剣道の構えではなく実家で教わった剣術の構えで

この男にはそれが必要だと本能が知らせてくれた

その様子を見て、銀髪の男は嬉しそうに顔を歪ませて言い放つ

「なかなかいい反応を示すじゃないか、見違えたぞ？ 開幕は遅れたがその分準備は万端のようだな」

突きつけられた真剣に動じた様子も無く男は歌うようにセリフを口ずさむ

「それでこそおもしろいというものだ。貴様が鍛えた才、存分に発揮してもらおうぞ」

「……なんだと？」

「だが必ず最後には悲劇を与えてやろう。最大最悪でもっとも醜悪なバットエンドのために！」

男は演技するかのよう大きく腕を広げる

「貴様の全てを否定し尽くし蹂躪する。それが俺の願い！ 悲願の達成！ その為の舞台は用意した！」

「……お前は」

脳の奥が熱い、体だけでなく頭までもが危険を知らせて来ている

俺は、こいつを知っている？

「今度は俺自らが招待してやろう、外史と外史が混ざり合った世界、貴様の理想と絶望の世界、俺にとって復讐の世界へ！ 因縁の大陸へ！ 終わりの突端は、今開かれた！！」

男からの激しい光で辺り一面が包まれる

極光に包まれた俺は、なぜか、懐かしいと感じた

……

……

この瞬間、北郷一刀は物語の主演として最後の幕に上がった

それは三国志ではない、北郷一刀の物語

終わりの為の始まり

第一話 御遣いの流星 五度落ちる

眩しい光に包まれた次の瞬間、俺は荒野のど真ん中にいた

剣道場での対峙のままの姿勢で固まってしまった

あの男はどこにも見えない、むしろ知っているものが存在しないのだが

「…やだ、なにこわい」

あまりの非現実性にボケてみたが無論、状況は変わらない。見渡す限りの山と岩、地平線まで見えているそして胴着に刀持った青年が一人だ シュールすぎる

「とりあえず、ここはどこなんだろうな？日本の風景じゃないよなあさすがに」

納刀しながら考える。以外というか、自分でも驚くほど冷静だ、なんでだろ？もしかしてあの日の出来事はもしかして…

と、そこで辺りの変化に気が付いた

景色に変化は無いんだが、微妙に揺れてるな、地震か？

「て、てめえ！なにしゃがった!？」

「……は？」

思いもよらぬ人の言葉、振り返るとそこには黄色い三人組が居た。
ガタガタと震えているが

「こ、この妖術はてめえの仕業かときいてんだよ！」

「妖術？ただの地震だろ、大丈夫か？」

「いたい何をいつてるんだこいつ、格好もおかしいし、なんか野盗
っぽいな」

「兄貴ー、やばいですってーこいつが天から落ちて来た途端にこれ
ですぜ？なんか良くない予感がしますぜ」

「そうなんだな、見たところ金目の物も持ってなさそうだし早くア
ジトに戻るに限るんだな」

「バカヤロー！こんな事で黄巾党がびびってられるかあ！」

「でもよー……」

……

ちっちゃい奴と大きい奴が真ん中の男を宥めてるみたいだ、…ち
ほら聞こえる言葉を辿ると

彼ら 黄巾党？ 町へ略奪の途中 近くに流星が落ちたので見に来た 俺発見 こいつ流星？ 天界の人間？ 珍しいものもってるんじゃないか？ うまくいけば一攫千金？ ヒヤッハー略奪だらしい

……まるで夢物語だ、これじゃあ、過去の大陸にタイムスリップしてきたみたいじゃないか。

「ちつ、アテがはずれたな、とにかくだ兄ちゃん、その得物をよこしな」

「なんでだよ」

「はあ？ わかんねえのかよ、そのボロ剣で見逃してやるうっていつてんだよ、頭悪いなお前」

「そんな身なりで金なんかほとんど無いだろ、さっさと出せよ殺されてえのか、こら」

「ア、アニキの優しさに涙するんだな」

どうやら野盗には間違いない、……しかたないな

無言で刀を抜き、構える

「おいおいWやる気かよW剣が当たったら死ぬんだぜ、わかってんか？」

ヘラヘラと三人組が嘲笑っている、

(そんな事、百も承知だ…)

これからするのは命の駆け引き、どんな人間も斬られれば死ぬ、一瞬の油断で生死が別れる世界

だというのに俺の心は落ち着いていた、力み過ぎず冷静に相手を見据える

集中しながら、剣の修行に実家へ帰った時に爺さんに言われた事を思い出す

「一刀お前、……人を斬つとりやせんだろうな」

戦争を経験した爺さん曰く、命のやり取りをした者の眼をしていたらしい

無論、そんな事は無いが心当たりがあるとしたらあの夢しかない

つまり現実でこれなら

「ほづら、当たるぞー」

夢は本物で俺は

こんな世界で戦って居たのかもしれないと、
撃を受け流し思った

相手の攻

「！？こ、こいつー！」

アニキと呼ばれた男は避けられると思わなかったか、ムキになって斬りつけてくる

それを冷静に捌いていく、すると

「なんでそんな細剣で折れねんだよ！」

ますますムキになり動きが雑になってゆく

日本刀は斬る事のみの特化した武器だ、極端な方向性ゆえに鋼を断ち割るほどの切れ味を得たが、その反面、どんな名刀であろうと攻撃を受け止めれば直ぐに曲がるか欠けてしまう程の薄さだ

故に、日本の剣術は独特の進化を遂げていった、防御するのでは無く、受け流す、体捌き、相手に攻撃させず仕留める居合い術等、世界に例を見ない技が数多く存在する。

本当に相手が過去の人間ならこんな戦い方は初めてだろう。

……

……

やばい、俺かつこいいかも知れない

この雄姿を見てどっかの美少女が一目惚れしないだろうか？

なんかこう、褐色肌の肉付きのいいツインテールの少女が現れないかな？

と、相手を押し返し、辺りを伺う

そこで気付く

「地震が止まってない？……っていつかあの土煙は？えっあれが震源地なの？」

三人組の後ろから煙が迫ってきていた、とてつもないスピードで

近づくにつれて震度が上がってる気がするよつな……

「しかたねえ！お前らアレをやるぞ！！」

「了解だアニキ！」

「任せるんだな！」

なにやら縦一列に整列し出したようだが、それより前に

「くらえ小僧！！黄巾爆発気流攻……」

……

……

謎の煙に黄巾三人組が

吹っ飛ばされていった

俺の前で急停止した煙が晴れていく、その中にいたのは！？

褐色肌の肉付きのいいツインテールの…

「ご主人んさまああんっ！」

……

「やっぱりお前かあ！貂蝉！！！」

全力全開で思いっきり刀で袈裟斬りを放つ

「ふんぬらばっ！！！！」

体に当たる前に刀が弾かれてしまった

妖怪だった

この上なく化け物だった

出来れば二度と見たくなかった

ていうか、始めに思い出したのお前かよ！

切ないわ！

と、一人身悶えしていると奴の追撃が無いことに気付く、おかしい、いつもならここで

「あらん？ずいぶん情熱的なあいさつねえ、ご主人様んっ」

と踊り出すぐらいやりそうなものだが

どうやらそのまま静止したままのようだ

「え？まさか効いたのか、お、おいつ」

この人外がああ程度で死ぬはずが…

近寄ろうと一歩踏み出すと

豪快な音を立てて崩れ落ちる貂蟬

「えっ！」

肉塊の後ろに女性が居た

彼女がやったのか？

身の丈を大きく超える槍を持ち

風にたなびくボロボロの衣装

赤い髪の下から見える瞳は強い意志が潜んでいる

そして全身から溢れ出すかのような闘気

この少女は…

ああ… そうだ、思い出した、この子は…

「……………」

無言

けれど、俺には伝わった

ゆっくりと近付き、抱きしめた

「…ただいま、恋。」

「……………お帰りなさい、ご主人様……………」

抱き返してくれる恋、それがたまらなく嬉しい

先程の闘気は消え失せ、身を預けてくる

彼女こそ、大陸に名を馳せる飛將軍、呂布奉先、真名を恋という

……………やっと確信が持てた、やっぱり俺はこの世界にいたんだ

思い出せるのはまだ少ないけれど、帰ってきたんだと実感する

この三国志の世界へと。

天から落ちたる流星は

かつて世界を救った

御遣い様

頼りの綱は無かるうと

彼にはなにものにも変えられぬ

天下無双の絆あり

第一話 御遣いの流星 五度落ちる（後書き）

一気に書き上げたのでいろいろと不備があると思います、修正していきます

あと、一刀が強そうに見えますが無双するほど強くなりません。ちよっとへたれるぐらいが彼はいいと思うんですよ

第二話 観測者の変態 説明回で頑張る(前書き)

今回は一刀の立ち位置の説明と各複線の仕込み。

貂蝉はしばらく出てきません、個人的に好きなんです……

実はプロットのな段階では奴との二人旅だったとか

……うん、今の感じでいいと思います

恋、かわいいよ恋

第二話 観測者の変態 説明回で頑張る

「……………」ご主人様

愛しさで胸が溢れてくる。この気持ちを俺はずっと忘れていたのか
すぎるように頭を擦り付けてくる恋を抱き返しながら、自分の頭の
中を整理する。

この子は恋。あの有名な飛將軍、呂布と同じ名前をもつ少女。彼女
と過ごした日々が頭の中を駆け巡り以前の記憶が戻ってくる

とても懐かしいたくさんの記憶、だが同時に違和感を感じた。

当然だ。

彼女とその仲間達と大陸平定への日々を歩んでいたはずなのに、再
びこの世界に落ちて来たんだから、それにもっと大きな違和感があ
った

ともに戦った記憶だけでなく、倒すべき敵として対峙した記憶もぼ
んやりと思い出した事だ

まるで逆の立場での記憶、考えるほどに様々な記憶が浮かんでは消
えていってしまう

俺はいつたいどうなってしまったのだろうか？

そんな事を考えていると俺のすぐ近く、具体的に言くと耳元に物理

的な違和感を感じ、その方向にゆっくり首を向けた

「……………あはん」

貂蟬が恍惚の表情で迫っていた。それも恋する乙女の瞳だ。

「久々にお会いできて嬉しいわん、ご主人様」

「……………ああ、そうだな」

瞬きすらせずこちらを見つめ、どんどんフェードインしてくる

「私達の再会にお祝いをしたいところなんだけど、残念ながら時間が無いの、いくつか質問させて」

「……………ああ、どうぞ」

恋にがちりホールドされている俺に逃げ道など無かった

「それで質問てなんだ？」

「恋ちゃんのこと覚えてるのよね」

「ああ、もちろん」

「じゃあ彼女はどこに所属する将だったか言えるかしら？」

「？ 何言ってるんだ恋は蜀の將軍だろ？」

「そうね、後々にはそうなるでしょうね。ではご主人様？あなたの所属していた国は？」

「？決まってるだろ恋と同じ……………」

ここで先程の違和感が湧き上がってきた

「…………ツ　ちょ、ちょっと待ってくれ」

抱き抱えていた手を離し頭を押さえる、そうしないと立ってられないほどの頭痛がしてきた

「無理に思い出そうとしてもきつと無理よ、一旦考えるのはやめて、まずは話を聞いて頂戴な」

「なんだ？なにか知ってるのか？」

「記憶が断片化しているのよ…まあ無理の無い話でしょうけどね」
断片化？

「それが意図的なものである可能性もあるけど、大きすぎる記憶は重要度の低いものから薄れていくはず……………なのになぜ、私まで思い出せたの？」

「？　なんでって、うーん見た瞬間、すぐ名前がでたってだけなんだけど」

「そう、嬉しいわね、でも私の事よく判らないでしょ」

「ああ、名前と、とんでもない化け物つてぐらいしか思い出せない」
むしろあまり考えたくないっていうか

「そう」

悪態ついたはずの俺を咎める事無く貂蝉の話は続いた

「ほかに思い出せる人はいるかしら、ぱっと思いつく限りで」

「……………駄目だ、すごく大切な仲間がいるはずなのに……………顔も、名前もでてこない……………」

そうか、俺は仲間が思い出せないんだ。ぼんやりと戦いの日々が思い出されるだけで顔やどんな名前かさえ出てこない。ただその人達はとてもなくさん居たはずなんだ

「……………ご主人様」

黙って抱きついていたはずの恋が心配そうな目で見上げていた

「ごめんな、恋。今まで忘れてて」

「……………ううん、恋もこないだまで同じだったから……………だから、ごめんなさい」

「恋……………」

それから様々な話をした

元の世界の生活ぶりやこの世界の事、そしてなによりここに来る前に出会ったあの男について……

「そいつは左慈よ、ご主人様。」

「左慈？」

「あなたに憎悪を抱いているのよ、まあ逆恨みなんだけどね、世界への恨みをご主人様を殺す事で紛らわせようとしている男」

「……ずいぶんと迷惑な野郎だな」

「まあ、突端を開いたのは間違いなくご主人様だから、間違いでは無いけれど……まだ存在できていたのね」

「と・も・か・く、今回の外史が左慈によるものなら、キチンと話すべきでしょうね。この世界の事、観測者の事、外史と正史、突端と終端、そして北郷一刀というファクターについて」

貂蝉はいままで見た事が無いほど真剣な目で言い放った

「これから話すことは本来あなたが知ってはいけない事、それを覚悟して聞いてほしいの」

「……ああ」

「まずは、そうね、この私が何者なのかから……」

話は難しくあまりに荒唐無稽な話ばかりだったが俺にはそのどの話

にも身に覚えがあった

貂蝉曰く、この俺、北郷一刀は何度も大陸に降り立ち平定へと導いてきた天の御遣い。それも魏、呉、蜀の三国ともに、だ。

ある時は国の王として、ある時は王の側近として、ある時は軍師として

だがどんな時も俺は俺らしく、女の子、この世界でいう武将達とよろしくやっていたとか

こんな運命になったのは以前、左慈と現実世界でこの外史の象徴である鏡を奪い合った為らしい

結果的に大陸を巻き込んだ戦いには勝ち左慈は消えたが、その時の外史から派生した世界の延長線上にこの世界がある。

本来は貂蝉や左慈のような観測者では世界を創り出すのは不可能。だが奴はあまりにも派生しすぎたこの世界達の想念を利用し自分が介入できるよう調整を施した。

再びこの世界を初めから始め

その世界で主人公たる北郷一刀を殺す為に

「……………」

「どっ、信じられる?」

「…まあ、普通の人間が聞けば突拍子もない空想話だけだよ」

「信じる……というよりその話を聞いて少しすっきりしたぐらいだよ」

記憶が戻ったわけでは無いが今の説明で思い出した事がたくさんあった。そのせいかずいぶん頭も軽くなってきた、だが

「……………ご主人様は、人気者……………」

恋が拗ねてしまった

「もしかしてやきもち妬いてる？」

「……………そんな事、無い……………」

ぷいっ 口を尖らせてそっぽむく恋

うん、100%拗ねてるよね。てか難しそうな話をしてる時寝たのに、各国の女の子の話だけ耳に入ってたんだね

「そっか……………でもごめんね。いまはちゃんと恋の事見てるから」

「……………んっ」

無言で服の袖を掴んでくる。そして

「ちゃんと、恋の事好きなままでいて……………」

うん、やっぱり恋はかわいいなあ

「もう、いいかしら？」

「あ、ああ、続けてくれ」

恋を抱き込んで話を聞く体制をとる。ぎゅっと握り返してくれるのを感じながら話を聞いた

「説明はここまでだけれど、これからの行動について話すわ、正直あまり時間がないの」

「どういう事だ？」

「さっき話した男、左慈達の力のせいであまり長くこの外史に存在できないの、有事に備えてなるべく消耗を控えたいのよ。だから今後の行動についてアドバイスだけしておくわ」

「作戦か何かあるのか？」

「いいえ、ご主人様はご主人様の思う通り行動してほしいのそれがきつと最良の選択になるはず」

「まず、自覚してほしいのは今のご主人様は天の御遣いではないという事、この世界の予言では御遣いについての噂は流れてないの、たとえ名乗ったとしてもその服では信じてもらえないでしょうね」

言われて気付いたが今は部活途中だったのでポリエステルの制服ではなくただの胸着だった。たしかにこの世界の服とあまり変わりが無い

「前みたいにくましくないって事か……………うーん」

「だったらこの刀はどうだ？この時代にはないはずだろ」

日本刀。無断で持ち出した事になったがあの不動先輩から無理をいって貸してもらった刀だ。銘は無くても業物の部類に入るはずだけど

「んー、劉備ちゃんが持っている宝剣と違って刀っていうのは装飾も無いからねえ。単なる珍しい剣どまりだと思っわよん」

「……………そうか、まあしょうがないな。御遣いってのも慣れなかったし」

逆に肩の荷が下りたぐらいに考えよう

「もうひとつ、以前より世界に落ちるのがかなり遅いの、黄巾の乱はすでに収束しつつあり、各陣営は領地に戻ってしまった、どこに会いに行くのも一苦労よ」

「まして、ご主人様を覚えている人間がどれほどいるか判らない状態で行くのは危険だわ、ヘタをすれば不審者として殺されるかもしれないし」

「うっ。それはありそうだな」

脳裏に悪寒と寒気がする。たぶんそうなのだろう本能で理解した、顔の判らない誰かがやってしまいそうだった

「なににせよ、最初は恋ちゃんの家がある都を目指して、乱が起くるまでは余裕はあるはずだからボディガードとしては一流でしょ」

「そっか、ありがとうな」

「いいのよう、愛するご主人様の為ならどんな苦勞も厭わないわん」

「そ、そっか」

「それとプ・レ・ゼン・ト・よん」

天に両手を突き出し

「ぶつうううううわあああああああ!!!!!!!!!
」

突然奇声を上げる貂蟬。な、なんだ天からお塩でも降ってくるのか
!?

次の瞬間、雷鳴と共に現れたのは赤い馬だ。やたら大きい図体のわ
りに純真そうな目だな

「……………赤い……………馬？」

ま、まさかこいつは！

「……………セキト」

「やつ、やっぱり赤兎馬か」

人中の呂布、馬中の赤兎馬と呼ばれるほどの名馬じゃないか！でも
あれ？この世界じゃセキトは…

「セキトちゃんには悪いけど、ご主人様の助けになれるよう私の力で本来の姿になってもらったわ、大丈夫。中身はいつものセキトちゃんよ。」

「助け？」

「この外史は何が起こるかわからないの、創造したのが左慈達だから危険なことはまず間違いない、けれどさっき言った様に力を節約したいの。その為に、強い仲間を低コストで呼びたかったの」

「それでセキトを馬にしたのか」

「そう私が貂蝉という役を演じている以上、呂布の馬である赤兔馬とは同調しやすかったの。登場人物への干渉はとも力を使うから」

「じゃあ恋も貂蝉に？」

「……………違う……………恋は自分で思い出したから、その後コレに会った」

「そう、自力で思い出す子もいるはずよ、よくいうでしょ？記憶は消せても、心は消せないって」

「……………だったら俺は」

「あ、ご主人様はしょうがないわ。記憶があまりにも多すぎるもの。いずれ必ず思い出すわ」

「そうだな、サンキユ貂蝉、俺頑張るよ」

「うふふ、頑張つてねご主人様。恋ちゃんもよろしくねん」

「んっ」

戟を構え応える恋、セキトもまかせるといわんばかりに嘶く

「じゃあ私はもう行くけど、最後に」

「ああ」

なんだかんだで、変態な部分を除けばいい奴なんだよなこいつ

「必ず終端は訪れるわ。その時までご主人様は生かそうとするはず、そこで止めをさす為だね。でも気を付けて」

「その時まで、おとなしくしているはずは無いわ。きつとなにかを仕掛けてくる」

「分かった。注意しておくよ」

その言葉を終えると貂蟬は光になって消えた。どうやらいっぱいっぱいだっ たみたいだ

「……………ご主人様」

「そうだね、うん、とりあえず洛陽に向かおうか」

そう、これから始まるんだ

新しい外史

全てに決着を着けるんだ……………！！

「……………ご主人様……………セキトが」

「え？」

「ひひーん」

「いぐにすっ!？」

……………そっか、馬になっても中身は子犬感覚の
ままのセキトだったか……………

「……………ぐふっ」

巨馬に圧殺されかけ、気絶した俺が目を覚ました時、待っていたの
は更なる衝撃

幼女の蹴りだった

止める

寄るな

この変態

事情を知った北郷が

掴み取りたい

未来は幸せ満点

ただし貂蝉

てめえは駄目だ

第二話 観測者の変態 説明回で頑張る(後書き)

次は一刀では無く蜀のお話です。

ちなみに、蜀は全員記憶がありますが実は………みたいな
では。

第三話 恋姫達の事情 蜀編

「姉者。こつちには知ってる人はいなかったのだ。」「

小柄な少女がこちらに向かって駆けてくる。その体にはあまりにも不相应な大きな槍を背負って

「…ああ、すまない。これは礼だ。取っておけ」

驚いている行商人に少ないが情報代を払い、身を上げた。……たいした情報は得られなかったな

傍らの少女も彼女を迎える。こちらは同じく小柄な姿だがひらひらの服を着た人形のような姿をしている

ある目的の為、聞き込みをつつけこの村で合流と相成った

「…これで付近の村全てを回った事になりますね……」

「……そうだな、しかし」

ご主人様は見つからなかった

「お兄ちゃんどこに行っちゃたのだ？」

「こつまで目撃情報が無いとすると、別の場所へ降りられたと考えるべきか？」

「うーん、星さんが仰るにはここで間違い無いらしいんですが」

鈴々と朱里に落胆の表情が浮かぶ、やはり到着が遅かったか

——そう、我々は天の御遣いである北郷一刀様の捜索を行っていた
我らがもう一人の主を思い出したのは桃園での誓い直後

記憶が混乱する中、すぐに五台山の麓へと駆けつけたがご主人様の姿は無く、近隣の村に聞けば流星が落ちた噂すら無いという

だが、旗揚げ直後の我々にこれ以上人を探す余裕などありもせず、
無常に月日は流れ続け

黄巾の乱沈静化の折、ようやく流星が落ちたとの話を聞き及んだ

本来ならば黄巾の乱の後、一度離れるはずだった星を引き止め（やつも前回の記憶を持っていた）桃華様の護衛を頼み

さっそくご主人様を探しに行くと言げると、

「あいや待たれい、私の知り合いに夜空の星を読む人物がおつてな。そやつによると今、我等から会いに行くのは凶兆らしいぞ？
……………いやいやいきなり構えるな愛紗よ、私とて主は大事、すぐにでも再会したい心は同じだ。最後まで話くらい聞かんか」

奴の知人曰く、昨今の大陸にとても強い邪悪を感じていたという。
ある日空を見上げ

「もしかしたら世界、終わっちゃうかもしれないね」

あまりに突飛すぎる話に半信半疑だったらしい星だが

「あくでもご安心を、お空にとっても強い星が輝いてます、それがなんとかしてくれませよ」

「根拠？いえ、特にありませんけど？　なんだかそう信じられる感じがするからです。…星さんもそんな感じしませんか？」

問われ、思い出したそうだ。我等を導き、人々の標となったご主人様の記憶を

そこで詳しく話を聞くと

ひとつ、落ちる場所は洛陽周辺、時期は分からず

ふたつ、時が満ちればおのずと流星とともにソレは落ちてくる

みつつ、ソレは宿星であり、人の手で運命を変えるべきではない

「……まあ、そんなところだ。言って聞くおぬしではなかるうが参考までにな、留意しておけよ」

やはり本心では奴もすぐご主人様に会いたいのだろう、止めはされなかった

……言われるまでもない。なんであるうとご主人様は必ず見つけてみせるわ

そうして私、鈴々、朱里の三人は身分を隠し、洛陽周辺で聞き込みをしていた

「にゃ〜もしかして誰か知らない人についていつちやたのか〜？」

「なにを馬鹿な事を言っている、ご主人様がいるべき場所は我等蜀のみ。あちらからも向かって来ているに違いない。ここは入れ違いになったと考えるべきだ」

その可能性を考慮して桃華様と星、雛里、白漣殿には留守番をお願いしている（居残り組）

「……ご主人様の場合、目の前に困ってる人がいればそちらを優先してしまいますからね」

「それで合流が遅れていると？」

「まああくまで仮定のお話なんですけど」

「確かに ありえなくは無いが……」

あの方の人徳は尊いものだ。だがここは私達を優先してほしいと身勝手な思いが巻き起こる

「でも助けたのがかわいい女の子だったら、今頃イチャイチャしてるだけかもしれないのだ」

「ちょ、ちよつと鈴々ちゃん!？」

「……………ほっ」

「愛紗さん落ち着いて!?!全部仮定の話ですよ!」

「にははは、愛紗はあいかわらずやきもちばっかなのだ」

構えた青龍刀をゆつくり下ろす

「……………まったく、お前という奴は姉をからかってなにがおもしろい」

ただでさえ気の多いあの方だ、あながち仮定で済む話でもない
情が移って自らの近くに置く事に関しては前例が多すぎる

この私では不満なのだろうか

この思慕の気持ちは他の誰よりも揺ぎ無いもの それなのに

「?どうしたのだ愛紗?いつもみたいに追いかけてっこないのか?」

「なんだ。そんなに仕置きされたかったか、なら仕方ない……………全力で逃げるよ」

「うわわ、やぶへびなのだ!」

胸の中にわずかに感じる痛みを押し殺し、駆け出した背を追いかけ

ようとしたところで

「!?!?前に気をつけて!」

「にゃにゃっ!?!?」

「鈴々!」

こちらに気が散っていた鈴々は正面から通行人と激突してしまった

「よく前を確認しないからだ!申し訳ない、妹が迷惑をかけた」

「いやいや、謝らんでいいよ。元気の良いちみっこちゃん。子供はこれくらいでないとな」

「鈴々は子供じゃないのだ!」

「そう言ってるうちはお子様やで」

「なにを〜!」

!?!? こいつは!

暴れようとする鈴々を素早く押さえ無理やり頭を下げさせる

「お前は黙っている。人にぶつかって置いてその態度はなんだ」

「にゃ〜だつて〜」

「ええて別に、ほんと怒ってへんよ。からかって悪かったな」

「むう」

この顔、姿は間違いない

「本当に申し訳ない事をした。張遼殿どうかお許しを」

「お？うちの事知ってるん？……見たところ旅人さんみたいやけど」

「へ！？う、うむ！各地を旅する身なれどその武勇は各地に伝わっていますからな」

「あはは、照れるな！そんな有名になつとたか」

危うく不審がられるところだった

正体がばれて要らぬ問題が起こらぬとも言えないからな

……いや、相手は董卓軍の将、民の知らぬ情報が有るかも知れぬ

「迷惑をかけた身で頼むのは心苦しいのですが、ひとつ、お尋ね申し上げたい。よろしいか？」

「なんや？いきなり改まって、別にかまへんよ」

「恩にきます。この周辺で光を受けて輝く、煌びやかな服を纏った青年を見なかつたでしょうか？」

「輝くつて、そんな服ほんまにあるんかい」

「ぼーりえすてーるといふ材質らしいのですが」

「……………悪いけど知らんなあ、そんな服着とつたらすぐ噂になるやろ。うちんとこぎょうさん情報入ってくるけど聞いたことないで」

「そう、ですか　ありがとうございます」

洛陽の情報網でも分からんか…嘘の可能性もあるが管絡の予言が広がってない以上匿う理由もなからう

「せっかく頼ってくれたのに役に立てなくて、えらいすまん」

「こちらこそ、重ね重ねすまなかった。……………我々はこれにて。鈴々、朱里行くぞ」

「そんな急がんでもいいやん。……………なあ　関羽」

「!?!」

「いや、思った通りのべっぴんさんでうれしいわ。　うん？ばれな
いと思つてたか？冗談やる。姿を隠しとっても溢れ出る威厳がある
さかいな、ただの旅人ってことない」

威厳？そんなものが出ていたのか？

「そこに、その美しい御髪に美貌。そんな人間が槍持つたら何処
の誰かわかるもんやで」

「……………私を関雲長と知ってどうする」

「なにもせんよ、敵対する理由がないやん。ただウチの憧れやっただから興味があるんや。いや〜ほんと嬉しいわ」

「……………どうやらこちらに危害を加えるつもりはないようだが

「……………」

「え、なにその反応。なんでちょっとずつ離れていくねん」

むこうに非は無い、極めて普通？に接してきているのだが…………

「……………」

「愛紗？」

「愛紗さん？」

「……………この女は私の事を

……………

……………

「…お」

「きゃっ」

微妙な空気が流れ始めたその時、突如軍馬が突っ込んでくる

「張遼殿！！火急の件にて失礼。至急洛陽へご帰還ください！！」

「つつ！危ないやろ！いつたい何事や」

鎧から見るにどうやら薫卓軍の伝令のようだ。息を切らしている

「お耳を……………」

「……………！？なんやと！月が！？いつたい誰の仕業や」

「分かりませんが、ですが全將軍に召集令が掛かっています、一刻も早く入城を」

「ちっ、ほんまになにが起きてるんや。 関羽。悪いけど急ぎの用や、…またどこかで会おうな」

ひらりと、随行していた馬に跨り一目散にこの場を後にしていった

「いつたいなにが起こったのだ？」

「…どうやらトウタク軍で問題が起こったようですね。 私達もそろそろ戻らなければ」

「えっ！？ お兄ちゃんはどうするのだ、このまま帰っても収穫無しなのだ」

「記憶が正しければ、まもなく袁招が洛陽への進軍を提案する頃だ。その前に軍備を整えねばならん」

「ここで私達が勝って名声を得なければ、他国に飲み込まれてしまいかねませんからね」

「うっせつかくお兄ちゃんに会えると思ったのに。愛紗は本当に納得できるのか？」

「…いまは天運が無いと割り切るしかあるまい、ここで我等が滅んでは元も子もなかるう」

あの方が帰ってくるのは確実、ならば機を待とう

「？ 前なら、なんて薄情な！お前達の忠義はその程度か！…と
かいいそうなものなのに、今の愛紗はやけにあっさり引くのだ」

「……………あの方への忠義はいつでも変わらん。がそれで私が危険な目に会えばご主人様は悲しまれるに決まっている。……そんな心配は掛けたくない」

ああ、そうさ

そう、きつとあの方は誰よりも私を気に掛けているはずだから

「？やっぱり今日の愛紗は変だ！良く判ないけど、なんかおもしろくないのだ、おかしいのだ！」

「鈴々ちゃん……………」

いかぶしげな二人をよそに遠くを見つめる愛紗

ここに来る前にもその兆候はあった。

どこか達観した瞳と口調、妹分である鈴々は一際大きく不審を感じた

「さあ鈴々、朱里、桃華様の下へ戻るぞ」

けれど理由は解からず、しびしび帰路に着く。

そこに何者かの意思が加担しているのに気付くわけも無く

「くそっ！無事でおつてくれよ！月、詠……………一刀！！」

馬を叩き全速力で洛陽を目指す張遼は知らない、思い出せない

叫んだその中に探し人がいる事に

「……………フム、危ないところでしたね」

四人が去った道路の隅で声がする

誰もいなかった物陰にそれはじわじわと染みのように人が形作られていった

「まさかここまで探しに来るとは いやはや大した影響力ですね北郷一刀という人物は」

現われたのは白い装束に眼鏡をかけた青年。細い目からは暗い怨念を感じさせる

…流星についてはカンロも含め噂が広がらないよう留意したはずですが

「話を聞くに蜀に関しては、全員記憶が戻っていると考えたほうがいいですね」

忌々しいまでの影響力。記憶操作の方は念入りに手を加えたつもりだった。それでも綻びは出るということだろう

「この事に関する計画の変更はまあ、別段気に掛けることはないでしょう 保険がキチンと働いているのを確認できましたからそれでよしとしましょう」

北郷一刀に演じさせる物語は悲劇でなくてはならない。でなければあの男は報われない

「報われる……私達がそう考えるのも滑稽ですね」

呟きとともに男の姿も消えていく

「さて、私は私の仕事を続けますか」

運命の齒車はいまだ、光を妬む脚本家の元で廻る

第四話 飛將軍の特訓 一刀、実力を知る(前書き)

前回、蜀編より少し前のお話です

第四話 飛將軍の特訓 一刀、実力を知る

ねりきつく

ちんきゆうきりもみにかいひ

…聞いただけではこの技の凄さは伝わらないだろう

あえて説明するとしたら

…とにかく痛い

……異常に痛い

……空前絶後に痛い

マジパネエぐらい痛い

食らったら思わず、空に飛び上がり爆発してしまいそうな蹴りだった

なぜこんなのを食らってしまったのか

理由は勿論、俺にある

不可抗力とはいえ彼女には申し訳なさすぎる

「ふん！帰ってきたのですかボンクラ。お前なんてどうでもいいのですが、それで恋殿が悲しまれるはねねの本意ではないのです。だからまあ、歓迎の言葉くらいはかけてやってもいいですよ」「

なんて、小柄な彼女が上から目線で話しかけてきたところに

「……………えつと悪いんだけど。君はだれなのかな？」

思った事をそのまま口に出してしまった

……………ここでもっとオブラートに包んだような返しは出来なかったのが失敗だった

「！！……………い、言うに事欠いて……………うう……………うわあああああああああん！！！」

いきなり泣き出した彼女に困惑し無防備に近寄ったところへ

「うわあああああん、こ、このド畜生があああ！！！！」

マスクドなライダーもびっくりな飛び蹴りを貰いましたとさ

…

…

…

……………おかげで陳宮こと、ねねの記憶が戻ったのは幸いだっただが

…

まあそんな事もあったが無事(?)洛陽に到着した俺は、客将とし

て薫卓軍に所属する事になった

それから日は経ち、軍の演習場でのこと

護身の為と、恋と実戦形式の組み合いをしていた

「……………ちゃんと、避ける」

「だったら手加減をしてくれ！……………どわっ！」

暴風のような横薙ぎを刀でなんとか逸らす、無論威力を殺しきれぬわけもなく、体勢が崩される

「……………次」

「だからもうすこし力をだな……！！」

続けて迫る烈風の突きを体を無理やり捻って避ける、避ける、避ける。

「……………っつーこの……！！」

止まらず、恋の疾風の連撃に晒されていく

攻撃の軌道を先読みしつつ、牽制の動きを絶えず折り交ぜ、なんとか直撃を防いでいるが

例えるなら台風

巻き込まれれば一瞬で勝負は付いてしまう

(……………「」でギリ貧になるくらいなら)

押し込まれて動きが封じられる前に、機先を取る！

「
せいっ！」

「!?!」

戟が戻る瞬間を狙い、手首のスナップを効かせた小手を放つ

これは貰った！

自分でも驚くくらい抜群のタイミングで先を取ったはず

……………

だが、

「……………残念」

「ぐはっ!?!」

天下の呂布には届かなかった

「……………大丈夫？」

心配そうな目で見上げる恋に、笑みを返して無事を伝える

「やっぱり強いな、稽古をつけて貰ってからいくら経つけど、まるで歯が立たないなあ」

初めから恋相手に勝つ事は考えてないが、それでもやはり悔しい

現実世界で鍛えてきた技術は無駄だったんだろうかとさえ思ってしまう

「……………ご主人様は、強い」

慰められてしまった

「……………嘘、とかじゃなくて」

独特の間のせいでお世辞かどうか判断に困る

「でもさ、全然良いところ見せてないし」

「……………少し本気出さないと、恋、負けるから」

「……………でもお少し何でしょう？」

「……………じゃあ、割と、本気？」

力の程度がよく分からなかった

「ご主人様、変な動きとかするから……………戦いにくい」

「そこが俺の強さにつながるわけ？」

代々伝わる実家の剣術を、変な動き扱いされるのは心外だが

コクリと頷き、話は終わったとばかりに俺の膝で昼寝をしようとする

(……………一応、無駄じゃ無かったってことか)

恋の頭を撫でつけ、自分の戦い方を思い浮かべる

北郷一刀は基本、後の先を取る戦いを重視している

勢い余って相手を傷付けないように

故に、相手の行動、心の動きを読む事が最重要となる

動きが変、というかあらかじめ牽制を仕掛け、相手の動きを制限するのがさっきの動きなんだけど

(やっぱり実戦経験が無いのがまずいのかな)

その為の特訓とはいえ相手が恋だけでは、どうしても動きに偏りが出てくる

「どつしたもんかな……………」

薫卓……………この人物とも再会していない

どうやら政務が忙しいらしく、ねねさえも謁見できないらしい

……正直まだ薫卓ちゃんの記憶は戻ってない

会いさえすれば思い出すと二人は言っていたが

自分の記憶、乱世を生き残る為の力、そのどちらもまだまだ足りていない

無力感に苛まれ、ふと空を見上げる

「……………世界を救う、か」

道は果てなく、自身も見えず、けれど立ち止まる事は許されない

「……………少なくともこの顔は守って行きたいな」

緩みきつた恋の寝顔に笑顔を向けて、そう誓う

「……………なかなかいい雰囲気やないの、北郷」

「うわっ！……………ってなんだ張遼か」

いつのまにやら傍らに女性がいた

そういえば隣の演習場で調練していたみたいだったな

「まつさかあの恋がこないにも懐くとはなあ、どうやって誑し込んだん？」

「失礼な事いうなよ、ちゃんと手順踏んでだよ」

「まあ無理やりなんてやったら、シバキ倒されるのがオチやろうしな」

ニヤハハと笑う張遼

将としての顔見せ以来、頻繁にこちらに会いに来るようになりだ**いぶ**経つが

彼女曰く

「なんか気になるんよ、あんたのこと」

とのこと

恋達によると後に敵になる相手らしいが……

「いややわー、そんな熱い視線で見られたら恥ずかしいやん」

クネクネと身を振る

「全然、そう見えないけどな」

バツサリ否定した

……ノリのいい友達みたいな奴なんだけど

「それはそうと調練はいいのか？まだ終了時間じゃないだろ？」

「あーそうしたいのは山々なんやけど……」

どうも歯切れが悪い

「……………兵士全員のしてもうて、相手がおらんのや」

「……………」

調練に参加した兵士は百人以上いたはずだが……

「で、暇になってどうしたもんかなあと、ぶらついたら二人の稽古を発見したんや」

とするとだいぶ前から見てたな

「いやはや、最初はとても戦う人間には見えへんかったけど、なかなかどうしてツワモノやね」

「まじでー!?!」

「……………まじってなんや?」

「いや、それは置いといて、俺が強いつてホント?」

恋は身内の鼻肩目があるからいまいち判らなかつたんだけど、張遼のお墨付きなら自信が持てる

「おう、そうや。そもそも恋相手に勝負になつてる時点てたいしたもんや」

俺、軽く感動

「まあ、そういうことで……」

笑顔のまま彼女は槍を構えた

……

槍！？

「うちの相手してくれへん？」

……まあ、悪い予感があったけど……

練習相手が増えたと考えよう

「もちろん、お相手するよ」

いくら時間があっても無為に過ごす道理は無い。覚悟を決めて立ち上がる」とすると

「……まだ、お昼寝」

寝惚けた恋に引っ張られ、肩が？げかけた。

天下無双と一騎打ち

襲う豪撃なんのその

倒れた程度で負けられぬ

守る為には弱音は吐くな

弛まぬ努力は身を結ぶ

多少の受難はつきものだ

第四話 飛將軍の特訓 一刀、実力を知る（後書き）

いまの一刀は恋姫達の為、というより世界の為、自分を鍛えていきます。

記憶が完全に戻っていないので自分の立脚点を見失ってる状態。
。なので少し焦った行動が多くなっています

第五話 風雲急の洛陽 かくして始まる予定調和

洛陽よりいくらか離れた山林で一人、北郷一刀はいた

恋や張遼と予定が合わない時は、こうしてセキトと遠乗りがてら素振りをするのが習慣となっている

今日もまた、そんな日だったらしく木漏れ日の中、素振りを繰り返していた

型の反復練習ではなく、相手を想定しての剣を振り続ける

誰に教えられたか、現実世界からこのやり方が一番しっくり来ていた

「 フウ」

乱れた息を整え、再度仮想の相手を見据える

道場でも何度も繰り返した攻防の数々

(……………)

基本、槍を多用する戦場では刀のリーチ差は致命的だ

一方的に射程外から攻撃されてはなす術も無い

唯一のアドバンテージ、密接時の斬り合いの優位も接近ありけりだ

「 ハッ！」

先日の張遼との訓練では、ある裏技を使ったおかげで一本取れたが、それでムキになったのか

「なんやねん今の！？ずっこいわ、もういつペンや！！」

なんて文句を付けられ、ボコボコになるまで扱かれた

やはり奇を突かなければ、名立たる武将達への勝機は無い

ただなにか感じるものはあったのか、彼女は俺に真名を預けてくれた

その日から一刀、霞と呼び合う仲になり、訓練によく付き合ってくれる

基礎鍛錬は欠かさず、実力さを覆す為の奇策、戦法も練っておかないと……

「……………ふう」

汗だくになった顔を胴衣を拭い一息つく、太陽は頭の上を追い越し
さんさんと輝いている

昼過ぎになったのかちょうど腹が減ってきたな

「んーそろそろメシ食いに帰るか、セキト」

「ぶるるるる」

小川で遊んでいたセキトは待つてましたと言わんばかりに嘶く

「あはは、大きくなってもセキトはセキトだな」

濡れたままじゃれつく体を撫でる。天下の名馬もその持ち主と同じく、日常生活ではまったく警戒心が無い

元が犬だったせいか、尻尾を振ってぐるぐる回っている

「よしよし、じゃあまた背中に乗せてもらおうよ?」

「ひひひひひん」

馬具を着せて、いざ出発しようとしたその時

「北郷殿!北郷殿はどこに居られる!」

静かな木々を割って、自分の名を叫ぶ声がした

「?なんだいったい」

「ひひん?」

ずいぶんと焦った声色だ、馬轍の音とともに真っ直ぐこっちに向かってくる。まあここに居る事は伝えてあるから洛陽の関係者みただけだ

ハテナマークを浮かべる俺とセキトの前に、馬に乗った兵士が一人現れた

「！！やはりここに居られましたか！訓練の最中申し訳ありません。ですが急ぎの用件がありまして」

「急ぎ？」

何だろう、腹の減った恋でも暴れ始めたかな

「洛陽にて謀反で御座います！！」

「……………は？」

一瞬、思考がぶっ飛んだ

「えっ、ちよっ、どういうこと!？」

「先程、宮中にて薫卓様が拘束されたのです。犯人は全武将を集結させよ、との事です。さもなくば薫卓様の命は無いと脅され……………」

待て待て、なんだそれ。内乱?いやそれはおかしいだろ!?

ねね達によれば、袁招の奴がでっち上げの戦を起こすまでたいした事件は無いはずだ

むしろ謀反なんて大事件黙ってるはずがない!

「急ぎ入城を！張遼様はすでに向かわれています」

っと今は疑問に思ってる場合じゃない

「よし！ 行くぞセキト！」

「ヒビーーーーン！！！」

ともかく現状把握だ、ひらりと馬体に跨り、全速力で林を駆け抜ける
さすがは赤兎馬。こつこつという時は心強い、ものすごい速度で景色が流
れていく

すでに遠くなつた兵士さんを置き去りに、真っ直ぐ洛陽を目指す

あっという間にたどり着いた目的地、洛陽。

厩にセキトを繋ぎ、急いで玉座の間に向かう

突然の異変に城内は大慌ての様子、長い廊下の中動揺する女中や怒
号を飛ばす兵士に、さつきから何度もすれ違う

なんだかんだで一度も会う機会が無かつた薫卓ちゃんにまさか、こ
んな形で再会しようとは思っても見なかつた

焦る気持ちを抑えきれず走ってたどり着いた扉に触れる

その先で最初に目に映つたのは……………

焦点の合わない瞳で玉座にうなだれる少女と

その首に閃く銀色の光だった

「月!」

咄嗟に声が出る

月 これが彼女の真名。そうだ俺は彼女を護ると誓ったんだ、なのにこんな危険な目に合わせているなんて!

彼女の首元にある銀、つまりは刃の持ち主を視認してさらに驚く

「……………なんで……………詠が」

詠 それは彼女の真名。月を護る為なら、その命さえなげうつ覚悟を持った少女

(いったいどうなってるんだよ)

謀反だけでも驚きで頭がいっぱいなのに、更にはその首謀者が人質の親友なんて意味が判らなさすぎる

「北郷!こっちに来るのです!」

呆然とする俺に掛かる声、前には恋、ねね、霞がいた

正面に向かう途中、玉座の間を確認する。人は少なく、十数人。人払いをしているようだ

「これはいつたい……大体なんでこんな事が！」

そんな興奮する自分に諭すように霞が

「気持ちは分かるけど、一刀、よく見てみい、詠の目を」

「目？」

「……………正気じゃ、ない」

確かに、月と同じくくすんだ瞳だ。まるで人形

「ねね達が玉座に来てからずっとあのままなのです、こっちの声に動かず、反応もしない。あの体勢で立ち尽くしたままなのです」

「……………なら誰が俺達を……………」

正気じゃないとしたら、誰が召集の号令を出したのか？他に首謀者がいるのか？

「揃ったようだな……………」

「！？」

突然の声、それは玉座の後ろからした。気配は一人じゃない！？

湧いて出たように気配は増え、数は二十人程、全員が白装束を纏っていた

「要求はみつつ、逆らえば董卓とこの文官の命は無いと思え」

こちらの意見は聞かないといった声色で話しかけてくる白装束

「ひとつはこれから起こる戦に全力をもって迎撃せよ、逃げる事は許さん」

これから起こるって……なんでそんな事知ってるんだ

「ふたつめは、北郷、貴様は最前戦にて戦ってもらおう」

「なっ!?!」

「!?!」

「なんですと!?!」

「みつつ、呂布、張遼、陳宮の三名は北郷に力を貸す事まかりならん」

俺一人って事か!?!

「以上だ、みつつが守られれば二人は解放しよう」

「ちょ、ちょっと待たんかい!これから始まる戦?一刀が前線に出る事が条件?いったい何者やお前ら!!」

怒号する霞、だが

「質問は受け付けぬ、ただ履行せよ、われらはいつでも監視してい

る

「言つと姿が消えていく

「……………なんやねんほんま、これは夢か？」

「…そうだったらいいな」

本当に姿が消えた白装束。残ったのは依然と動かない月と詠

「妖術使いなんて初めて見たのです」

「……………まあそう考えるしかないよな」

突如現れ、人を操り、姿を消す。どう考えても常人の及ぶところじやない

ただ、なぜだろう？これをどこか見たような

「奴らのいない今のうちに、どうにか出来ませんか恋殿？」

「……………駄目、気配だけ残ってる」

「姿だけ消して近くにおる、いうことやな。うちと恋でも目に見えんのはきついで」

確実に救うとしたら、危ない事はできない

やっぱりこのまま従うしかないのか……………

「これからの戦ってのはやっぱり袁招の事やるうな」

「あ、ああ、そうだろうな」

洛陽の事件は歴史に残る程のものだけど、霞は当然知らないよな。袁招が準備しているってのは以前から軍議で聞いていたし

「でも、一刀をわざわざ指定してくるなんて……なんか心当たりでもあるか？」

「……ないよ、妖術使いに知り合いなんていないから」

「……………ご主人様」

心配してかきゅっと袖を掴んでくる

「大丈夫、なんとかしてみせるさ」

こういふ事の為に、修練を積んできたんだ。それを生かせる時がきた

彼女達を守るために……………

「ならば私が力を貸してやろう!!」

……

……

「戻って早速軍議を開くのですよ」

「せやな」

「……………」

「つてまてい!!無視をするな!!」

やたら声を上げる女性がいた、実はずっとここに居たのだが誰も触れなかった

白装束さえも

「なんや華雄、いたんか」

わざとらしく聞く霞

「おったわ!!ていうか一度目あっただろ貴様!？」

「そうやったけ?まあそれは置いといて、なんか用？」

「だから力を貸すといっておるのだ!!北郷に!!」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「な、なんだその反応は、私は力を貸すなどは言われなかったぞ」

……………まあそうだな、気配も変化ないからOKみたい？だけど

なんだろ？すごい嘸ませ犬臭がする

正直ありがたいけど……………」

そこまで思って、三人の沈黙が俺に向かってるのに気が付いた

「……………」なにか怖いですよ？御三方？」

「あの華雄が助力するなんてなあ……………」

「普通だったらありえないのです」

「……………」手籠め？」

直球すぎる！？

「ちっ。ちがっ……………」

「なにをいう！私と北郷の間には愛がある！手籠めなどではないわ！！」

嫌な意味でキラークラスがきた！？

「……………ほう？」

「……………やっぱり、なのです」

やっぱりとか止めて！

「お前を守る為なら、この華雄、全力を掛けよう！！」

「……………」

「……………」

「……………」

以外な助っ人は頼もしいが、現状の修羅場に援軍は来ない

かくして、北郷一刀の戦いはすでに始まっていた

世界が決めたこの騒動

抗う術は限られる

けれども只じゃ従わない

見せてやるつぞ

男の甲斐性

ここが初めの

正念場

第五話 風雲急の洛陽 かくして始まる予定調和（後書き）

どこでもフラグたてる一刀さんマジパネエっす

第六話 十文字の北郷 泗水関に現る

「ここから見ると壮観だな……」

砦の物見櫓から見下ろす軍勢はまるで津波。はためく軍旗に、揺れる槍。それら全てがこちらを指して進軍している

迎え撃つのは董卓軍。前方の津波に比べれば、小波程度の戦力。ただこちらには難攻不落と名高い虎牢関や泗水関がある。籠城し、敵の兵糧切れを待てば、とりあえずの敗北はないはず

白装束の定めた全力で迎え撃つ、というのがどの程度になるかわからない以上、全力を尽くして抗戦しなくてはいけない

だが……、

「いざ行かん！！私の武を諸侯連合に見せ付けてくれるわ！！」

案の定、華雄は突撃の姿勢を見せていた

「落ち着け華雄。俺達は防衛戦をするんだぞ？自分から出て行ってどうするんだよ」

「それでは私の気がすまん！！将たるもの、最前線で戦う事に意味がある！！」

まさしく猪武者、といった感じだな。戦い＝突撃みたいな短絡思考に頂垂れる

「いいか、もう一度言うぞ？すでに説明回数は十回じゃ済まなくなってるけど、よく聞いてくれ」

分かりやすいよう噛み砕いて解説しないとな

「戦力、つまりは兵の数はあちらが圧倒的に上、将も大陸に名を馳せた奴らばかり、正面から当たっても勝機は無い、いいか、まるで無いからな。戦力差が有りすぎる。だからこそ、泗水関で籠城するんだ。分かるか？その為の準備もしただろ？自分勝手な行動で、月詠を危険な目に合わすのは本位じゃないよな？」

簡単に、かつ丁寧に言葉を並べて説得を続ける。ここには副官や兵士もたくさんいる、周りの兵士は「なんとかしろ…」みたいな、冷やかな視線を送ってきた。

一方、華雄とその部隊連中は似たような思考回路をしているのか、全員不満顔だ

視線の大半は俺、北郷一刀の部隊兵、霞や恋のところから人員を割いてもらった臨時の人達。せめてと優秀な人材を寄越してくれたが、正直、信頼は得られてない。まあ、武勳一つ無い将にそれを求めるのは都合が良すぎるな

「もう理解したよな？ここで取る最善策は？」

「圧倒的不利を覆す私の武で、戦いを切り開く！！」

はい、全然聞いてませんね。完全に突撃ありきで話を持っていかないでほしいです

だってほら、うちの兵士さん達の視線がさらに冷たく……俺のせいじゃないだろ、そんな目で見ないで！

……このままじゃまずい。兵の信頼も、華雄の制御もままならない状況じゃ勝てる戦も勝てない

なんとかして猪を繋ぎ止めないと……

「こつなつたら。最終手段だ」

「ぬ？」

泗水関の戦い、落とすわけにはいかない。仕込んだ策を完遂する為にも、自分の全てを費やし、最高の結果が出るように最善手を尽くす！

「副官さん。悪いけど後頼めるかな？」

「？はあ、手順は聞いておりますが……」

突然声をかけられた男、副官のおっちゃんはぎこちなくも応えてくれた

「ならよろしく、今から華雄を大人しくさせるから。連合がアレを出したら教えてくれるかな」

むんずと華雄の手を握り、目的地を目指す

「ま、待たんか北郷！！私をどうするつもりだ！？」

手を引かれ、ズカズカと進む俺に訴えかけてくるが、ここは無視させてもらう。正直今からめちゃくちゃ恥ずかしい事をするんだ。兵の信頼をすぐ得る事は出来なくても、確実に、お前は押さえ込ませてもらう

辿り着いたのは将軍用の寝室。無論個室。当然する事ひとつ

「……………北郷……………まさかとは思いが……………」

「そのまさかだ」

すかさず唇を奪う

「んむ！？ちょ、ちょっとまで！！こんな真昼間から……………んんっ……………んあっ」

これしかない。これしかないんだ。力の無い俺は、男としてお前を止めさせてもらうぞ！

持久戦だ。覚悟しろ。策が成功するまで、俺とせいK…（割愛）

情けない手段だが文句は言わせないぞ。ほかに対処法があるなら教えてくれ！！

「……………すごい漢だ」

閉じこもってしまった二人を確認して呟く副官。まさかあの華雄將軍を手籠めにしていたとは……

……一刀の知らないところで兵の信頼度が上昇していた

一方、その頃連合軍では、劉備こと桃香の軍勢が、泗水関前に到着していた

「ふええ……やっぱり大きいね、泗水関って」

「鉄壁の防御を誇る砦ですからな、厚く、高い塀が崖の間を隙間無く塞いでおります」

「籠城するにはもってこいつてことだよな」

関心する桃香に星と翠が応える。前回の記憶を持つ二人はこの時点で、蜀軍として合流していた

「ゆえに攻める側の私達は苦戦するでしょうね」

「あわわ……また袁紹さんに先陣を切られましたなあ……」

「承知していたとはいえ、腹立たしいな」

自軍陣営にて作戦会議を開いていた全員から溜息が漏れた。あいつも変わらぬ袁紹に呆れ、記憶うんぬんを問いただすのも忘れてしまった連合の軍議。あやつはどんな記憶があっても変わらない気がする

「しかし状況が前と同じなのは僥倖。策は立てやすいですな」

いかに泗水関といえど、それを守る将が華雄では対策は立てやすい。やつの自尊心を煽り、誘き出せばいいのだ

「よし、さつそく始めるぞ。張飛隊は左翼、趙雲隊は右翼に展開。砦を囲め！関羽隊は私に続き、正面から行くぞ！！」

「おおっ！！なのだ！」

「任されたぞ！」

「「「オオオオオオオオ」」」

兵の士気も高く、万全の態勢だ、すぐさまカヲを着けようとしたところに伝令が駆けつけてきた

「報告！！泗水関にて怪しげな動きが！」

「怪しい動き？」

兵といっしょになってエイエイオーしていた桃華がオウム返しする。出鼻を挫かれた形になった愛紗は露骨に嫌な顔になる

「………いつたいなんだ。華雄がもう出てきたのか？」

「いえ。どうやら砦の上部に柵を設置しているようです」

「柵、だと？　いったい何の為に？」

「砦の上ってあんま意味ねえよな？」

「もとより、壁があるからな」

突然の奇行に疑念が広がる。柵の設置という不可解な行動より、それが華雄がとる行動とは思えない

「どう思う？　朱里ちゃん、雛里ちゃん？」

「ええっと、柵についてももう少し詳しく教えてもらえますか」

「はい、騎馬を防ぐような類ではなく、こう、衝立で困った壁のよ
うなものです」

「……………うーん」

「あわわ……………」

考え込む二人、どうやら時間がかかりそうだな。ここは難しく考え
ず突破してもいいと思うのだが……………

皆が考え込む中、鈴々が伝令に話しかけた

「向こうにいるのは華雄だけなのか？　他に旗は見なかったのだ？」

「なにを言っている鈴々、忘れたのか？　ここを守っているのは……………」

「あっ、はい実はもうひとつ在ります。旗は一つ二つしか無かったのですが」

「?どんな旗だ?」

「……どうせ、数合わせの雑将だろう、たいして気にかけるものではない……」

「色は白、十文字の旗です」

……

……

……

……えっ?

「なっ!?!?」

「しっしっ!?!?」

「っしっ!?!?」

「あわわ!？」

「はわわ!？」

「本当かよ!？」

「まさか……お兄ちゃんなのか!？」

全員が目を白黒させ、一瞬でパニック状態に陥る

なんで、そんな……こんな、こんな事があつて堪るか!!

状況が掴めない兵達を置き去りにして、困惑した頭で、砦を見据える

正直、理解が追いつかない……

……

ご主人様……あなたのですか?……

呟いても届きはしない。立ちそびえる砦がとてつもなく大きく感じる。まるで、いまの私達にもある見えない壁のように……

勝利を疑わなかった気合がどんどん小さくなるのが分かる

このままでは……

……

……

泗水関の戦いは、すでに始まっていた。

男の強さは一つじゃない

それも立派な才能だ

近くに修羅がいるけども

知らぬ、存ぜぬ

貫こう

ばれたら後は

合掌のみ

第六話 十文字の北郷 泗水関に現る（後書き）

作者が書きたかったトコその一。
こついで展開は燃えるよね？

第七話

前哨戦の始り

燻る災渦は仰ぎ見る（前書き）

色々勉強中、書き方は少しずつ変わっていくと思いますよ？

第七話 前哨戦の始まり 燻る災渦は仰ぎ見る

やはり、前回のようにはいかなかった。

砦の向こうにご主人様が居る可能性がある以上、すぐにも駆けつけたい一心だったが、我等は兵を率いる将。敵に向かって伺いを立てる事などあってはならない。逸る気持ちを無理やり引き締め、泗水関攻略の一手として、華雄への挑発を続けていたのだが……

「全然出てこねえな……怖気づいたとも思えないし、やっぱ、ご主人様が引止めてんのかな？」

本陣天幕にて全員揃ったの会議中、溜息とともにうなだれる翠

翠の言う通り、二日に及ぶ挑発行為にも、扉を開く様子は無かった。まさか本人がいないのではと、問いかけてみたが、こちらの声に応ずる声が聞き取れる。本人がいるのは間違いは無いようだが……、どうもおかしい。なんとというか、こっ、艶がかったというか、妙に色っぽい感じの声色ばかり返ってくるのだ。

……まさかな……

浮かび上がる疑問にこめかみがピクリと動く、憤慨の気を泗水関に放っている間に、翠の疑問に朱里が答える

「ご主人様の所在についてはなんとも……あの衝立のせいで、砦内の様子が確認できないんです。かなり高く展開していて、旗ぐらいしか見えないんです」

「旗は見えても、将は見えず、か。その場合、陽動作戦には有効そうだが、わざわざこの状況で実行する意図が掴めんな。……ふむ、離里殿、斥候からの報告はどうでしたかな？」

朱里と星の二人は、別の方法で砦攻略の策を練っていたが、どうも芳しくないようだ

兵力の劣る我が軍に、正攻法の城攻めは不可能。誘き出しが失敗した場合に備え、いくつか策は用意しておいたが、ご主人様という要素が存在する以上、ただ砦攻めを実行するにはいかず、まずは情報収集となったのだが……

「はい、斥候さん達の話では、目立った行動は起こしてないです。……ただやっぱり内部の状況は掴めないままです」

「……砦の中でなにが起こっているのか。気になるところだが……これ以上は待てんな。このまま陣を展開しているだけではいずれ、袁招が痺れを切らし突撃命令を出してくるやもしれませぬ。……桃華様、砦攻めの許可を。ある程度兵の損失を覚悟してでも攻め入るべきです」

「……うーん、やつぱ、そうするしかないよね。なにがあるか分からないけど、このままじゃみんなのご飯無くなっちゃうし、まずは行動しないと！」

小規模の軍隊である我等にとって一番問題なのは兵糧だ。調達すべき農地が少なすぎる為、遠征の際、十分な蓄えを用意できなかった、そうなった以上は短期決戦こそが活路。この戦いで勝利し勇名を馳せねば、国を広げ力を得る機会を失ってしまう。

「ならば桃華様、この関羽におまかせを」

青龍偃月刀を掲げ名乗り出る

「おいおい、城攻めを進言したのは私だぞ？ここは私が出てしかるべきだろうて」

「にやにや！鈴々が行くのだ！待機ばかりでもう暇で暇でしょうがないのだ、もう我慢できないのだ！」

蛇矛を振り回しながら鈴々が地団駄を踏む。長い進軍とこの二日間で大分ストレスが溜まったようだ

「それだったら俺もこれ以上大人しくしてらんねえよ」

「駄目なのだ、鈴々、鈴々が行くのだ！もう決めたのだ！…ねえねえ桃華お姉ちゃん、いいでしょ

？鈴々ちゃんと結果を出すのだー」

駄々っ子のように桃華様の腰にしがみつき、上目遣いで懇願してくる。こういう子供っぽいところを直せと常日頃言っているのにこいつは……

「おい鈴々、自分勝手に話を進めるな。この戦はとても重大な意味をもっているのだぞ、暇だからなどという理由で選んでくれとは何事だ」

ぶー、頬を膨らませて無言の抗議を表してくるが黙殺する

「それになんだ？自らの武器を放り出す武人に、責任ある仕事か

きると思っっているのか？」

「じゃ？」

自分で気が付いていなかったのか、キヨロキヨロとあたりを見渡している。抱きつく際、無意識に蛇矛を投げ捨てていたようだ。入り口近くの地面に突き刺さっていた

「そうだ、そうだ、自分の武器を大事にしない奴なんかが一番手柄は譲れねえよな」

ニヤニヤと、鬼の首でも獲ったかのような上から目線で翠は腕を組む

「だからといってお主に決定するわけではないぞ翠。手柄を上げる権利はここにいる全員にあるのだからな？」

諭すように翠に注意した後、朱里や雛里に顔を合わせ焚きつけるように言い放つ星

「無論、二人ともな」

「はわわ……私は別に手柄なんて……」

「あう……私もいません」

「ほう、なんと欲のない事だ。いやはや、どこの誰かのように我先にと主張するもの達とは大違いだな」

「……………おい、一番初めに言い出したのは誰だと思っている」

進軍の提案をした本人がそれを言うな

「ははっそうだったかな？失敬、失敬。だがここは是非とも私を選んでいただきたいものですな。……さすれば主の愛は一身にこの体に受けられるのだから……」

「！？ ご主人様の愛だと？」

その一言に全員が目が変わる。目を白黒させる私。いまだ桃華様にぶら下がる鈴々も動きを止める。軍師二人は瞬きすらしていない。翠にいたっては愛という単語に過剰反応したのか顔が真っ赤だ。それを満足げに見渡すと、星はさも当然のように告げる

「考えてもみよ？もし本当に主がいるのなら、最初に顔を合わせるのは誰だ？群れ為す敵の中、颯爽と主を救い出してもみる。その雄姿を目の当たりにしてはいかに主としてもその者個人にときめいてしまうのではないか？」

「と……ときめき！」

「そして、いずれ大陸を平定した後、平和になった時代のなか、ふと思い出すのはやはり始めに会った人物では？天の言葉で言うのなら、めもりある な思い！」

「めもりある！」

「此度の戦は我等女の戦いでもあるのだ！！」

「「「「「おおおおう」「」「」

感心したように歓声を上げるみんな。満足そうに頷く星は、声を出さぬ私に気づいたのか首を向ける

「どうした愛紗？お前が一番食いつきそうな話だったのだがな、なにか気に入らぬところがあったか？」

「……………いや、なんでもない」

視線を逸らし、虚空を見つめる。星の言葉を聞いて少し気分が悪いご主人様の取り合いなど前回では日常茶飯事。あつちふらり、こつちにふらりと掴み所が無く、みんな苦労していたな……………こんな風に盛り上がるのも一度や二度では無かった

……………なのに

……………なぜ私の中にこんな心が浮き出す？

嫉妬などという言葉で片付かないドス黒い感情

なぜ、私は仲間に 憎悪 を感じているのだ？

「……………愛紗ちゃん？」

理解できない心情に疑問を持つ。仲間に憎悪だと？自覚出来るほどの大きさの……………おかしい、この世界で記憶を取り戻してからどうにも感情の制御がうまく出来ない。

握り締めていた拳には血が滲んでいた。そうでもしないと正気を保てなくなりそうだ

「……………愛紗ちゃんってば！」

「っ！？桃華様？」

「どうしたの怖い顔して、なんかいつもと違うよ。いきなり不真面目な話になっちゃったけどそんなに怒るような事だった？」

視線を戻すと桃華様をはじめ全員が心配そうな様子で顔を向けていた……いかな、私ともあるう者が迷惑を掛けてしまうとは。不甲斐無い。

「……………大丈夫です。ご主人様の素行を思い出していただけです。……気持ちは理解していただけだと思いますが」

苦笑する面々。そこは否定できないようだ、これでなんとか納得してもらえたようだな。

……今は戦いに集中しなくては。湧き上がる黒い感情を胸にしまい込み、話の輪に加わる。誰が行くのかは別として、今の私の状況はただ不安を招くだけだから……

そう自分に言い聞かせるなか、星の疑惑の目線が晴れる事は無かった

「ずいぶん苦勞しているようね」

ようやく始まった劉備軍の行動を見つめる少女がいた。お世辞にも高いとはいえない身長だが、えもしれぬ覇気が感じられる。無造作に流れるような金髪に手を通し梳いただけだが、それだけで一枚の画になりような魅力も秘めていた

そんな彼女の脇に控える少女は明らかに侮蔑の視線を送っている

「あの程度の砦ひとつ落とすのにどれだけ時間をかけているのかしら？無能が集まると邪魔にしかないわ、そう思いますよね？私なら初日で落として差し上げたのに」

ころりと表情が変わり、猫撫で声で擦り寄ってくる、金髪の少女は気にするでもなく、あやす様に頬を撫でた。それだけで控えていた少女はトロンとした恍惚の表情に変わる

「ふふ、期待しているわよ。くれぐれも私を失望させないでね」

「当然です。全て私におまかせください」

息巻く彼女を撫でる手は止めず、顔を上げる。先に見えるのは苦戦する劉備軍。どうやら単なる戦力差による劣勢ではない。細かくは視認できないが砦上部の柵が防矢の役目をしているようだ、砦と柵の間から落石による攻撃も行っている。あの華雄の部隊とは思えないほどの計算された動きの数々、一進一退の攻防が続く中

「……………それにしてもラチがあかないわね」

互いに損害は最低限といった様子で遅々として状況は変わっていない、……………ある程度消耗したところで漁夫の利を狙う算段だったが、これではいつになるか分かったものではない

……………本来なら焦る理由はない。十分な食料、武器、兵力は揃っている

だが、しばらく見つめていた少女はおもむろに言い放つ

「誰か！夏侯惇、夏侯淵の両名をここに！」

「はっ！」

警備をしていた兵士が陣地を走っていく

「？あの、どうされたのですか？」

突然の号令に驚く少女

「……………」

答えず泗水関を眺めている主の瞳は、いままで一度も見た事の無いような瞳だ。どんな感情がそこに隠されているのかははっきりと分からないが、胸中にイヤな気持ちがあった

春蘭、秋蘭が到着次第、行動を起こすとしましよう

桂花は確実に反対するでしょうけど、まあ、譲れないところではあるのよね

……ちて、どうなることかしら？

第八話 泗水関の戦い 蘇る軍師の才

苦戦必至と思われた泗水関攻略は予想外の援軍によって一変していた被害止む得ずと正面からの攻勢を続ける我々だったがその援軍により数を増し、大規模な作戦を実行できるようになったのだ

曹操軍、我等の後で待機していたはずだがここにきて助力の誘いをしてきたのが始まりだ。無論タダという事は無く一番手柄と作戦の指揮を寄越せとの事だが

「部隊を六つに分けての波状攻撃、昼夜問わず続ければおのずと相手は疲労する。そこを狙い一気に叩く作戦か……」

「うん、曹操さんには感謝しないと。私達だけじゃこんな大掛かりな事できなかったもん。これで傷つく人は減るし、思ったより早くご主人様に会えそうだし、一石二鳥だね」

各部隊の配置確認を終え、安心してらっしゃるのか笑顔が零れている

……桃香様の仰る通り、曹操の助力は願っても無い申し出だが素直に受け取っていいものか、いまだ疑惑が残る

この合同作戦の意図はいつたいなんなのか。曹操は裏があるだろうと疑惑の目を向けていた私達に、毅然とした態度で言い放ってきた

「安心なさいな、あなた達にとって不利になるような事は無いわ。ただこちらの都合上、早く砦を落したいの。……人の厚意は素直に受け取るものよ?」

「……そうだよな、ありがとう曹操さん。私達といっしょに泗水関を突破しよう!」

悩む中で鶴の一声ならぬ、桃香様の一声でその場は合意と相成ったしかし

「私達にとって都合が良すぎるのが不安ですね……この策、曹操さんの軍隊だけでも可能なんです。なのにわざわざ助け舟を出してくれるなんて」

「あう、本当なら私達と董卓軍が消耗した後にやるべきだよな、いくら手柄がほしいからってここで無理する必要ないもん」

軍師二人も同意見なのか浮かぬ表情だ。いまだ互いに顔を合わせ曹操の真意を模索している

答えが出るとも知れない問題の中、第一陣を任された二人が帰ってきた

こちらを見るや星は溜息混じりに呟く

「……まだ考え込んでいるのか、悩むのは分かるが何にせよ、今はこうする他あるまい」

「そうだけ、あっちの思惑とかあたしには全然分かんねえけど、今更悩んでもしょうがないだろ?」

「短絡的な……そんな事ではいつか寝首を取られるぞ。ここは熟考

を重ね、予防策を張って置かねば……」

「……いえ、翠さんの言う通りですね、ここで機を逃すよりはあえて乗ってみましょう。悩みすぎるのは思考の幅を狭めてしまいますから」

「む、だが……」

「これ以上考えても憶測の域を出ない事ばかりです。もしここで反感を買って対立なんかしたら本末転倒です」

やはりこうなってしまうか、止むを得ないな

腹を決め、桃香様に出陣の合図をお願いする

「よし、それじゃあ作戦実行つてことで。星ちゃん、翠ちゃん、それに兵士の皆さんがんばってね！」

声量は大きくないがピンと澄み切った声が陣内に響く

「任されよ。必ずやご期待に答えますぞ」

「うっし、いっちょ派手にやってやるぜ！」

呼応する兵共々気合充分といった様子で答え、意気揚々と部隊を前進させていった

「まったく、陽動作戦だというのを理解しているのかあの二人は……」

「もう愛紗ちゃんたら、きつと大丈夫だよ心配しすぎは良くないよ

「？」

「それはそうですが…」

深手とまではいかないが、すでに手痛い被害を被っている以上、無駄に消耗するのは避けたい。かといって消極的な攻めでは敵軍の疲労という十分な効果は期待出来ない

そのあたりの機微を加減しなくてはならないのにあいつらは…

「……………不満ならさっきのじゃんけんで勝てばよかったのだ」

「ぐっ」

出陣の順番決めのじゃんけんで同じく負け、端で拗ねていた鈴々がぼそりと嫌味を言う

「まあまあ、順番は必ず来るんですからそこで頑張ってくださいね」

嗜める朱里

気遣う雛里

いじける鈴々

見守る桃香

悩む愛紗

泗水関での戦い備える星と翠

戦いは始まったばかり、今はただ全力を尽くすのみとなった

時と場所は変わり、作戦決行から三日。いよいよ泗水関攻略の総攻撃が始まるうとしていた

砦にもっとも近いのは夏侯惇こと春蘭率いる曹操軍。沿うように劉備軍が控えているのは突撃を春蘭の部隊が行い、劉備軍が援護をする手筈の為だ

泗水関にはまだ反応が無い。砦攻めの陣形を組み、攻撃の合図を待つ
いくらかの空白の後、高々と銅鑼の音が響き渡る

怒号とともに突撃を開始する春蘭の部隊。すかさず劉備軍による牽制射撃が始まった

雨のような矢が泗水関に降り注ぎ、門へと兵士が殺到していく

一気に突入しようと勢いを付けた破城槌が襲い掛かる

三日に及ぶ波状攻撃が効いたのだと、反撃がこないのをいい事に、ここぞとばかりに勢いを増す兵士達

そして破城槌が門にぶつかった瞬間。春蘭は異変に気がつく

なぜなら、門は破壊されること無く砦内への道は開かれたのだ

そう、あらかじめ開けておいたように

抵抗少なく開かれた門。幾度とない攻撃にびくともしなかったそれが、ただの一撃であっさりと開け放たれてしまった

先行部隊に続き、砦内に辿り着いた時、信じられない光景が春蘭の目に映る

「なんだ……………これは」

広がるのは石造りの壁のみ、迎撃の様子も無く、動くものさえ皆無だ

「誰もいない……………だと。……………そんな馬鹿なことがあるのか？」

もぬけの殻。人の気配すらない。この異常な状態の中呆気に取られる

……………かちっ

「どこへいったというのだ董卓軍は。兵士は？華雄は？いつたいたいどこにいる…」

動揺と、もしや逃げたかもしれないという疑惑が春蘭をイラつかせる感情に身を任せ、怒鳴りたてる。敵を前にしてこのような腑抜けた行動とは何事かと

から、から、から

「ええい、探せ！誰でもいい。この状況を説明できる奴を探し出せ
！！」

春蘭の気迫に押され兵士が散らばって行く、後続からはまだ状況がわからないのか次々と兵が雪崩れ込んでくる

から、から、から、から、から、から、から、から

「……………ん？なんだこの音は」

そこでようやく乾いた音がずっと鳴り響いているのに気が付いた。心なしかだんだん大きくなってきているような……………

次第に音は泗水関全体に鳴り渡り、取り囲むように反響する

そして

……………ガツン

「なっ！？」

……………仕掛けられた罠が発動した

驚愕する春蘭。周りの兵達も驚きで身動きが取れない

一面に広がる 赤 赤 赤

。一瞬で泗水関が火に包まれていく。無人のはずの砦で突然に激しく燃え盛る炎は熱風を伴って春蘭の部隊に襲い掛かる

「くっ！砦を捨てるつもりか！？ええい、一旦戻れ！このままでは炎に焼かれるぞ！」

慌てて指示を飛ばすが、突然の出火に気が動転しているせいか兵士達の動きが鈍い

急に反転したせいで門周辺で人がごった返している事も原因の一つか、遅々として進まない

それどころか味方同士の押し合いで怪我人まで出ている

ようやく外へ脱出した春蘭が見たのは更に信じられない光景

……本陣が攻撃を受けている場面だった

場所は変わり曹操軍、劉備軍の本陣を挟む崖の上。そこには泗水関にいるはずの董卓軍がいた

砦を捨てての奇襲作戦。かねてより用意してあった長弓と崖からの高低さによる一方的な攻撃を実行する為に

慌てふためく敵軍。砦攻めの為、隊列が伸び切った今がチャンス。まさに矢継ぎ早に降り注ぐ矢

それを赤兎馬に跨り見下ろす本郷一刀の姿がある

普段とは違い胴衣に白いマントを羽織っている。これは霞にお守り代わりにと持たされたものだった

霞とほぼ同じだが区別の為、背中に大きく描かれた十文字と右下には光に反射して輝く龍の意匠がみられる

油断無く戦場を見据える一刀に、傍に控える副官が感心した様子で話しかけた

「見事なものですな……、正直最初は半信半疑でしたがこうもうまくいくとは思いませんでした」

「みんなが迅速に動いてくれたおかげだよ、…ありがとう、あともう少し頑張れば成功するよ」

華雄との情事を終え、戦場に戻ってきた自分に、皆は驚くほど素直に従ってくれた。おかげでいまのところ予定通りだ

「あくまでこの攻撃は足止め、深追いはしないようにみんなに確認してきてくれる？矢が無くなった人から順次撤退を開始させるのも忘れずに」

「はっ」

「それから狼煙の準備もお願い。…そろそろ突入した部隊が出て行く頃だから」

伝令に指示を出し、状況確認と次のタイミングを計る

……相手がこちらの疲弊を狙った計略を使ってくるのは解かっていた。拠点制圧に数による絶対的有利を生かさなはずがないからな計略が成功してしまえば敗北は必至。それを打破する計略が必要となった

本来なら曹操軍が仕掛けている計略はもつと大人数で実行するべきだが、味方は袁招率いる連合軍。結束なんて無いも同然だ、協力を取り付ける事も難しいだろう

そこが突破口

増員できないなら自軍のみで、最小限の人員投入で実行するはず。劉備軍との連携は予想外だったが、それでも分散した兵力では泗水関は落としきれない

そこで疲弊による戦力低下に見せ掛け、少しずつ兵を皆外へ。奇襲の為に敵軍横まで送り込んでいく

俺の中にある軍師としての記憶を最大限使って考えた作戦だ

ただ防衛するだけではなく、長期的にみた足止めが目的の計略

戦闘による戦力低下が激しくなる前に、奇襲での大打撃を与えたかった

砦からでは相手は警戒し、効果的な攻撃ができない

そもそも数を減らす必要は無い。死人ではなく負傷者が増えれば当然手当て必要になってくるからだ。食事の消費も減らないうえ治療の為に進軍速度は低下する

袁招が痺れを切らせて本軍の総攻撃をかけようとしても、曹操、劉備軍の二つを押しつけて進める程、道は広く無い

「……………よし頃合だな。華雄に合図を送って！第二段階に移るぞ！」

「承知致しました。狼煙上げ！！総員撤収開始、泗水関に急げ！」

一刀は夏侯惇が泗水関を脱出したのを確認すると指示を出す

砦上部に衝立を設置したのは防矢と落石の役割だけじゃない。本当の目的は目晦まし、こちらの移動を悟られないようにする為だ

敵軍突入の頃合を見計らい、わざと砦内に誘い込み、無人の砦にブービートラップによる火計を行う

簡単なワイヤー（紐）で作った時限発火装置だが、見事引っ掛かっ

てくれた

本陣への攻撃を始めれば炎の勢いに押され、一時撤退を選択せざるを得ないはず

それが第二段階の狙い。無防備に後ろを見せるこの時を待っていた

「華雄隊突撃するぞ！！我らの武を今こそ見せ付ける時！！」

無人のはずの泗水関から掛け声と共に華雄が飛び出していく、砦を包んでいた猛火はいつの間にか消え去っている

もとより火責めに見せかけた演出用の炎だ。実際の砦への被害は無い

華雄達は単に視界外にいただけ。狼煙を合図に、都合三回の奇襲で動きが散漫になっている敵突入部隊へ追い討ちを開始する

これもタイミングを見計らって撤退。援護射撃もこの位置取りなら効果的だ

順調に進む防衛戦

後は定石通りの戦術でいこう

華雄隊の撤退が完了次第、再度、扉の施錠と強化を開始しよう

いずれは落とされる運命なら、最後は泗水関を破壊して足止めする手もあるしな

一刀は帰還途中も、最善手への思考を止める事は無かった

神算鬼計は誰のもの

時代を超えた

罨と策

嵌り嵌るは連合軍

たった一人の将軍が

活躍するのはこれからだ

第九話 泗水関の戦い 混迷する戦場

「おおお！！」

泗水関前。両軍入り乱れる戦場の中で、華雄、夏侯惇による一騎討ちが始まった

その周りで華雄の配下が何か叫んでいるが、熾烈を極める戦いに近寄ることも出来ず、声は届かない。両者を中心にぽっかりと円を描いたような空間が出来てしまっている

奇襲は成功し、一刻も早く帰還すべきこの状況で華雄の悪い癖が出てしまったのだ。

一刀に散々注意されたはずの撤退の機を逃し、華雄は力の限りに叫び、相手を倒す事に夢中になっている

「ちっ！」

放たれた戦斧の薙ぎ払いを半歩後ろに下がり、避ける夏侯惇。その空振りのスキを狙い、反撃の一手を仕掛けようと大剣を構え直す。華雄は空を切る戦斧の勢いに乗せて体ごと一回転。その場を軸に腕を捻り、追撃の打ち下ろしを放ってきた

頭の中に危険警報が鳴り響き、すかさず後方へ飛び退く。振り下ろされた地面は爆音と砂煙立ち上り、地面には爆発したような大穴が広がった

「デタラメな破壊力だな……これがあの華雄だと？噂以上の実力ではないかっ！」

予想外の劣勢に自分にあつた過信に毒づく

斬り結ぶ度に伝わってくる力と技。遠方　においてもその武勇は聞き及ぶ程だったが、まさかここまで追い詰められるとは思わなかった

「どうしたその程度か夏侯惇？そんなヤワな攻撃ではワタシは倒せんぞー！」

いまだ砂煙舞う中で勝ち誇つたような声が響く

「ぬかせっ、勝った気になるのはまだ早いぞ！」

実力を測り間違えたとはいえ負ける言い訳にはならない。ここで敗北ないし撤退しようものなら負けた側の士気に大きく影響する

ならば、ここで鬨気漲る華雄に一騎討ちで勝てなくとも、兵による包囲が完成すればこちらの勝ちだ。いつまでも皆門を開き続けるわけにはいくまい

普段なら策を弄する戦闘は好まない彼女だが、曹操からある密命を受けていた為、万が一にも勝機を逃がすわけにはいかなかった

「貴様を倒し、目的を果たさせてもらおう！」

「はっ！！吼えたな！！今のワタシに勝てる者などおらんわ！！愛を知り、愛を成就せんと戦うワタシはまさに無敵よ！！！」

若干場違いな発言はともかく、ようやく前線に復帰し、勢い付いた華雄は絶好調だった。何合か打ち合うも夏侯惇は劣勢を覆せない

このままでは包囲する前に敗られる！？

それ程凄まじい攻めを見せる華雄。周りの兵士達の中には固唾を呑んで見守る者も出ている中

そこへ、一人の将が突如現われた

「……………苦戦しているようだな。夏侯惇」

「き、貴様は……………」

「ぬっ？」

最初に目に入ったのは鮮やかな黒髪。それは上質のシルクを思わせるほど。

次に写るのは武器、華奢な体に見合わない大きな得物、青龍偃月刀

そしてその二つに劣らないほどの端麗な美貌が際立っている

彼女こそ劉備軍にその人ありと呼ばれ、美髪公とまで呼ばれる英傑。関羽雲長だった

「関羽、貴様どうしてここに……………」

最前線のこの場所で援護の為、後方で備えていた彼女がここまで上

がってくるとは思っても見なかった

「協力しろと最初に言ってきたのは貴様等だろう？これは共同作戦。助けに行くべきと主が仰るものでな……」

本意ではない。暗に聞こえるが関羽の助力は頼もしい

「そうか……なら手を貸せ関羽。こやつ強いぞ」

「……………」

「……………関羽？」

いざ構えたところで、なぜか返事が返ってこない。疑問に思い視線を追うと、真っ直ぐ華雄を見つめ……いや、凝視していた

「……………華雄、ひとつ聞きたい」

「なんだ。怖気づいたか？この溢れる愛の力に恐れをなしたのだろ
う……！」

「……………その愛を、教えたのは、誰だ。」

底冷えする声が妙に恐ろしい。一瞬で場が凍りつく。だが華雄は気づいていないのか、声高らかに、地雷を踏んだ

「無粋な。だがあえて言おう。……北郷一刀！！こやつがワタシに愛の力を気づかせてくれたのだ……！」

「……………そうか」

今度は無言の威圧感が凄まじい。歴戦の勇、夏侯惇がたじろぐ程

「……………やはりここにおられたか、…………ふっ、ふふっ」

「な、なんだ貴様。なにがおかしい!!」

ここに来てようやく異変を感じ取ったのか、華雄は警戒しながら戦斧を構え直す

「……………いやなに、あの方は変わらないと再認識しただけだ。貴様のような女にも等しく愛を説いておられるとはな……………是非ともすぐにお会いしたい。そしてじっくりとご教授願いたいものだ。……………多少のキズを覚悟してもらおう事になるがな……………ふふふっ」

せせら笑う愛紗もまた青龍偃月刀を構える。全身に闘気……………だけではない。やや邪悪な気を纏って

「……………いくぞ、華雄。一身上の都合により貴様を、斬る。」

「はっ!! やってみろ!! 我が愛は無敵だ!!」

激しく交錯する武器。裂帛の気合は双方劣らず、打ち鳴らす金属音がけたたましい

……………

……………

「……………私はどうすれば……………」

戦う二人を呆然と見つめる夏侯惇。突然、蚊帳の外に放り出されたのだ。それに加勢しようにもなにか場違いな気がした

黙っていても決着は関羽の勝ちだろう。なぜか確信できる

そこで、どう立ち回るか考えようと辺りを見渡した

泗水関前での奇襲を受け部隊の被害は少ない。本陣も崖上からの奇襲で被害は甚大。掻き乱された戦場では兵士達の混乱は収まっていない上に隊列はバラバラ…急ごしらえの部隊で連携がうまく取れないのが原因だ。最悪なのはいつの間にか現われた董卓軍に再び泗水関を占拠された事。これではイタズラに被害を出しただけになつてしまう

……………完全に上を行かれた結果だ。忌まわしげに崖を見上げるとそこには白い羽織を纏った青年がいる

…やつが北郷だろうか。先程までは見えなかったがどうしたのだろうか。視線がこちらに向いている気がする

疑問に思い、剣戟の音を聞きながら観察していると

「……………なにい!?!?」

泗水関での突然の火責めに続いて、またも予想外な出来事が起こった

青年は赤い馬に跨り、直下の崖を落ちてきたのだ

「なにをバカな、死ぬ気か！？……いや、あれは！！」

よく見れば、途中に切り立った岩を足場に飛び移りながら下りてきている。常識では考えられない光景。一歩間違えば即死にも拘らず戸惑う様子は無い

「なんて度量だ……さすが華琳様が欲しがるだけある」

曹操からの密命、それは泗水関に在るであろう北郷一刀という男の捕獲だった

最初は意味が解らなかったが、これだけの才の数々を見せ付けられれば認めざるを得ない

「こちらの来る理由は解からんが……まさに飛んで火にいる夏の虫機が回ってきたな」

ここは関羽に任せ、自分は役目を果たそう

「包囲兵を残し、部隊転進！あの男を捕縛する！」

号令を飛ばす。関羽は戦闘に熱中し、気が付く様子は無い。降りてくるであろう崖下を目指し部隊を進めていった

「どわあああ!？」

死ぬ、死ぬ! 死ぬ!!

有り得ない振動と揺れが間髪入れず襲ってくる。例えるならジェットコースターとフリーフォールを足して割らずに二乗した感じ

落下速度が速すぎて胃が持ち上がりそうになる上、岩に飛び移る度に襲い掛かる衝撃がハンパ無い

なぜ俺は、こんな直角に近い崖を駆け下りているのだろうか?

予定を無視して撤退せず、孤立してしまった華雄を救出すると言いだ出した数分前

副官に「見捨てられないさ。だってもう心も体も重ねた関係だからね(キリッ)……なんてカッコつける直前まで戻りたい気分

素直に皆まで戻れば良かったな……

……完全に元の木阿弥というかコレは無かった

……ほんとコレは無い

……源義経が一ノ谷の戦いで見せた、崖(本当は山)を馬で駆け下りた「逆落とし」を実践できるかもと調子乗ったせいだ

(実際は『平家物語』が創作した虚構であるという説が有力)

セキトの持つ桁外れの身体能力でなんとか無事だが、正直死にかけています

過度の緊張と恐怖で手綱を握る手がまったく動かない、それどころか体自体、硬直しっぱなしだ

……あつ、なんか泡吹きそう、変な景色も見えるし

色とりどりの花と真っ直ぐ伸びる大きな川が目の前に広がって…

「ぐふっ」

一瞬の浮遊感の後、尻を直接蹴り上げられたような衝撃で、トリッ
プしかけた脳が目覚めた

気が付けば、いとしの地面、地表、ようやく下り終えたようだ

「……大丈夫か、セキト？」

混濁する頭で問いかけるとぶるる、と元気に首をふるセキト。想像
以上のスペックだな、直下の崖降りで息が乱れた様子も無い

「よし、早速だけど華雄のところまで……」

この調子ならすぐに駆け抜けられるだろう、急いで回収しないと本
当に撤退出来なくなる

そう言いかけて異変に気が付く。戦場に来た以上敵との遭遇は避け
られないのは承知しているけど、目の前のこれは…

「…包囲されてるね。完全に」

見回せばぐるりと半円を描くような陣形。明らかに俺達だけを狙っている様子だ

……ああそうか、今の自分は將軍だったね。狙われるかもしれない事をすっかり忘れてたよ

後悔先に立たず。いいトコ見せようとするのと直ぐへマがでるなあ、なんて暢気に考えてしまった

「貴様が、北郷か？」

「は？」

突然、正面から現れた一人の女性

黒髪を後ろへ撫で付けただけの髪型に端麗な顔つき。強面だが美人さんだ

背中に背負った大剣が無ければお茶の一つでもお誘いしたいものだが、そうはいかないよな

「我が名は夏侯元讓。貴様は北郷で相違無いな？」

「あ、ああ、俺が北郷で間違いないと思うけど…」

夏侯元讓だって？さっきまで華雄と戦ってたハズじゃ…

「ならば良い。早速首輪につけ」

「……………は？」

なんで首輪？

「……………いや違ったな。それは華琳様への私の願望だった。おとなしく縛につけ北郷」

いきなりなにを言い出すんだこの人。どんな間違いだよ。縛 拘束
首輪 っで頭でどんな変換が起こったらそうなるんだよ。しかも
自分の願望って…

……………いや、重要なのは、いきなり敵将を捕獲しようとする事だ。お
かしくないか？

打ち倒そうってならもつと殺意がありそうなものだけだ。よく見ると
周りの兵達の中に投網みたいなもの持ってる人がいる

……………初めから捕獲狙って事？…まさかな、いくらなんでも考え
すぎか

「意味が良く分からないな。俺と戦いもせず降参しろって？…いや
戦いたいわけじゃ無いけどさ。おとなしく捕まる気は無いよ？華雄
を回収する為に来たんだから」

馬上戦闘なんて出来はしないけど、こっちは天下の赤兎馬がいる。
みすみす捕まるわけにはいかない。ここは突破すべしと体勢を整え
ていると

「華雄なら関羽と戦っているぞ。余計なお世話といたいところだが今回は助かった」

こちらの動きを察してか、セキトの進路上に移動してきた

「元よりこの戦での狙いは貴様だ、北郷一刀。華琳様から賜った命令、実行させてもらう」

言うつや否や背中の大剣を抜き放つ夏侯惇

「俺の捕獲が目的？……まさか曹操は……」

少なからずの動揺。曹操は前回の記憶を持って……

ブォン！！

「うわっ！」

考えようとした矢先、大剣の一撃が襲い掛かってきていた。セキトのおかげで間一髪被害は無かったが危なかった

「いきなりなんだよ！？捕まえるんじゃないのか。ヘタしたら死んでたぞ！」

「ふむ、なぜか貴様を目の前にすると殺意が湧いてきてな。……まあいいか五体満足とは言われなかったしな」

全然良くないよ！？

「抵抗するなら斬る。しなくても若干斬る。いや斬らせろ」

御免被る！！

思考が危険すぎるよこの人

……なぜかだろつなと考えるのはなぜだろつ

周りの陣形は少しずつ狭まっているようだし、いつまでも華雄が持つ保障は無い

「……腹を決めなきゃいけないか」

狙われる目的と相手が不穩だが、華雄救出のためにはしょうがない不安がるセキトから降り、刀を抜く

「ほう、私と戦うつもりか？……てつきり軍師かと思ったがなかなかどうして、さまになった構えでは無いか」

大剣を構えなおす夏侯惇は嬉しげだ

いまだ気分は優れないけど目的の為ならやるしかない

記憶は戻らないけど、恐らくはこの人とも縁があるはずだ。出来れば傷付けたくないけど手加減して勝てる相手じゃ無いだろう

構えは正眼。この世界で初の実践が始まった

崖の上からこんにちわ

降って落ちるは雨だけか

いやいやここに

馬一頭

ひよっこり顔出す

男も忘れずに

第十話 泗水関の戦い 流転する舞台（前書き）

ここから作者的に油が乗った状態になってきます

こつこつとこころから妄想すると楽しいよね

第十話 泗水関の戦い 流転する舞台

対峙する夏侯惇と俺こと北郷一刀

互いに距離を取り機を伺う

得物のリーチにほとんど差が無い分、恋の時のように一方的な展開にはならないだろうが、相手は魏武の大剣と呼ばれる程の猛者。気は抜けない

正眼からやや下に剣先を下ろし迎撃の構えに移行する

対峙して初めて気づく生の殺気。じつとりと汗が滲み心拍数が上がっていく

「行くぞ。北郷！！」

声と同時に振り下ろされる大剣は真つ直ぐ左肩を狙っている

それをしっかりと見据え、刀で受け流そうとするが想像以上の威力に後ろへ押し出されてしまう

一瞬の安堵もつかの間、すぐさま放たれる追撃の数々もなんとか捌き切る

徐々に後退しながらも致命的なキズは無い

恋や霞相手の特訓が功を成したのか驚くほど体が反応する

「…なかなかやるな。武官としての心得もあるのか」

何合か打ち合った後、感心したような声で夏侯惇が喋りかけてきた息が乱れた様子は無い。こっちは一合ごとに魂が削られる気分だといつのに

「護身程度の実力だけだね。簡単には負けないよ」

夏侯惇は薄く笑い、再び殺気が放たれる

どうやらこちらの実力を過大評価してるみたいだ。手加減されていったのか今まで以上のプレッシャーに押し潰されそうになる

…前言撤回。すぐにでも負けそうだ。いずれ押さえ込まれて捕らえられてしまうビジョンが目に見えかぶ

ここであえて曹操側に捕まるのも選択肢のひとつかもしれないが、女の子を残して負けを認めるのは納得いかない

途中退場してしまえば恋や月に無用な心配をされてしまう

捕まえる…記憶があるという事が本当ならきつと俺を求めてくれてるんだらうけど

曹操には悪いが今の俺は董卓軍の将。彼女達を守りたいんだ

負けるわけじゃない。例えどんな手を使ったとしても

だから…

「……貴様、何の真似だ」

「とっておきさ。言ったる？簡単には負けないうて」

下段寄りの構えを解き、霞相手に使った裏技の構えを取る

夏侯惇はそれを見て正気を疑う。それはあまりにも異質で、見た事も聞いた事も無い構えだからだ

両足を開き腰を落とし、一切の機動を捨てた死に体に

上半身は右肩を突き出し、左手は鞘へ

あまつさえ剣は納刀した状態。…いや若干抜いた状態か

どちらにせよ、剣を収めた状態の構え などありえない

「勝負を捨てたか北郷！」

降参の意思にしてはまったく目が死んでいない。むしろ鋭さが増しているがその質問はもっともだ

けれど一刀は目はそのまま、小馬鹿にした態度で挑発してきた

「御託はいいよ。もしかして怖くなったか猪武者？」

「…なんだと？」

真意を聞くより早く、次々と侮蔑の声が続く

「勝負を捨てるわけ無いだろ？馬鹿だろあんた？少ない脳みそでよく考えろよ。あっ、そこまで頭が回らないから馬鹿なのか」

「なっ」

「見た事が無い構えだから怖いって正直に言ってみろよ？もうこの仕合は早くも終了ですね」

「貴様、いい加減に…！」

「おお怖い、怖い」

うざい顔と突然の事にどんどん夏侯惇の怒りゲージが高まっていく

そしてトドメと言わんばかりの一言

「こんな事じゃ曹操なんてたかが知れてるな。部下がこれならとんだ無能、愚者の極みだな」

ぶちっ

一刀を包囲する兵士達は確かにその音を聞いた

「貴様ああああ…！！！」

この広い戦場に怒号が響き渡る。まるで空気自体が振動していると錯覚するほどの音量

真正面からそれを聞いた俺は心臓が止まりそんな衝撃を受けた

「死ねええええええ!!!」

まさに地雷。夏侯惇の逆鱗に触れた今、必殺の一撃が迫ってくる

これをまともに受ける術など無い。無慈悲にそのまま殺されるだけ
そう確信できる程の戦い始めとは比べ物にならない最速最大威力の
豪撃

だが

（そう、おまえならそう来るよな）

この状況こそが畏。乾坤一擲の策だ

まともに正面からの戦いで勝てない以上、搦め手が必要

こちらの最高の手札は 居合い抜き

納刀状態から鞘を使って加速。抜き際に刀と鞘を同時に引き、更に
加速

刀だけが持つ最速剣技

本来なら居合いは実戦向きの剣技じゃない。放った後のスキも大きいし、少しでも剣先がぶれると威力は半減する

刻一刻と変化する戦闘で使うものじゃない。まして十分な修練を積んでいない一刀にとって相手の剣に合わせるなんて芸当は不可能だ

だがこれではなければ夏侯惇を負かす事は出来ないだろう

ならば成功させる為の状況を作りださなくてはならない

ゆえの挑発。怒り心頭の状態なら単調な攻撃になりやすい。予め来る箇所が分かるなら未熟な居合い技術でも対処できる

初めからそこに構えを持っていけば成功率は一気に増すからだ

（大切な曹操を侮辱されたお前は絶対に切れるはず。そしてその状態からの一撃目は！）

脳内に浮かび上がる過去の記憶。ぼんやりと浮かぶ情景の中に確かに彼女はいた

（大上段からの袈裟斬りだろ！春蘭！！）

夏侯惇の豪撃と一刀の居合い

大剣と刀は見事打ち合い、甲高い金属音が鳴り渡る

取り囲む兵士達は二人の剣筋を追う事は出来なかったが、どちらも最高の一撃というのは感じられた

一瞬の静寂の後、上空から空を切る音が落ちてくる

それはどちらの武器か？

地面に突き刺さったのは…

「今を見たか。翠よ」

「……ああ、間違いねえよ。……ご主人様だ」

二人の決戦より少し前、劉備軍陣営にてそれはよく見えた

突如、崖を降りてきた一刀の姿、遠目とはいえ、見た瞬間に湧き上がる懐かしさに胸が詰まる

「やっぱりここに居たんだ。ご主人様……」

桃香は安堵の為か、すでに涙目になっている。もしかしたら二度と会えないかもしれないという悪い予感がやっと解消されたからだ

「すぐにも迎えを用意しましょう!」

冷静な判断を下すべき朱里も興奮した様子で言葉を続ける

「愛紗さんは華雄將軍の相手をしています。なので別の方をお願いしたいんですが……」

「鈴々!鈴々が行くのだ!」

「待て、敵陣を突つ切る危険な任務だ。ここは任せて貰おうか」

「いいや、アタシの馬で一気に拾ってくるぜ」

喧々囂々。我先にと主張を繰り返す將軍達

誰もが一番に再会を果たしたいのだろう。泗水関の先陣を決めるときより余程白熱している

そんな輪に入れなかつた少女が一人、雛里がいじけた様子で崖の方を仰ぎ見ていた

「あう、ちよつと怖いよう。朱里ちゃんもなんだかいつもと違うし」

誰にも聞こえないような呟き。根っから気の小さい雛里にとって今の状況はとてもじゃ無いが入り込めない

せめて二番目くらいに会いたいな、と空に祈っていた

そして、少々の時間が過ぎ。仲間の元へ帰ろうとした時

一陣の風が吹き荒んだ

「あわわ！？な、なに？」

思わず尻餅を突いてしまうほどの突風、帽子が飛ばされないようしっかりと手を握り、目を開けると隙間から以外なものが写った

「蹄の跡？なんで？お馬さんなんて通つてないのに…」

風と共に地面に残された真新しい蹄の跡。その先を追うと真っ直ぐ
一刀の落下地点に向かっているようだ。人の波が掻き分けられてい
るようにも見える

「まさか…幽霊!？」

今は昼だとか幽霊に足跡は残せるのかと疑問はたくさん残るが、彼
女の平常心を奪うには十分な怪異だ

「あわわ！朱里ちゃん助けてえー。幽霊が、お馬さんの幽霊があ
腰を抜かし慌てふためくが、いまだ誰が行くか決まっていないのか
助けに来る気配は無い

此処こそが大きなターニングポイントだったのに…

「……………馬鹿な」

信じられない、といった顔で夏侯惇は自分の大剣を見た

手元にあるはずのそれは離れた地面に突き刺さっている。対する相
手の武器は自分の首の前で静止している。つまり

「この私が一騎討ちで負けたというのか…」

愕然とした気持ちでうなだれる。華雄に続きこんな男にも敗北するとは不甲斐無いにも程がある

「ここは俺の勝ちって事でいいよね。とどめを差すつもりは無いからこのまま通してくれる？」

刃を突きつけながらもそういう男はどこか申し訳なさに喋りかけてくる

「それとさつきはゴメン。曹操を侮辱して。あれは本心じゃないから勘弁してほしいな」

「…どういうことだ」

「あくまでさつきのは君を惑わす為の口上だからさ。実際の曹操がどれほど優れているのかはよく知っているからね」

事実、魏という大国を一代で築き上げた人物が並みの凡人でない事は確かだ

「…つまり、まんまと貴様の策に嵌まったわけか」

「そう…なるね。うん、そうでもないかと勝てそうになかったし」

こんな危険な賭けはこれ限りにしたいと一刀は強く願う

夏侯惇は敗北感からか顔を上げず、表情が読み取れない

それを見てなぜか胸がチクリと痛む、あの猛将に勝ったというのに晴れた気持ちにはなれず純粹に彼女を慰めたくなった

「あ、あのさ…」

慰めの言葉をかけようと刀を下ろそうとしたその時、視界に危険な光が映った

それがなんなのか理解するより早く体が動く

庇う様に夏侯惇を抱き、強引に引き寄せるが。間一髪間に合わず光が一刀に当たる

「!?!? 貴様何を……!?!?」

突然の抱擁になぜか赤面しつつも一刀の背中を見て驚く

そこには一本の矢が突き刺さり、血がドクドクと流れているではないか

「ぐっ!」

白いマントは血で染まり、身代わりの形となった一刀はぐらりと倒れ込んでしまう

「くっ。誰だ!一騎討ちに水を差す愚か者は!」

戦士に対するこれ以上の侮辱は無い。矢の元を追うとそこには見た事の無い衣装に身を包む人間がいた

明らかに魏の兵士とは異なる風貌、白装束を深く被り顔は判らない
ただ一言が繰り返し聞こえてくる

「歴史、修正…歴史、修正…歴史、修正…」

うわ言の様に唯一見える唇が動き、更に矢を放つべく弓を引き絞っている

「お前達、なにをぼつつとしている！そいつを取り押さえる！」

号令を放つがなぜか反応する声は返ってこない

なぜなら

いつの間にか取り囲んでいた兵士は皆倒れ、白装束に包囲され
たからに違いない

(……白装束だと)

失血のせいかな眩む視界でぼやけるが確かに一面が白い人物で満た
されている

なぜ、此处で現れるのか。まさかこの場所で命を奪うつもりなのか
疑問は尽きないが兎にも角にも大ピンチには変わらない

(一難去ってまた一難か…)

前線で戦うのがこんなにも苦しいとは知らなかった

自分はなんどもこんな場所に彼女達を送り込んでいたのかと思うと、さっきと同じように胸が締め付けられる思いになった

「くそっ、こいつらはいったい何者だ！」

「…白装束。敵だよ」

「北郷！？」

「俺の事は良いから武器を拾って突破してくれ。こんな空けた場所じゃないだ」

今度は自分を庇うように立ってくれている彼女にそう告げた

「目的は分からないけど、とにかく今は逃げてくれ。敵将を守るなんて矛盾はするなよ」

「くっ」

それはお前だと言いたいが確かにこの状況では共倒れがいいとこだ
どうしたものかと思案していると

またもや異変が起こる

目の前の白装束の人間が吹き飛び、蹄の音が聞こえる

けれど姿は見えず圧迫感だけが迫ってくる

そして音は真横まで近づきなにかが止まった。そして

「なあ!？」

独りでに一刀の体が持ち上がり始めた。それどころか徐々に姿が消えていく

まさに怪異。もはや言葉にならずただその様子を眺めてしまう

やがて完全に姿は視認できなくなり、再び蹄の音だけが遠ざかっていく

近くで沈黙していた赤い馬は何を思ったのか、遠ざかる足音に向かって駆け出していった

敵中に一人残されながらも夏侯惇は一人愚痴る

「どうなっているのだ、この戦場は……」

当然、白装束が応えるはずも無く、変わりとはかりに矢が放たれた

「一刀!！」

薄れる意識の中。誰かの声がする

とても懐かしい声だ、聞くだけで涙が零れそうになるのはなぜだろう？

いつの間にか抱き抱えられているのが分かる。優しくもしっかりとした抱擁

いまだ朦朧とする意識の中で一人の女性の名が思い浮かんでくる

苛烈で気高く、誰よりも仲間を愛する女の子

いつかどこかで悲しい別れがあつたはずなのに…

祈るような気持ちで一言呟いた

「……………雪蓮？」

すぐさま自分を抱きしめる力は強くなり、返事が返ってきた

「…そうだよー刀。だから死なないで」

孫策伯符。真名は雪蓮。孫呉の王である君がどうして此処に？

疑問を尋ねる気力も尽きかけ、口に出ない

「まずいわね、当たり所が悪すぎる。…お願いもう少し頑張って」

担ぎ上げられ恐らくは馬に乗せられたのだろう視界が少し上がった

その隅から一人の男が近付いてくる

二言、三言会話があつた後、不思議な感覚に襲われ声を聞いた

「御意、わたしにお任せください」

男は答え、次の一声を聴くと急速に意識が奪われていく

「消」

それは如何なる呪法か、確認はできず、心配するセキトの声を最後に意識を手放した

血煙舞う戦場に

倒れ伏せたは我らが北郷

死んでは名も栄光も

要らぬ長物

捨て置くか？

嫌ならとっとと立ち上がれ

第十話 泗水関の戦い 流転する舞台（後書き）

ここで洛陽編は終了。

次からは呉のお話。幕間 恋姫達の事情 呉編から始まります

ここが一番入り組んだ状況ですが、書くのが楽しくなっていると
るでもあります

ではまた。

十一話 恋姫達の事情 呉編(前書き)

前回のあとがきにテラ子安と書くべきだったと今さらながら思う

十一話 恋姫達の事情 呉編

死の先は存在しない

思考する脳が無い だから疑問を感じない

行動する四肢が無い だから痛みを感じない

自分という存在が無い だから孤独を感じない

ココには何も無く ココがどこかなんて知る由も無い

だから おかしい

今、私は確実に思考しているから。深く暗いまどろみの中で確信する

悲しいと 感じている

握り締めた拳に 痛みを感じている

誰かが愛しいと 感じている

だから、起きなくてはいけない

視界がゆっくりと懐かしい色の世界に移り変わり、同調するように
記憶が揺り戻される

私の名前は孫策伯符 孫呉の王

そう自覚した瞬間。一面の黒色は消え去り世界が反転した

ゆっくり瞳を開けると天井が見える。赤く塗られた自室の様子がひどく懐かしい

腕を掲げ、自分の存在を確かめるように動かすと現実感が湧いてくる
頭の中に去来するのはこれから先の未来、まだ見ぬはずの日々の中で大陸制覇へと乗り出す夢

だがその宿願は適わないはず

少なくともこの孫策が死ぬまでは…

「夢？もしくは死後の世界かしら…」

呟き、自分でその言葉を打ち消す

「…にしては記憶が矛盾してるわね」

確かに昨晚ここで就寝したのは覚えている。同時に毒矢で射られ、

志半ばに倒れた記憶がある

どちらにも実感があり夢幻とは到底思えない

「ああ、もう。どうなってるのよ？」

頭を掴み、唸るが答えは出ない

異なる記憶は織り交ざり合いながら次々と情報が押し寄せてくる

…仮に死んだ記憶を前回のものとするのならば、今はまだ袁術の元で活動している時期かしら

ともすれば二回目の生という事。始まりは曖昧だけどこの表現が一番しっくり来るわね

…またあのちび助の相手をしなくてはいけないと思うと嫌になるけど溜息を一つ。焦らず記憶の整理を始めていく

呉の事、冥琳や妹達の事。たくさんの思いの中で一際輝く存在がいた天の御遣いとして祀り上げられ、利用される立場にあつたはずの彼突出した才能なんて一つも無いのになぜか気になってしょうがなかった

本当に全ての人々を救いたいと願い、努力を続けていた。およそ自分とは正反対の優しすぎる性格

だからこそ惹かれたのだろう、仲間達全てが彼に恋をしていたように感じる

「一刀……」

私を只の女の子と言ってくれた、彼

また私達は再会できるのかしら……

思考に暮れ、寝台から半身起こした状態でいると、どこからか足音が近づき、扉が開け放たれた

そこには見慣れたはずの顔がある

「雪蓮、早く起きるんだ。いつまでも寝坊は許さんぞ」

呆れたようなその声を聞き、私は思考の渦から現実へと引き戻された

「冥、琳……」

「？ どうした、何をそんな驚いた顔をしている？」

今と前回の記憶に整理がつかない状況での彼女との再会はあまりにも衝撃的で、思わず感情が爆発してしまう

「冥琳！！」

寝台から両手を広げ、飛ぶように襲い掛かる

「！？ な、なんだいきなり、うわっ、こらいきなり抱きつくな！」

「冥琳！冥琳！！本当にあなたなのよね？これが夢とかいわないでよー！」

彼女は突然のことに困惑した様子だが、私の勢いは止まらない。抱きしめ、全身で存在を感じる

「ああ…！私は本当に生き返ったのね、またみんなと一緒にいられるのね！」

これが如何なる奇跡であろうと今はどうでもいい

さっきまで思い悩んでいたのが馬鹿らしく感じる

「何の事を言っているのだ、とにかく離れる！」

「悪いけど聞いてあげない。しばらくはこうさせてもらおうわ」

「なんだと？くっ、一体どうしたというのだお前は」

「どうもしないわ、私は私。…そうよね。さすがにびっくりするわね。冥琳、長くなるけど聞いて欲しい話があるの」

そこから私は前回の、自分が命を落とすその時までの歴史を語った死からの再生なんて、夢のような出来事だけど、今の現実とこの記憶はきつと繋がっている

全てを語り尽くすには時間がかかるので要点だけ説明を済まし、こっぴり出した

「一刀を探しに行きましょう！」

今の世界ではまだ姿を見ていない、一刀はきつとどこかで待っているはずだ

天の御遣いという存在は大きいし、またいつしよに過ぎせると思うと心が躍る。この先の未来が分かるなら運命は変えられるはずだ

毒矢に倒れる事も、妹達に重責を負わせる事もない明るい孫呉の未来が！！

「……………いい加減落ち着かんか、孫策」

「冥琳？」

黙って聞いていた彼女は背に回した腕を無理に剥がし、怒気をはらんだ声で訴えかける

「先程からの言葉、狂言にしか聞こえんぞ……。貴様は王。何かあったか知らんがもっと毅然とした態度を取れ！！」

自分でも抑えきれない高揚が癪に障ったらしい

「第一、雪蓮が言っている 天の御遣い とは誰の事だ？少なくともそんな予言は聞いた事が無いぞ」

「……………え？ちよつと待ってよ、私が拾ってくる天の御遣い、一刀よ。ほら、管輅が予言した流星の話、知らないはずなんてあるはずが…

…」

いや、そうだ。流星落下の報告はあっても 天の御遣い の予言を聞いた事は無かった

だとするならば、一刀は存在しないのか

一抹の寂しさと例えようの無い違和感が交錯する

御遣いという存在は大陸制覇には必ずしも必要ではない。いないほうが自然とも言えるはず

だが、この確信めいた予感。これを気のせいとは信じたくは無かった
依然として抗議の視線を投げかける彼女に説明を続けるが、まるで
信じてくれる様子は無い

どうしたものかと考えていると、廊下のほうから走る音が聞こえる
やがてそれは近づいて、部屋の前で止まった

「……………穩？」

大きな胸を揺らし、息を切らせながら、潤んだ目でこちらを見つめている

思いつめたような瞳はやがて、決壊したように涙を溢れさせ、さっきの私のように飛び込んできた

「うっ、うっ、うああああああああん」

冥淋ごと抱きしめられ、子供のようにえんえんと泣き始める陸遜

「な、なんなのだ今日は……」

朝から連続する珍事にさすがの周瑜も混乱してきたようだ

「ひぐつ、雪蓮様ー、冥淋様ー、お会いしたかったですー。う、う
あぁあ」

「穩、まさか貴方……」

その言葉にもしかして、と声をかけようとしたところで更なる客人が入ってくる

「おお、会話の途中いきなり走りだしたかと思えばここにいたか」

「黄蓋殿まで、いったいこれは」

涙を流し続け、会話が成り立たない穩に一瞥くれると

褐色の肌、歴戦の雰囲気を感じさせる女性は首を傾げながら話始める

「こやつ朝から言動がおかしくてな、会うなり、やれ天下二分だの、過去の記憶だのと質問攻めに負って困っておったのじゃ」

「過去の、記憶ですか」

「うむ。当然世迷言と一蹴したのだが、策殿に会うと駆けて行くも
のでな。なにか只事ではないと思ひ、付いて来たのだ」

「…やっぱり。穩、前の事を思い出したのね」

抱き締められるままだった雪蓮は応えるように腕を回し再会を喜ぶ

「ぐすつ、朝起きたと思ったたら昨日の部屋と違うのに気が付いて、
うう、通り掛かった祭様との会話で気が、ついっ、ふぐうう」

止まらない涙と一緒になって漏れる言葉は聞き取りにくかったが、
その気持ちは十分に伝わってくる

さすがの冥淋もそんな彼女を足蹴に出来るわけもなく、泣き止むま
でそのままできてくれた

今度こそと、事態が把握できない祭を含めた四人できちんと話し終
えるまでには、すでに昼に差しかかるうという時間が立った

「…だから、本当だったらこれから先の戦いでお二人ともお亡くな
りになられていたんですよう…ううっ、また再会できるなんて夢の
ようですよ」

穩の記憶はずっと未来、大陸制覇まで覚えているらしい

私が死んだ後の呉は蓮華の指揮のもと、ついに宿願を果たしてくれ
たのだ

ただ、その戦いの中で冥淋までもが命を落とすとは思ってもみなか
った

他にも記憶の内容をすり合わせ、この世界に戻ってきた確信を得る

「にわかには信じがたいのう… いったい… なにが起こっている？」

「それが私にも皆目検討もつかず……」

記憶の無い二人ははまだ私たちに奇異の視線を浴びせてくる

とりあえずは信じてくれたようだが、なぜこんな事態になったのか
までは分からないままだった

それでも今ここで生きている奇跡を噛み締めた

「きっと他の娘も妹達も覚えているはずよ。その為にも冥淋。お願いがあるの」

「…聞くだけは聞いてやるわ」

「やっぱり一刀は必要だと思っの。だから……」

「却下だ」

「聞いてくれるんじゃないの!？」

「仮にお前達の話を鵜呑みにするとしてもだ、その男を引き入れる理由が無い。前回とやらは天の御遣いという大義名分があったらしいが今はどうだ？まさか我等が噂を広め仕立て上げるとでも言うのか？」

「それは……」

確かに本当に一刀が天の世界から来た人間という確証は無い。あく

まで御遣いの噂、その信仰を利用する為の手段だったからだ

彼の提案する天の知識のいくらかは穩が記憶している

必要無いと言われればそうかもしれないが…

「なににせよ。人捜しをする余裕などどこにも無い。そういう事はまず、袁術をどうにかしなければ始まらんぞ」

「儂も同意見じゃ、それに少々落ち着かれた方が良い。方針を変えらるというのなら、今この場で決めるのはあまりに早計にと存じますぞ」

悲しいが、焦って行動し自滅する事だけはあつてはならない。それは一刀も望まないだろう

「大丈夫ですよ、雪蓮様。きっとすぐ再会できますよ」

ようやく落ち着いた穩は記憶を持つ者同士、心中を察してか慰めかける

「あの人は絶対どこかに居ます。だから今はやるべき事を成しましよ」

この記憶が有れば決して悪いようにはならないはず。私は孫呉の道を突き進もう

(待っててね、一刀)

「……………」

雪蓮の横で冥淋は冷たい視線を向ける

なぜか、そんな彼女をどこか危ういと感じるからだ

小さい疑念と前回の記憶という不確定要素に頭を悩ませる

だがその疑問も次の穩の爆弾発言で掻き消えてしまう

陶醉したようなうっとりした声で呟く様は女を感じさせ、ぽつりと

一言

「はあ、私も早く旦那様にお会いしたいですう…」

「くくッ！?」「くく」

三人の声が綺麗に重なった

十二話 未曾有の大陸 混濁の外史を駆ける者達

泗水関で負傷した俺は雪蓮率いる呉軍に匿われ、治療を受けていた原因となった矢は当たり所が悪かったらしく、完治に一ヶ月以上の歳月を必要とし齒痒い日々が続いていたが

その療養中、再会した彼女達と話し合う内に自身の記憶を取り戻すきっかけに気が付いたのは幸いだっ

どうやらそのトリガーはすでに前回の記憶を思い出した女性との再会と人数に起因するらしい

思い出せる内容まだ限られているが、呉に所属していた頃の歴史はおぼろげに思い出せる

そこで戻った記憶と現在の大陸の情報を擦り合わせ、状況の変化を確認する

まず一つ目、洛陽の乱は董卓軍の敗北、諸侯連合の勝利で決着した

この戦いでたくさんの命が散っていったが、幸いにも董卓軍の将は全員無事らしい

恋とねねは劉備の元へ、霞は曹操陣営へ仕官する事で難を逃れ、ケガと途中退場の原因になった華雄は関羽に戦域外まで吹っ飛ばされたおかげでうまく逃げ果せたらしい

白装束に捕まっていた月、詠の安否も一応の確認ができた。劉備軍

に保護されているらしく董卓失踪の噂は流れているが死亡の報告はまったく無い

ここまでは記憶通りだが

すでに蜀が西に向かって移動を開始という情報は初耳だった

周瑜達はその突飛な行動に首を傾げたが、もしも劉備側に前回の記憶を持っている人間がいれば話は判る

恐らく袁紹、曹操といった大国の戦闘を避け、西蜀に居る仲間達と合流するのが目的だろう

今なら両国とも戦争中で迂闊に手を出せないからだ

あくまで自分の予想で別の理由があるかもしれないが、いずれにせよわざわざ手に入れた領地を捨てた事には変わらない

…この行動が吉と出るか凶と出るか

少なくとも呉にとっては領地を広げる絶好の機会となった

それに関連して袁紹、曹操の戦い

いわゆる管渡の戦いは歴史とは逆の結果を見せようとしている

当初圧倒的な兵力差を覆すべく様々な計略を実行する曹操軍だったが、その悉くを見破られ劣勢を強いられている

あの袁紹に策を見抜く慧眼があるとは思えないがこのままでは勝敗

が逆転することは無いだろう

最後に身を寄せる呉の現状

洛陽の乱終結後、タイミングを見計らい袁術軍の撃破に成功した

順調なペースで富国強兵が行われその一環として雪蓮が本拠地から南方を、孫権は劉備の去った平原に出向き領土拡大の準備が進めている

以上の変化から前回の記憶が有効に活用できるとは言いがたく、参考程度にしかならなくなってしまった

いまだ姿を見せない左慈や白装束の行動も気になる上、このままでは将来の仲間同士が争いあつはめになってしまう

それだけは避けたい。だが回避の手段はどこにあるのか？

天の身遣いという肩書きの無い俺はどこまでやれるのだろうか

「トクシツ、トクシツ」

森を駆け抜け、目的地に到着した俺は握った手綱を引き、声をかける。馬は人語を理解するように返事を返し、おとなしく停止した乗っているのは当然洒水関から付いて来てくれたセキトだ

矢で射られ、気を失った俺が連れられるままだった所を後から追いかけてきたらしい

その姿は忠犬ならぬ忠馬といったところか

素直に従ってくれるセキトから地面に降り立ち、目標を確認すべく辺りを見回す

目的の場所はあらかじめ聞いていたが実際探すととなると苦労した

腰を屈め草や木々を掻き分けていく搜索活動。注意力が足りないのか発見した時には随分と時間がたってしまった

そこには生前の実績とは裏腹に質素でシンプルな墓石。ようやく見つけたその前で居住まいを整える

雰囲気を感じ取ってかセキトはおとなしくその場に脚を下ろしてくれた

息を落ち着かせ目を閉じる

その静寂の中、手を合わせて祈りを捧げる

そうすると聞こえるのは木々のざわめきと微かに流れる風の音だけ

その中で一人静かに故人を思う

墓標に眠る人物の名は孫堅。孫三姉妹の母であり、孫呉の立脚者。その人となりは偉大で雪蓮達の言葉の端々に尊敬と羨望を感じる

逢う事は適わないけどここを離れる前に一度挨拶をしておきたかった

「あなたの娘さん達は必ず幸せにしてみせます。どうか天国で見守ってください」

声に出し誠意を込めて誓いを立てる

この思いは本物でそこには一遍の嘘も無い

それは間違いないが、自分の中に少しだけ刺すような痛み。後ろめたさがある

(蜀や魏の記憶に関してはなにも言っていないんだよな…)

記憶の大半が失われていた洛陽での頃とは違い、今では呉に関する記憶が大分戻ってきていた

過去、彼女達が自分に向けてくれる好意の数々は何物にも変えがたい

ただ、俺は全てを思い出していない。今は確かに呉のみんなが大切だがいつか来るその日、偏った判断だけはしたくない

そんな理由から混乱を避ける為と自分に言い聞かせ、誰にも語らぬままの日々が過ぎた

懺悔めいた思いでしばらく黙禱を捧げていたが、突然後ろから気配が近づいてくる

こちらを伺っているのか、がさがさと揺れる草むらの音が動いては止まりを繰り返す

数瞬、この場所で起きた忌まわしい事件が脳裏を掠めるがこの気配はあまりにも露骨でお世辞にも暗殺者の類とは思えない

近くで脚を休めるセキトも気づいたのか不思議そうに首を傾げ、成り行きを見守る

腰に下げた模擬剣に手を掛けて、一応の迎撃体勢をとってみるが相手が気にした様子は無い

隠す気が無いと思う程大きくなった音は自分の背後まで接近すると、ごそごそと何かを取り出す音とイラついた声に変化した

「
」

内容は一応聞き取れないくらい小さいがその声色は聞き覚えがある
幼く高い声。加えてこの場所にいるという事はまず間違い無いだろう。…小蓮だ。正体が判明すると迂闊に手を出し難くなってしまっ

（先に気付くと絶対へそを曲げるだろうからなあ…）

溜息をつき、頬を搔く

悪戯好きの彼女に下手なりアクションはこちらの命取りになる。以

前兵に運び込まれた時に再会の言葉をかけたところ

「そうじゃないでしょ！もっと気の利いた言い方は出来ないの！？
やり直し！！」

なんて駄目出しされ、半生半死での無限大喜利状態に移行したのは
記憶に新しい

構ってあげたい気持ちは山々だがこれからの出発に備えて体力の温
存はしておきたいのが本音

ここは小蓮に我慢してもらってやり過ぎさせてもらおう。…無論、
機嫌を損ねない程度の対応を心がけながら

心構えの済んだ俺は来るであろうダイブに備えて気合を入れる

…さあいつでもかかって来るがいい！！

「どーん！！」

「うあらばっ！？」

襲ってきた衝撃は想像以上だった。その場で踏ん張っていた自分を
ものともしない威力。大の大人である自分が吹き飛ばす程の突進が炸
裂し、宙を舞う

油断は無かった。ただ、ひとつ誤算があるとすれば、それは

…意識の外にあった横方向からの攻撃に違いない

「じはっ!？」

空中での言い訳もそこに地面に向かって滑るように転がる俺。一応の手加減はあったのか思ったよりは飛ばなかったなというのが正直な感想。彼女が本気なら骨折どころの問題じゃない気がする

体に付いた土を払いながら立ち上がると隠れていた二人が姿を表しやけに嬉しそうな顔が見える

「ふっふーん。シャオに気が付いたのは褒めてあげるけどまだまだ未熟ね。伏兵には気をつけないと駄目じゃない」

小蓮は駄目出ししながらもまんまと引つかかった俺の姿を見てご満悦の様子。何かの箱を持ちニコニコと飛び跳ねる

それを微笑ましく見つめているのは自分を突き飛ばした張本人である雪蓮。彼女もこちらに顔を向けるとニヤリと笑い口を開く

「シャオの言うとおりよ一刀、こんな見え透いた罠に引掛かるなんて。少し遅しくなったようだけどまだまだ精進が足りないんじゃない?」

…言ってる事はまあ、間違っでは無いしもっともな意見だが、お墓参りに伏兵の警戒をする人間はいないと思うんだ

「策に嵌った言い訳はしないけど、なんで此処に来たんだ?」

「呉の将として平原に出向く一刀を労いに来たのよ、嬉しいでしょ?」

「…気持ちは嬉しいよ、でもこの場所は…」

「ああその事、…別に今は命を狙う輩はいないから大丈夫よ。心配しすぎ」

もう聞き飽きたとばかりに雪蓮は鼻を鳴らす。確かにここで起きた事件について何度も話し合った。だけど脳裏に蘇る彼女との別れは思い出すほどに胸が苦しくなる

彼女の死は北郷一刀にとってトラウマであり、同時に彼の心を支える立脚点でもあった

まだ他にも大切な思いが抜け落ちているがフランチエスカの世界で燻っていた気持ちは間違いなくここから始まった

「……………」

「一刀…」

軽い気持ちの悪戯もここでやられると心が痛む

「……………」

「……………」やっぱり重症ね、今回の遠征に出して正解みたいね」

「……………雪蓮？」

「ここですぐ話しても納得しきれないでしょ。シャオ、一刀にアレを渡して」

「はい」

落ち込んだ気持ちになっていた俺の前で小蓮は抱えていた大きめの箱を開き、中身を見せてくる

「これは、確か」

出てきたのは純白眩しいマント。基本的なデザインは洛陽で霞から貰った物を参考に行っているが玉飾りや色紐といった豪華な装飾が増えていく。中でも背中の十文字周りに描かれた龍と虎の刺繍がとても目立つ

「前のは血塗れになってから新しく作り直させたの。勿論シャオの意見を取り入れた抜群の出来よ！」

小蓮は後ろに回り自慢げにマントを着せてくれる

「…ありがとうなシャオ」

「未来のお嫁さんとして夫の身だしなみに拘るのは当然の事でしょう？」

頭を撫でてあげると嬉しそうに笑ってくれる

嫁うんぬんは別としてありがたく受け取った。見れば上質の素材を使っているのか、陽光に照らされて輝く様は以前着ていたポリエステル製の制服に近い気がする

「もう一つ餞別として、剣も一緒に渡したかったけどまだ修理に時

間がかかるらしいわ」

「ああ、それは覚悟してたけど……」

専用刀ではなく打刀で無理に居合いを使った事と元が年代物だったせいもあってか鞘は割れてしまっていた

造りが大陸刀とは根本的に違うから時間がかかるのは仕方ない

「あ、そつちもシャオが監修してあるから乞うご期待ね！」

バチリとウインクしてくるが、マントだけでこの豪華さだ。無事な姿で帰ってくるだろうか？

「饒別…今回の遠征はやっぱり俺の雪蓮離れ為もあるのか」

「あくまでついだけでどね。領地の拡大が主目的なのは変わらない。ただ記憶の戻ってない子達から見ると私と一刀の関係は少し異常らしいから」

確かに、ぽつと出の男が突然王と恋仲になったら不信がるのは当然だろう

「だから私の傍にいても問題の無いくらいの事績と信用を稼がないと。記憶が戻らない可能性もあるでしょ」

「それは考慮してなかったな……」

「駄目よ、成り行き任せは。自分から魅力を出して行かないと変に誤解されるわよ……その子みたいに」

「えっ？」

雪蓮の指差す先、木々に隠れて一組の男女が立っている

「い、何時の間…」

「…初めからだ。おまえは気が付いていなかったようだが」

女性のほうは冷たい目線で一瞥してこちらに歩み寄る。腰まで伸びたロングヘアーが特徴の少女孫権だ。後ろに控える男もそれに続いて出てくる

「いやいや、北郷殿はとても集中なさっていたのです。気付かなくて当然。どうかご納得を」

「于吉、お前もいたのか」

数少ない男仲間である彼は道士という職業？らしい。魔法的な術が使えるらしく泗水関では周囲の反対を押し切って助けに来てくれた雪蓮の姿を隠し救出してくれたらしい

眼鏡の奥に何となく引つかかるものを感じるが物腰の低い青年だ

「孫権がいるって事はもしかして」

「……当然、私もいる」

「ひいー！？」

「…まだ何もしておらんぞ」

今度は木の上から忠臣、思春の声がする

(…この場に合計五人隠れていたのか。一人しか気付けなかった俺はいつたい…)

またもや頂垂れる俺に雪蓮は近づき耳打ちをする

「蓮華がもし思い出せなくても一刀はきちんと今の魅力で惚れさせないと駄目でしょ。そういう約束だったわよね」

天の御遣いだった頃の条件だったね確か

「このまま私にべったりだと気に入られた時に苦労するわよ」

「……………ふんっ！」

「ほらね」

視線を合わせようとしただけで顔を背けられる。よほど嫌われたようだ

ここまでとはいかないが黄蓋、周瑜、呂蒙、周泰といった人たちも同じように俺の存在を納得できないらしい

逆に小蓮、穩はべったりなんだがな、思春は…よく分からん

「ええと、孫権？一緒に平原に行くんだから、もう少し態度を崩してもらえるとありがたいな」

恐る恐る声をかけてもすぐには返事は返ってこない。見かねた雪蓮に催促されてようやく会話できたが内容は素っ気無い

「…お前はまだ信用に足りん。信頼を得たくば働きを見せる」

そう告げると出立の準備が残っているという理由で于吉と思春を引き連れ帰ってしまった

その三人と俺、呂蒙を合わせた五人で平原を治める予定なのでわざわざ別で行く理由は無いんだけどなあ

「……まあそういうことで妹をよろしくね一刀。蓮華はきつと大丈夫よ。天界の言葉で言うツンデレってやつでしょ？」

…前回の俺はいったい何を教えてるんだ…

それはともかく俺も目的は果たしたんだし荷物のチェックでもするかな

そう思って小蓮にしばしの別れを告げ、セキトの元へ向かおうとすると雪蓮の真剣な声がかかる

「最後に注意しておくわ。……于吉には気をつけて」

「えっ？でも周瑜公認の部下なんだろ。とりわけ不信なところも無いと思っけど」

「なんとなく……勘よ」

「……そっか。うん、注意するよありがとう」

雪蓮の勘は馬鹿に出来ない精度を誇りからな、理由は分からないけど頭には入れておこう

「じゃあ、行ってきます」

手を振って見送ってくれる二人

装飾過多なマントを羽織り、お墓を後にする

大きく形を変える世界

新しい地ではどんな事が起こるのか

風雲急を告げる大陸の中で

とりあえずは孫権のご機嫌取りから始めたいと思います

…異論は認め無い

時を同じくにして、場所は成都。劉備去った後、戸惑う民の中に少女が二人が茶店で辛気臭い顔でおしゃべりに講じていた

表情はともかく、その様子は至って普通だが、彼女達の服装は一般民とは言いがたい

一人は螺旋の槍を、もう一人は双剣を腰に下げている

「はあしんど。結局無駄足になってしもたやないか。劉備のあほんだらが」

「そういう事言っちゃ、めーなの。第一遅れたのは真桜ちゃんが原因でしょ」

「あれはしょうがないやん。カラクリに使える良い素材が手に入る絶好の機会やったんやから」

「同じ理由で曹操様にも仕官する機会が無くなっちゃったの。反省すべきなの」

「うう、えらいすまんこって」

すまなさそうな口調であやまるが槍を持つ少女からは悪びれた雰囲気は感じられない

対する女の子は慣れているのか、それ以上は口に出さず、おしゃべりを再開する

この乱世で義勇軍として戦った彼女らは仕えるべき主君を探す為、

旅をしていた

当初、魏に仕官するつもりだったが真桜の素材集めに時間を取られ曹操軍は戦争状態へ

武勲の無い彼女達が仕えられる状況では無くなった為だ

そこで徳高い劉備軍に仕官しようとしたのだが、同じ理由で遅れてしまい先に移動されてしまった

「けどこうなると、他に誰がいるやるか？自棄で変な人の下で働きたくはないしなあ」

「沙和だつてそうなの。その情報収集の為に聞き込みに来たの」

「その割にはただ喋ってるだけに見えるがな…」

「げっ風、もう帰ってきたんか!？」

「あわわ!別にサボってたわけじゃないの。情報を共有していたというか!？」

「明らかな言い訳を平然と言い放つあたり度胸はあるようだが頭は宜しくないようだ」

「…別に怒ってない」

「…本当に?」

「本当に。仕官先が見つかったから少し気分が良い位だ」

「「えっ!?!」」

叱られると思っていただけにその答えの衝撃は大きい

凧と呼ばれた少女は少し満足そうに頷くと口を開く

「相手は呉の孫権様。近く平原の地に赴任されるらしい」

ここに新たな出会いが始まるうとしていた

気が付けば

見知らぬ天井

知らぬ顔

ただどこか懐かしい

ぬるま湯みたいな陽だまりで

北郷一刀はまた歩く

十三話 北郷隊の再編 平原捕物帳その一 猪現る

「ほ、本当に外出していいんでしょうか？何か突発的な仕事があるかも…」

「大丈夫だって。やる事やったんだから。一度割り切って休憩しないと気が持たないよ」

人通りの多い城下の大通りでビクビクと周囲を警戒し続ける様子に苦笑しながらも歩を進める

恐らくは孫権に見つかって注意されないかと心配しているようだけど、今日の分の仕事はキチンと終わらせてあるので問題ないはずだ
もし問題があるとすれば彼女ではなく俺の方がまだ全然終わってないぐらいか…

…それはとりあえず置いておくとして、後ろを付いて来るのは同じ呉の仲間である呂蒙だ

平原の町に到着後、軍の編成、町の状況把握等の文官仕事を全てを俺と呂蒙の二人でこなし、忙しさに追われ続けたが、その苦労もあって今はいくらか落ち着いた日々を送っている

そこで、俺は久しぶりの息抜きを充実させる為にある目的地を目指している

そこは町で評判の甘味屋。味は勿論の事、種類も饅頭、菓子含めて数十種類という充実ぶりで楽しくおしゃべりするにはうってつけの

お店だ

前もって呂蒙が好きそうなゴマ団子を用意して貰っているので喜んでもらえるだろう

そこで大事な話を二つするつもりだ。これからの仕事に関して人間関係の改善

この地に赴任していくらか時が経ったが相変わらず孫権は信用してくれないのか一定の距離を保ったまま。今一緒に歩いている呂蒙もいざ二人きりになるとそそくさと逃げてしまう

思春に至っては前回の記憶があるのに関わらず態度が素っ気無い。

…それでも一応は気遣ってくれるのか、孫権と政策の意見で言い争いになった時には進んで仲裁に入ってくれた

さすがは将来の嫁の一人。内心とても頼りにしてます

唯一の男であり、記憶の中では出会わなかった新しい仲間、于吉は中立の姿勢を保ち、誰に味方するでもなく進んで物事には関わろうとしない

確かに仕事上問題は出ていないがこのままではいずれ問題が起きて軋轢を生みかねないだろう

雪蓮の言葉もあるが北郷一刀にとって仲間とは互いに信頼し合う関係でなければならず、今のどこか余所余所しい雰囲気は一刻も早く何とかしたい懸案事項の一つで手始めにこうして呂蒙をデートに誘い、関係改善の足掛かりになればと計画したわけだが…

「……………」

「…ん？」

「はう！？」

思考の途中、なにやら視線を感じて振り返ればそこには慌てて顔を隠す呂蒙の姿。見れば長過ぎる袖の隙間からなぜか赤く染まった頬と困ったような表情が覗く

不信に思い近づくと更に顔を伏せてイヤイヤされた

「どうしたの？どっか体調でも悪くなった？」

本当に無理に連れ出して彼女に負担がかかってしまったら元も子もない

もしや熱があるのではと額に手を伸ばすと弾かれたようなバックステップで距離を取られてしまう

「い、いえ！どうかお気になさらず！？」

半ば裏返ったような声とぶんぶんと手を突き出した全力否定をアピールされてはそれ以上聞けず、とりあえず健康そうなのを確認するとさっきより明らかに開いている距離を保ちながらも付いて来てくれる

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………はう……」

「……………あのさ」

「はう！？」

いくらかも進まない内に同じ視線を感じて、振り向くとまた同じ反応が返ってくる

「本当に用事とかあるなら言つてよ？無理なんてしなくていいから」

「そんな無理なんて！私なんか気にせず進んでください！」

「いや、そうしたら一緒に行く意味がないでしょ……」

「うう！？」

理由も分からずこの後も同じやり取りが繰り返され、気が付けば予定より大分時間を費やし茶店に到着した

甘い香りが立ちこめ、全ての席はお客で埋まる盛況振り、その中で一つだけ机がポツンと空いている

（揚げたてをご馳走してあげたかったんだけどな）

場所は確保出来ているが、恐らく注文しておいたゴマ団子は冷めてしまっている時間だろう。気を利かせたのが裏目に出てしまったかもしれない

やはり女の子と付き合うときはもっと真摯な心構えで望むべきという神のお達しか…

「すいませーん、予約した本郷ですけどー」

気を取り直し、店員を呼ぶと奥の方から給仕服の女性がこちらの気付き声を上げる

「あぁー！ やつと現れたの。てつきりもう来ないかと思ったの！」

「ごめんね。ちょっと事情があって時間がかかったんだ」

「ぶう、遅れるのはいいけど、そのせいで注文の品は冷めちゃってるの。そこは自業自得と思って諦めるの」

「それはもちろん了解してるよ。ただ追加でまた作ってもらえるかな？ 用意してもらった分はきちんと食べるから」

「…それなら良いの、少々お待ちくださいなの」

飲食店には似つかわしくないアクセサリーで身を包んでいる店員の少女はお茶を差し出し、くるりと回ると再び奥の方へ入っていく

とりあえず注文は終わったので席に着き、一口啜る。すると呂蒙がテーブルに置かれた団子を見て遠慮がちに尋ねる

「あの、一刀様。もしかして…」

「ん？ ああ別に呂蒙が気にする事じゃないよ。甘いもの多く食べたかったからちようどいいぐらいさ。それよりほら、なんでも好きなものを選んでよ」

遅れたのは確かに彼女が原因だが、それで責任を感じて落ち込まれては意味が無い。やや強引に話を進める

「ここは種類が豊富で有名だからね、ネタ狙いでおもしろい菓子もあるみたいだし思い切って頼んでみる？この火中点心甘栗とか…」

「あ、あの…」

「あーでもヘタなもの頼んで残したら申し訳ないよなー。やっぱり普通っぽいのでまずは攻めてみようか？」

案の定、責任を感じて小さくなり始める彼女に話し続け場を保つ。とりあえずはなんでもいいから別の話題にどんどん切り替えていくて気分を変えてもらおう

洛陽での話や呉で療養していた時の話など、話題に関しては事欠かなかったが、生真面目な彼女の頭の中では世間話と重い話は別テールで処理されているのかどうにも反応が芳しくない

そこで一旦、話題を打ち切って本当は後で話そうと思ったもう一つの真面目な話を振ってみた

「ところでさ、話は変わるんだけど俺達はこの平原の地を治めようとしてるよね、今は順調だけど後から問題になりそうな事がありま

す、それは何か分かる？」

「？ 問題、ですか？」

「そう、表面化してないからまだ軍議には上げてないけど、いずれ対応しないといけない問題。ヒント…じゃなかった。周りを観察すると分かりやすいと思うよ？但し、顔を動かさず目だけで見てね」

切り替え作戦の第一弾は成功。回りを伺う呂蒙の顔には先程までの暗い表情は無い。目だけがキョロキョロと動き、真剣に考え込んでいるようだ

やがてその動きが止まるともう結論が出たのか、おずおずと口を開く

「もしかして、…民のみなさんの事ですか？」

「正解。じゃあ具体的にどんな問題かは分かる？」

「えっと、…はい、…身なりが酷い人はいないですし、暗い話題も聞こえてきませんから貧困や生活の不自由が起こっているわけではないですよ。…だとすると残るのは…心の問題ですか？」

「さすがは孫権お墨付きの軍師、大正解。民衆がまだ俺達を受け入れていないところが今回の問題なのさ」

「そ、そんな！たまたまです！」

見事正解した彼女に笑いかけると、褒められるのが恥ずかしいのか真っ赤になって謙遜するが、この数瞬で気付くとは…

注意深く見渡せば周りの客はちらちらとこちらを覗く仕草が見て取れる。敵意や害意ではなくもつと軽い感じの、悪く言えば値踏みするような視線が集まってきているのだ

無論、ここだけの話じゃない。この雰囲気はこの平原に来たときからずつと感じていた。息抜きと称してよく遊びに来る俺と違って引き籠りがちな呂蒙や城からあまり出ない孫権はこれに気が付いていなかったようだが

「でもなんで……私達はそんなに無理を強いてるわけじゃないですよ。治安も問題無い筈ですし……徴兵も最低限に抑えていますよ？」

「そう、だから心の問題なんだ。世策に関しては俺達は十分やっているはずさ。でも実際、人心の方は付いてきてないんだ……なぜなら」

もったいぶった言い方に半ば身を乗り出すような前傾姿勢で近づく呂蒙。先程の恥じらいも忘れモノクルから真っ直ぐな視線が投げかけられる

とりあえず話の切り替えには成功したな……。真剣な瞳に影は無い。話題は何であれ、まずは彼女との間にある遠慮を取り除かなくては話にならない

椅子に座りなおし背筋を伸ばすと疑問に答えるべく続きを切り出す

「……劉備が居たから。徳高い王として有名な彼女が治めていたからこそ起きる問題だったんだ。孫権も劉備に劣らず善政をしているけど、二人には大きな違いがある。……それは統治者としての在り方。劉備は民と同じ目線に立って国を動かしていたからまず最初に人心を得ていた。そこから政が評価されて人が集まってきた経緯がある。

「ただ孫権は王として民の前に立つ存在。政策や争い事を収めていくことで崇められ人心を得るやり方だから、劉備の人柄を慕って集まった人達にとっては多少の善政では魅力としてあまり感じられないんだろっね」

「加えて治安もいいこの地では争いそのものも少なく、武勇による名声も立てれない状況が続いている」

「本来なら時間が立てば解決する問題だけど、今の大陸の情勢から考えればいつ戦禍に巻き込まれてもおかしくはないだろ？その為にも、一刻も早い人気取りが必要なのさ」

「実際戦うのは呉の兵士だけじゃない。この町の人達の協力は必要不可欠だ」

「それで、まあ今日はそこらへんを話し合おうかなと思うんだ」

「再びお茶を口に運び、喉を潤す」

「……………さすがです」

「……………呂蒙？」

「さすが孫策様がお認めになった御方。そこまで考えていたなんて…普段の気の抜けた姿がまるで嘘のようです！」

「……………まあ、うん。とりあえずどんな方向性でいくか考えようか……………」

「？」

彼女に悪気は無い。気が付けば少なくなつたお茶を一気に飲み干すと、妙に渋く感じるのはなぜだろう？

一息つき、しばらく意見を交わすがなかなかうまくは纏まらない。ただ、一番効果的なのは孫権が前に出たのパフォーマンス活動だろう。劉備より優れていると民衆の前でアピールできればいいんだが、彼女の性格からして劉備と同じ手段じゃ時間がかかるし、うまくいかどうか微妙だしなあ

どうしたものかと二人して頭を捻っていると明るい声とともに香ばしいゴマの香りが一緒になって運ばれてくる

「はい、おまつとうさん。注文の品やでー」

テーブルに置かれた揚げたてのゴマ団子。見るからにおいしそうだ。このまま悩み続けても妙案が出るとも限らないし、ここは甘いものを取りながらの小休止といこう

「呂蒙。考えすぎは良くないよ、すこし頭を冷やして、また考えようか」

いまだ思案顔の彼女に声をかけるが、聞こえていないのかブツブツと呟きが止まっていない

真面目すぎる性格に苦笑いし、彼女の再起動を待つ。その間に冷めたほうの団子を口の中で咀嚼し、再び辺りを見渡す

相変わらず様子見の視線は止まっていないが、気付かれないよう眺め続けていると、なにやら視線が別の方向にも傾いている

その先を目で追うと、奥の方にうず高く積まれた皿と蒸籠の山がテーブル一杯に広がっているではないか

しかも微妙に揺れ続け、カチャカチャと音がする

…まさかアレだけの量を食っているのか？

俄然興味が湧いてしまい、体を抜って凝視する。皿の隙間から時折見える髪の色は珍しい金色。忙しなく動く頭頂部はやけに低く、とてもあの量を完食できる体型には思えないな

更に観察しようと身を乗り出すと、先程の店員はなにか用事があるのか近づき話しかけてきた

「兄ちゃんら、もしかしたら呉の將軍さんやったりする？」

「…一応そうだけど」

「おお！ちょうどええところに来てくれましたなあ。ちよーつと頼みたい厄介事があるんやけど…」

なしを作る店員の視線が俺と同じ場所に注がれる

「あの客の事なんやけど。よーく皿見てもらえる？」

「皿？」

言われるまま、相手が見えないほど高くなった皿の塔を観察してみた

「注文の品全部、残してあるやる」

「うおつ。ホントだ」

確かに積まれた皿と皿の間に潰れた菓子類が挟まっており、どれも一口、二口程度しか食べた形跡が無い

「随分と豪気な喰い方やけど、ちゃんと金払ってってくれるか心配になってきてん。相手が相手やし迂闊に強く出れんくてなあ」

溜息交じりに肩を落とす

「困つとつたトコにちょうど兄ちゃんが来てくれて助かったわ。もちろん、これくらいの民の悩みぐらい解決してくれるやる？」

いや、任せた！みたいな感じでウインクされても…第一、相手は一体誰だ？武人とか出られても俺は勝てないぞ？

渋る顔で彼女に向く、その表情にこちらを伺うような素振りは見えない。前に来たときには見かけなかったからどこかから流れてきたのかな？素直に頼られている感じがする

少し考えてみるが、これはチャンスじゃないだろうか

わざわざ孫権を呼ぶほどじゃないが、厄介事の対処はイメージアツプに直結する

「よし、任された！」

答えとともに席を立ち、目的のテーブルへ向かう。呂蒙はまだ俯い

たまま考え込んでいたのでとりあえず、そのままにしておいた

まずは相手を見極める。自分で対処出来る相手ならよし、もし手に負えなかったその時は臨機応変に対応しよう

いざテーブル近くまで来ると皿の揺れる音以外に小さい声が漏れてくる

耳を澄ませて聞くと、子供のようなトーンだ

加えて特徴的な口癖がちらほらと出てくる

「……………」

猛烈に嫌な予感がこみ上げてきた

おそろおそろ正体を確認しようと身を乗り出すと、そこにはポロポロと溢しながら食べ続けるお子様の姿

こちらにはまだ気が付いていないのか一心不乱に菓子を掻きこんでいる様はまるでリスのようで微笑ましくもある

微笑ましくはあるが……

……………

息を吸い込み口を開く

「袁術ッ！！」

「ひゃわっ!?!」

突然の大声に、袁術と呼ばれた少女はもんどり返って椅子ごとひっくり返ってしまふ

崩れる音と今の声で店中の注目が集まるのが分かる

「な、なんじゃいきなり!無礼であろう!」

彼女の立て直しは意外とは早く、すぐに立ち上がり抗議の声をあげる

「わらわを誰じゃと思うておる。袁一族の一人で荊州太守である袁術であるぞ!図が高い!」

その内容に客がざわめく。名門の一族がこんなところにいたら誰だつてそうなるだろう

その中でいまだ不遜の態度で立つ俺に彼女は苛立ちを剥き出しにする

「まだ分からんか!わらわに対する無礼、さつさと詫びぬか!」

喧々囂々どんなに捲くし立てられても事実を知っている俺にはその脅しは効かない

だから、ただ一言だけ口を開く

「……………孫策に言いつけるぞ」

「……………」

ピタリと、本当に一瞬で、彼女全ての動きが止まった

目だけがすごい勢いで浮いている

実際あったことはなかったが、袁術は雪蓮に大分脅され、何処かへ逃亡したと聞いていたがまさかここにいたとは…

不思議な巡り合わせに少し驚くが、目の前の状況を見逃すわけにはいかない

負けて放逐された袁術に、これだけの量の菓子代を払えるとは到底思えないからだ

「…どこへ行こうと言っのかね？」

「うう！？」

こっそり逃げようとしていたところを捕まえる

「三分間待ってやる。その間にとりあえずいまままで食べた分の金を払ってくれるか」

「……………」

「……………やっぱりか…」

大方、袁家の名前を出して踏み倒そうとしていたんだろう。露骨に目を逸らされる

「もう一度孫策に灸をすえてもらおうか？」

「ひい！」

今度はガチガチと怯えるように震え始める。…一体なにをしたんだ雪蓮。前回色々厄介だったとかで念入りにお仕置きしたとは話していたけど。ここまできると可哀相でもあるな…

不憫に思い慰めの言葉をかけようとしたその時、彼女の瞳に涙が溜まり始めた

「ちよっ、まさか!?!」

「……………うわああああああん!!!!!!」

耳を劈く大音量。お子様の必殺技、ガン泣きが発動してしまった

「お、落ち着け、袁術!」

「びええええええん!!!!!!」

まったく泣き止む気配は無く、なおもシャウトは続く

宥めようとあれこれ手を尽くすがうまくいかない

時間が立つごとに周りの視線が痛くなってきた

なんか俺が悪いみたいになってない!?

なおも時間は過ぎるが事態は好転しない

まさかの展開に動揺し、何をすべきか混乱してきた

と、とりあえずは泣き止ませないと…

彼女に触れようとした瞬間。後ろ、店の入り口から叫び声上がる

「お嬢様!!」

そこに立つのは帽子を被った黒髪の女性。その姿を見るや否や袁術が脱兎の如く駆け出した

「あ!ちよつと待て!?!」

完全に意表を突かれ、するりと横を抜かれてしまう

「七乃お!!怖かったのじゃああ!!」

「お可哀想に。わたしが来たからにはもう平気ですよ」

飛びついた袁術を抱き締め、撫で始める。その優しい抱擁とは裏腹にこちらを直視する目は険しい

「よくもお嬢様を泣かせましたね。あまつさえトラウマである孫策の名をだすとは、何たる外道!その罪償ってもらいます!」

ビシリとカツコつけられるが、なぜ俺が悪役側に…

それに…

「孫策の名って…まさか結構前から見てて、放置してないか?」

「……………」

「……………七乃」

沈黙は解なり。主従ともどこかずれてるな…

「まさか、また困ったわらわを見て楽しんでいたのか？どうなのじゃ七乃？」

しかも常習犯だった

「……………そんなわけあるはずありませんよ。わたしは、忠実な、美羽様の、部下です」

目が泳ぎまくっている。誤魔化しかたまで一緒だった

そこで先から黙っていた依頼主、店員さんが口を出す

「漫才はええからさっさと金、払ってもらえます？」

もつともな言い分だった。救いを求める衰術に、七乃と呼ばれた女性に余裕の笑みを零す

おもむろに懐に手を入れ、何か球状の物体を取り出した

「無理。だってお金ありませんから。お代はこれで勘弁してくださいね！」

それをいきなり地面に叩きつけると一気に白い煙が噴出し、一面を

覆い尽くしていく

「うおっ！？いったいなんや！」

「きゃーなの！？」

突然の事態に動揺する店内は無理に逃げ出そうとする者や、パニックになった連中で阿鼻叫喚の騒ぎに陥る

くそ、煙幕なんて持ってたのか！？

舌打ちし、テーブルを掻き分け、敢えて視界の悪い中を突き進んでいく。その際、ガツガツと色々な物体に当たっているが今は気にしていられない

痛んできた体を無理に進めていくと煙の向こうで二人が逃げようとしている姿が視界に飛び込んでくる

「うわっ！もう追ってきおったのじゃ！」

「美羽様！ここは一旦、二手に分かれて逃げましょう。合流場所は前と同じところですよ！」

煙を抜け、逃がすものかと、手を伸ばすが今一步のところまで逃げられてしまう

しかも言っていた通り、それぞれが別の路地に入り込み、姿はずでに見えなくなってしまった

「…ぐっ！どっちを追うべきだ！？」

捕まえるのが簡単そんな袁術を追うか、それともまたこんな事態にならないよう黒髪のこと、多分、張勳であろう人物を先に確保すべきかあまり長い時間は考えていられない。どちらを追うにしても距離を離された分、発見の難易度はどんどん上がっていつてしまう。最悪揃って逃がしてしまうのだけは避けたい

見つけやすいのは…

！ 袁術だ！

瞬間、ある閃きが浮かび目標を袁術だけに絞る。この予想が正しければ、すぐ確保できるはずだ。駆け出そうと地面を踏み込んだところで後ろから、叫び声がした

「あんのクソガキ！ もうゆるさへんで。直々にとっちめてたるわ
！」

見れば茶店の店員さんが、いまだ煙立つ店内から巨大な武器を持って出てくるではないか

それを一言で表すなら、ドリル。ドリルそのものを槍につけたシロモノだ

「せっかくの路銀稼ぎの仕事をこんなにしおってからに。いくら名門の人間でも絶対にゆるさへん」

「そつなの！許すまじなの！どこ行ったのだーなの！」

最初に会った店員も仰々しい二振りの剣を両手に握んで憤慨している
なぜそんな物騒な得物を持っているのかは置いておいて、どうやら
こちらと目的は同じようだ。しかも武器を構えている様は素人とは思えない。ならちよūdい

「二人とも、手を貸してくれ！」

本格的な戦闘をするわけじゃない。せめて追跡だけでも協力してもらおう

手短かに状況を説明し、俺が袁術、店員さん達には張勳を追うよう指示を出し、二手に分かれる事にした

すぐに路地裏の道に入り込み、地面を注意深く観察し始めた

慣らされた土の上には、小石や砂利の他にちらほらと予想通りの物も点在している

…よし！

これを追っていけばすぐ見つかるはずだ

俺はそれを目印に脚を進めていった

「まさか、呉の將軍に会うとは予想外でした」

家と家の隙間に身を隠した張勳は溜息をついた

袁術が引き起こす厄介事はいまさら咎める気など無いが、今回は危なかった。念のため持っていた煙玉が無ければどうなっていた事か…
相手の名は分からなかったがこのままでは孫策に通告されてしまう
恐れがある

…それだけは避けたい

「でも、こんな事もあるうかと、保険は用意してあるんですけどね」

ニヤリと口を歪めた先に、一人の女性が佇んでいた

大きな戦斧を担いでこちらに一瞥くれるが愛想は無い

「お給料分はキチンと働いてくださいね？」

「…ふん、追っ手を無力化すればいいのだろうか？ 任せておけ。まあ、齒ごたえがある相手がくるとは思えんがな」

つまらなさそうに吐き捨て、辺りを警戒し始める、瞬時に殺気が路地に満ち溢れ近くにいた犬が慌てて逃げ出していく

「とはいえ私では勝てないので、よろしくお願いしますよ 華雄さ

ん？」

そう呼ばれた女性は、やはりおもしろくなさそうに、顔を向けただけ
で返事とした

甘い会話は犬も食わぬ

どこかの僻み屋が言いました

そんな誰かのやっかみが

巡り巡って彼の元

不安の種は

まだまだ増える

十四話

北郷隊の探索

平原捕物帳その二 鹿震える

道行く地面にあるのは砂利と砂

転ばないよう慣らされた土の上で、謎の破片があちこちに点在している

黒や茶色、大きさもまばらで統一性の無いものばかりだが、これこそが追跡を可能にする道標

それは道なりのように続き、目の前の十字路で右に曲がる

歩を進めて右を向けば、案の定、ここまで来たところと同じように続く破片の行列

例に挙げるなら、ヘンゼルとグレーテルのお話に出てくるワンシーン、道に迷わないようパンを千切って目印にしたあれと同じ状態

違うのは落ちているのがパンではなく食べ残しの菓子の破片であり、対象が意図してそうしたわけでないという部分

「あれだけ盛大に食ってれば、そりゃくつつくよな」

先の茶店でお世辞にも上品とはいえない仕草でがつついてた袁術。口の周りは餡子まみれ、桃でも食べたのか頬まで伸びる蜜の輝き

しかも頼んだ品を一口程度しか口に運ばないので、齧った後から砕けた生地が服のそこらじゅうに付着しまくっていた

そんな状態で走れば当然、食べかすが転がり落ちるはずと予想していたが、まさにドンピシャリ

逃走ルート一直線の完全ナビガイド

これなら時間はいかからないだろうと意気揚々とカスが続く路地裏へ足を踏み入れた

人の姿は見えず、聞こえてくる音は皆小さい。表の慌しい喧騒はまったくの逆の町並みが広がっている

家屋の間に挟まれているせいで光が届かず、所々薄暗い死角があちこちにある

ぱっと見ても、角に積まれた木箱や壺の影、うち捨てられた木材の裏なんかは小柄な袁術にとっては格好の潜伏箇所になるだろう

試しに傍に置いてある木箱と住居の隙間に顔を差し込んで確認してみる。予想通り、子供一人入るスペースが空いていた

これだけ隠れやすそうな場所が多ければ、遠くに逃げようとするよりも、付近で待機して張勳と合流したいはずだ

……ここを中心に探し始めよう

一人頷き、視線を足元に戻す

食べかすはなおも通路に沿って続き、いくらか進んだ十字路で再び右折している

それを見失わないようゆつくりと歩き出した。しばらくすると曲がれる箇所は全て曲がる。そんな主張が感じられるくらい右や左に方向転換しているようだ

いまのところ、同じ道は二巡していないようだけど、そう広くないこの路地裏。まだ調べていない場所で食べかすが合流するような事があれば、どちらが最後に通過したかの判断が曖昧になり迷いやすくなる

そうなる厄介だな…

募る焦燥を抑えて歩き続け、数分が経った

途中誰ともすれ違う機会も無く、聞き込みの情報は無し。ついでに言えば家屋の中にも人はいないとこが多かった。まあそこは単に働きに出ているだけだろうけど

肝心の道標の量は次第に少なくなっていく、細かくなつたかすは風で飛ばされたのか道一杯に広がってしまっている。加えて追い打ちをかける様に最悪なのは、何回か前の曲がり角でとうとうかす同士が交錯し、もはやどこで曲がったのか分からなくなってしまう事だ

それでも勘を頼りにあちこちを探してみたが、やはり表術は発見できな

い
派手なキンピカ衣装と食べかすで直ぐに見つかるたたかをくくつたのに、この様だ

なんでもそうはうまくいかないか…

一刀の眉間に深い皺が刻まれ、深い溜息がこぼれる

お手上げと、あきらめるつもりは無い勢いが削がれてしまった気分
一旦、気を落ち着かせようとマントの肩から伸びる色紐を指で弄び
ながら、頭を冷やして考える

まずは逃走範囲

「袁術の性格と逃げ際のセリフからして町から出て逃げるのではない
だろうな…」

張勳に依存している以上、見捨てていく可能性も無いだろう

次に潜伏場所

「あの服装じゃ目立ちすぎるから、大通りで人に紛れてやり過ごす
可能性も低いだろうし」

その点ではこの人通りの少ない路地裏は格好の場所といえる、わざわざ
発見されるリスクを負って別の区画の路地に逃げ込むのも考え
にくい

「…やっぱり、このあたりで合ってるはずだよなあ」

自身の能力不足は自覚しているつもりだが、この推理は当たらずと
も遠からずといったところだろう

とすれば、発見できないのはなにか別の要因が在るのではないか？

紐を握る指の力が強くなり、推理を働かせようと頭を捻っていると、ふと視界の先に人影が移った

背丈からして袁術ではないようだが、丁度いい。聞き込みを試してみよう

「すみません。ちょっといいですか？」

不信感を与えないようなるべく明るく声をかける

すると、こちらに気が付いたのか体ごとこちらに振り向く

「……なんでしょうか。」

少しぶっきらぼうな口調で返事を返す女性。近づいてよく見ると先の茶店と同じ給仕服を着ているが、それよりも大きく印象に残るのはあちこちに残る傷跡の数々。とてもじゃないが日常生活で傷つくようなものじゃない

それに近づくにつれて高まっていく彼女からの圧迫感は、戦場でよく感じるものと酷似している

どちらにしてもただなものではないだろうが。美人だから問題ない

「今人探しをしてるんだけど、この辺りで小さくて、やたら派手な衣装を着た女の子を見かけませんかでしたか？」

「派手な衣装？」

「そう。なんていうかこう、金ぴか？」

「……………」

女性は考え込むように俯き、指を唇に添える。なにか心当たりがあるのだろうか

「…もしかして捜し人は、袁術。ではないか？」

「！よくわかったね」

金ぴかと小さいだけの情報でまさか名前まで当てられるとは思わなかった

「察しの通り、袁術を追ってるんだ。さっき茶店で食い逃げを目撃して追ってきたんだけど、どうにも見失ってね。だれか見かけてないか捜してたんだ」

「…なるほど」

「もしかして、見た？」

「…いいや、残念だが私は目撃していないな」

「…そっか」

「ただ、袁術が食い逃げを繰り返しているというのは聞いた事がある。毎回家の名を出して噂が広がらないよう工作しているらしい」

やけに手際がいいと思ったが、初犯ではなかったか。

いきなりビンゴとはいかないが、悪評が広がっているなら、見かけた人がいれば素直に教えてもらえそうだ

「ありがとう、助かったよ」

「いや、こちらこそ力になれなくてすまないな」

お礼を述べて、搜索を再開しようと思っていると背を向けると、やや間があった後、今度は女性から驚いたように呼び止められた

「……………！ お待ちください！少し質問があるのですが、よろしいでしょうか」

「え？なにか思い出したの？」

「あつ、そういうワケではないのですが…」

なんだろう。口調も変わったような気がするけど

「もしや貴方様は、北郷様ではないでしょうか？」

「？そうだけど？」

町民なら大体の人に覚えてもらった気がしたけど、まだ知名度が低いのかな？町に顔を出す機会は大目にしてるけど、そういえばこの子といい、茶店の二人も結構な美人だったけど、今まで見かけた事なかったな。もしかして最近こっちに来たばかりなのかな？

返事をした途端、急に背を伸ばしたと思えばいきなり頭を垂れる

「やはり！泗水関の英傑に出会えるとは光栄です！」

「……………？はい？」

「生死不明との話でしたがご存命でなにより。…この町で搜索しているという事は、今は呉に所属しておられるのですか？」

「そう、だけど。…俺ってよく分かったね？」

泗水関では結局活躍できずじまい、途中退場なんて失態を見せた記憶しかないんだけどな。そんな尊敬の眼差しで見つめられるのは正直不相応というか…英傑て

「羽織を見れば一目瞭然ではないですか、十文字の北郷ここにありと言っているようなものです」

確かに背中に描かれた家紋である十文字は遠目でも覚えやすい。いやそれよりも気になるのは別のところだ

「十文字の北郷なんて呼ばれる程、活躍した覚えは無いんだけどな」

「なにを仰います！大軍相手に見事な奇襲を収め。直下の崖を駆け落ちる雄姿に加え、あの夏侯惇に勝ったという事実は讃えられて当然です」

…：崖に関しては極度の緊張でセクトの上で硬直してただけだし、一騎討ちの時は実力で勝ったとは言い難いんだが…

「まあ誤解は置いといて、なにか用件でもあるのかい？」

やや興奮した様子だった居住まいを整え、小さく深呼吸してから真っ直ぐ見定められる

「私を含めた三人を呉の将として加えて貰いたいのです」

「………どういう事？」

「この乱世、不幸になる民が増えています。私達はその人達を救いたいのです。その為に少なからず腕を磨いてきたつもりです。どうか孫権様のお口添えしてもらえませんかでしょうか」

真剣な瞳に嘘は混ざっていないだろう。それほどの信念が溢れている

「恩着せがましいとは思いますが、袁術搜索に私をお加えください。必ずや力になります」

「手助けしてくれるのはありがたいけど、他の用事の途中じゃないの？」

彼女の手にはおかもちのような箱が握られている

「それでしたら大丈夫です。ただの買出しですから。用件は済んでいます」

多少の打算はあるようだが、これは好都合だな。力を借りる為詳しい説明を試みる

あらためて話を聞けばさっきの茶店の店員さんらしい。しかもあの派手な娘と関西弁っぽい娘は仲間だそうで張勳と相打つ事になっても負けるとは考えにくいらしい

そろそろ悩みまくってた呂蒙も再起動するだろうから、察しの良い彼女ならあっちに向かって助力してくれるだろう

ただ気になるのは彼女達の名前だ。楽進、李典、于禁といえは確か魏に組するはずの人物

仕官しようにも袁紹との合戦で出払っている曹操には会えずじまい、しかも苦戦の報を聞き、呉に執り立ててもらおうべく路銀集めがてらこの地に赴いたらしい

(どうもおかしいな…)

戻らない記憶を加味しても、ここまで三国志と異なる展開は今までなかったはずだ

向かい入れるのは孫権の采配次第だが、もしそうなれば、大陸の情勢を含め、完全に大筋からはずれてしまっただろう

そこにどうしようもない悪寒を感じずにはいられない

正史から外れきった外史

その先にあるだろう結末に

本当に、心臓を鷲掴みされたような悲しみが湧き上がる

思い出せない記憶が、必死になにかを訴えかけているような…

「か……………ま」

「……………」

「如何しましたか？北郷様!？」

「っ!？なんでもないよ。…じゃあ悪いけど手伝ってもらえるかな」

しかめた顔の俺を心配する楽進に笑顔を見せて無事をアピールする
なぜか顔を赤らめる彼女に少し疑問を感じたが、意見を聞くべく説
明を続けた

……………やがて話しきった後、二人して考えてみるが妙案は浮かばない
闇雲に捜すよりはある程度目安を付けておきたかったが、ここで手
招いて逃がしてしまつては彼女達の仕官にも影響するだろうし、な
にか良い作戦はないかな？

「……………見落としている。という可能性はないでしょうか?」

「どこかに隠れているって事?」

「はい。北郷様の探索が悪いという事では無いのですが、私も袁術
がこの区画を出たとは考えられません。とすれば何処かに身を隠し
たと考えるべきです」

「うーん、それはそうなんだけどさ、残るのは家の中だけになるだ
よ。あの性格上、庶民の家に入ってやり過ごしたりはしないと
思っ
んだよね」

家内なんて密室に逃げ込むなんてマネはさすがにしないだろう

「ならもつと奇抜な場所に……」

楽進は目を細めて辺りを伺っているようだが、めぼしい箇所は調べつくした後だ、今更新発見はないだろうなあ

いくらか気になる箇所が上げられたが、案の定すでに調べた所ばかりだった

言い終わると苦笑しながら

「……相手が表術だと、まるでかくれんぼのようですね」

なんて冗談が漏れる

「……………かくれんぼ？」

その単語に閃きが舞い降りた

かくれんぼのうまい逃げ方は、隠れる場所を移動するのがもっとも良い

一箇所ではいずれ見つかってしまうが、一度捜した場所へは気が向きにくくなり、注意が散漫になりやすい

そしてそれを実行するには鬼がどこにいるか確認する必要がある

ならこの状況ではどこがベストだろう？

この狭い路地にいる俺を常に監視できる場所は？

もし、仮定が正しいなら袁術は……

「北郷様？」

「静かに！」

顔を見上げた一刀に声をかけるがそれ以上の返事はない

不振に思い、釣られて空を仰いでも特に変わった様子はない

それでも空を凝視し続け数分が経つと、小さい音が上から聞こえた

「…そこか！」

突然腰に差した剣を壁に立てかけ、鏢を足場にして家を駆け上る一刀

そして聞こえてきたのは少女の絶叫

「ぎゃああああ！見つかったのじゃああ！…！」

啞然とする楽進をよそに事態は急速に終結した

一方その頃、李典、于禁の両名は追って来た呂蒙と協力し、張勳を
発見していた

だが問題はその後、そもそも探し当てたのは偶然で、向かった区
画で感じた殺気を確認したところで彼女を発見したのだ

「こんなん勝てるわけあらへんよ！」

「が、頑張ってください。張勳さんさえ捕まえれば孫権様へのいい
評価に繋がりますよ」

予想外の相手に戦いを挑まれたが、彼女達の事情を含め、ココで張
勳を逃がすのは惜しい

なんとか抗戦しているが、どうにもうまくいかない
なぜかこちらに向かってどんどん追撃を放ってくる

「きゃー！もう嫌なのー！！」

打ち下ろされた戦斧を辛うじて避ける于禁から悲鳴が上がった

その声を聞いて相手は、ほくそ笑む

「ふっ、強者ではないが狩りと思えば良い気晴らしになるな」

「ちよっ！？華雄さん！こっちも気にして…きゃー！！」

言いながら、自らの得物、金剛爆斧を振り回す華雄とその暴風圏で
逃げ惑う張勳

ここでもやはり輿が乗り、暴走していた

とはいえ多少は気にかけているのか傷ついた様子は無く、いわば守られているともいえなくは無い

そのまま無造作に武器を振り回す華雄。それだけで周囲の家屋が切り裂かれ、狭いはずの通路が空けた空間に早や変わりしていく

「むちやくちやや、この人!？」

乱れ飛ぶ残骸の嵐のなかで突っ込みをいれるが当然、勢いは止まらずどんどん迫ってくる

猛将、華雄

活躍の場は少なかったがその実力は紛れも無い本物だった

その迫り来る恐怖に精一杯の抵抗を見せる呂蒙

長い袖から様々な暗器を投擲するが、彼女は文官。威力も無く、狙いもいいとはいえない為、全て打ち落とされてしまう

「どうした？奇術はもうお終いか？」

「くっ」

地面に落ちた暗器の山には、中華鍋や材木、椅子など如何見ても袖の容量を超えたものが散乱している

ゴマ団子も転がっているのはご愛嬌といったところだが…

「どっちもどっちや…」

呂蒙の袖からは、中華刀がぞろぞろ出てくる

その数は優に十を越え……訂正。一本はお玉だった

構わず投げられる剣プラス調理器具

戦斧で全弾振り払われるが、今度は袖から大量の槍が出てくる。あと菜箸が数本

…目の前の将は二人ともむちゃくちゃだった

「国の将ってみんなこうなんかな？」

「そうじゃないことを祈るの…」

華雄の注意が移ったところで愚痴る李典、于禁

どうも彼女はこちら相手に遊んでいるようだ

命までは取らないだろうが、実力差が大きすぎて迂闊に手を出せない状況が続く

事態は長引くと思われたその時、呂蒙の自分を励ます一言で流れが変わった

「一刀様を失望させない為にも、ここは引けません！」

そんな精一杯の虚勢が、なぜか戦斧の猛攻を止め、辺りの雰囲気を変わらせてしまった

「今、誰の名を口にした…」

「えっ？」

「誰の名を呼んだと聞いている！」

華雄から裂帛の気迫が響いてくる

「ひゃわ!？」

「貴様、まさかと思うが北郷一刀がどこにいるのか知っているのか」「さっきまでとは桁外れの殺気に気圧されるが、何とか踏ん張って答えを返す

「し、知ってます。というか、今は呉のなか……きゃあああ!？」

喋り切る前に、戦斧はピタリと眼前数ミリのところで静止し、呂蒙の目が見開かれた

その目に映ってくるのは、明らさまに殺気をぶつけてくる華雄の姿と突きつけられる斧だ

「…行方知れずで心配していたが、まさか呉に捕まっていたとはな」

「あ、あの…」

「あやつは私にとって大切な存在。待っている。直ぐにこの女を白させ、救い出してやるからな」

「……………」

「さあ吐け。北郷をどこに捕らえている。言わねばこのまま潰すぞ」

「「呂蒙様！」」

慌てる二人だが華雄から発するあまりの殺気に近づけないでいた

更にゆっくりと近づく斧。それでもなぜか呂蒙には怯えた様子がない

むしろ気合の入った表情で見返している。そしてはっきりと華雄に顔を見定め、告げる

「…一刀様は呉にとって、…私にとっても大切な御方。あなたには渡しません」

「…なんだと？」

「あなたが一刀様と共闘していたのは知っています。ですが今は呉の将なんです。お引取りください」

「言ってくれるな、小娘？」

「いくらでも。正直あなたでは一刀様の優しさはもつたいないと思います」

「!? なんだと!」

「素敵な男性の隣にいるのは、それ相応の女性であるべきと考えています。だとすると貴方では役不足ではないでしょうか?」

笑顔で毒を吐く呂蒙

「っ! なら貴様は自分が相応しいと、胸を張って言えるのか!」

「!? そのそれは…」

「ふん! 貴様こそ北郷に見合つとは思えんな。張る胸も無いようだしな」

「!! 人の気も知らないくせに! あと胸は関係ないでしょう!」

「!」

「!?」

「!! !!」

まさに一触即発

突然の修羅場に李典に于禁、息を切らしている張勳も逃げるのを忘れて行く末を見守っていた

「……………北郷様？」

「…クス野郎じゃ」

「なんていうか、すいません」

修羅場の直ぐ横で、一刀と縄で縛った袁術を抱える楽進が現場を覗き込んでいる

袁術を捕まえ、合流しようと町を歩いていたら只ならぬ殺気を感じてこちらに向かったのだ

到着から十分程。最初こそ、互いに一刀を讃えるようなセリフに感動し聞き入っていたが、段々と方向性がずれてきてる

褒め言葉は、節操の無さを叫弾する罵倒に変わり、呉と董卓軍にいた頃の女性関係がボロボロ零れてくる

本人は全員に対して至って本気だが、ここで聞く分にはただのナンパ野郎だった

楽進の尊敬の眼差しが一気に侮蔑の眼差しに変わっていく

罪悪感に苛まれ、耐え切れず小鹿のように震える俺

…なんでこの状況に…

説明しようにもここで出て行ったところで火に油を注ぐようなものだ
万が一、華雄が切れてしまったら手のつけようがない

かといってここで待機しては、楽進の視線に耐え切れない

まさに、前門の虎、後門の狼状態だ

頭を抱えて悩む一刀

打開策は無いのか！？女性関係の広さはもはやどうしようもないが、
どこかヒントはないか！

豊富な記憶を検索してみるが、該当する回答が見つからない。むし
ろこういつ修羅場は今まで無かった気がする

「どっすればいいんだ…」

とつとつ膝を折って塞ぎこんでしまっ

すると、その拍子に胸元からなにかが出てきた

地面に落ちたそれを拾って見ると、封筒のようだ

「？…手紙、か？まだなんか入ってるな」

この中にはその二つしか入っていないようだな

…手紙？この時代に書簡ではない、これはどういつ事だ？

勿論自分で作って忍ばせたなんて事してないし、今まで違和感を感じなかったのもおかしい

不信に思いながら手紙を開いて内容をあらためる

『こんなこともあるのかと。愛するごしゅ…』

ビリイ！！！！

渾身の力で引き裂く

「いきなりどうしたんですか!？」

突然の奇行に驚く楽進になんでもないと手のジェスチャーで伝える

一言だけのメッセージ

しかもやたら丸みがあった日本語で書かれたこれは間違いなくあいっだ

脊髄反射で破いてしまったが、まあいいだろう。意思は伝わった

観念して、恐る恐る封筒の中を確認すると中には肩のかかったマントより派手な物体が輝いている

…確かにコレなら正体は、ばれないかもしれない

失うものが多すぎる気もするが…

「あの、北郷様。なんで涙目なんですか？」

「…後生だから聞かないで、ちよつとの間だけ袁術を頼むよ……くつ！」

「ほんとに泣いてる！？」

男の涙は貴重なんだ。見なかつた事にしてほしい

呂蒙達に見つからないよう迂回して、屋根の上に登って準備する

こんな演出はいらぬ気がするが、どうもテンションがおかしい。
この物体の持つ悪影響だろうか

…まあいい。覚悟を決め、ソレを装着する

するとなぜか全身から謎の高揚感が巻き起こり、その気になってきた

「……イケる！」

いく方向が駄目な方だが、もう止まれない

現場を見下ろして声高々に声を上げる

「待てイ！！」

「！？ 何奴！」

気付いた華雄に釣られて、全員の視線が集中する

「この戦い、俺が治めよう!」

「いきなり出てきて何を言っている? 貴様。名を名乗れ!」

「ふっ、いいだろう」

ニヤリと笑いながら、即興で考えたポーズで決める

「天が知る」

デデン

「地が知る」

デデデン

「人が知る」

ここでピシッと手を突き出し、更にかっこよくアピール

ジャキーン

「美々しき蝶も知っている」

やや貯めてから、最後に名を叫ぶ

「我が名は

!?!」

ドカーン!

脳内効果音とともに修羅場という戦場に降り立った俺、参上。

金の尋ね者を探して右往左往

先に見つけたのは新たな出会い

いつかのどこかで会ったはず

思い出せぬが

協力しよう

三羽鴉はどこで鳴く？

十五話 北郷隊の活躍 平原捕物帳その三 蝶踊る

「真・華蝶 仮面！ 参上！！」

輝く太陽の光を背に受け、悠然とポーズを決める一人の男

狭い路地の屋根の上、逆光の中でも蝶をあしらったであろう奇怪な仮面がよく目立ち、存在感を引き立てている

この場にいる全員の注目を浴びる中、男は不適に笑い、突如、あるう事か屋根から飛び降りた

高さはそれほどでもなかったが、怪我を負うには十分な高度がある
しかしそんな心配を感じさせないほど優雅に、まるで舞う蝶のように華麗な姿で降下していく

純白のマントがふわりと揺れ、ちょうど華雄と呂蒙の間に向かって、軽やかに着地

グキッ

「……………」

「……………」

「……………」

「くっ。さすがは張勳。罨を張っていたとはな」

「よりによつて私のせいですか!？」

なんて卑劣な奴だろう。ここはお約束で危害を加える場面ではないだろうに

「……ええい。怪しい奴め!! たたつ斬ってくれるわ!!」

戸惑いながらも斧を振りかざす華雄

だが仮面の男は、迫り来る恐怖に動した様子もなく、笑みを浮かべている

「ふっ、そうあせるな。おまえは今なにが起こっているのか気が付いていない」

「なに? どういう事だ?」

「ふっ……」

「?」

「まだ脚が痛い。少し待ってくれ」

「情けないな!?! 貴様!?!」

挫いた左足から上がってくる鈍痛に耐えながら静止をかける

この状態で攻められたら間違いなく死ねるだろう

いまだ、突然の闖入者に呆気をとられているのか、素直に待つてくれる面々に感謝しながら、痛みが引くのを持つ

数分の後、いくらかマシになった左足の無事を確認して、目の前の相手に向き合う

意を汲み取ったのか、再び武器を構えなおす華雄に対し、俺は…

「天が知る…」

「何事も無かったように仕切り直すな!!」

登場の口上を阻止された

むう…、やはりこの時代にはヒーローものの良さは伝わらないのだろうか？

「さつきから貴様を見ていれば…。いったい何の為に出てきたのだ…！」

ペースを乱され、怒り心頭の華雄が忌々しげにこちらを睨む

…どうやら正体はばれてないようだな…

向けられる視線には、苛立ちが色濃く写り、思惑通り？、俺の正体に気付いた様子は無い

背を向ける形になった呂蒙達の反応は確認できないが、せめて事を成すまでは騒がずにしてほしい

今重要なのは華雄をどう対処するかだ

もつとも、謎の高揚感による自分のキャラ崩壊に、一抹の不安を覚えずにはいられないが、まだカケラ程の正気が残っている。頑張れ俺

この場の羞恥心など、もう掻き捨ててしまえばいいさ！

.....

…とにかく、武で勝る華雄に真つ向勝負で勝つのは難しい。ここは争わず、説得で解決するのが最善だろう

洛陽では十分な活躍は出来なかったが、元武官である呂蒙を加えた三人相手をもつともしない、まさに猛将と名乗るに相応しい実力を備えている

たとえ俺一人が加わったところで勝敗は変わらないのは、火を見るより明らかだ

だけど、女の子が目の前で傷付け合うこの状況で、手を出さずに静観するなんて選択肢は持ち合わせていない

一つ対応を誤れば、死ぬかもしれないこの状況で恐怖に負けないよう、あえてわざとらしいほど、演技っぽく振舞う

「冗談は置いておくとして…華雄。お前ほどの強者が、実力で劣る相手をいたぶるなんて下賤な行為をこれ以上続ける気か？」

ピシリと片腕を突き出して質問する

「…これは戦いでは無い、ただの狩りだ。言いがかりはやめて貰おう」

華雄はしぶしぶと答える。やはりこの戦いは彼女の本意では無かったのだらう。言葉の歯切れが悪い

「言いがかり？ふっ。たとえ狩りであっても、誇り高き華雄將軍は弱いものいじめなどしないと生きていたのだがな。…小物相手に高笑いしながら優越感に浸るようでは、せつかくの力が泣いていると、忠告しているまでよ」

「ぐっ…！ワタシの武が相手を選ばぬ、低俗とでもいいたいのか！」「！」

「そこまでは言っていないさ。だが、はたから見ればそう感じざるを得ないという客観的な感想だよ」

「他人の評価など知ったことか！！いきなり出てきての罵詈雑言の数々。もう辛抱ならん！そこに直れ！！」

「！？ほん！……。華蝶仮面さん！危ないです！」

迫る気配に気付いた呂蒙の警告が背中から飛んでくる

前半二文字はまるで聞こえなかったが、片手を後ろに伸ばし、ジェスチャーで心配無用を伝える

その間に心外だとばかりに息を荒げ、構えた戦斧を引き絞り始めた彼女を前に、冷静に問いを重ね始める

「…つまり俺が言いたいの、この状況を見て、本郷一刀はどう思うか。…君は理解出来ているのかどうかだ」

「…なん…だと」

華雄の動きがピタリと止まった

明らかに沸点に達したはずの怒りが、突然、冷水をかけられたような驚きの表情に変わる

「思い当たるふしがあるだろう？彼は無駄な戦いを好む人間だったか？今の君を見て、失望しないと言い切れるか？」

「そ、それは…」

「約束したのではないか？無闇やたらに力を振り回さないよ。たとえ本心からの行動でないとしても、どんな反応をされるかぐらい容易く想像できるだろう？」

思い当たるふしがあるのか。見て取れて動揺が走り、さっきまでの荒れ狂う闘気はもはや見る影も無い

力に酔って暴走しない。この約束は泗水関で華雄の足止めの為に昼夜を共にした時交わした言葉だ

実際には行為ばかりが先行し、戦場では守って貰えなかったが、彼女の中ではまだ楔のように残っているのかも知れない

もしそうなら、華雄を思い留まらせるには丁度良い口実になるんじゃないか？

「わ、ワタシは…」

「今からでも遅くない。武器を下ろして話し合おうじゃないか」

優しく諭すように語りかける。単純で自意識過剰な面が目立つが、心の根っこの部分は素直な女性だ

このまま説得を続ければうまくいくかもしれない

追い打ちをかけるべく口を開こうとした瞬間、今度は華雄の後ろから叱責の聲が上がる

「惑わされては駄目です！その男の言っている事が真実とは限りませんよ！」

声の主は張勳。戦斧の暴風に晒されたせいだろう、服のところどころが切り裂かれ、なかなかセクシーな格好にアレンジされている

胸元を押さえながら、こちらを睨む

「こんな怪しい輩の言葉を信じてはいけませんよ。あなたの思い人にはカケラも興味ありませんが、魅力的な男性なのでしよう、きつと単純バカな貴方でも許容してくれるのではありませんか？」

ぐっ、余計な事を…

「第一、大陸に名を馳せる華雄將軍ともあろう御方が、男一人に現をぬかしてご自身の武の崇高さを貶めるおつもりですか」

「なんだと、…ワタシの愛が武に影響しているともいうのか」

「そうです。単純バカで武器を振るうしか能が無い貴方は深く考えず、斧を振り回していればいいんです。ヘタに知恵をつけられて寝返られても困りますし…もし、愛なんて妄言に騙されず、純粹に関羽と戦っていたら泗水関では勝てたかもしれないでしょう?」

「むう、確かに。ワタシが負ける筈はなかったからな…だとすると北郷は…」

「まずい。今度はもう張勳の口車に乗せられている。このまま黙っていたら、また襲ってきかねない」

張勳の言葉に聞き入っている華雄に慌てて割り込む

「待つんだ!一度は考えを改めたのなら、そう簡単に意思を曲げてはいけない。自分の選択を信じるんだ!あと、何気に罵倒され続けているのに気付け!」

「そうはいうがな、関羽に負けた以上、理由を考えるとやはり…」

「まず自分の猪突猛進ぶりに疑いを持つとよ!?負けた理由を後付けするほうがよっぽどみつともないぞ!」

「そんなことはありません!華雄さんよく考えてください。単純バカで武器を振るうしか能が無い上、なぜか隠し財宝ごと金目の品全部、孫策さんに没収されているのに、賃金は出世払いで…なんて嘘に引っかけられて雇われた貴方でも、目の前の不審者より、雇用主である私を信じるべきだとわかりますよね!」

色々と酷くなってきたな…まだ気付かない方も大概だが

「惑わされるんじゃない！北郷一刀がこの惨状を見たらどうなる！
？想像してみろ！」

「……………ぬっ…」

結局判断するのは、華雄次第。まずはじっくり考えてもらおう

悩むように、顎に手を当てて目を閉じる華雄。時折顔をしかめ、唸りだした

「考えなくても問題にはなりませんよ。思うが俥、力を振るい、邪魔者を排除してください！」

語気を荒げる彼女にとって、この舌戦はこちら同様、正念場だろう。

華雄より強い人物がない以上、彼女が引くか戦うかで決着はついてしまう

「駄目だ！信じるんだ、愛の力を！！」

シラフでは言えないようなセリフで後押ししてみると、張勳が反論してくる

「くっ…邪魔をしないでください。変態仮面さん」

素直に否定できない言葉だ

「そちらこそ。後が無いのは分かるが、いつまでも逃亡生活を続け

るわけにはいくまい」

時間が立つほど袁家の名は地に落ち、威光に頼った振る舞いは難しくなる

普段から悪評が高い上、一度没落した袁術をわざわざ向かい入れる人もいないだろう

前回の記憶を持つ雪蓮に徹底的に私財を奪われた袁術達にとっては、華雄は数少ない手札の一つだ

「余計なお世話です。心配をされずともなんとかかります」

ふんつと、鼻を鳴らしてそっぽを向かれる

やれやれどうやら後の事はあんまり考えてないみたいだな

このまま放置していると、とんでもない珍事を巻き起こしそう心配がする

袁家「トラブルなんて図式がすぐ頭に浮かぶ

と同時に、ゆるやかに記憶が戻ってきた

以前もこんな風に悩まされた事があったような…

袁家

華蝶仮面

無用のトラブル

少しずつ思い出していく。記憶を持つ女の子と再会していないのが、酷く曖昧になっているがキーワードが浮かび上がってくる

悪役

ムネムネ団

正義

地味仮面

ここでようやくどんな事が起こったか思い出せた

確か似たような雰囲気相手に色々てこずらされた気がする

歴史に関係ない事は結構簡単に思い出せるのか？

まあ、今は関係ないけどなあ……

結構切羽詰まったこの状況で思い出す必要はなかったな

運良くこれが終わっても楽進達についても孫権と話し合わないといけないし、気が重くなってくる

……はあ……

……

……
……いや、待てよ？

あの時、どんな方法で解決したっけ？

確か、暴動っぽい事を起こそうとした相手に、華蝶の導きを受けた人間が立ち向かったような…

……もしかしたら使えるかもしれない

袁術達の処遇

楽進達の仕官

うまくいけば、あの問題も解決できるアイデアが浮かんでくる

「張勳……取引をしないか？」

「……いきなりなにを……」

突然の言葉に警戒の様子を見せる

断られれば、立ち行かないのでしっかりと聞いてもらえるよう、多少の脅しをかけて言葉を選ぶ

「悪い話じゃないさ。双方に利益のある提案だ、話だけでも聞いてみないか？」

「……………」

「ちなみに、言い忘れていたが袁術の身柄はすでに預かっている。脅迫の形になる前に話をつけたほうが良いと思うぞ」

「…あなたはいつたい」

「華蝶仮面。正義の味方さ」

今から話す内容は、とてもじゃないが正しい行いとは言えない。でもそこにあるものは見様によっては正義とも言えなくは無

仮面越しに張勳を見つめ、返事を待つ

「……………まあ、聞くだけならただですし、拝聴してあげますよ」

第一関門突破

後はうまく話しに乗っても貰えればOK。自分の交渉術がうまくいけばいいが

万が一、失敗して作戦が漏れれば。国の信用が落ちてしまう

両者の間でいまだ悩む華雄。呆気に取られたまま三人と隠れている二人の運命を決める交渉が始まった

……………

……………

……………

「……………北郷が…」

「……………北郷が……………死んだ。」

「今頃!？」

「……………すまん。やりすぎるつもりはなかったんだ…」

「なんだ!？脳内でなにがあった!？」

話が纏まった後にあまりに衝撃的な回答が返ってきた

「まさか、あんなに飛ぶとは……………」

「おいよせ、やめろ。なにをするつもりだ。その視線はどこまで向かってるんだ」

なぜ雲を見てるんだ

「愛とは悲しいものでもあったのだな……………」

「遠い目をするな!思い直せ!主に生きるか死ぬかの部分だけでも!」

このままでは、せっかく問題が解決しても俺だけが命に関わる局面に立たされてしまうではないか

明かされた女性関係に対する叱責は覚悟しているが、そんな、無茶しやがって…みたいな最後で締めくくろうとしないくれ

割と本気でなりそうだから…

すでに洛陽では華雄、恋、ねねと呉では雪蓮、小蓮、穩と大人な関係を築いている俺は、もし彼女達を本気で怒らせた時の場合を考えてみた

いずれも劣らぬ名将揃い、実力差は歴然とし…

…

…

「……………俺が……………死んだ。」

いまだ顔につけた華蝶の面の力を持ってしてもこの沈んだ心は持ち上げられなかった

1ヶ月後…

「きゃーー助けてー！」

「逃げるー!! あいつらが出たぞー!!」

平原の町を逃げ惑う人々

そこにいるのは主に他からやって来て日が浅い人間がほとんどで、わけもわからず走っているのも多い

確かに怯えた様子もあるが、ちらほらと笑顔が見え隠れしながら逃げているのは地元の子供達だ

後ろから迫ってくる恐怖をむしろ楽しんでいるような姿で駆け回り、対照的に町の大人は、落ち着いた様子で避難を開始する

そうやって人が居なくなつた後、間を置いて現れたのは、女性三人組

一人は大きな斧を持ち、もう一人は混乱に乗じて店先の品をくすねている。三人目は背が低く前の二人に隠れてよく見えないが、なにやら偉そうな態度が目につく

そのまま路地が交差する道の真ん中まで来ると、斧を持った女性が図つたように大声を上げた

「力なき民達よ!! 大人しく恭順せよ!! 抵抗すれば命無いものと思え!!」

荒々しく得物を突き上げ、少しでも遠くの人間に見えるよう存在をアピールする

それに続いて小さい少女が高笑いとともに宣言が告げる

「邪魔するものがいなければこの町はわらわのものじゃ。皆、ひれ伏すがいいぞ！にやははは」

「素敵ですよ美羽様！もつと愛くるしい笑顔をもつと見せてください！」

「うむ、はちみつ水があればもつと笑ってやるぞ。さあ平民どもよ持ってくるのじゃ！」

説明するまでもないが三人の正体は華雄、張勳、袁術だ

定期的にこの平原の町に現れ、悪事を働いていくのが最近の恒例になっている

ココだけ見れば治安について物言いがありそうなものだが、実際には一件も陳情は無く、むしろ全体的な苦情も減少傾向にあった

その理由は今から始まる出来事が大きく関係しているのだろう

いざ袁術達が行動を起こそうとすると、突如町に響き渡る声に邪魔され、動きが止まる

声の元は高い場所から響き、三人が同時に店を仰ぐ

「むう。また現れおったか、忌々しい奴らなのじゃ！七乃！華雄！」

「はい！」

「応っ！！」

かけられた言葉を合図にお互いの武器を構える二人

「今日こそ、返り討ちにしてくれるのじゃ!」

「……………そううまくいくかな?」

「来おったか!?!」

「悪があるなら、どこにでも参上してみせよう!」

正面の屋根の上から、返事が返ってきた

その声がした途端、離れた場所で待機していた町民達からどつと歓声が漏れだした

「おお!やはり来てくださったぞ」

「待つてました!」

口々に期待の込められた言葉が波を打つかのごとく響き、期待の大きさが伝わってくる

「ええい。さっさと姿をあらわすのじゃ!」

上機嫌はどこへやら。地団駄を踏む袁術

「ならば、明かそう 我等の姿!」

「「「「「「「「「「「」

三人を取り囲むような位置から声が聞こえる

「天が知る」

デデン

「地が知る」

デデデン

「人が知る」

ジャーーーン！

太鼓と銅鑼な音が盛大に鳴らされ、地面に五人の影が写し出される

見物している町民のボルテージはどんどん高まっていく

見上げた瞳には、逆光が強く姿は良く見えないがどこのだれかは想像できた

「び、美々しき蝶も知っている」

言い終わると同時に五つの影は屋根から飛び降り、三人の前に降り立つ

同時になんの原理か、色とりどりの煙が足元から吹き上がり、登場を演出している

そのなかで屋根から降りた五人がポーズを決める

「 美麗戦隊！ ゴレンカチヨー！！！」

ワアアアアアア！！！！

最高まで高まった声援が投げかけられる

「螺旋華蝶様ー！！！」

「拳闘華蝶様ー！！こっちむいてー！」

「キタ！メイン華蝶キタ！！コレで勝つる！！！！」

一部時代を超えた応援が聞こえたが俺のログにはなにもなかった

「懲りん奴やな、袁術はんわ」

「まったくなの、そろそろ潮時だと思っの」

「……………ふっ（あざ笑い）」

「むかーっ！そう言われると絶対諦めたくなるのじゃ！」

袁術の興奮もどんどん上がっていく

「……………つう……………」

「そろそろ慣れような、りよ…………暗器華蝶」

「名前だけでも何とかありませんか………一刀様」

「こーら、ここでは真華蝶仮面、もしくは隊長と呼びなさい」

ノリノリな四人をよそに、密談を交わす二人の華蝶

もう何度目になるだろう。こんなイベントを行ったのは

…あの時の張勳との取引内容は定期的に町を襲ってほしいという、
まともに聞けば正気を疑う内容だった

その上、住む家、生活費も全てこちらで面倒を見るといふ契約にな
っている

驚きを隠せない様子の彼女に理解を促すべく説明をした

襲うといっても本気ではなく、なるべく町に危害を加えない事、人
は絶対傷つけないのが最低条件

守られれば、雇用期間内なら身の安全は保障するという内容

敵将を生かして、子飼いにするなんてばれた日には周瑜に殺されて
しまいそうだが、それだけのリスクを背負ってもなお十分に余るリ
ターンが見込めた為、俺の独断で実行させてもらった

一応孫権には伺いを立てたが、いまのところ密告された様子は無い

一代作戦、『ヒーローショー作戦』は

これは低迷していた呉の人気を上げる狙いが一番大きい

実際の政治でも、国が国民と共通の敵を相手取る事により、意思の統一を図るのは定石になっている

大陸に敵はたくさんいるが、この時代、あまりに数が多すぎて民衆は自国以外の誰が味方で敵かの判断がつきにくいことが多い

そこで平原限定の共通敵を作り出し、意思の統一。…までいかなくても人気集めに利用しようと思いついたのだ

結果はご覧の通り、絶大な効果が返ってきた

美麗戦隊は孫権が指示する特殊部隊として認知されており、彼女は指令という役職を合わせて名乗ってもらっている

ただ、戦うだけではなく、元の世界の戦隊物や特撮、ヒーロー関係の知識を生かした演出を多用しているのが人気鰻のぼりの原因でもある

袁術達の雇用条件にはこの悪役をお願いしてある。…袁術だけは知らされず、毎回本気のようなが…

華雄の説得もなんとか成功し、九死に一生を得たのは本当に嬉しい

更に

「戦隊は五人！ここは譲れないからな！！」

これで楽進達の仕官も無理やり通させてもらった

無論、将扱いではなく、俺の副官として始めてもらっているが、彼女達は才能がある。すぐにひとり立ちできるだろう

最初こそ恥ずかしがっていた三人も今では自分達から望んでやっているふしが見られる

俺を含めて四人、最後の一人を呂蒙に頼んだときは、ささやかな交換条件があったが、今は滞りなく進んでいる

「互いに真名で呼び合いたいか？」

「……………や、やはり駄目でしょうか？」

「そんなわけないじゃないか亞莎。むしろ嬉しいぐらいだよ」

悲しそうな顔になった彼女に笑みで返す

その言葉で安心したのか、はにかむような笑顔がかわいい

少しずつ戻る記憶。近いうちに彼女に関するものは全て思い出せそうだ

目の前で繰り広げられる予定調和を眺めながら、そう感じた

その様子を見つめる人物が二人

孫権と甘寧が身を隠して見守っている

「……………」

「蓮華様……」

先程から口を開かない主君は黙ってその男を観察していらっしやった

この状況は初めてというわけでもなく、最近は何回あれが行われる度にこうして出向かれています

理由は監視との事だが、明らかにそれは嘘だろう

終わる頃にはいつも深い溜息をついておられるからな

「……………はあ」

原因は察するまでもないが、こればかりはどうしようもない

黙ってついているだけしか無いとは、我ながら恥ずかしい限りだが……

「……………なにあんな嬉しそうに亞莎に言い寄って、私には一度もそんな笑顔向けてくれないじゃない……」

「……………蓮華様……」

「！？なんでも、なんでもないわ。独り言、そう独り言よ！気にしないで！」

「いえ、私はなにも……」

「待つて！言わないで。別に亞莎が羨ましいとか、三人も競争相手が増えて焦っているとかでは無いの！本当よ！」

「……………」

「ただ少しかだけ北郷の横顔がかっこいいとか、見ているだけで動悸が早くなるとかだけで、細意は無いわ！」

「……………そうですか」

「そうよ！もし仮に言い寄られてもしたら、間違いなく口説かれる自信があるけど、きっとそれは錯覚だから！」

「……………そうですね」

慌てる蓮華を暖かい眼差しで見守る思春

最後に一つだけ思う事があった

（もしも蓮華様を傷つけるような事があれば……わかってるな北郷）

右腕の振りを確認しながら、なぜか雲に向かって目測を図る彼女だった

大陸中央に羽ばたく蝶

人の思いを背負って飛ぶ

人畜無害な正義の味方

望みはきつと世界の平和

いまだ戦え華蝶仮面

君の明日はにび色だ

十五話 北郷隊の活躍 平原捕物帳その三 蝶踊る（後書き）

読書感想文以外の初の長文書きが続く中。今回は『バカとテストと召還獣』というライトノベルに影響されています。自分のスタンスがまだ安定しないよ…

十六話 恋姫達の事情 平原編 Side 孫権

北郷一刀の提案した政策を実行してから更に一ヶ月後：

劉備への思慕から、呉への不信感が拭えなかったという民衆の支持は順調に上昇、初期の頃より効率的な政策が実行出来るようになり、遅れ気味だった治水、開墾の拡大や、軍への徴兵も、予定を上回るほどの速度で完了し、いまだ続く袁紹、曹操の戦いから逃れた流民の受け入れにも十分な対応を見せた

そのおかげもあって町中は活気に満ち溢れ、民の顔には乱世の無情さを感じさせない、明るい笑顔が浮かぶ

そんな平和な日々が続く中で、私こと、孫仲謀には実に悩ましい懸念を抱えている

奇抜な発想と確かな仕事振りを発揮し、民の信頼も厚い、平原一番の人気者である北郷一刀への対応だ

誰にも打ち明けず、胸の内に秘めたこの思いは、いまだ誰も知る由は無いだろうが、もしも思春にバレてしまったらと思うと気が気ではない

北郷の身の為にも、このままずるずると先送りにして良い問題ではないだろう

一念発起し、覚悟を決めた翌日の朝。政務室への移動中に前方の扉が空いた一室から異様な音が聞こえてきた

「ぬふふふふ……」

小鳥の囀りとは程遠い、地を這うような怪しげな笑い声

近づくにつれ、抑えきれない愉悦を噛み締めているような低音が漏れている。不審に思った私は立ち止まり、扉近くに近づいてみた

耳を澄ませば、はつきりと笑い声が聞き取れる。…万が一、賊が侵入しているのなら看過出来ないわね

いざという時に備え、戦闘態勢を取り、気配を悟られないようにゆつくりと扉と壁の隙間から覗き込む

朝日が差し込むはずの部屋の中は一瞬、倉庫だと見間違ぐらいの雑多に大小様々な木箱がそこかしこに積みまれ、窓からの光を遮っている

どうやら笑いの主は、中央奥にある作業机に鎮座しているようだが、卓上にも箱が載せられ、視界が遮られてしまう

なんとか相手を確認しようと立ち位置を変えているうちに、部屋の持ち主の事を思い出した

ここは確か李典の自室だったかしら？

彼女は北郷の取り入れた三人組の一人で、カラクリとかいう怪しい工作物を造るのが得意らしい

実際に目にした事は無いけど、あの男が身銭を切って発明品を依頼しているらしいのは聞いた事がある

『かめら』だとか、『びでお』なんて言葉の意味さえ分からないものを耳にしたけど…

だとすると木箱はその材料が完成品だろう

目を凝らしてみても、かすかに暗い室内では、はっきりと確認出来ないが、蓋の開いた箱からはなにか小さい物体がはみ出ているのが分かる

ただ分かるのはそこまでで、やはりこれ以上の詮索は直接進入するしかないよね

部屋の主を思い出した事で相手が李典である可能性がとても高くなつたけど、この薄気味悪い笑い声はとてもじゃないが、真つ当な感情から出るものではないと思う

なるべく疑う真似はしたくないが、北郷にはんば押し切られる形で登用した彼女達が本当に信じられる相手かどうかの判断はまだ付いていない

敵か味方か、意を決して扉に手を掛けたその瞬間

私の手に別人の手が重ねられた

「ごそごそしてどうしたの。孫権？」

「！?!ほぷっ!?!」

びっくりして振り向こうとしたが、あまりにも近い位置に立っている北郷のせいで首しか回らない

息がかかりそうなくらいの距離で覆いかぶさるようなこの姿勢

後ろから見たら、まるで抱きしめられているようじゃない!?

なんでここに。というより、こんなに接近を簡単に許した事に驚きと、この状況のせいで返す言葉が見つからない

そんな私の動揺を気にした様子もなく、肩越しに見える彼は一人納得し

「真桜に用でもあった?それなら遠慮しなくても堂々と入っていけばいいよ。徹夜明けでまだ起きてると思うから」

単なる訪問と勘違いしたのか、あっさりと扉を開け放つ……待つて!?!近い!顔が近いわ!

張り付いていたせいで開く扉に押され、一瞬とはいえ、更に北郷に密着してしまう

「ッつ!?!」

触れるか触れないかの微妙すぎる距離のまま、扉は開かれ、暗かった室内に明かりが満ちていく

「おーい真桜。今いいか?」

「ぬふふふ………つて隊長!?!」

突然の来訪に慌てたのか、どたばたと物音を立てながら作業机の上

の箱が崩れ落ちる

その先に居た笑いの主は、北郷の予想通りの人物。李典が張り付いたような笑顔で固まっていた

? 今、後ろ手に隠したのは…

「なにもそんなに慌てなくても。寝てないのに急に動く体が悪いぞ」

「そ、そんな急に入ってくる隊長があかんのやないか!？」

「む。………確かにそれはあるかも知れないけど。………怪しいな。………なんか隠してないか？」

「ぎっくう!………いや別になにもないで？」

「語るに落ちているような気もするけどな」

私もギクリと発音する人間は始めて見るわ

疑惑の視線に晒される中で、余程聞かれたくない理由があるのか、李典はなんとか話題を逸らそうとして、いくらか視線を巡らした後、思い出したように積まれた木箱を指差す

「ええと、あれやあれ。例の華蝶仮面ぐっず、初期出荷分の生産が終わったで！」

華蝶仮面ぐっず？

確かこの前の軍議で特別に予算がほしいって言ってた件かしら？

更なる人気獲得には必要な経費なんて、北郷にしては珍しく息を荒げていたから気にはなっていたけど、この事だったのね

一人納得し、北郷の顔を伺うと目に見えて嬉しそうな笑みを浮かべている

「おお、ついに終わったのか。頑張ったな真桜」

「そやでー。ごつつい頑張ったおかげで安心の高品質を維持。全ての購入者に満足を与える出来になってまっせー。百聞は一見に如かず。実物を見てやってや」

齧り付くような速度で手近な木箱に近づき、中を弄り出す李典

その手に掴まれ出てきたのは、見た事もない程、精巧に作られた木彫りの人形の数々と数種類の絵画、一人はありそうな大きさの枕など多岐に渡る

用途はわからないが、どれにも共通しているのはあの華蝶仮面を名乗っている時の李典達が描かれている点

特に人形にいたっては、童が遊ぶような簡素な造型とはかけ離れた細い体躯で作られ、遊び道具というよりは鑑賞品に近い印象を受けるくらい見事な代物ね

手先が器用とは聞いていたけれど、まさかここまでとは思わなかったわ

北郷は人形の内一つを手に取り、満足げな笑顔を漏らす

「これは…すごいな。想像以上の完成度じゃないか」

「そやる、そやる。もっと褒めたって良いんやで」

気分を良くした李典は次々と他の品の説明を始める

『フィギュア』、『生写真』、『華蝶印入り特製きーほるだー』、
『抱き枕』

種類ごとに聞いた事の無い単語がちらほらと混ざっている

これは北郷がたまに使う彼の故郷の言葉なのだろうか

『絶対領域』、『ちらりずむ』

このあたりは、なぜだろう？非常に問題がある気がする

私が悩む間にも、二人は和気藹々とした様子で会話を続けている

「……………」

その様子はなんと言うか部下と上司というより、仲の良い年頃の男女の会話のようで、どこか、羨ましい気持ちになってしまう

思い返せば、北郷と日常会話の類をする機会はとても少ないように思う

彼が呉に保護された当初は積極的に話しかけてくれていたのに、こ

の平原に赴任してからは業務に関する受け答えばかりになっていた
主な原因は私が彼を遠ざけているからだけど、彼自身もどこか遠慮
した態度を取る事が多くなったように感じる

.....

はあ。.....

完全に蚊帳の外

そう思い浮かんだところで、どこかいたたまれない気持ちになって、
会話の合間を狙いポツリと言葉を漏らす

「.....じゃあ、さっきの笑い声の原因は華蝶仮面ぐっずの出来に
自分で感動していたからなの？」

「.....へっ？」

私よりやや上、北郷の顔に視線があつた李典の目がゆっくりと下が
り、目が合った

一瞬の空白の後、呆けたような表情から引き攣つたような驚きに変
わっていく

なにかまずい事でも言ってしまったのかしら？

北郷は「ああ……」なんてまるで忘れてたような口振りをするけど、
特に変わった動きはしないで静観を決め込んでいる様子

「た、大将！？な、なんでココに居るん！？」

そこに驚くの！？かれこれ結構な時間、この位置にいたのに何をい
まさら…それだけ夢中になってたって事なの？

ビシリとこちらを指差すのは礼儀がなつて無いと注意の一つでもし
ておいた方がいいのだろうが、それよりも目の前にいて本当に気付
かなかつたとは、思いも寄らなかつたわ

「…初めからよ、半開きの扉からおかしな笑い声が聞こえたから確
認しに来たのよ」

「うっ、聞こえてたんや…徹夜明けで妙に気分が高揚しとつたから、
戸締りまで気が回らんかつたわ…」

あはは…と乾いた笑いを浮かべながら肩を落とす

「…まあその件は良いとして。それよりさつき隠したものに興味が
あるのだけど……」

部屋に入る前に聞こえた声の原因はおそらくそれだと思う

「……さつきって……まさか」

「ええ。貴方が最初に握り締めていた…」

大きさからして、『ふいぎゅあ』と同じ人形。ちらりとしか見えな
かつたけどここに置いてあるものとは種類が違った気がするの引
つかる

どちらかといえばすっかりとした体格の造りで、羽織を着た人物はたぶん…

「！！？ うぎゃああああ！！！！」

「ど、どうしたの、真桜！？」

突然の奇声とともにこちらに向かって詰め寄ってくる

「なんも無い！なんも無いんや！」

「ちよつと！？落ち着きなさい！」

彼女を手で制しながら、落ち着かせようとする。…これだけ過剰すぎる反応をするって事は、余程知られたくないのね

真意を問おうにも顔を真っ赤に染めて、あたふたとしている李典にまともな受け答えはできそうもない

一旦、話し合おうと手を下ろした瞬間。それが合図であったように更はずいと接近してきた

「いったいどうし…うおっ！？」

「きゃっ！」

「後生やー！何も見んかった事にしといてー」

不意な接近で避ける事も適わず、北郷と李典に挟まれる形になってしまった

間近に写る彼女の表情は、もはや泣きそうな位強張っている

やっぱりこの子も、他の娘と同じように北郷の事を…

しがみつく彼女を引き剥がそうとして肩に触れると、私だけに聞こえるような小さい声でそっと耳打ちされる

（黙っただけでもえんやるか…その、隊長の人形眺めて悦に入ってたなんて本人にばれたら、うち、もうまともに隊長の顔見られへん！）

なんて。捨てられた子犬のような視線で訴えてくる彼女に苦笑しながらも、安心させるようにそっと髪を梳く

（慌てなくて良いわ。別に誰に迷惑がかかるわけでもないでしょう？なら個人の趣味に口を出すつもりはないから）

（ほんまに！？絶対、隊長には黙っただけでください！…人形鑑賞が趣味ってわけやないけど、変な誤解されたくないんや）

（……………。ただ気になって聞いただけだから安心しなさい。北郷には一切話さないから）

その気持ち、分からないでもないから。

その言葉でようやく納得できたのだらう、ほうと大きく息をつくと照れたように、はにかみながら近すぎた距離を開く

えろっ、すいませんなあ大将

ようやく落ち着いて彼女に安堵しながら、渦中の人物を仰ぎ見れば、
…わざわざ内緒話をしている二人の会話を盗み聞くつもりは無いから。
と先に気を回したセリフが出てきた

こういうところに気が利くなら、もっと他の娘の事も考慮すべきではないの？

実際には口に出さないが、やはり北郷の前だとどうしても自分の感情を抑えきれない

済し崩し的に収まったこの場で、一人愚痴ると、李典がまた突然と声を上げた

「どうしたの李典？まだなにか心配事でもあるの」

「ああいや、そうじゃなくて。これもまた今更な話題で何やけど……」

「？」

「その、はっきり言ってまうとやな。……隊長はなんで大将を抱き締めてるんやろか？」

……

……

……

「ん？ああ、そう言われればそうだったな。なんかこの体勢、落ち

着くもんだから全然違和感無かったよ」

な、なんでそんな冷静なのよ!?

「ッつ!」

「おお?」

悪く言えば羽交い絞め、よく言ってしまうえば包み込むように抱擁されていた私は、李典の忠告でようやくこの体勢の危険性に気が付いた彼女のうろたえっぷりにどこか余裕を見せていた自分が情けない!

こんな、

こんな、北郷の感想と同じように違和感が無くて、どこか安心したような気持ちになるなんて!

いまだ抱きすくめるのを止めない本郷の腕を体ごと振り払い、廊下に躍り出る

まだ整理がついていないこの気持ちを悟られたくない!

その一心が頭の中を駆け巡り、この場を離れようと私はろくな釈明もしないまま、走って逃げてしまう

「お。おい!? 孫権!」

呼び止めの言葉も聞こえない振りをして、とにかく距離を離す

結局、北郷が追って来ることは無かったが、正常な判断が出来なくなった私は途中で思春に止められるまで延々と城内を駆け回っていたらしい

……

……

「隊長はやっぱり罪深い人間やねー」

「……どういう事かな？」

「わかってるクセに。ま、一々口に出すもんやないから黙っとくけどなあ」

「……色々あるんだよ、俺も。……きっと孫権も」

そんなこんなで昼下がりに。中庭にある屋根付きの場所で私は亞莎と

「それはこっちの話なんだけど！」

世間話から子作りって、どういつ思考を經由したらそんな話題が出てくるのよ!?

「もしかして、そんな…そっちの方はいくら注がれても子種は……」

分からない! 私には貴方が何を勘違いしているのかさっぱり分からない!!

「亞莎! い、いったいなにを言い出すのよ!？」

「あ、えと、どこか気分を害していらっしやるご様子でしたので、一刀様との関係がうまくいってないと思ったのですが……」

「なぜその関係を、夜に限定するのかしら」

どこまで節操の無さに定評がある男なのだろう

咳払いを一つして、乱された調子を整える

「いい、亞莎? 北郷はあくまで部下。呉の仲間よ。王として生きるべき私が、彼と男女の関係を持つはずないでしょう」

そう、王には国と民の未来を守る責務がある。姉様ほど要領の良くない私は、他事に感けて大事を見失うような行為は慎むべきだと考えている

そんな当たり前の答えに目の前の少女は、納得のいかない顔をしている

「でも前回の蓮華様は、きちんと公私を両立させていましたよ」

「……………」

「慣れぬ地での生活と、統治者としての重圧でお辛いのは承知しています。ここは根を詰めず、一度一刀様と話し合って前のような仲睦まじい関係を取り戻してみてもはいかがでしょう？」

「……………」

「きつと、以前のようなご関係になれるはずですよ」

ニコリと、邪気の無い笑顔眩しく微笑む亞莎の姿が映る

前回の記憶を取り戻したとの報告が上がってからの彼女は見間違えるような変化があった

外見が変わったわけでは無いが、人として成長が顕著に現れるようになったからだ

常に周りを警戒して怯える仕草はなりを潜め、落ち着いて物事に対処できるようになり、一端の文官として遜色の無い働きぶりを見せている

北郷との関係も良好らしく、辛そうな顔はほとんど見た事は無い

唯一泣いたのは、姉様と冥琳が死んでしまった過去を思い出した時だけらしい

前回の記憶なんて眉唾なものに半信半疑な部分もあったが、目の前に最たる実証例が存在する以上、認める他無い

そうになると、この地では私だけが北郷との思い出が戻っていない事になる

「……………亞莎はあの男が好き、なのよね」

「？ はい。そうですが、どうしましたか」

「……………」

「……………蓮華様？」

「……………その感情は、今のあなたの気持ちから来るものなのか
しら」

「えっ？」

唐突な質問に驚く亞莎に

「記憶とやらで勝手に好きだと錯覚しているだけかも知れないと、
思った事は無い？以前好意を持っていたからと行って、今も変わらず
同じ感情を抱き続けるなんて胸を張って言える？」

「あ、あの……………それは……………」

「……………失礼すぎる質問なのは承知しているわ。でもこの際キチンと聞
いておきたいの」

「は、はう……………」

久方ぶりに見る怯えた仕草の彼女に、強い視線を送る

…………やはりどうあっても私は、北郷の事が気になるようだ

せつかくの休息の時間も、すぐにこの手の話題を真剣に捕らえすぎ
てしまう

「過去の好意と、今現在の気持ちは等価なのかしら……………」

拭い切れない不安が渦巻く

「…………ねえ、亞莎……………」

これこそが北郷への態度を決め切れない最大の理由

「過去が無ければ、…………私は北郷を好きになっ
てはいけないのかし
ら」

「……………あっ」

独り言にも似た自白

「この感情は、…………本当に、今の私の感情？以前から持たされただ
けの、決められた愛情だったと考えたら……………」

「…………蓮華様」

真っ直ぐのはずの視線は何時の間にか、机の茶碗に注がれていた

「……………」

「……………」

どちらも口を開かず沈黙の時間が流れようとした時、近くの草むら
が揺れた

朝の件もあつて無為な警戒をせず、相手が出てくるのを待っている
と現れたのは…

「……………」そう言ったご事情でしたか

「思春？」

「茶のおかわりを持ってきたのですが、込み入ったお話のようでしたので、失礼ながら状況把握の為、静観しておりました」

そのまま近づき、手に持った茶菓子や急須の乗ったお盆を机に置く

「主の心配事の真意に気付かなかった私を、どうかお許してください」

言いながら頭を下げる思春

「あ、あなたが謝る事じゃないでしょう…」

「いいえ。もっと早くに気がつくべきでした」

すまなさそつに姿勢を正し

「あの男の抹殺を」

「うん、言うと思ったわ」

「……………」

なにか持ちネタみたいになってるのは気のせいよね？

「あの思春様はどうしてここに？午後は確か北郷隊のみなさんと訓練のはずでは……………」

「ああ、それなら」

思春の出てきた草むらの更に先、かすかに見える程度の距離に訓練場がある

よく目を凝らしてみると、北郷と楽進の姿が映っていた

「あやつが言うには、楽進との訓練が後々役に立つと、私からの指導を途中で切り上げてきたのだ」

「それは凧さんの実力が高いからですか？」

「いや、なんでも倒すべき相手ができたといいていたからな。戦い方が似ているから組手をしたいと……まあ一通りの訓練内容はすでに終えているから文句は無いがな」

倒すべき相手？北郷に似合わない単語ね

「……………頑張りますね一刀様」

「確かに、以前太平の世を実現した頃より忙しそうにしているな」
懐かしむような声色が聞こえる

本人達は無自覚なようだけど、一步引いた私には、二人が北郷へ向ける好意の深さがよく分かった

口では酷い悪口を連呼したり、冷たい態度が多い思春も、結局は彼を信頼しているのだろう

必要以上に険悪な雰囲気は見た事は無い

……彼女にも聞いてみるべきね

「思春。さっきの話は聞いていたのよね」

「はい、失礼ながら」

「なら聞かせてもらえるかしら。あなたは自分の感情の整理。過去と今の分別をキチンと着けられたの？」

とっさに答えられなかった亞莎も息を呑んで返答を待っている

思春の目はなにも迷った様子は無く、さらりと言い放った

「そもそも私は北郷に好意など持っていません」

「なっ……!?!?」

ここでそんな事を言うの!?

私が真剣に、真剣に答えを待っているのに……っ!

たまらず激昂し、立ち上がりざまに手を机に叩きつけた

その振動で茶器が落ちそうになるのを慌てて亞莎が押さえつける

「思春っ!……ふざけないで!」

「ふざけてなどおりませんよ。これが 私の 答えです」

興奮した私を諫めるでもなく、冷静に告げられる

「……………あなたの?」

妙な区切り方が耳につく

「はい。亞莎のような愛し愛されるような関係になりたいとは思っていませんから、明確な回答とはいえないかも知れませんが」

「…ただ。私はあの男を信頼しています。……これは以前の記憶によるものが大きいのですが」

思い返すように右手を胸に当てる

「県の一員としての日々。その時に感じていた安心感を今でもあいつから感じています」

語るより言い聞かせるような口ぶり

「過去の記憶による錯覚と言われればそこまでですが、これだけははっきりとしています」

「……………」

「理由はなんであれ、この感情は間違いなく自分から生じたのです」

「自分の……………」

「記憶があるからこそその確信かも知れません。……………ですがこの信頼が今まで生きてきた自分からの答えだというのには、自信を持って答えられます」

「……………それが思春の答えなのね？」

黙って頷く思春から視線を外す

彼女が言いたいのはこのことだろうか

記憶と感情は分けて考えるべき、と

それは記憶を持つ人間だからいえるのだと一蹴するのは簡単だ、だけれどそれでは何も変わらない

やはり自分から行動を起こすべきなのだろうか

側近ともいえる彼女はそれを伝えようとしてくれているのかも知れない

「……………きつかけをご用意しました」

私の胸中を察したように言葉がかけらる

「まもなく南陽からある品が送られてきます。それを話題の足がかりにゆつくりと北郷と話し合ってください」

「……………いったいなにが送られるの？」

「以前、あの男が修理に出していた得物で……………」

そこからしばらく思春と亞莎の会話の後、于禁が持ってきた品を片手に夜、北郷の部屋に行くことを決めた

そうなれば初めてあの男と二人きりになる

……………

……………

……………こゝで怖気づいては駄目ね

どこか確定的な、貞操への危機感を抑えつける

けれど、今日、判断を下すと心に決めたのだ

北郷はただの家臣か、それとも……………は、伴侶となりうる人間かの決断を……！

決心が鈍らぬよう自室で黙想する

.....

.....

.....

.....もし、恋人になったらどうなるのかしら？

きっと北郷のことだから、すごく甘やかせてくれる気がする

歩くときは勿論、腕組みが基本で

休憩の時なんか、朝みたいにぎゅっと抱き締めてくれるんだけど、私は恥ずかしくて身を擦るの、でも北郷はもっと強く抱いて

「逃げないで。俺の蓮華……もっとよく顔を見せて……」

なんて、なんて！言葉でも喜ばせてくれるに違いないわ！

ああ、でも！甘やかす側も捨てがたい！

私の膝枕で安心しきって眠る本郷

優しく髪を梳いてあげるとくすぐったそうな寝顔を見せてくれるの

そ、それで無防備な北郷に……く、くち……

だ、駄目よ蓮華！妄想ばかりが先行してるわ

一度、おちつかないと

.....

.....

よし、大丈夫

実際はもっと甘々な関係になるのかもしれないのだから、ここはしつかりしておかないと

ようやく落ち着いた私の部屋に運命を告げる音が聞こえたのはその直後だった

全ての条件が整ったはずの一日は、予想など出来もしない報告で締め括られる

部屋に移動中の私に話しかけてきた男、于吉の言葉

北郷一刀が裏切った

夜の平原大通りで目を回す二人の少女

何かに突き飛ばされたのか尻餅をついていた

「いたたた、もう！なによ今の！危ないじゃないのよ！」

怒れる少女は端麗な顔が歪むのも気にせず、走り去った原因に腕を振り回しながら悪態をつく

「うう、痛いよう、ちーちゃん」

「大丈夫姉さん？ほら、立てる？」

立ち上がり、姉に手を差し出す地和

それに引かれながら、天和はようやく自分の足で立ち、服に着いた汚れをはたく

「急にお馬さんが来るから、びっくりしたよー。なんだったんだろうね、あれ？」

「知らないわよ、暗かったし赤くて大きい馬ぐらいしか判断できなかったわよ。それより怪我は無いの？」

確認の為、天和の周りを一周して確認してみる

どうやら目立った外傷は見当たらないわね

顔を上げると、なぜか嬉しそうな姉さんの顔があった

「……………なに」

「えへへ、心配してくれてありがとう」

にこやかに微笑む姉に私ははっきりと告げる

「心配するに決まってるでしょ。……………怪我しても治療費なんて払えないんだから」

「……………」

「泣かないで！その原因がこの極貧生活によるものか、妹の態度に不満があったのかは分からないけど」

おそらく、両方だと思う

なんとか慰めようと七苦八苦していると、ややあつて路地影から人
和が出てきた

「……………なんで天和姉さんが泣いてるの」

「色々と積み重なったのよ」

「うう、まともな生活に戻りたいようー。しゅうまい食べたーい」

先の接触事故で今までの鬱憤が表に出てきたのか、愚図ってこの場から離れようとしないうちに、溜息をつく地和と人和

解決には時間が必要と判断した二人は、回復まで適当に姉の相手をする事に決めた

とりあえず人和は、さっきまで離れていた時に聞いた情報を打ち明ける

「そろそろどこか安全な場所を見つけないとまずくなってきたみたいよ。姉さん」

「なに？いきなりどうしたの」

身の安全に関してとは珍しかった

大なり小なり旅芸人には、危険が付きまとうものだけど、そうではないらしい

ゆっくりと人和が口を開く

「魏の曹操が負けたりしないの。」

かくして時代は、誰かの望む、誰かの為の世界に向けて、ゆっくりと動き始める

十六話 恋姫達の事情 平原編 Side 孫権 (後書き)

上げて、落とす。我ながら何たる非道か
ここで平原、呉のお話は一旦終了。次の舞台は…分かるよね？

ちなみに、修理から返ってきた一刀の刀は小蓮の指示で豪華絢爛な
装飾を施されています。

その派手さから「南海霸王」や「靖王伝家」と同じく宝刀として
呼ばれるようになり

作中に名を出すつもりはありませんが

銘は「恋姫無双」

……うん、狙いすぎだね。まあずっとやりたかったところなんです
が

十七話 戸惑いの選択 零れ落ちる幸せ（前書き）

業務連絡。

各話の最後に正体不明な詩を追加しました

分かりにくい伏線の為ですが、ある意味ネタバレくさいので注意してください

十七話 戸惑いの選択 零れ落ちる幸せ

陽光照り返す程磨かれた石畳の廊下を通り抜け、昼からの鍛錬に備える為に真桜といっしょに鍛錬場へと赴く

話題はフィギュアは新作を作らなくても初回限定、イベント専用なんて理由をつけて色を変えるだけで、低コストで拡充販売できるとか多少の特典を餌に会員制を設け、会費を徴収する自分の世界ではメジャーな商法を説明するなど

およそ年頃の女の子と話さないような話を肩が触れ合う距離で談笑する

「あーあ、これからの調練はしんどそうで嫌やなあー」

「んー。まあそつだなあ。今日は思春が直接指導する模擬試合の予定だから、確かに気は重くなるのは否定できないな」

うな垂れる真桜相手に相槌を打つ

今日は思春が直接指導する模擬試合だ

… 思春が直接

隣で歩く彼女の溜息が大きい

平原における実質的な前線司令官である甘寧さんは、とっても厳しいのだ

……俺は毎回、その十倍規模の溜息をつきたいくらい命の危険に晒されるわけだが……

「「はあ……………」」

そんな気が重いまま修練場を目指す二人

中庭を抜け、開けた広場に出るとすでにある人物が待ち構えていた

「……………遅い」

「こ、これでも昼食の後すぐ来たつもりなのですが……」

明確な時間指標が無いこの時代は、待ち合わせがうまくいかないのは日常茶飯事だけど、それで許すつもりはないと、目で語るぐらい怖いオーラを発していらっしやる思春さんがいた

「指導される側が遅れるとは……気が緩んでいる証拠だな」

「……………すみません」

触らぬ神に祟り無し

このお方相手に下手な反論は寿命を縮めるのです

「……………他の者はどうした？」

「えーと。沙和は受け取り物があるから後で合流する予定だし、凧は……………」

「…すでにいます」

話し声が聞こえたのか、ひょっこりと修練場に併設された武器倉から顔を除かせる凧

さすが北郷隊の優等生。遅刻などするはずもないか

「となると、後は亞莎……」

「あつ、すいません報告が遅れました。呂蒙様は孫権様のお相手をするそうで、ここには来られないそうです」

「そうなんだ？」

とすると俺達が最後か…

「思春。待たせてごめんな」

迷惑をかけてしまったに詫びる為、素直に頭を下げる

「……ふん。遅れた分は内容を充実させろよ」

くるりと振り向き中央に仕切られた組み手用の舞台に向かっていく

「ほっ…あんま怒られんですんだやん隊長？」

「……まあね」

真桜を伴って思春に続く俺達。凧は全員分の模擬戦用の武器を担い

でこちらに歩いてくる

今日は將軍、副官クラスの組手が基本のメニューだ

凧や真桜達は俺の副官扱いになってるから、毎回参加しているが、思春や亞莎の配下の人はあまり見かけない

指導教官曰く

「ある程度実力が伴う者しか参加させていない」

だ、そうな

鍛錬は忙しいなりにも欠かしてはいないけど、それでも名立たる名将相手に戦闘能力はやっぱり適わない

強くなりたいこちらとしては願ったり適ったりな内容だけど、とにかく、きつい

組手は俺中心で行われ、自分と戦わない相手が休むローテーションだから休む暇が無い

一番弱いから、とりわけ疲れる役回りだろうけど、最近は実力の向上を肌で感じられるようになった

格上クラスの強者と数をこなす戦いは常に緊張に包まれ、後の先を突く俺のスタイルを磨くのに適している

洛陽での恋や霞も勿論強かったが、得物が似通っていたせいか動きが画一しそうになって少し困っていた

その点、剣や拳闘との戦いはとてもためになる

そんな事を思いながら尻から模擬剣を受け取り舞台上がっていく
舞台とは名ばかりの盛られた土の土台で、最初の相手が待っている
孫権の右腕で義の忠臣、元は錦帆族と呼ばれた江賊の頭領である甘
寧だ

……いきなりか

文句は無いけど、不安はある。温まっていない体でどこまで付いて
いけるかが問題だ

剣を正眼に構え対峙する

………？

向き合つと同時に感じる、ほんの少しの違和感。いつもより殺気の
具合が酷いような……どこか思いつめた感じがしないでもない

とりあえずは様子見と、そう思って気を張ろうとした瞬間、思春の
姿が掻き消える

「なっ!?!」

本当にいきなりかよ!!

開始の合図も待たずに仕掛けてきた

咄嗟に急所である首筋を剣でガードする

刹那、ガキリと鈍い音が耳元で鳴り響き、遅れてそちらに視線を向けると消えたはずの思春がいた

あ、危ない！

最初に狙うのは首と予想していたが、右か左は完全に賭けだった

無理に力比べをせずに相手の剣を受け流し、距離を取る

「……………チツ」

やっぱり、いつもの訓練通り、彼女に半端な手加減の様子は見えない

「あれを受け切るんかい、隊長は…。うち何も見えんかったで」

「気配を絶つた高速移動による奇襲だろう。それを防ぐなんて…」

舞台横でなにやら話し声が聞こえるけど、目の前の集中を切らさない為に聞き流す

相変わらず初動が見分け辛い

人知を超えた速度で繰り出される攻撃は恋相手に慣れたつもりだったが、そう簡単にはうまくいかないな

正面に立っていても姿が消える不思議。恐らくは昔うちの爺さんが使っていた『縮地』とやらだろうか

自分には到底出来っこないが、原理は確か相手の死角を突く歩法だ
ったはず

つまり、死角からの攻撃をしてくるならと素直に従ってみたのが幸
いした

そう何度も防ぎきれぬ攻撃じゃないのは明白

次からはフェイントも織り交せてくるだろうから、このまま後の先
に徹するのは得策じゃない

あまり手加減してくれない思春が相手だと、手が出せないまま終わ
ってしまう組手も多い

「……………」

ゆらりと、見にくいと思春が徐々に脱力していくのが分かる

もう一撃来る気が…

意を決して迎え撃つ為に、息を呑み。精神集中の言葉を口ずさむ

「……………摩利支曳娑婆訶… 天清浄… 地清浄… 人清浄……………六
根清浄……………」

「……………」

「……………」

周囲の物音さえ聞こえない極限の緊張感。細心の注意を払いながら対峙する

「……………ハッ！」

集中空しく、再び思春が消える

掛け声でタイミングは図れたが、やはり見失ったか。どういつ体の造りをしてるんだか…

だけど、体はすぐにでも動ける。集中のおかげで筋肉はまだ弛緩していない

先と同じ右側か、それとも裏を搔いた左方向か、その二択で悩む時間さえ命取りの瞬撃が迫る

なら！

一か八か、右に向かって体当たり気味のステップを踏む

これなら左側の攻撃は当たらない。もし反対側でも、ぶつかってしまえば致命傷は避けられるはず

「クッ…」

鋭い音が左から襲い掛かり、空を切る幅広の刀

そこを狙って自分から斬りかかる

「甘いぞ、北郷！」

隙をついたはずの横薙ぎの剣閃を、地を這うように身を低くして回避された

だが、甘いのはそっちだ思春！

反撃に転じようと中腰になった彼女目掛けて、今度は前蹴りを放つ

「!?!」

驚き、バックステップで後退した思春に間髪入れず攻撃を加えていく

上段打ち下ろし、突き、逆袈裟

避けたところへ裏拳を振り回し、更にその勢いに乗せた回し蹴り

そこまでしてようやく動きを止めるのに成功する

勝機とばかりに、蹴りを受け止めた思春へ向かって剣の柄で打つ

が、相手は時代に名を残す名将。こちらの攻撃が届く前に、鳩尾への強力な手刀が突き刺さる

「がっ、…はっ!」

体が硬直し、呼吸が出来ない程の激痛。それでも追撃を逃れる為、思春に当たっていた足を前へ無理やり振り抜く

おかげでいくらかの距離が空いたが……あの体勢で的確に急所を突いてくるとは

そんな舞台での攻防を目にしている二人が驚嘆の声を漏らす

「……………お二人とも素晴らしい動きだ。すごく勉強になる」

「ようあんな速度で戦えるなあ……………甘寧様がすごいのは分かるけども、隊長も日に日に強くなってへん？…才能の違いやるか」

「……………いや、隊長は絶え間無い努力で強くなってると思う。昨晚も遅くまで鍛錬をされていらっしやっただから」

「えっ？昨日って……………確か風の順番の日やなかったけ？」

「う……………そ、そうなんだが。こ、こ、事を終えられてから出て行かれたみたいなんだ。その、恥ずかしくて……………い、いや緊張して寝れなかったから!！」

太陽が頂点に昇る時刻に相応しくない話題に、顔を真っ赤にする風をからかうように笑い飛ばす真桜

「相変わらずウブやねえー。かわいい風ちゃん、君はずっとそのままでいて。ってかー」

「……………う……………いじわるだぞ真桜」

「ええやん、ええやん。けどほしたら……………隊長はいつ寝てんのやる？」

「……………うん、体調管理だけはしっかりしてほしいな」

なんとか返事を返して、再び舞台に視線を戻す

彼女達の心配通り、一刀は睡眠時間をかなり削っていた

文官としての政務は勿論、自己鍛錬、人付き合いの時間もなるべく減らさないようにした結果だ

徹夜の場合も多い。目立った体の不調はまだ出てないが明らかにオーバーワークが続いている

…… 本人すら、それに気が付いていないようだが…

……

一刀はおもいつきり息を吸い込みたいのを我慢して、構えを整え先の攻防を思い返していた

久しぶりに使った体術は思ったより成果は出ない、やはり付け焼刃では駄目なのか……

実家の流派、タイ捨流は体術を多用する。本来は跳躍も含めたトリッキーで豪快な剣だが、身体能力が高くない俺が実家の道場で習ったのは門下生に教える正道剣術がほとんどだった

使えるのは子供の頃、爺さんに教えられた初歩だけ

それでもここに来てから勘が戻ってきたのか、それなりに使えると見込んで実践してはみたが…

目の前の思春は警戒して、さっきより本気の度合いが明らかに上が

っている

……失敗した

中途半端な攻撃が、彼女のプライドに火を付けてしまったのか。あれはもう、獲物を狩る虎の目だ

緊張した雰囲気の流れる中、覚悟を決めて足に力を込めっていると、ポツリと思春から言葉が漏れた

「……………なぜ、強くなった」

「……………えっ？」

あまりに予想外な質問に呆けた声で返す

突然何を言い出すんだ？

疑問に思ったその一瞬。せっかく離れたはずの位置が肉薄する距離まで詰められる

くっ、まだ速くなるのかよ！

常識外れの速度に恐怖を感じる間も無く、放たれる怒涛の乱撃

上下左右、変幻自在な攻撃を受け流す余裕も無く、必死に刃で受け止めてみせるが、勢いに乗った猛攻に徐々に押し込まれる

「……………なぜ、力を求めた！」

思春にしては珍しい大振りの攻撃

「……………なぜ、貴様は……………！」

受ける度に押し寄せる腕の痺れがどんどん蓄積されていく

「いったい、何を！……………言っ、るんだ！」

問いかけてはくるが、手は緩まないまま苛烈さだけが増し、気がつけば、後退をしすぎたせいで舞台の縁が近い

そしてとうとう後が無くなった俺は単調になり始めた太刀筋に合わせて、罅迫り合いへ持ち込む

互いに腰を落としての力比べ。真正面から向かい合い、ギリギリと金属が擦れる音が耳につく

「思春！言いたい事があるならはっきりしてくれ。組手中に会話されたら集中できないだろ！」

「はっきり、だと……………いいだろう。なら言っ、てやる！」

「ぐっ……………！」

女性とは思えない圧力が押し掛かり、真近で捉える表情は鬼気迫るものを感じる

どうして……………

「なぜ蓮華様を蔑ろにしている！あの方の御心。解らぬとは言わせ

んぞー!!」

!! つつ!?

「なぜ避ける!なぜお傍に居ようとしない!以前ならば、意の一番に気にかけていたはずだろう」

腕にかかる力以上の、目に見えない重圧が押し掛かってくる

「思い返せば、成都に来た時からそうだった。記憶のある雪蓮様や穩が相手とは違い、最初から一線引いた態度で接していたな」

「そ、そんな事は……」

「勘違いとでも言い訳するつもりか?笑わせるなよ、北郷一刀!貴様と私、半端な嘘が通じる間柄ではないだろうが!!」

……ああそうだったな、思春とは前回の終わりの頃には他の娘と同じように子を授かっていたんだ

繋がりは深い。俺が躊躇していたのは承知済みだったってわけか

「一見すればいつも通りの節操無しだが、あの御方相手に限って自ら求めるような行為に及んでしまい!共に生き、支えると誓ったのはどこの誰だ!」

「……………俺は」

「この先強くなってどうするつもりだ。貴様の本分は武力ではあるまい。なにが目的だ、なぜ何も打ち明けないのだ」

怒りだけでは無い、どこか優しさを含んだ厳しい口調になぜか、安堵を覚える

攻めるような口ぶりの裏に、変わらぬ信頼を感じたからだろうか…

「……………俺には…成すべき事があるんだ」

「……………」

気が付けば、初めて。具体的な内容こそ避けたが、自分の境遇を話していた

思春は黙ったまま視線だけがこちらを向く

すでに形ばかりになった鏢迫り合いの間合いで、俺は独り言のように吐露する

「必ず成功させなくちゃいけないはずだけど、まだ何をしていいか、自分でも分からない。…………だから誰にも話せてない」

いまだ左慈の行方も分からず、行動指針も無い。我ながらどれほどの体たらくぶりだろう

自分の情けなさに齒噛みし、口元から血が流れ出る

この外史が生まれた最大の理由。それが、北郷一刀の絶望に満ちた殺害である以上、きつと奴は今も俺への復讐の為、牙を研いでいるはず

以前、貂蟬に注意された言葉以上に、自分の中にある眠った記憶が
そう自覚させている

そう、自身の存在を否定された象徴として、あいつは…

左慈は俺を殺す為に、世界を犠牲にする

だから俺は思いを繋いだ人達を、世界を守らなくちゃいけないはず
……

「今の状態で孫権と愛し合えば、俺は彼女に依存してしまう。……
誰よりも彼女を優先して、きつと誰かを…見捨ててしまう。それが
怖いんだ」

「……どこが悪い。全てがうまくいくなど、夢物語でしかないぞ」
「……そう、だろうな」

思春の言い分はもつともだ

悪く言えば、前回の俺達は雪蓮と周瑜を犠牲にする事で大陸を平定
した

もしそれが真理なら、何もかもを望むのではなく、掴み取れる未来
だけを選択するべきなのだろうか……

「……」

「……今すぐに結論を出せとは言わん。…だがな」

何時の間にか俺に背を向ける形で問いかける思春

「もし貴様が、どうしても蓮華様を悲しませる場合、……当然だが、私はお前よりあの御方に味方する。それだけは覚えておけ」

「楽進！李典！」

「は、はい！」

「残りの時間、北郷の相手はお前達だけでやれ、いいな」

「了解しました！！！」

二人の返事を聞くと、これ以上の会話は不要とばかりに、背中を見せたまま去っていく

残されたのは消沈する北郷と、分けも分からずこの場に放置された二人だけが佇んでいるだけ

「え、え、なに？白熱の戦いから、いきなり修羅場みたいになっただけど…これはいったいどういう事？」

「自分に聞くな……こつちもさっぱり分からん」

「かと言ってあの状態の隊長に、もの聞くんは少々きついんじゃない？」

「だから自分に判断を委ねるな！……隊長が動きを見せるまで少し待とう……」

その後、活動を再開した一刀は思春に掻き乱されたままの精神状態で訓練を続けるが、当然身の入った内容とはいえない始末で何度も直撃を受けては、天を仰ぐ羽目になってしまった

その日の夜

帳の落ちた城壁の上で一刀は凧と二人で酒を呷っていた

持ち込んだ明かりは光量が乏しく、目に見えるものは限られているが、その分、空に見える満天の星空が鮮やかに広がっている

「……………」

一刀が無言で杯の中を飲み干すと、凧もまた無言でお酌をする

こんな光景は非常に珍しい

あの北郷一刀が女性相手にちよっかいを出さないのもそうだが、何

かを吹っ切るようにアルコールに逃げるのはもっと珍しかった

一刀は酒に強く、普段は嗜む程度しか飲まないのも、単純に昼の件を忘れようとするにはもっと効果的な手段があったはずだからだ

お呼ばれた風自身も、もしかしたら昨日に続いて……なんてどこか期待していたが、実際にはこうして酒を注ぐ役に徹しざるを得ない程、真剣な一刀がいる

(……………隊長)

時折、一刀は救いを求めるように空に向かって手を伸ばす

結構な量を胃に収めたはずなのに、その動きにブレは無い。…酔いたくても酔えないのだろうか

出会ってから二ヶ月以上が経過した今でも、こんな表情を目撃したのは初めてだ

力になりたい……

その一心が胸に満たされるが、果たして自分に対処できる問題だろうか？

甘寧様との会話以来の隊長は心此処にあらずといった感じで、いつもの笑顔を向けてくださらない

下手に進言して嫌われてしまったらどうしよう、そんな不安が入り混じり、なかなか発言する機会を掴めないまま時間だけが過ぎ去っていく

やがて用意しておいた酒が底を尽き、特に会話もなく、そろそろお開きといったところで、視界の端に明かりに照らされた人影が映り込む

そこには中肉中背の男、道師と呼ばれる于吉がこちらに向かって近づいてくる姿だった

凧を伴った月見酒は穏やかな時間とともに過ぎ去っていく

真桜や沙和が相手だと、どうしても落ち着いて飲めないから、黙って空気を読んでくれる凧は非常に有り難い存在だった

ただ、久方ぶりの飲酒は、いくら飲んでも気分が高揚せず、ひたすら飲み続けている今の段階でも酔いの兆候は見られない

ほろ辛い辛味と鼻に抜ける澄み切った香りはあまり酒類を嗜まない

俺でもわかるぐらいの高級品だ

せつかく品質はとても良い物なのに、どこか味気なく感じるのは飲む側の問題だろうなあ

まだこの時代の酒は純度が低く精製法も未熟な為、濁った醸造酒が多いが、これは透明度が素晴らしく高い

これを拝借する時に料理長が、魏領から流れてきた貴重な一品だから大切に飲んでほしいって言ってたけど

よくよく考えてみるとこの味って……

確認の為にもう一口喉に流し込むと、…うん、やっぱり独特の麦の味がしない。どちらかと言えば日本酒な感じだ

てゆうかほぼ純米酒に近いような混じり気の無さは、今の技術レベルで出せる代物なのか？

そんなどうでもいいような疑問が頭を過ぎり、少しだけ気分が軽くなる

視線の先には洪水のように広がる星の海とぼっかり浮かんだ上弦の月

気が付けば無意識に、そこに向かって手を伸ばしていた

特に意味はない行動。だけど後から考えてみれば、俺はこの時、誰かに助けて貰いたかったのだろう

いままでの外史と違った、自分で守るべきものを選択する厳しさに

心が折れていたのかもしれない

だから、この時の俺は、突然開いた活路へ無防備に顔を突っ込んでしまったんだ

それこそがあの男の狙いだったのを知るわけもなく……

手で透かすように仰ぎ見ていた視界に明かりが寄ってくる

警備の人間以外の人通り少ないこの場所に来客とは珍しいな

気になって首を動かすと、手持ちの行灯を持った干吉がこちらを指して歩を進めていた

「……ここに居られましたか北郷殿、随分探しましたよ」

やはり目的が自分だったのか、明かりを地面に置きながら苦笑している

「……なにか急ぎの用件でもあったかな？」

警戒して立ち上がろうとした風を手で制し、続きを促す

道師という怪しげな立場にいるこの男とは接点が薄く、普段は誰も顔を合わせる機会が少ないらしいから風の心配も分からなくもない

一応、周瑜推薦の人物だから一角の才能を持った人格者らしいけど、俺自身も感想は、以前雪蓮が言っていたのと同様、どこか危うい雰

困気を感じさせる

そんな個人的な感想を思い浮かべる中、彼は胡坐をかいていた俺に向かつて見下ろすような視線を浴びせる

「良い報告と、悪い報告の二つを持って参りました。どちらを先にお聞きになりますか？」

報告？この男が？

声をかけられる事さえ稀な人物の問いに警戒しながらも、言葉を返してみる

「よく分からないけど、じゃあ…良い方からお願い」

さすがに今の心理状態では、悪い方からの報告は聞きたくない

「フム……北郷殿は嫌いなものを最後まで残すタイプですか。なるほど、参考になります」

「えっ？」

「いやいや、こちらの話です。気にせず本題に入りましょう」

「……………」

「貴殿の失った記憶、すぐに取り戻せるとしたらどうしますか？」

「！… なっ!？」

「……………記憶？」

事情を知らない凧だけがきょとんとした表情を浮かべている

記憶が、戻る……………！？

「どついう事だ、干吉！」

衝撃的すぎる内容に思わず立ち上がり、彼に詰め寄る

「おおっと、落ち着いてください。北郷殿。お話は周瑜様から聞き及んでいましたから、前々から準備をしていたのです」

干吉は焦った様子も無く、眼鏡の位置を直す

「記憶の再生。量に制限はつきませんが、有力な術を見に付けたと自負しております」

「……………本当に可能なのか」

「はい。時間は取らせませんし、すぐにでも執り行えます……………実行するかは貴方次第ですが」

突然開けた光明に声が出ない

全てを思い出せなくても、孫権の記憶さえ戻れば気持ちの踏ん切りが着くはずだ

もしそうなってくれれば、思春に迷惑をかけ無くても済む

「出過ぎた進言かと思いますが、悩みの種は少しでも減らしておいた方が良いかと」

正直、信頼していいものか迷う気持ちは在る。けどそれ以上に記憶が戻るといふ可能性は捨てがたいのも事実

巡るめく思考の渦で、けっして短くない時間が経過していく

話題についていけず困惑する風と表情を変えない干吉の間で出した結論は……

「……………やってくれ」

「ふふ、良い覚悟ですね」

答えは分かっていたとばかりに、すぐさま右手が中空に差し出される

「施術は一瞬で済みますので、しばし目を閉じていてください」

干吉の言葉に従って目を瞑るとなにやら呪文のような長文が聞こえ、頭の上に手が乗せられる

「開」

それはどこか聞き覚えのある祝詞

「展」

一言ごとに、まるで頭の中を切り開かれたような開放感が広がり

「戻」

瞬間、脳内が膨れ上がる感覚に襲われた

「がっ ああ!」

「隊長!大丈夫ですか!」

痛みを伴った記憶の復帰。頭蓋が押し潰れるかと思う程の圧迫感に耐え切れず、思わず膝をつき目を見開く。すると軋む頭のせいで涙が零れ落ちた

おぼろげとはいえない鮮明で膨大な記憶に理解が追いつかず、脳内情報がオーバーフローを起こしているのか、感情だけが先に伝わってくる

それは北郷一刀の在り方を根底づける記憶の一滴

霸王と呼ばれた少女の別れ

運命という大局に流された思い出は、自らの無力さを思い知らされた切望の過去であり、彼の求め続けた立脚点の一つでもあった

「おいつ!隊長は無事なんだろうな」

どうみても尋常ではない位苦しむ一刀に駆け寄り、介抱する風の激昂

原因となった男は悪びれもせず、また心配した様子もなく、一人話を進める

「多すぎる記憶は整理に時間がかかります、小一時間もすれば痛みは引いてきますから安心しなさい。それより……」

干吉は自分の懐から小さな木片と竹巻を引き出す

「悪い方の報告です。体調が回復次第みせてあげてください」

直接渡す事もなく地面に並べられた二つは、呉の間諜である事を示す割符とその報告書のようだった

「きつと北郷殿にとっては、大変貴重な情報ですから……くくく」

「貴様……」

今の笑いで凧は確信した。この男は隊長に仇なす人物だと

話についていけず真意は理解できないが、すぐにでも殴り飛ばしたい気持ちを抑え、一刀を守るように対峙する

……この状態で傍は離れられない

代わりに目で殺せるような視線が干吉を貫く

「くく……そう怒らないでください。何も悪い事はしていないですよっ、」

凧は答えず、より視線の厳しさだけが増す

「怖い、怖い。……まあ、後は任せますよ」

「!？」

まるで世間溶けるように消え去る干吉

さっきまで立っていた場所には人の居た痕跡すら残らず、彼の持っていた明かりだけが灯っていた

「いったいなにが起こっているんだ……」

果たして道術とはここまで摩訶不思議なものだったか

いまだ嗚咽を繰り返す一刀の横で尻は途方に暮れるが

この時はまだ、自分がこの地を離れ、一刀とともに行動を共にするとは思っても寄らなかった

遠く離れた西蜀の地で、緑の旗が翻している

その下には一万を超える兵で構成された兵が、何処かへ向けて進軍

していた

「にゃー、久しぶりの合戦で鈴々、わくわくしてきたのだ！」

先頭ではためく旗は『張』の文字、張 翼徳の部隊

「これ鈴々。我らは率先して戦うのではないのだぞ。意味を履き違えて要らぬ問題を起こすなよ」

その横に並ぶのは『趙』の旗、趙 子龍だ

「いいじゃねえか星、最近はろくな戦も無くて飽き飽きしてたんだ。せつかくの戦の機会、せめて気合だけでも入れさせるよな」

「そんな事言つて、お姉さまも隙あれば暴れるつもりでしょ？」

『馬』の文字の下、馬超、馬岱も二人に続き

遅れて後方、『黄』の旗を背に黄忠も話に加わる

「鈴々ちゃんも翠ちゃんも、欲求不満なのは分かるけど我慢しなくちゃ駄目よ、今回は朱里ちゃんの命令に従わないと大変な事になるんだから」

「それは分かっただけだよー」

「訓練ばかりじゃ、つまんないのだ」

早くに仲間と合流した蜀軍は少しでも兵力を増やす為、あらかじめ領地の拡大に制限をかけ他国を刺激しないようにしていた

そのおかげで前回と同規模の領地を平らげた後、軍の質を向上させる為の訓練が繰り返し行われてはいるが

実践は偶に攻めて来る五胡相手がほとんどで、一定以上の実力を持つ將軍達にとっては物足りない日々が続いている

「ふむ、退屈なのは同意だな。二人とも、今回の作戦如何では対決も止む無しと言われておったから、強者との戦いはそこに期待しようではないか」

「……………星ちゃん」

「はっはっは、分別は弁えております故ご安心めされい」

一見良識派の星ちゃんも偶に暴走する時があるから少し心配なのよね…

実は戦う気満々な彼女に溜息をつく紫苑

お守り役である彼女の受難はまだまだ大きくなりそうだった

その後方、誰にも目に付かない位置に居る彼女の存在を含めて…

前方では鈴々と翠が言い争いを始めたらしく、大声の応酬とともに蛇矛と十文字槍が鎬を削っている

せめて目的地に着くまでは問題を起こさないでね…………

そう願わずにはいらねず、皆にばれないようそっと天に祈ってみる

だが、切実な紫苑の祈りを遮るように、一際大きな声が広い大地に響き渡った

「長坂橋なら鈴々が一番活躍できるのだ——！！！」

舞台は混迷、色はとりどり。

緑と紫、金に赤

たった一つの橋に集まる運命の開闢

いざや始まる演目は

喜劇か、悲劇、どちらを選ぶ？

全てを塗り潰さんとする白い悪に

立ち向かえるか、北郷一刀

十八話 長坂橋の遭遇 再び交わる仲間達（前書き）

全然関係ないけど、星の個別シナリオに出てきた極上メンマ丼。作
つてみた

イメージはかに玉風、でも卵とメンマの食感が合わない
桃屋のメンマでは駄目なのか？

十八話 長坂橋の遭遇 再び交わる仲間達

蘇る記憶は魏の霸道

一陣の風が地平線まで続こうかという荒野に地響きを轟かせる

その正体は北郷一刀と凧を乗せた赤兎馬の姿だ

深紅に染まる巨軀が疾走する姿は、さすが歴史に謳われる名馬だと関心せざるを得ない

セキトはその名に恥じぬ身体能力を発揮しながら、我が主を一刻も早く送り届けようと全力で大地を駆け抜けていた

「凧！長坂橋まであとどれくらいの距離だ！」

激しく揺れる馬体の上で蹄の音に負けないよう大声で呼びかける

はつきりとは視認できないが、前方に村のような家屋が立ち並んでいた

「あそこは恐らく当陽内の村。ここまで来れば目と鼻の先程度しかありません！」

一緒に乗せた大きな荷物で狭いのか、きつい位に背中から抱きつく凧は肩越しに顔を出しながら答える

もうそんな所まで来たのか……………

はつきり言ってセキトを侮っていた

昼夜問わずの強行軍に、いまだ息を切らす様子一つ無い体力

流れる景色が霞む程の速度

今までは長く乗る機会が無かったから実感し難かったけど、ほとんどチートクラスの能力だ

このまま行けば、間に合わないと踏んでいた目的地の到着は予定より大幅に繰り上がり、逆に相手を待つ側になりそうだ

そうなれば一度、作戦会議を兼ねた休憩を取る為に村に立ち寄ってみよう

干吉の一件から今まで、最低限の準備だけで走り続けてたからな

いまだどこか火照ったような頭を冷やす良い機会だ

近づく村に向かってこれからの事に思いを巡らせる

.....

直接的ではないといえ、曹操こと華琳は、呉の人間にとって忌むべき相手だ。その救出に思春や孫権が反対しないわけがない

説明を躊躇った俺は簡単な内容を書簡に残し、無断で城を出る事にした

今頃は真桜や沙和を含めて大騒ぎしてるかもしれないな

……後で怒りも叱責もいくらでも受けるから、少しだけ待っててくれ
干吉の術によって魏に関する記憶全てを取り戻した俺は一路、敗走
する曹操を追って長坂橋付近を目指している

記憶が確かなら、世界はここを舞台に選ぶはずだ

大局に逆らった過去の記憶。赤壁、定軍山。結果に差異はあれど、
歴史の収束は必ず起こる

曹操の逃走ルートが長坂橋付近にある以上、その可能性はとても高い
消えた干吉の搜索を後回しにしても、その場所へと向かう事に決
めたこの旅路

待ち受ける結果は……

村にあった酒房近くにセキトを止めて、荷物ごと凧と二人店内で一
息つく

注文する前に出た出洩らしのお茶でさえ、ひどくおいしく感じるのは想像以上に体力を疲弊していたからか

同じく渡された布巾に顔を埋める

「くうー、生き返る。考えてみれば徹夜続きだったもんなあ」

「……………親父くさいですよ、隊長」

ぐっ、最近まで学生だった俺に向かってなんて暴言だ

最近忙しくて、急速に老けた気がしてたけどさすがに親父はないだろう

「そんな事言ったら風だって、椅子に座った瞬間、ああ…なんて溜息ついてたじゃないか」

「そ、それは……………」

仕返しとばかりに正面に座った風^{ふう}に反論すると、両手を膝に乗せ、真っ赤な顔で俯く

……………あー、なんか癒されるな

ちよっと強気な娘が見せる小動物チックな仕草は、万国共通微笑ましい

精神力のほう^{ほう}が先に回復していくのを感じる

「……………っつ！ そんな事はどうでもいいんです。それより早く状況

を説明してください！」

正論だが、照れ隠しなのがバレバレだ

「じゃあ、話していきうか……複雑で長くなるけどいいかな？」

コクリと頷かれる

「まずは、そうだな。曹操救出の件はひとまず置いて。天の御遣いなんて与太話から始めようか……」

自虐めいた口頭から、まずはつらつらと過去の記憶について言葉を重ねていく

自分の本当の素性

三国に渡る歴史を生きた過去

そのせいで、現在の立ち振る舞いに悩んでいる事

恋とねね以外、誰にも話した事が無かった秘密を含めて包み隠さず打ち明ける

再生された過去の記憶のおかげで、俺は少しだけ弱くなれたから

「……………」

誤解のないよう丁寧に説明したつもりだけど、凧の表情は硬い

当然だけどね

はたから聞けば妄想もいいところだろう。こんな荒唐無稽な物語

「信じられないのは分かる。でも、力を貸してほしいんだ……彼女を助ける為に」

呉を裏切る形になった今回の出做はどうしても成功させなくちゃいけない

それは残してきた孫権や彼女…華琳に報いる為にも

「だから……」

「……信じます。納得はしきれませんが、理解はしました。ここまですべて付いて来たのは自分からですから、今更協力しないはずがありません」

瞳には決意が映っている

「あの晩、慟哭する隊長を見た時から気持ちは決まっていました。どんな難事があるうと、あなたを支えたいと」

「干吉の件、だな……」

大事にこそならなかったが、あの時の俺は尋常どころではない苦しみ方をしていたらしい

痛みが落ちつき、最初に視界に入ってきた彼女の泣き出しそうな表情の奥には、確かに安堵と喜びに満ちていた

その時にはもう、俺についていく覚悟を決めてくれていたのか…

「……ありがとう」

感謝を込めて頭を下げる

「礼など言わないでください。自分はただ隊長の役に立ちたいだけですから……」

「凧……」

「力の及ぶ限り、助けになります。だから……」

一度きつく唇を嚙み

「お傍に居させてください。決して、いなくならないで……」

搾り出した言葉は告白にも似た願い

その言葉は果たしてどれほどの意味を持つのか

少なくとも、北郷一刀にとっては一度、なしえなかった約束

傍にいと、誓ったはずの思いは歴史のなかに埋もれてしまった

凧にその記憶はまだ戻っていない

しかし、以前貂蟬が話していたように感情は残っているのだろう

彼女もまた、一刀との別れを体験しているのだ

無意識に彼が離れてしまわないよう心が求めているはず

万感の意を込めて、一刀は凧の手を取る

「約束する。俺はどこにもいかない」

「隊長……」

握り返す力は強く、痛みを伴うがそれだけ思いの大きさが伝わってくる

……凧に報いる為にも華琳救出を絶対に成功させよう

決意とともに、結ばれた両の手より絡み合う二人の眼差し

いわゆる二人の世界が形成されていく

近づくと二人の距離

感極まった凧はそっと瞳を細め……

……

すかさず手を跳ね除けた

「ご注文は？」

「うん、うん……」

見つめ合う俺達を、店員さんが冷たい目線で睨んでいた

「……………それと腹に溜まるおかずを幾つか見繕ってください。全部大盛り、一人前は唐辛子ビタビタで」

「くうっ……………！」

さっきより頬を染めて恥ずかしがる姿はいじらしさ満点で、これはこれで……………なんて思うが、なんか損した気分だ

「……………畏まりました……………リア充、爆発しろ」

最後のほうでおかしな単語が聞こえたのは気のせいだろう

厨房に入っていく店員を尻目に、咳払いを一つ。場を仕切りなおす

「えーと。次は何を説明しようか？」

つとめて明るく話題を振るが、反応は乏しい

例えるなら、赤に染まったアストロン状態

……………しばらくまともな会話はできそうもないな

残りのお茶を飲むべく椀を傾けると、背後からこちらを呼ぶ声があった

「おっおっ、兄ちゃん。さっきから見せつけてくれるねえ、ちょっと面貸してもらえるかい？」

典型的なヤクザ口調、店が小さいからか先の会話は丸聞こえらしい

「あー。一応これでも立て込んだ内容を抱えてまして、できれば」
遠慮しておきたいんですけど」

振り返らずに答える

休憩中に絡まれるのは勘弁願いたい

「ほー俺様も舐められたもんだ、大陸に名を馳せる『太陽の化身』
に向かつてそんな口調を返せるとはな」

なにそれ？ 初めて聞くんですけど

「いいから言う事聞きな。このままじゃ封印している第三の力が開
放されちまうぜ？」

どこの中二病だ。あと、第一と第二はどこいった

あきれて言い捨てる

「いいかげんにしろよ。これ以上邪魔するなら、こっちだって考え
がある」

腰に差した剣に手を伸ばす

猛将相手に訓練を積んだ今の俺には、ゴロツキ程度なら負けない自
信がある

けど、後方の声は動揺した様子もなくちよっかいをかけてくる

「びびると思ってるのか」コラ、汚物は消毒してやろうか、ああん？」

そんな世紀末な文句を聞き流そうとして、ふと気付く

……………声が異常に高い

高いどころか、男の音域じゃ出せないソプラノボイス

さっきからの口調を合わせて考えてみると、頭の中にある人物が浮かんでくる

「……………」

無言でゆっくり振り返ると

まっすぐ向いた視線に人の姿は無く、少しだけ頭を下げると

「おおっ？」

どこかで見たいようじよがガン見していた

「……………」

金髪のふわふわヘアート、常に眠そうな目をしている沈着冷静な魏の軍師

程？ 仲徳 登場

あまりに突然な事態に、開いた口が塞がらない

「オウフ、俺様のあまりの美貌にぐうの音もでないってか？」

「……………とりあえず宝？は黙っててくれ」

空気を呼んでそっちの名で止めてみる

目の錯覚か、頂垂れたように萎れる頭の彫像

「むう、小粋な洒落が分からないお兄さんですねえ」

風は機嫌が悪そうだ

「せつかく女性からのお誘いを受けたのに、むげにあしらうとは、馬に蹴られて死んでしまいますよー」

「いやいや、明らかに喧嘩売ってたよねさっき」

「言い訳、かつこ悪い」

「ぐっ……………」

確かに声の質ですぐ判断できなかつたのは短慮だつたかもしれないけど、こっちは疲れてるんだ。勘弁してくれ…

「無作法だつたのは謝るよ、でも次からは正面から話しかけてもらえるかな？君の顔もじっくり見たいし　キラッ」

お返しとばかりに、キザったらしく白い歯をキラリッ

「……………ぐっ……………」

「寝るな！」

「おおっ？」

……いや分かってたけどさ

「……まあべたな口説き文句は置いときましょー」

聞こえてんじやん

箱を横にスライドするジェスチャーの後、風は改めてこちらを向く

「はじめまして、お兄さん。私の名前は程立です。気軽に程立ちちゃんとお呼びください」

「あ、ああ。はじめまして程立ちちゃん。俺の名前は北郷、向かいの席で固まってるのが楽進だ。よろしく」

程立って名乗っているのは、曹操に仕官してないからなのか……？

「これはどうも。それと、もう一人ご紹介したいのが、あっちの柱に隠れてるのですが……」

風が指を差した先には顔だけをひょっこり出した眼鏡の女性

注目されるのも構わず、鋭い視線で睨みつけてくる

「稟ちゃん、どうしましたかー。この人に声をかけようと言いだしたのはあなたですよー」

「……私の名は戯志才。よろしく」

ようやく口を開くが、近づいてくる様子は無い

……俺まだなにもしてないよね？

「初対面の人に失礼ですよ稟ちゃん。ほらこっちに来て」

「そう言われても……実際目になると……こう、得体のしれない憎しみが湧き上がって、近づくと何か変態行為をされそうなの……」

……原因は前回の俺でした

記憶は無くても、閨での一件はなんとなく覚えているのか警戒させてしまっている

風の手招き空しく、稟はその場から動かない

「むう、普段はあんな事しない子なのに、なぜでしょう？」

「……さあ？」

しらばっくれてみる

「まあ、いつか。お話しましょーかお兄さん」

ぼてりと隣の席に座る風はちゃっかりと固まったままの風のお茶を飲む

いつだって彼女はマイペースだ

「さっき気になるお名前が出たので聞きたいのですが、……曹操さん救出の話は本当ですか？」

「こら！ 様をつけなさい風！」

妙に鋭い突っ込みを無視して話は続く

「本当だよ、……ちょっと彼女とは縁があつてね。少しでも力になりたくて平原からここまで来たんだ」

恐らく前回の記憶がないだろう相手に詳細は省く

「お二人で何とかするつもりなのですか？ 曹操さんを追いかけて来るのは袁紹さん率いる三万規模の大軍勢。個人では何もできないと思うのです」

「……それは承知してるさ。でもだからといって見捨てるマネはできない。微力でも助けになりたいんだ」

追走する軍隊の戦力はあの晩、細作からの報告で知っていたから今更驚かない

俺は、自分の決意を表すようにはっきりと答えた

「……三万の兵と聞いて顔色一つ変えないなんて、勇気があるというか、剛毅なお兄さんですねー」

指を唇に添えて薄く笑う

事前情報が無かったら、びびってたと思うけど

「その分、何を企んでいるのか非常に気になりますねえ！。ただの無謀な特攻野郎では無さそうですし、良ければお話を聞かせてもらえませんか？」

「別に構わないけど……我ながら成功する可能性の少ない、ずさんな計画だよ？聞いたら落胆するかも」

平原の町を飛び出した俺はある秘密兵器以外の用意はしていない

ちらりと目を横に移すと、そこにはずた袋に包まれた荷物がいまだぐったりしていた

「それを判断するのは風なのです。いいから話してみるよ兄ちゃん、穴があるなら俺達が助言してやるうってんだ」

「……………君が？」

「おうよー。袖触れ合つのも多少の縁。こう見えても結構頼りになる頭脳の持ち主だぜー」

頭のとっぺんに乗った宝？がえっへんとばかりに胸を張る

やっぱ生きてないか？あの彫像

「じゃあ、ありがたく知恵を貸してもらおうかな……でもその前に……つ聞いていいかな？」

「二行前の事以外なら、なんなりと」

なんとというメタ発言を

いやいや、問題はそこじゃない。……聞きたいけども

「…君達はどうしてここに？」

「風と凜ちゃんは今流浪の身なのですよ。軍師として仕官先を探しているのですが、なかなかこれだ！という人物が見つからないまま今日に至るのです」

そう言っただけは手に持った飴をペロペロ。ちょっと不機嫌そうだが呉のみんなと違って、魏の人間は凼達同様、過去を思い出せてはいないらしいな

「そっか、それならそれでいいんだ」

「……含みのある言い回しですね。……まあいいでしょう。それより、こちらからもお聞きしたい質問があったのでした」

「質問？」

「はい。それについては凜ちゃんにお願いしましょうか」

「わ、わたし!？」

突然話を振られた彼女は余程驚いたのか、弾かれたように後ずさる

「そうですねー、早く会話に参加してください。いつまでもそんな調子では私達まで変人扱いされてしまうので」

確かに狭い店内で身を隠しながら見つめてくる女性は不審者以外の何者でもない

「くっ……………」

わずかな思瞬の後、ようやく稟は同じ机についた

風 稟

俺 — 一 風 (アストロン中)

／ — — — — —
＼ — — — — —
／

位置関係はこんな感じ。どんだけ警戒してるんだ

「んっ、んん！では曹操様の敗走について、貴方の所感をお聞かせ願いますか？ …… 十文字の北郷殿」

なにそれかっこいい

「えーと、それは構わないんだけど。俺ってそんなに有名だった？」

前にも確か、風にも言われたような記憶があるな

「白銀に輝く羽織を纏う武人。泗水関における奇天烈な防衛戦は結構有名ですよ。華雄將軍の暴走が無ければ歴史に名を残す戦いだっ

たと、当時の貴方の副官が書に認めて流布しているぐらいですから

あのおっちゃんに文才があったとは……まさかいらぬ事書いてないだろうな。(主に華雄との情事。ばれたら何かとまずい気がする)

「その人物が平原で仮装演劇を開いていると聞いた時は、気でも狂ったのかと思いましたけどねー」

「あつ、やっぱバレてるんだ」

「当然です。まあそれが民衆の心を掴む政略なのは理解できますが、仮面一つで正体を隠す必要はないでしょう。なぜか判っていない輩も多いそうですが……」

「そついや思春も最初は人違いしていきなり本気で斬りかかってきたな。…嫌な思い出でもあつたんだろうか」

「いやーアレが無いと正直やってられないというか、最後の一線と
いうか、好んで付けてるわけじゃないから。そこだけは誤解しないで」

「そうですねー、他人の倒錯した露出趣味に口を出すのは失礼ですから」

「脱いでないよ、どこの絶好蝶なホムンクルスと勘違いしてるんだ」

「風のボケをスルーして、稟の眼鏡の奥には試すような瞳が潜んでいる。どうやらこちらの器量を計りたいらしいな」

咳払いして真面目に答える

「曹操軍の敗走か……。細作からの報告を信じれば、間違いなく再起を見越した逃走劇だろうね」

「……その理由は」

あの晩までの情報を元に自分なりの考察を話す

「まず一つ目。兵の流出が多すぎる。官渡の決戦以前の白馬・延津の前哨戦の時点ですでに死者より逃走兵の方が数を上回り続けていたから気がついたんだけど、大幅な兵の減少が起こった場所はどこも支城から程近い場所ばかりなんだよね。これはどこでも蜂起出来るよう各地に兵を潜ませる為だと思う」

怖気づいて逃げたにしては、少々整然としすぎている

魏軍の曹操に対する忠誠心があつてこそ判断だ、普通ならそのまま投降もしくは寝返つてもおかしくない

「そして二つ目が逃走速度が遅すぎる事。数が減つたのにも関わらず、曹操は着かず離れずの行軍で追走されているのは、長坂を抜けた先の相手に袁紹軍を押し付けて、準備の時間を稼ぐつもりなんじゃないかな」

「ふーむ。長坂を抜けたというとー」

「……劉備率いる蜀の領地ね」

「並みいる諸侯の中で、頭一つ抜けた規模を持つ蜀は袁紹に太刀打

ちできる数少ない国だからね。蜀領近くで姿を眩ませれば、袁紹は搜索を理由に進軍する建前を得る絶好の機会になる。そうだったら逃げる曹操の探索は一旦とはいえ打ち切られるだろうな」

正史と違い、諍いも無く成都を居城に据えた劉備さんは今や益州のほとんどを併合。兵数八万に届こうかと一大勢力に成長している

勝敗は不明だが魏領を平定する前に両軍の対決が実現すれば、互いの疲弊は免れない。それこそが華琳の狙いだろう

ただ腑に落ちない点もある

華琳は誇り高い王だ。負けたからといって生き恥を晒すくらいなら自刃してもおかしくない

相手が袁紹なら尚更その可能性は高かったはず

ではなぜ再起を見越した敗走を続けるのか？

この疑問に答えたのは、あの晩干吉から渡された書簡だった

袁紹の傍に白装束に身を包む銀髪的青年が控えている

この男は間違いなく左慈だ。奴が袁紹を裏で操っていたのだろう

あくまで報告を全て信じた上での予想だし、ただの考え過ぎかもしれない

でも俺は居ても立ってもいらなかった

本当にあの男なら何をしでかすかわからないから

狂気に満ちた殺意は誰を襲おうとしているのか

「むー惚けた顔の割にはキチンと考えてますねー。噂通り智謀に明るそうな印象を受けました」

「うん、きちんと大局を見据えた状況を理解できる頭の持ち主のようね。……だからこそ理解できない点もあるけど」

「えっ、考え違いでもあった？」

「根本的な内容です。呉に組みする貴方が、事情を理解した上でなぜ魏に助力するのか？」

「あー。それは……」

まさか前世で仕えてました。なんて言えないよなー

「さっきの与太話、前世うんぬんが本当なら納得できますよー」

しっかり聞いてたのね

「なにを馬鹿な。そこは彼の人間性を主張して無視してあげるのが世間の優しさというものでしょう。どんな人間でも欠点があります」

眼鏡に指を当てて位置を直す

誤解されるぐらいなら、そんな優しさは要らない

「風的には信じてみたい気もするのですが、……そうなるとお兄さんは星の王子様という事になりますねー」

誰がお子様向けシチューの商品名だ

「言いたい意味が伝わってこないんだけど……」

「お星様。何ヶ月か前に落ちてきた流星と同じ印象をお兄さんから感じるので、もしやと……」

「流星は間違い無く俺だろっけど、王子様はないだろっ。ガラじゃないし」

苦笑して返す

「否定しないのですか……」

凍りつくような視線が突き刺さるが、交流のある風と違ってすぐに信じてもらうのは無理だろっな

乾いた笑いで場を繋いでいると、店員がたっぷりの料理を持ってテーブルに並べていく

その食欲をそそる匂いに反応したのか、ようやく風が再起動した

「はっ！？ 自分はいったい……」

「おはよう風。お目覚めのところ悪いんだけど、とりあえずいただきますしよっか」

休み無しの乗馬によって体力は結構限界だった

稟と風に一言断ってから、二人してご飯をかきこみカロリー補給を最優先する

「まさに一心腐乱ですねー、まあ詳しい話はお二人が落ち着いてからにしましょーか」

「風……二人が夢中なのを良い事に自分に分を取らないの」

相方はちゃっかり小皿を用意して盗み食いしようとしている

稟は溜息をついて、せっかくの注意も意に介せず料理をパクつく少女越しに見える青年を観察した

身なりこそ派手だが、武官特有の覇気のような緊迫感を感じず、かといって自分達軍師に相応しい知性、思慮深さは伝わってこない

十文字の羽織を脱げば只の町民として生きていても違和感を感じないだろう

だが、なんとなく声をかける前に風が漏らしたのと同じ感想が頭に過ぎる

(どこかで会ったような……)

魏への仕官の機会を失い、路頭に迷ったとしかいえない日々で偶然湧いて出た曹操の窮地

せめて手助けだけでもと悩んでいたところに、現れた噂の人物

不審な点はいくらでもあるがどこか信じられる気がした

彼ならきつと曹操様を救ってくれるはず

口では否定したが、もし前世からの縁があるのならこんな不思議な感覚になるのだろうか

稟はそう考えながら、ただ黙って北郷一刀を見つめていた

ちなみにこの後、知らずに風の皿に手を出した風があまりの辛さなのた打ち回ったのは言うまでもない

迫り来る運命に

押し寄せるは三万率いる高笑い

せめてと足掻く北郷は

新たに二人の軍師と出会います

大軍止める力は有らずとも

我らに流れを変える智謀あり

十九話 長坂橋の交錯 繋がらない思いを噛み締める(前書き)

更に関係無いけど

メンマ入り餃子はうまかった。食感が素晴らしいね

余ったタネで焼き肉まん作っても結構イケたよ

メンマつええ

十九話 長坂橋の交錯 繋がらない思いを噛み締める

「うへー結構な数がいるなー」

一夜明け、状況把握の為に長坂橋に赴いた俺達の前には所狭しと並ぶ軍勢が待ち構えていた

見つからないよう茂みから覗き込むと、そこにはずらりと整列した緑の旗

辺りに木が蔽い茂る中、橋の掛かった崖周辺は空けた空間になっており、その異様さに拍車がかかる

「概算で一万程度。率いる将は旗を見る限り、関羽を除く五虎將軍四人のようです」

となると張飛、趙雲、馬超、黄忠か。層が厚いなー

「ふーむ風が聞くところによると馬岱さんもいるようですよー」

「ああ、だから部隊が五つに分けられているのか」

言われてみれば、浅く広く展開している兵士達は大まかに捉えて五分割されている

歴史に出てくる長坂橋といっても橋自体は他にも何箇所があるから、周囲の橋全てを押さえるつもりなんだろう

「といっても多すぎだな。曹操の手勢は千にも満たないくらいまで

減ったらしいのに、ここまでの包囲網を敷くなんて」

「それは蜀のみなさんが曹操さんを領内に入れないと、袁紹さんに主張する為ではないでしょーか。諸葛亮さんなら今回の思惑に気がついてそうですから」

両脇に控える軍師二人が頷き合う

こうなると当初の予定通り『おとり作戦』を実行するには少しまずいな

悩みかけていたところで背後から草木の揺れる音が近づいてくる

「隊長。偵察任務完了致しました」

「ん。疲れてるところ悪かったね。ご苦労さん」

顔を出したのは蜀軍の細かい部隊編成を確認する為に別行動を取っていた凧だ

相手に気付かれないうち早朝から出発したせいで疲労の色が濃い

労ってやりたいのは山々だが、先に報告だけを受ける事にした

「早速になるけど、蜀の配置に抜けれそうな穴は有ったかな？」

「……すみません。确实と言えるような配備の薄い箇所は発見できませんでした」

まるで自分に非があるかのように頂垂れる凧に慌ててフォローする

「おいおい、凧が謝る事じゃないだろ。顔を上げてくれ」

「しかし、このままでは隊長の策を実現するのは……」

「駄目なら駄目でやりようは有るさ。そんなに落ち込まないでくれよ」

「でも、せつかくお役に立てる機会なのに……」

「いいから頭を上げて……」

俺と凧の会話が無限ループになりかけたところで稟の質問が間を割る

「……蜀側の布陣はそれほど完璧という事ですか？楽進殿」

少し棘を含んだ口調に凧が居住まいを正しながら説明を始めた

「はい。主要な橋全てが掌握されるだけでなく、一定間隔ごとに連絡用の旗兵が配置されています。これではどの橋から進入しようとする増援が駆けつけてくるでしょう」

「……ふむ、将の配置はどうなっていますか」

「中央の橋に張飛率いる本陣、その後方に弓による援護を目的にした黄忠の部隊が控え、北側の橋一帯には趙雲、長坂南側へ抜ける道には機動力のある马超、馬岱の騎馬部隊が展開しています」

「これは……」

「取り逃がすつもりは全然ないみたいですねー」

考え得る最良の布陣

単騎で駆け抜けるならまだしも、手勢を率いた曹操軍が突破するのは難しそうだ

もしおとり作戦が成功して蜀軍を分断しても、相手には十分な余剰戦力がある。追撃は免れないだろう

どうしたもんかな

風を加えた四人で頭を働かせていると、さっきまで大人しかった秘密兵器が騒ぎだした

「難しい話は分らんがつまり、あれじゃろ。おとり作戦はやっても無駄という事じゃな？　なら、わらわはもう必要ないはずじゃ！　放せ！」

そこには縄で縛られた金髪の少女

服こそいざという時以外、目立たないようコートのような粗末なものを身に着けているが、普段のロングヘアとは違い、サイドに纏められたバネのような髪形が見を引く

小難しい会話は理解できなくせに、本能で脱出の機を嗅ぎ取ったか

「気持ちは分かるが、開放するのはもう少し待って貰うぞ、袁術。君は今回の要なんだから」

フードに隠れた隙間から覗く目には不快感が募っている。苛立つ袁術を宥めるように頭を撫でてみると少しだけ静かになった

普段は子供扱いしおって　なんて文句を垂れるが今は満更でもない表情だ

黙っていれば可愛い娘なんだよなあ

ちょっと癒され思い返すのは、あの晩の事

干吉の一件直後、焦っていた俺の準備は必要最低限で、ろくな思考もせず町を出ようとした

だけど、いざ出発しようとしたところで頭に過ぎった一瞬の過去が足を踏み留ませ、天啓を得た

袁術は華琳の身代わりに使えるはず

思い立った俺は、ほとんど拉致に近い形で袁術を連れ去り、ここまですべて連れて来たのだ。(ちなみに華雄と張勳はぐうすか寝てた)

実際、髪型さえ変えてしまえば背丈や表情など差異はあるが、曹操そっくりの容姿。おとりとして申し分ない

存分に活躍して貰おうと、目覚めた袁術を昨晩まるっとかけて説得し引っ張ってきたけど、ここまで危険な状況になると、さすがに同行するとはいえ戦場には出たくはないなあ

「おやおや、この小娘はまだ愚図っているのですか。いい加減覚悟を決めておとなしくしてほしいのです」

「むっ、なんじゃチビ助偉そうにしおって。わらわが協力しなければ困るのは貴様らであるっ」

風の愚痴に過敏に反応する袁術

ああ風さん。ようやく落ち着いてきたのに蒸し返さないで

「……………チビ?……………勘違いしては駄目ですよ劣化曹操さん。やるうと思えば貴方を気絶させて無理矢理おとりに出来るのです。意思を尊重しているだけありがたいと思ってください」

「なんじゃと!?!」

「なんですか!」

いがみ合う二人

そついや渋る袁術を最終的に説得したのは風だったよな、どうやったんだろ?

「やはりもう一度立場を分からせる必要がありますね」

「な、なんじゃその不適な笑みは」

「ふふふ。……………」

よ

「つにゃ!?!」

耳打ちされた袁術がビクリと身を震わせる

なんだ？急に顔が青ざめ始めたぞ

「爪の……………剥き出し……………」

「や、やめるのじゃ！？やめてたもれ！！」

「……………強引に……………何枚も……………」

「聞きたくない！もう喋るでない！！！！」

「……………いくら怯えても……………笑いながら……………」

「うわー！ー！ー！ん！！ 痛いのは嫌じゃー！大人しくするから、もう止めるのじゃ！七乃おおお！」

風の奴、恐怖で袁術を縛ってたのか

おとなしくさせる為とはいえ、なにも泣くまでしなくてもいいんじゃないか。まるで拷問する悪者みたいだぞ

「……………興奮した……………」

……………お兄さんが……………」

「おい、こら待て」

「ひいひい！！！！」

最終的に俺を悪者にするな

袁術がめちゃくちゃ怯えてるじゃないか

「文句はもう言わん！だから乱暴はやめてほしいのじゃー！」

「くつくつく。もう遅いぜ。お前さんは怒らせちゃなんねえ相手を怒らせちゃまったのさ」

すごいノリノリだな

まったく、静かにさせるだけでどんだけ誤解を生むつもりだ

誤解されないよう宣誓しておくが、俺にはSM趣味なんてないからな

まして相手は見た目（ここ重要）幼い少女だ、下世話な感情なんて起きるはずないだろ

この年で性犯罪者の罪を被りたくないっての

.....

.....

.....」

.....ゴクリ」

「なぜツバを飲むのです、隊長」

ち、違うんだからねこれは！ ただ勝手に喉が鳴っただけなんだからー！

「……やあ……痛く……しないでほしいのじゃ……他なら……なんでもいう事聞くから……お願いじゃ……」

縛られた縄が彼女の微妙にある胸部の凹凸に食い込み、少し痛いのか目には涙が溜まっている

そんな状態で上目遣いでこちらを見つめても……

……

……

「……この物語はフィクションであり、実在するいかなる人物とも関係ありません。」

また登場人

物は全て18歳以上です」

「隊長。一度しっかりとお話ししましょう」

待つんだ尻。気弾でこちらを狙うのは止めてくれ

そして稟。君もその汚物を見るような視線を一旦外しなさい

鉄壁の防御魔法『ソフ倫』で世界の崩壊を防いだのにこの仕打ちは酷いと思うんだ

ややあつてから、気を取り直しみんなと向き合う

若干視線が痛いのは気のせいだろう。そうに違いない

風の気が済むのを待つて俺は疲れた凧と稟をこの場に残し、一路曹操を探す為、北を目指す

道案内は風。協力の意思を見せる為、怯えきつた袁術をセキトに乗せ、蜀に気付かれないよう慎重に進んでいく

後でも尾けられたら本末転倒だ

歩を進めてしばらく、太陽が頂点を過ぎ日差しが一層強くなった頃

俺は、とうとう彼女と再会した

その出会いが望まれないものだとしても

長坂橋を出て数刻

茂る草むらと鬱蒼と纏わり付く木々の中を掻き分けていく

少し前から枝にぶつかると危険を考慮して二人はセキトから降り、迷わないよう俺の羽織を掴みながら後を付いてきている

特に袁術は変装を隠す為、覆い被った布を纏っているのが良く見えないのかよたよた歩き、なんかカルガモの親になった気分だ

風曰く、この辺りに曹操が潜伏している可能性が高いらしいが、一向に姿は見えない

先導して障害物を押し退けてくれているセキトには申し訳ないけど、ここらにはいないんじゃないか……

思い切った場所を変えようと提案しかけたところで、不意にセキトが身を捻る

「? どうしたセキト……」

ガキンッ

「なんじゃ!」

「おおおっ?」

乾いた金属音

発生源はすぐ近くセキトの腹の部分

「攻撃!？」

咄嗟に後ろ二人を羽織の内側へ隠すように抱き抱える

顔だけ動かして確認すると、地面には飛んできたであろう一本の矢

その飛来を察知して馬具で防御するセキトもすごいが

視界の悪い林で当ててくるなんて、どんな腕の持ち主だよ

……

……………弓手?

はっとなって射線を追う

林の奥、目を凝らせば確かに不自然に揺れる草木が存在する

「………合図するまでセキトの影から出るなよ」

「なにをするつもりじゃ、みすみす的になる気か!」

「………お兄さん」

「………ああ、ようやくビンゴだ、二人ともここから動くなよ」

安心させるように頭を撫でてから立ち上がる

「撃たないでくれ！こちらに戦闘の意思は無い！」

両手を上げ、大きな声で敵意が無い事をアピールしながら、不要な警戒を与えないようセキトの反対側へ慎重に身を出していく

「俺の名前は北郷一刀。曹孟徳殿に用あつてここまで来た。面会願いたい！」

少し待つが、反応は無し

セキトの影に隠れた二人も心配そうにこちらを見ている

格好つけたのはいいが……これすごく怖くないか？

いつ射られるとも知れない空白の時間は、さながら時間制限付きのロシアンルーレット

風と袁術の手前、情け無い態度は見せられないからって身を挺したのは良いが

出来る事なら俺もセキトの影に隠れたい。今すぐに！

一人で勝手に心が折れかけたその時、何処かで聞いた懐かしい声が聞こえた

「やっぱり………一刀ちゃん！」

「霞ー！」

注目していた茂みの横から洛陽で世話になった人物が顔を出す

姉御肌で威勢が良く、トレードマークとなった羽織をプレゼントしてくれた女性。神速の将こと張文遠だ

「ひっさしぶりやなー。惇ちゃん和一騎討ちやらかして行方不明って聞いてたけど、元気でやっとなるみたいやん」

笑いながら肩を叩いてくる霞は純粹に再会を喜んでくれてるみたいだ

「……………北郷だと？」

「……………ふむ」

誘われて出てきたのは、夏侯惇と夏侯淵。手にはやっぱり弓矢が握られている

「霞よ。旧知の仲を懐かしむのは良いが、一度離れてもらおう」

「？ 何で？」

霞の疑問に答える前に、秋蘭は無言で弓を引き絞り、切っ先をこちらに向ける

「ちよっ秋蘭！？ なにしてるん！」

「北郷一刀。何用があつて我等の元に来た」

問いかける秋蘭だけでなく、春蘭も武器に手を掛けている。予想は

してたけどすごい警戒のされようだ。

視界には映ってないけど辺りに魏兵であろう相当数の殺気が潜んでいる

へたな発言をすれば即死亡。命の危険に晒されたままだが、恐れず慎重に対応していこう

「目的はただ一つ。君達を助けに来た」

誠意を示す為にまずは一言シンプルに答える

余計な言葉の装飾は相手次第で不信感を与えやすいからだ

「助け……だと？………呉に組する貴様が何を考えている」

秋蘭とはまだ初対面のはずだが所属まで知っているのは昨日稟達が話していた通り、俺の存在が有名だからだろう

当然の疑問に咄嗟に思いついた答えを返す

「誤解される前に言うておくが、呉に所属しているのは拾われた恩からだ。忠義を誓っているわけじゃない」

勿論これは嘘

みんなには感謝してるし、彼女達を守ると誓ったのは紛れも無い本心

話を円滑に進める為にしかたないとはいえ、実際口に出して喋るのは気分が悪いな

「だから国の関係で君達を陥れる気も、敵対するつもりも無い、俺は純粹に君達を救いたいからここに居る」

「……………なぜ助けようなどと思いつ。貴様が我らに義理立てる筋合いは無いはず」

「……………」

心の中でタイム

三度目の問いに、頭が真っ白になりどう説明したものかと答えを窮してしまふ

ぶつちやけ、一番大切な魏軍救出の理由を考えてこなかった

ただでさえ呉の所属という事で不信感を与えるのは分かっていたはずなのにこれは不味い

正面から再会しても大したリアクションが返ってこない以上、真正直に前回の記憶が。なんて納得してもらうのは不可能だな

うう……………こんな事なら風達に適切な対応を用意してもらうべきだったな

いまさらだけどさ

「……………」

秋蘭は黙り込んだままこちらの返事を待っている

心なしか更に矢が絞られてるのは緊張から来る錯覚だろう。そうに
違い無い

冷や汗が背中を伝い、なんとか場を繋げようと喋る前に後ろから複
数の声が聞こえる

「やれやれ、私がいないと駄目駄目なお兄さんですね」

「これ離すのじゃ、無礼者！わらわを誰だと思っておるのじゃ」

「うわわっ！こら、暴れるな。落としたら危ないじゃん」

そこには二人の人間を両手でリフトアップしながらこちらへ歩いて
くる団子頭の怪力娘

季衣かつ 久しぶりに見るが相変わらず桁外れの筋力だ

「おおでかしたぞ、季衣。気付かれず捕縛できたな」

「へへー。ボクだってやればできるんです」

春蘭に褒められて嬉しそうに頬を緩ませる姿は愛らしいが、こっち
は進退極まってきた

セキトに隠れていたはずの二人が捕まったのは俺の死角。後ろから
の接近が原因だろう

つまり俺達を中心にすでに包囲網が敷かれているはず

これではいざとなった時、風達を逃がすスキを見極め難い

最初の矢が射られた後の空白の時間はこのためだったのか

「待ってくれ！二人には危害を加えないでくれ」

「そのつもりはない。お前がこちらにとって有害でなければ。の話だが……さて先の返答を聞こうか？北郷殿」

理由が思いつく前に時間制限をちらつかせられる

季衣が二人を手にかける様子は想像できないが、いざとなれば周りの兵士が命を狙ってくるはず

風達の安全を確保するに余計下手な発言が出来なくなった

けど後ろの風はこの状況に気が付いていないはずなのに怯えた様子もなくいつも通りの口調で交渉し始めた

「お取り込み中悪いのですが、私のお話を聞いていただけませんか？」

「貴様は……」

「申し送れました。私は程？というしがない兵法家です。以後お見知りおきを」

「……聞かぬ名だな」

「現在売り出し中の身です。活躍はこれから期待してください

ね

「ちやっかり自己アピールする姿勢はある意味尊敬に値する

ちなみに風と稟は俺の進めで今日から元の程？、郭嘉の名をを名乗って貰っている

「その兵法家がなにをでしゃばるつもりだ。私は北郷に質問しているのだが？」

「つれない事言わないでくださいよー。一応お兄さんの助言役としてここに来ているので役目を果たしたいのです」

「担ぎ上げられた不安定な状態でも落ち着いた様子でバランスを取っている

「まずはあれこれ言葉を重ねる前に、曹操様に直接お話をさせてください」

「！いきなり世迷言を抜かすな！貴様らのような不信な輩がお目通り出来ると思っているのか！！」

瞬間沸騰する春蘭に怯む様子もなく風は続ける

「逃げられないよう周囲を囲み、人質まで取っているのです。ここまでしたら天下の魏武が目の前で主の危機を救えないはずなんですよねー」

「当然だ！華琳様に害する行動を取ればすぐさま首を刎ねてくれる！」

「おおつ、自信たっぷりですねー」

「それこそが我が使命だからな。抵抗するだけ無駄だ」

「ふむふむー、ならお話すぐらいなら無問題ですよ。そちらに危害を加えるつもりは有りませんし、もし万が一の事が起こっても防ぐ自信がありますもんねー」

「そうだな、よしこちらの気骨を見せる為にも会わせてやろう」

「わーい」

「……………姉者」

すげえ、こんな見え透いた挑発に乗るのもさすがだが、褒められたと勘違いしてまんざらでもない表情を浮かべてやがる

さすが春蘭。半端無い単純さだ

呆れた俺と秋蘭が絶句していると横の木々の隙間から二人の女性が現れた

「安い誘導に引っかかってるんじゃないわよ、バカ春蘭」

「自信を持つのはいい事だけど、もう少し思慮深さを学ぶべきね」

「……華琳様（孟ちゃん）！？」「」

そこには毒舌持ちの猫耳フード桂花と

威厳を纏った少女。曹孟徳こと華琳が立っている

「お下がりにください！ この者が我らに仇なすか否か、その判断がまだ出来ていません！」

「秋蘭、私は不審者程度で怯えるような狭窄な心の持ち主かしら」

「……………いいえ、…ですが……………」

「心配は無用よ。早くその矢を収めなさいな。季衣もその子達を降ろしてあげるように」

「……………はい」

しびしびといった様子で従いながらも警戒の色は色あせておらず

霞も空気を読んで俺から離れていく

この場にいる全員の注目が華琳に注がれる

「さてと、……………私に話があるのね。本郷一刀」

彼女はゆっくりと近づくと

周りは慌てて止めようとするが意に介した様子もなく正面まで歩み寄る

「お話でしたら風が代わりにお答えしますので、どうぞこちらへ」

テンパっている俺をフォローするために助け舟を出してくれる

しかし

「私は北郷から話を聞きたいの。あなたは少し静かにしていなさい」

「……………ふつむ」

言われて黙り込む風

視線から、しつかりやれよとメッセージが伝わってくる

ここが正念場か

覚悟を決めて向き合う

「北郷一刀。改めて聞くわ、この曹孟徳に何用かしら？」

「……………袁紹から君達を逃がす為に助力しに来た」

「助け？ 見たところ三人しかいないようだけど、よっぽどの策でも用意してあるのかしら」

「ああ…それは」

目配せすると風が袁術の被っていた布を剥ぎ取る

「!?!? うわっ……」

一番近い季衣が驚きの声を上げると周りの人間も同様の反応を示す

それほど袁術の変装は華琳にそっくりだった

「へー影武者を用意してきたって事ね……………なるほど。……………ん？
ちよつと待ちなさい」

「な、なんじゃ」

いきなり見つめられた袁術は怯えて目を逸らす。華琳の視線は変わらず彼女を打ち抜く

「あなた……………袁術ね」

「わ、悪いかっ！」

「「「!?!?!」」」

周りに更に動揺が走る

袁一族の人間がここにいれば当然の反応だ。まして彼女はすでに負けた身、命無いものと思われていてもしょうがないだろう

「驚いたわね、まさかこんなじゃじゃ馬を手懐けていたなんて」

「今回に限り協力してもらっているだけさ。…普段から面倒はみてるが」

「……………そう。……………さすがの人徳といったところかしら」

「？」

後半が聞き取れなかったな

「それで。袁術をおとりにして私達を逃がす算段でここに来たのね」

「あ、ああ。追って来る袁紹軍も危険だけど、この先の長坂橋に蜀軍が展開してるんだ。このままじゃ逃げ切れない」

「それは大変ね」

「人事じゃないだろ！　まずは迂回経路を相談して……」

「少し待ちなさいな」

「……なんだよ」

「一つ聞いておきたいのだけど」

身長差で見下ろす形になっても彼女の威圧感は変わらない。真剣な瞳に自然と体が硬くなる

「あなたはなぜ私達を助けようとするのかしら」

「それは……」

秋蘭と同じ質問

ようは逃がす事さえ出来れば良いから適当な嘘でもついて場を誤魔化せば良かったはずなのに、この時の俺は緊張のせいか思った事をそのまま口に出していた

「君達を見捨てられなくて……」

ポロリと零した本心

それに対して華琳は

「……………嘗めるな！ 北郷……！」

心の底からの怒号を持って返してくる

「貴様のそれは敗者に対する侮蔑に過ぎない。見捨てられない？
はっ！ とんだ上から目線ね」

「そ、そんなつもりは……」

「まったく無いと言うのかしら。袁紹に敗れ、おめおめと生き恥を
晒す私達に情けを感じたからここに来たのではなくて」

「違う！ 俺はただ心配で……」

「心配？ この乱世で生きる死ぬかなんて世の常。どう転ぶか誰に
も分からないわ。こちらの命運、貴様に関係ないはず」

「ぐっ……」

過去の因縁を話すわけもいかず言葉に詰まる

「はっきり言いましょう。北郷、貴様のそれはただの 憐み よ」

「……………」

「……憐み だって？」

助けようとした相手からの怒りさえ伴う拒絶

それがあまりにも重い枷となって身に絡みつき、思考が追いつかない
俺の行動は邪魔でしかないのか？

「私は曹孟徳。思惑がどうあれ、他者の手など借りるつもりなど毛頭無いわ。へたな同情で私の誇りを傷つけないでほしいものね」

「……………」

「蜀が待ち構えているのはすでに知っているわ、舞台を長坂橋に選ぶ事もね。それを踏まえた上での策も事前に用意してある」

「……………」

「貴様が提案するものより確実な策がね」

「……………」

男「……………もう、返す言葉もないのかしら。……………つまらない」

くるりと踵を返し一刀から離れていく

「……………華琳様」

「捨て置きなさい。どうせなにもできやしないわ」

「しかし、脱出の際問題になっては困ります。ここは口を封じておくべきではないかと」

「もう一度言っわ、捨て置きなさい」

「……………御意」

去っていく華琳に続いて春蘭達の姿が消えていく

霞は声をかけようとしたが秋蘭に止められて、無言のままこの場を後にした

残ったのは茫然自失の北郷一刀と風、袁術、セキトだけ

切望した再会は何も重ならないまま、終わりを告げた

「はい。いじけるのはそこまでにしましょーね。お兄さん」

静まり返った空間に響く風の声

沈んだ気持ちの一刀は特に反応を返さなかった

「聞こえてますかー。お留守ですかー」

挑発するような口調に苛立ちとはいえ、心に火が灯る

「少し静かにしてくれよ」

吐き捨てるようなセリフ

今は何も考えたくないんだ

「そうはいきませんよ。元氣の出る風の言葉を聴いてください」

「……………」

「まただんまりですか。では勝手にお話しますよ、いいですか？」

「……………」

「無言の肯定ですね。分かります。なら単刀直入にいりますが、…

…このままだと夏侯惇さん死んじやいますよー」

「……………っ!?!?」

「ん? なんで奴の名前が出るのじゃ」

そっだ、いくらなんでも話の脈落が無さ過ぎる

「曹操さん脱出の策があると言っていましたよねー。あれって夏侯惇さんの犠牲ありきなんです」

「……………どっいつことだ」

「……………ぐっぐっ」

「起きろ!」

「おおっ!?!?」

ふざけてる場合か!

「昨日よりつつこみが激しいですね、お兄さん。……………聞く耳は持つてくれましたか?」

「……………あっ」

「落ち込むのは分かりますが、ちゃんと現実を直視しましよーねー、私がついてますから大丈夫ですよ」

慰めるように低い身長を伸ばして俺の頭を撫でる

「風……」

「曹操さんは袁紹軍から逃げ切る事だけでなく、蜀と争わせるのが目的なのです。従ってお兄さんの提案だけでは聞き入れてもらえなかったのですよ」

「それはこの辺りで行方を眩ませれば済む話じゃないのか？」

「それだけでは駄目ですねー。蜀の防備は厚く、そこを抜け出したという事実は付加しにくいでしょーね。だからこそこれですが」

懐から一枚の紙を出し、くるくると巻いていく

それはまるで

「？ 書状？」

「大正解。巻き巻きしたのは関係ないのですが、さっきこっそりお団子頭からその内容を聞いておいたのです」

さすがいざという時は頼りになるな

風が説明するのはこうだ

まず魏軍はわざと袁紹軍に身を曝け出す。これはおとり部隊

華琳のいる本隊はそのスキに揚州を經由して北方へ戻る進路を取る

おとり部隊は袁紹軍を引っ張ったまま、本隊の脱出を待つて蜀軍と

接敵

その後華々しく散り、書状を奪われる手筈らしい

肝心の内容はというと

「……………えらく抽象的だな」

風の予想した書状の内容に率直な感想を述べる

要点だけ抽出すると

私こと曹操は貴方の手引きで蜀領に逃げる事にしました。お力添えありがとうございます。このご恩はいつかあの傲慢極まりない袁紹を討たれた後にたっぷりします。期待して待っててね。とても強くて有名な蜀の有名人さん ノシ

だ。(我ながらエキサイトな纏め方だが)

「相手が誰なのか示してないのはわざとか？」

「そうです。へたに指定してしまうと手引きするはずの武将が長坂橋に居ないなんて事態に対応できませんし、特定の人物ならすぐに潔癖を調べられますからねー」

蜀の武将は大陸に名を馳せる猛将ばかり

そこを逆手にとって、誤解を解く時間かせぐつもりか

「しかもここに袁紹を侮蔑する言葉をいっぱい書いておけばすぐに

でも戦ってくれそうですね」

「……………単純だからな」

そこは確定だ

「そして、この書状の信憑性を持たせる為に、曹操さんの片腕である夏侯惇さんをおとりに使う必要があるのですよ」

「？」

袁術はわかってないが、双方の戦力を削ぐ意味合いでは俺の策より随分と上策かもしれない

だけど

「絶対に犠牲がでるのか……………」

「でしょうね。おとり部隊は合計四万の軍勢を相手取らなきゃいけないわけですから」

「ぐっ……………」

春蘭のことだ。華琳の為と言われればにべも無く従うだろう

「いったいどうしたら」

なにをするかは判明したが拒絶された俺に出来ることなんて…………

「勝手に助ければ良いじゃないですか」

「……………は？」

「うにゅ？」

「断られましたでしたが、お兄さんの策とあちらの策はかち合わないですよ。むしろおとり曹操持ちがいる方がより信憑性が出てくるものです」

「いやいや、さっき四万の軍勢を抜けないといけないうって言ったばかりじゃないか」

いくらなんでも袁術を犠牲に巻き込んでしまいたくない

「大丈夫です。お兄さんなら可能な脱出方法がありますから」

「俺なら？」

「そうです。正確には違いますが、多分いけるはずですよー」

風は妙に自信たっぷりだ

「期待してますよー。十文字の北郷さん？」

「ふーむ。よくわからんが頑張るのじゃ」

少女二人に励まされ、なんとか奮い立つ

そうだ、まだ始まって無いなだ

気合を入れるために頬を叩く

長坂橋の戦いはここからだ！

「……………華琳様」

「しつこいわよ桂花。私の判断が間違っているとしても？」

「そ、そんなはずありません！」

「だったら口を嚙みなさい、少々耳障りだわ」

「……………すみません」

明らかに苛立った主君の後を続く魏軍

その原因は明白だったが誰もその真意に気がつく者はいなかった

(相変わらず甘い考えだったわね、あの男は)

一度とはいえ自分を認めさせた相手が、ああも簡単に言い負かされる姿を見るのは癪に障った

あんな情けない相手に私は会いたいと思っていたのか。更に気分が悪くなる

(だけれど……)

それは泡沫の出来事

春蘭や秋蘭はその夢を理解できなかったし、あまりに突拍子もない内容だ

この私があんなブ男に負けるなんて

そもそも夢の中のあいつは今で言う蜀の統治者として敵対したはずだがそれが呉に組みしてる時点で信じる余地はないはずなのに妙に気分が落ち着かない

行き場の無い怒りを胸に、華琳は歩を進めていくのだった

すれ違う、思いと信念重ならず

押して引くは互いの事情

時間は刻一刻と迫り来る

下す判断どれにて最良

答えはまだまだ先の方

胡蝶の夢は儂いままか

二十話 長坂橋の陽動 黒い兆しと雑じる過去（前書き）

袁紹と左慈の関係はオリジナル設定です

正直今回はやりすぎた

後半の技名が分かる人がいたら偉大（ヒントはきばつき。いっさい

他に呼び名など無い）

ようこそ、修羅の国へ

二十話 長坂橋の陽動 黒い兆しと雑じる過去

長坂橋への道を行軍する金色の旗

その数実に3万の兵を超える軍隊を率いる袁紹はいつも通りというか、高笑いしながらご機嫌の様子だ

「おーっほっほっほ、愉快！ 痛快ですわ！」

「……………1037回目」

「ここまで来るとすげえな姫は」

二人同時に溜息が出る

このセリフは曹操軍追走の時から繰り返し発言しており、文醜と顔良はいい加減うんざりしていた

「まあ、気持ちは分からないでも無いけどねー」

官渡の戦いにて大勝利を収めたのも束の間、続く追走劇においても勢いは留まるどころを知らず、あの奸雄と呼ばれる曹孟徳を圧倒しているのだ

機嫌が悪くなるはずがない

「ちよつと文醜さん、顔良さん。わたくし良い考えが浮かびましたの、お聞きになりたいかしら？」

「はあ…なんですか、いったい？（絶対ろくなもんじゃねえ）」

「今回の華麗な戦いを後世に語られるよう、書物に書き残したいと思えますの」

「書き残す……って麗羽さまが!？」

思わず跨った馬から転落しそうになった

「そのつもりですけど……なんですのその、可愛らしい猫を見つけて後を追ったら急に熊が出た時のような顔は」

「なにやってるんですか…」

「まったくだ。…つと、それよりも麗羽さま。いきなり書物なんてどんな気紛れを起こしたんですか？」

「文ちゃん!？ 失礼だよ！」

「大丈夫だって、ほら見てみるよ」

「……………ああ、捲るめく薔薇色の歴史がここに……………」

そこには文醜の粗野な口ぶりを気にした様子もない袁紹が遠い目をして物思いに耽っている

「ああ……………今日はもういつもの妄想時間に入っちゃったんだ」

「そゆこと。自分で振って置いて何なんだよって話だけどなー」

両腕を首の後ろに回し呆れたように空を見上げる

隣に併走する顔良も同じ感想なのか、肩を落として黙り込む

元々人の話を聞かない袁紹であったが、最近のある事件からはそれは特に酷くなっていた

きっかけは魏軍との緒戦、白馬の戦いの際仕官してきた男 左慈である

出仕こそ不明だが文武両道、容姿端麗。見た目と才能を併せ持ち、官渡の戦いに勝てたのは彼のおかげといっても過言ではない

だが、その性格は冷酷非道の一言に尽き、軍略においては一切の容赦が無い殲滅戦を推奨、提案。実戦においては身の纏う白装束が真っ赤に染まるまで殺戮を続ける狂犬だ

美しさや誇りを尊ぶ袁紹にとって相性の良い存在とはお世辞にもいないのだが、当の本人はまるで気にした様子はない

むしろ全幅の信頼を寄せているといっても良い位、彼の言葉を鵜呑みにしている

この状態も一国の城主としてかなり問題はあるが、もっと深刻なのは袁紹の左慈に対する態度だった

口数の少ない彼の言葉に一喜一憂し

どれだけ辛辣な言葉でも頬を赤らめ俯いたり

高飛車な態度は為りを潜め、従順に従って興味を引こうとする様は
普段の彼女からはまったく想像出来ない仕草が多く見受けられる

そう、袁紹は左慈に一目惚れといっても良い、あからさまな好意を
抱いていた

「……………左慈さん。なんて罪なお方なのかしら……………」

「……………呼んだか、袁紹」

「ひゃいつ!?!」

突然の返事に飛び上がる袁紹

振り向けば渦中の人物左慈がすぐ近くまで馬を寄せていた

「な、ななななんですよ! 左慈さん!! わたくしに御用かし
ら!?!」

急いで手櫛で髪を整え、精一杯の体裁を整えるが左慈はまるで気に
した様子もなく言葉を続ける

「そろそろ長坂橋に入る。打ち合わせ通り馬蹄形に部隊を展開させ
ておけ」

「そんな事でしたら……………文醜さん、顔良さん。直ちに部隊を動か
さない!」

何の疑いもなく指示を飛ばす

「ちょ、ちょっと待ってください麗羽さま」

「なんですの。早く実行しないと左慈さんが機嫌を損ねてしまうでしょう」

「だーかーらー。早くも何もここで軍をバラけさせる意味を先に説明してくれよ」

「文ちゃんの言う通りです。只でさえ規模が多すぎて行軍速度が遅いの、意味も無く隊列が伸びれば曹操に逃げられちゃいますよ」

今でさえやっとの状態で追走出来ているのに、左慈は西側も含めた囲い込みの陣形を推奨してきたのだ

どんな思惑があるかは知れないが、これ以上離されてしまうと行方を失ってしまう恐れがある

ここまで遠征を果たしてそんな結果で終わるのは割りに合わないと考えるのは当然の判断だった

だが

「だったら走れば良いでしょう。頭を使いなさいな」

「「ええー」」

「……なんですのその、熊に追いかけられてたら今度は奇怪な筋肉達磨とやたら叫ぶ医者に助けられた時のような顔は」

「だからなにがあったんすか麗羽さま」

呆れて物も言えないとはこの事が、二人してがっかり肩を落とす

「……貴様らがどんな漫才をしようが知った事ではないが、曹操は必ずここで陽動を行う為に動きが鈍る。さつさと動け」

「必ずって……確証でもあるんですか？」

「議論するつもりはない」

「なっ、なんだとー!!」

視線すら合わさず顔良の疑問を切って捨てる態度に文醜は思わず掴みかかろうとするが、すんでのところで思い留まり、腕を下ろす

刹那に感じた殺気の束

何時の間にか左慈の周りには白装束の軍団が控えていた

(またかよ……)

正体不明の私兵は事ある事に戦場や彼女達の前に現れ主人の命に従う。しかも用が済めば消失したかのように姿が見えなくなる不気味さを持つている

まさに怪異としか表現出来ない事態に再三、袁紹に彼の危険性を忠告したが聞き入れて貰えなかった

現に今の現象を目の当たりにしても、その瞳は左慈を捉えたまま動かない

恋は盲目とはこの事か

「ふんっ……………人形風情が粹がるなよ」

直接的な危害を被りそうになっても男は態度を変えず、注文を付け加える

「もう一つ指示を出す。曹操以下有力な將軍は全て首を刎ね持って来い。塩漬けにする」

「うえ……………生首にすんのかよ、良い趣味してるぜ」

想像して若干気持ち悪くなったのか、ペロリと舌を出す

その仕草が気に入らなかったのか袁紹からまたも叱責が飛ぶ

「ちよつと文醜さん。なんて口を聞きますの！ あなたは黙って小娘の塩漬けやら砂糖漬けを作ってきなさい！」

「姫。ちよつとおいしくしてどうするんですか……………」

やはり根本的な部分でズレている袁紹だった

左慈はそんなやりとりを無表情で見下す

冷たい思考の奥には袁紹を初めとしたあらゆる人間への侮蔑と嘲笑があった

本来ならばこんな猿どもに構う事などなかったはず

いくら今の自分には必要な代償だと自戒しても、止まぬ怨嗟が身を苛む

外史を構成する際、多大な想念を消費した我が身はさながら充電の効かない使い捨て電池のような状態だ

傀儡の召還、猿どもの記憶操作。道術の行使には制限がつき限界を超えればこの体は自壊するリスクを負っている現状

ゆえに少しでも力を温存したまま物語を進める為に自らが演者の一人として舞台上がる必要があった

術に長けるあの男がいれば多少は楽になったかも知れないが…

一瞬、かつての同士が頭を過ぎるが意識的に外へ追いやる

奴は俺を裏切ったのだ……

苛立つ気持ちを表面だけでも抑え、前を向くとそこには変わらずの会話を続ける袁紹達がいた

なんたる醜悪

所詮はこいつらは外史に発生した演者。自然現象の産物。定められた運命しか生きられぬ人形

いかな行動も全て定められているというのに自らの意思が有るのかのように振舞う喜劇は見ていて吐き気を催す

だがこいつ等はまだマシな方だ

真に劣悪なのは 北郷

北郷一刀、貴様だ

俺が壊そうとしていた外史を新生し、全てを掻き乱した元凶

奴のせいで消えるはずだった外史は想念で満ち溢れ、様々な世界に
飛び火した

突端とは異なる結末を含む夢想の外史

三国それぞれに身を寄せ大陸を統一する外史

北郷こそいないが、演者どもが女同士肌を合わせる外史

その度に俺のような観測者が作成され、決められたレールを何度も
走らされる

いい加減うんざりなんだよ!!

燃え盛る感情は握る拳に集中し、隙間から血が零れ落ちていく

だからこそ創った!

だからこそ待ったのだ！！

無数の想念を掻き集め、俺の意思で外史を！！！

磐石の舞台上で最悪の結果をもたらす為に！

まずは曹 孟徳 貴様だ

貴様の生首を平原にいる北郷に送りつけてやるう

そして無言の再会を果たすが良い

く、く、く、く、く、く、く、く、く……

次は死体そのものを

その次は目の前で息絶えるよう工夫してやるう

それが終われば今度は一日かけての殺戮ショーを公演だ

演じるのは勿論、貴様の思い人

全てを殺し切るまでは終わらせん。せいぜい今は東の間の平和に浸るがいいさ

そして最後は無力に嘆きながら息絶えろ

堪え切れない狂笑は地を這うように響き渡り、端麗な顔立ちにひび割れた笑みを映し出す

左慈はそのまま血に濡れた手のひらを中空に伸ばし、手首を捻った
まるでそこに、怨敵の首筋があるかのように……

曹操軍衝突まで、あと数刻

運命の再会は差し迫る

「ブルルッ」

「よじっ、どじっどじっ」

華琳の援護に三人を近場まで送り届けた後、俺と袁術はセキトに跨り馬超の指揮する部隊周辺に潜んでいた

時折聞こえる蹄の音や話し声にビクつき、いつ見つかるとも知れな

い緊張感が張り詰めていく

「うーまだか北郷お。もう十分じゃろ？そろそろ逃げてもいいのではないか」

そんなプレッシャーに耐え切れなくなったのか、袁術がか細い非難を洩らす

「気持ちは分かるがまだ駄目だぞ。相手に見つけてもらうのは馬超を発見してからだ」

俺は上半身を捻り、後ろに座った彼女の頭を撫でて気分を紛らわせてみる

最初こそ抵抗をみせるが幾らか続けていると次第に目に見えて上機嫌になるのが少し可笑的い

袁術はやつと落ち着いたのかそわそわとしていた視線を戻し、覚悟を決めたようにぎゅっと羽織を掴む

やっぱり小さい子に撫で撫では効果覲面だな

体はそのままに風の助言を思い出す

『いいですかーお兄さん。今回の作戦で一番重要なのは蜀軍の注目を集める事です。これがうまくいかないと、おとりだってバレル可能性が出てくるので要注意なのです。まずは南方に配備された馬超、馬岱さんにわざと発見されて部隊ごと夏侯惇さんの所まで吊り上げてください。あたかも逃走中に見つかってしまった感を出しながらですよー』

難しい注文だ

逃げ切るだけならセキトの健脚にものを言わせれば早い、陽動しながらでは逆に足が速すぎて意味が無い

だからといって距離感を間違えてしまえば包囲されて逃げ所を失う危険性が大きい

そうならば馬上での戦闘は避けられないだろう。あの猛将名高い錦馬超相手に……

……

……

だ、駄目だ

戦う前から気持ち負けしては話にならないじゃないか

ざわめき立つ心を抑えつけ、懐に手を伸ばす

指先にはつきりと感じる硬い感触は秘密兵器第二弾

そうだ。俺にはまだコレがある。だから落ち着け、まだ頑張れるはずだろ

コレさえあれば少なくとも怖気づく事は無くなるし、うまくいけば正体をばらさずに済む

そうならば独断行動による孫権達への風評被害も最低限は防げるはずだ

男は根性！ やるしかない！

良識という名の枷を千切り捨て、今ここに再び降臨しよう！

大振りにブツを引き出し、一息に 仮面 を装着する

「北郷……………」

場の不穏な変化を読んだのか袁術は裾を掴む力を強める

別に敵が来たわけじゃないんだがなかなか鋭いな

緊張しすぎるのも困りものだし、ここは安心させる為にもクールに対応しようじゃないか

コホンと咳払い

「別になんとも無いZ E」

「嘘じゃっ！！」

マツハで否定された

「むしろ貴様は誰じゃ！？」

存在すら否定された

分からない人間は本当に分からないみたいだな

「俺だよ、俺。北郷一刀。急に入れ替われるわけないだろ」

「なんと！ぬう、見事な変わり身じゃ……………しかしその姿どこかで見た記憶が……………」

首を傾げて思い出そうとする袁術

そういえばこの子だけ、真華蝶仮面の正体知らなかったっけ

いつもと色違いなだけなんだがなあ

いつもの ピンクの仮面 貂蝉の禪の色

今 ゴールドの仮面 まだだ、まだ終わらんよ！

というわけで正体を隠す為、セキトにもプリンカーっぽいのを付けて貰う

「ヒピン？」

OK、大丈夫。慣れればなんとも無い代物さ

色は黒。蝶のワンポイントがお洒落に映えてるZE

今この瞬間から俺の名は、百式・華蝶仮面

我が愛馬はトロンベと名乗ろうじゃないか

「さて、そろそろ頃合だな。準備は良いか？」

「ぬ？ こちらは良いがどうやって他の兵より早く馬超を誘い込むつもりじゃ？」

解決策は頭上にキューピーンと閃く光が導き出した

ターゲットは馬岱ちゃん。自分の中に妙な確信が走るのを感じる

華蝶よ、わたしを導いてくれ……

「ここは逆転の発想で相手を呼び出すぞ。……………せーの」

大きく息を吸って一気に吐き出す

「曹操様参りましょう！ 我らの道を阻む者など有りはしません！」

わざと大声を出し存在をアピールする。直後

「ここに居るぞーっ！」

ブオンー！！

「うおっ！危ない！？」

迷い無く頭部を狙った一突きをすんでで避ける

突然草場から現れた少女は馬上で舌打ちをしながら槍を構え直した

思ったより三倍以上早い登場じゃないか

「名乗りと同時に攻撃するのはずるくない？」

「えー、そんな事したら避けられちゃうじゃん」

曇り無い笑顔で言ってるのける

恐ろしい子だ……

「それよりお前！ 後ろに乗ってるのは曹操だな！」

サイドポニーの少女は槍を突き出し問いかけてくる

背後に人の気配はまだ無く、どうやら単身で突っ込んできたらしい

こちらの予想通り、引っ掛かってくれたようだなによりだ

早速演技を始めよう

「くっ、こんな所で発見されるとは…申し訳ありません曹操様」

「気にしないでいいわ。お主のせいではないのじ……わよ？」

いきなり躓くな！

「そうはいきません。この命に代えても貴方をお守り致します故、今しばらくご辛抱を！」

気取られる前に腰に差した剣を抜き放つ

「いざ参られよ。わたしは通りすがりの美食家……もとい。我は百式。百式・華蝶仮面。曹 孟徳の剣なり!!」

名乗りを上げ、挑発するように剣先で手招きする

その動作が癪に障ったのか少女は勢い良く対抗する

「我が名は馬岱!! お命頂戴つ!!」

先と同じ、頭部への突き

それを切っ先で軌道をずらし跳ね除ける

「くっ…っのお!!」

続けて人中、水月、秘中といった正中線を狙う連続突きを馬上から器用に繰り出す

急所を狙うのはセオリーだけど、こつも正直だと……なっ!

刀身に勢いを流して捌く

慣れぬ武器と馬上戦闘だがなんとかかなりそうだな

手持ちの剣は修理待ちの刀と違って両刃の直剣に『鏢』をつけた特別製

重量も似せてあるので振り遅れる事も無い

「どうした。君の実力はこんなものかい？」

「むきー！ むかつくー！！」

実戦が足りないのか、元の性格なのか感情に任せた攻撃はどんどん単調になっていく

「ほらほらしっかり狙う！」

セキトも援護とばかりに相手の馬の正面へ移動し続け、槍の攻撃範囲を狭めてくれる

他の兵が集まる前に仕掛けるか…

「しっ！」

何合か打ち合った後、気迫の薄い一撃を敢えて打ち上げてみる

「うわわっ！？」

勢いが変わった槍に翻弄され体勢を崩す馬岱ちゃん

やっぱり見た目通り威力が軽い

これならいけるな

恋の豪撃、霞の神速、思春の奇襲で鍛えられた俺ならうまく立ち回れるはず

更に挑発を重ねてスキを作る

「こんな時になんだけど馬岱ちゃん。豆知識を教えてあげよう」

「はっ？」

「実はスーパードで売っているしめじとなめこは同じ茸なんだ」

「知るかー！ー！ーっ！！」

意味は通じなくとも舐めた態度に反応しておざなりな突きを放つてくる

これが若さか…

一撃に合わせて槍の穂先に剣を這わす

「えっ？」

馬岱ちゃんの得物は片鎌槍。先端に鎌が付いた特殊な構造をしている

本来なら槍の弱点である引き戻し時にも攻撃を可能とした代物だが、今はそれが好都合だ

そのまま刀身に滑らせ、鎌の根元を鏝へ移動

「ふっ！」

すかさず手首を返し反転。切っ先を絡め取る

「うわわっ！？ な、なに！？」

大きくバランスを崩したスキに空いた左手で槍の柄を掴む

そして一気に引っこ抜く！

「きゃああああ！」

勢いのあまり主の手を離れ、吹っ飛ぶ片鎌槍

戦闘に勝つのが目的じゃない以上、危険な武器には御退場願おう

名付けて『巻葛』

「おおー」

格好つけて剣で空を切ると背中から憧れの視線を感じる

ふふん。俺だってやれば出来るのさ！

「きゃうっ！」

「調子乗ってごめんなさい!？」

気分いいところに突然の衝撃が襲う

何？ なにが起こったの？

慌てて馬岱ちゃんの方を向くと……

……いない？

そこには馬が一頭佇んでいるだけだった

ていつか正面に感じるこの感触は…

「……………」

「……………」

目と目が合う

どうやら全力で引いた際、この子も飛んできたらしい

すっぽり股の間に収まっている

……………なんとというミラクル

親方！ 空から女の子が！と反応するべきだろうか？

とりあえず退いて貰おうと首根っこを掴んで持ち上げようとするが

ぐぐっ

「ちよっ!?!」

思い切りしがみつかれる

まさかこのまま絞め殺すつもりじゃ！

嫌な予感に力を入れようとしたところで彼女は突拍子の無い行動に

出る

「……………くんくん」

嗅がれた！？

「どっしたの！ お兄さんびっくりしすぎてリアクションに困るよ
」！

こちらの文句を気にせず、より密着してくる

「……………ぬー」

「……………袁術さん？」

むぎゅっと背中から回される小さい腕

なぜか後ろの袁術もくっついて来た

なにこのギリギリセーフとギリギリアウトに挟まれた気分は（性的
な意味で）

いよいよもって反応に困る

接敵を果たした今、一刻も早く蜀軍の注意を引いて春蘭の元へ行か
なくてはいけないのに

「……………イカ臭い」

「ぐはぁぁっ！……」

必中＋熱血＋直撃＋気合のクリティカルダメージ！！

言葉の暴力って怖い！

「勘弁してくれ……」

肩を落とす俺。精神攻撃が目的なら物凄い威力だよ

「……………この匂いどっかで……………」

いまだくんかくんかする馬岱ちゃんの対応に困っていると、背中に恐ろしい覇気を感じて身の毛が総立つ

どンドン近づいてくる蹄の音

振り向けば枝の合間から長いポニーテールが良く似合う美少女が迫ってくる

「馬超！？」

進路を塞ぐ木々を槍で切り落としながら突っ込む様は勇ましく、五虎大將軍に名を連ねるだけはある

だが彼女の武を目の当たりにしても危険信号は鳴り止まない

なぜだ！

なぜ俺はこんなにも恐怖を感じている！？

この合法ロリに囲まれた状況で緑の服を着た女性に会うのは非常に
まずい

蜀

五虎大將軍

戻らぬ記憶のどこかに煌く白刃

彼女はゆっくり歩を進める

ガクガク、ブルブル

ち、違うんだ愛紗っ！！ 誤解しないでくれ！頼む！！ 君の事を
忘れてたわけじゃないんだ！！！ だから武器を収め……

「ユニバアアアアス！！！！」

「きゃあ！」

「にゅわ！」

開けてはいけない地獄の釜が一瞬見えてしまった……

頭を振り払い意識を集中する

愛紗って娘が誰かは分からないけど、今考える状況じゃない

だから落ち着け本郷一刀

俺はやれば出来る子のはずだ

「いったいどうしたのじゃお主は……って急がんか！ あやつも
うそこまで来ておるぞ！！」

「……………マジだ！！？」

近い、どころじゃないすぐ目の前に迫る馬超

「てめえ、たんぼぼを離しやがれ！！」

この子からくつついてきてるんです！

遊びすぎた！ こつなったら……

「ごめんっ！！」

剣を鞘に戻して馬岱ちゃんを腋の下から掬い上げて引き剥がす

「もう一回我慢してね？」

「え…嫌な予感がするんだけど……たんぼぼの気のせいだよね？」

小さく笑いかけ……

そのまま馬超に向かってアンダースロー……

「そおいつ！！」

「うぎやあああああ

「たんぽぽ!？」

すかさず馬を急停止させて受け止める馬超。さすがだな

「行くぞ袁……曹操様! 一度北へ逃げましょう!」

「う、うむそちにまかせるのじゃ」

まったく演技出来てないが、あえて突っ込まず逃げの一手を選択する

さすがに馬超相手じゃ分が悪い

「あつ、こいつ待ちやがれ!」

「聞けぬ相談だ。行くぞトロンベ。今が(後ろ向きに)駆け抜ける時!」

「ぶるるる!」

まさに脱兎の如く北を目指す

さあ、早く部隊ごとこつちに来い!

祈りもそこそこに木々を抜けて走り去る

「くつそ、なんて速さだ……でも追いかけられない速度じゃない……
…おい! 部隊に連絡。馬超隊、馬岱隊は曹操追撃の為に北上するぞ!」

大声で張り上げるところからか返事が聞こえ、すぐに蹄の音があち

ここに巻き起こり走り去っていく

「おい、たんぽぽ。どっかやられてないか？」

先の怒りの形相はどこへやら、心配する馬超の目は不安でいっぱいだった

「……………」

「たんぽぽ？ おいつ返事しろ！」

腕に収まった従姉妹の反応がない

まさか傷が深いんじゃない？

思わず肩を揺さぶる馬超に馬岱はよつやく言葉を返す

「ケガは……………してないよ、お姉さま」

「……………良かった」

抱き締めて無事を喜ぶ

だが当の本人は思案顔で眉を顰める

「やっぱり気になる……………」

「？」

「……………よしっ おいでー！」

自分の乗馬を呼び出し、その上に飛び乗る

「お、おいどうしたんだよ」

「ごめんお姉様、たんぽぽ確かめたい事があるの」

腰を下ろすと馬の腹を蹴り、曹操の逃げた方角へ駆け出していく

「待ちやがれ！せめて説明くらいしろよ！」

馬超もそれに続くように愛馬紫燕を走らせる

よし……………第一段階終了だな

次は春蘭の救出だ

蠢く殺意は際限無く

留まり続けて幾星霜

未来の花弁は今開かん

咲いて誇るは

祝福の花か

埋葬の花か

二十一話 長坂橋の絶望

盛者必衰の幕が下りる（前書き）

今回のお話はドシリアス回

笑うところ無いのでご注意を

その分反動で次話がえらいカオス化してますが…

謎の詩は十七話のものどわざと重複させています

所謂伏線回収

分かった人は多分いない

ここから段々時いた種の回収が多くなってきましたよ

二十一話 長坂橋の絶望 盛者必衰の幕が下りる

「おおおおおおお!!」

「うーっ。にゃー!!」

春蘭の放つ大剣「七星餓狼」の一撃は火山の爆発のような苛烈さをもつて

張飛の穿つ蛇矛の一突きは稲妻のような閃きをもって

互いの武器が火花を散らしながらぶつかり続ける

その光景はまるで鉄火場のように激しく、蜀の兵士達はあまりの迫力に近づけない

「ぜええああああ!!」

離れた場所からも聞こえる大音量の剣戟

体ごと投げ出す至近距離からの横薙ぎが張飛を襲う

まだまだ……まだ果てんぞ!

おとりの身で残るはもはや私のみ

予定より圧倒的に早く蜀軍に発見された我らはすでに私を除く全ての兵が取り押さえられてしまった

まさに万事休す。だがあきらめる事は許されない

華琳様からの最後のご命令

懐に忍ばした書状を袁紹軍に発見されるまではこの命、くれてやるわけにはいかんだ！

一撃、一撃が必殺の威力を發揮し合っているにも関わらず春蘭は一歩も怯えない

「にやっと！ うう…片目のお姉ちゃん、今日はすごく気合入っているのだ」

すかさずしゃがみ込んで避けた張飛が距離を取りながら感想を述べた

「さつきからわけの分からん事を…この五体、一部の損傷もないわ！ 傷を負わしたければもっと踏み込んで来いっ！！」

体勢を整えさせる前に大地を蹴って肉迫する

リーチ差を埋める為、剣の有効範囲で戦うのは勿論だが春蘭が接近戦に拘るには別の理由があった

戦いの場である長坂橋の空けた空間は射線を遮るものは無い

それはこの敵軍に囲まれた状況で張飛と離れてしまえば矢による狙撃を受けてしまう事を意味する

目まぐるしく立ち位置を変え、狙いをつけさせない戦いは体力の消耗こそ多いが一方的な展開にはさせない苦肉の策

絡み合うようなぶつかり合いは稀代の弓手である黄忠の腕でもなければ援護する事は出来ないだろう

逆に言えば黄忠が援護に来てしまえば手詰まりになってしまつのも事実

だからこそ春蘭は張飛との決着を急いでいた

「はあああああー!!」

渾身の力で蛇矛を打ちつける

「くううっ!!」

地面にめり込んでしまつのではないかと錯覚するほどの衝撃

張飛はそれに耐え、劍の当たった部分を支点に石突を振り回し頭部を狙う

「甘いわ!!」

大劍を滑らせ、地に伏せる形で蛇矛の軌道から外れる

そしてしゃがんだ勢いを活かしての高速突きを放つ

「そつちだつて!!」

常人なら反応できない距離と速度を持つ突きを、蛇矛を更に回転させ劍を横殴りにして弾き飛ばす張飛

なんたる反応速度だ、こいつは獣か!?

逸らされた勢いそのまま横に付けるが思った以上に手強い

まるでこちらの動きを知っているかのような立ち回りだ

「だが、退くわけにはいかん!!」

「もー。鈴々達はお姉ちゃんや曹操を傷つけるつもりはないって言うてるのに、いい加減落ち着いて話を聞いてくれなのだ!」

「貴様が言っても説得力が無いわ!」

振るう大剣を持って返事とした

「ぐにゃっ!?!」

「情けをかけられるのは至上の侮辱。我らは我らの誇りで華琳様を示す覇道を付き従うのみよ!」

激しさを増す剣の嵐

絶え間無い連撃は過去の記憶から春蘭の動きを見切ったはずの張飛を押さえ込む程、重さと速度を増している

「わ、わわわっ!」

「そして! ここで貴様に負けるのはなぜか納得いかんだ!」

「うわっ！！？」

対応し切れず防御の薄くなった瞬間を狙い武器を打ち上げる

思わず蛇矛を握り締め、衝撃に耐えるがそれが徹底的な隙となった

豪撃は僅かに体を浮かし、張飛はかわす事も受ける為に踏ん張る事もできない

「もらった！！」

ようやく掴んだ勝機

恨みは無いが全ては華琳様の為だ、悪いがこのまま死んでもらうぞ

不可避の張飛に狙う横一閃

勢いも十分。この距離なら外す事も無い

斬って捨てたらずぐさま死体を盾に、北に向かって包囲を突破しよう

すでに疲労が濃いこの身にはきついがどうせ死に行くのだ。無茶も道理も気合で吹き飛ばしてくれ

勝利を確信し、これこそが怨敵の狙いだとは気付かず次の行動に移ろうとする春欄

手を取り合うはずの二人を断絶する時がすぐそこまで迫る

しかし

「そうは問屋が卸さぬよ。夏侯惇殿？」

必殺の一撃は横から打ち下ろして阻まれた

数瞬の後、着地した張飛は間を入れず飛び退き大きく距離を空ける

「星！？ どうしてここにいるのだ」

「なにこちらに事情が変わってな。苦戦するであろう鈴々を援護しに来たのだがな」

星と呼ばれた少女。趙雲は自身の得物、直刀槍「龍牙」を構える

「いやはや予想以上の活躍ではないか魏武の大剣夏侯惇殿。燕人張飛をここまで追い詰めるとはまっこと恐れ入った。名に恥じぬ勇猛さですな」

感心したかのように頷く趙雲は素直に感想を述べた

「べ、別に鈴々負けそうになってないのだ！ ちょこつと油断しただけでこれから反撃するところだったのだ!!」

慌てて再度、武器を構え直す

「負けるとまで言ってないのだが……そうかそこまで苦しかったか」

「にゃっ!? いじわる言うんなのだ!」

「はっはっは。まあ許せ鈴々……………手こずるのはよく分かるぞ」

正面の相手を伺う

五虎將軍二人を前にしてもまったく気にした様子は見えない

むしろ気力が充実しているのではないか?

肩で息をしているにも関わらず、瞳に闘志が漲っている

春蘭は覚悟を決めた

……………あの方は出来る限り生き残る方法を探せと仰ってくださいましたが

燕人張飛と昇り龍相手ではどうにもそれは無理そうです

ですが任務は必ずや完遂してみせましょう

この全身全霊を持って!

「うおおおお!」

地が響くほどの踏み込みで趙雲の首を狙う水平斬り

それを後ろに半歩下がり避けるが

見切ったはずの一撃に髪の毛の数本が犠牲になる

「……本当に予想以上だな。手負いの獣は凶暴という良い実例だな」
はらりと宙を舞う毛髪

「……鈴々。全力で同時にかかるぞ。いいな」

「うー……本当は一人でやれるのに」

しびしびと蛇矛で牽制しながら春蘭の後ろに回ろうとする

「くっ……」

先のような至近距離に持ち込もうにも視界が狭まっては反応が遅れてしまう

もう一度、必殺狙いで仕掛けるか？

そう思い始めたところで、趙雲の一言が張飛を含めた二人に静止をかけた

「本来なら我が蜀にて便宜を図る算段だったのだが、すまんな夏侯惇殿。これも乱世の定めとして諦められよ」

「え………どういう事なのだ星！？ だったってなんで過去形なのだ！まさか片目のお姉ちゃんの命を取るつもりなのか！？」

「………二人とも、よく周りを見てみる」

「なんだと？」

油断なく言われたとおり見回してみる

周囲には変わらず大量の兵が円を描くように並び立つ

そこには命を賭して付いて来てくれた魏の兵達が捕らわれ……

「なっ!?!? 貴様らああ!?!?!」

血溜まりに沈む姿があった

「ど、どうなってるのだ!?!?」

困惑する張飛と怒れる春蘭に趙雲は冷静に答えた

「もっと良く見る二人とも。臥せた者の近くにいる人間の鎧を」

咎められて視線を上に向けると血に塗れた剣、鎧が視界に入り、そしてさらに上、赤に染まらなかった鎧の色が露になる

金色の装い………先の戦いの勝者。袁紹軍の兵士が居並んでいた

突然の凶行なのか、元にいた蜀軍の兵士は硬直して隙を見せている春蘭へ矢を絞る者がいないほど整然とし切った光景が広がる

「こいつらがやったのか!?!?」

「そうだ、こちらの有無を言わさぬ内にな………しかもそれだけでは無いぞ」

今度は橋の対岸へ目配せする

そこには黄忠率いる緑の旗だけではなく、このこと同じ金の旗が揺らめいていた

「我ら共々囲まれてしまつたいる……………袁紹め、始めから戦争を起こすつもりだったという事だ」

唇を噛み、忌々しげに言葉を漏らす趙雲

今や蜀軍は逆に兵力で勝る袁紹軍に包囲される形になっていた

もし彼らが攻撃を仕掛けてくれば大損害は免れないだろう

張飛達は一転、狩られる側の人間に回っていたのだ

民の信用や求心力を失わせない為に袁紹はこちらと戦つ理由を探している

民がいなければ食べる事もできず、兵の補充も出来ない

民衆のモチベーションの向上は国力の増加と密接な関係がある

故に曹操は蜀領へ逃げ込み、互いを戦争させ再起を図る時間を稼ぎ、袁紹は追撃という格好の理由を得るはずだ

稀代の軍師 諸葛亮の言はこの乱世において当然の答えといえる模範的なものに違い無かった

予想は正しく、本来ならばここで内密に曹操軍を匿い、過去の記憶を打ち明けた後共に手を取るはずだった

だが、袁紹軍。否、あの男の狂気は民草の心など最初から思考に入っていない

所詮は用意しただけの舞台、脇役がどれだけ文句を垂れようが関係などない

「さつさと始末しろ。趙雲」

「なっ……貴様は!!」

声に釣られて振り返ると何時の間に現れたのか銀髪青年が近づいて来ている

曹操の策を悉く見破り、数々の屈辱を味わせられた元凶。左慈が見下した口調で喋る

「躊躇するな。情けを掛けるな。命令に逆らうな。貴様は黙ってその女を殺すんだ」

「お前っ！いきなり出てきて何を言い出すのだ!!」

春蘭から注意を逸らし、左慈と向かい合う張飛

殺気に晒されているはずの左慈は気にも留めずに先を促す

「早くしろ。黄忠の身の安全、これ以上は保障してやらんぞ」

「……………分かれている」

「まさか……………紫苑が捕まっているのか!？」

「……………如何にも」

「こいつっ!?!」

張飛の怒りはもつとも。北側で捕縛された黄忠を代価に左慈は春蘭の命を要求してきたのだ

聞き届けられなければすぐさま殺すと脅されて

「……………相変わらずの外道だな、左慈」

春蘭は吐き捨てるような口調で相手を睨む

「……………」

答えずそのまま見つめ返す

「だが、私にとっては好都合だ」

趙雲の言葉を信じるならこの書状はもう必要ない

任務は果たされたと考えていいだろう

だから、華琳様

生き延びる旨はお忘れください

この夏侯 元讓。命を賭して仇を討ちたいと存じます

「左慈！ 覚悟っ！」

弾丸のような速度で飛び出す春蘭に趙雲は一瞬躊躇う

(もしここで左慈が倒れば紫苑殿は……)

死ねば向こうの兵に気付かれる前に救出しなくてはならない

うまくいけば丸く収まるのでは？

そんな幻想を少なからず思う

戸惑いは致命的で、すでに大剣は振るわれ真っ直ぐ唐竹割りの軌道を描いている

何人もこれをかわす術はもたないだろう

この場にいる全員が確信するほどの見事な軌跡

だが

「縛」

左慈は瞬きすらせずに、むしろ手すら触れずに動きを止めてみせた

「がつつ！？」

ピタリと、急制動が掛かり剣は左慈の眉間数ミリ手前で停止する
なにが起こった!?

あまりに無理のある制御に、春蘭の腕の筋肉が耐え切れず断絶し激痛が走るが構わず相手の目を睨む

無表情。否、徐々に裂けたような笑みが浮かぶ

「……………放て」

「うっ?! がああ!!?」

「夏侯惇殿!」

「片目のお姉ちゃん!」

次なる悲劇は彼女の光を奪った

矢はどこから放たれたものか、眼球に突き刺さり止め処なく血液は流れていく

あまりの激痛に思わず膝を着きそうになるが、気合でねじ伏せる

まだ、まだわたしはっ!

「……………醜態だな」

「がああああああ!!!!!!!!」

躊躇無く刺さる矢を引き抜く左慈

引き出された眼球にはさつきまで繋がっていたはずの神経や血管がどろりと糸を引いている

「うっ……………」

見る者ほとんどが生理的嫌悪感に口を押える中、矢を持つ男は嬉しそうに笑っていた

「なるほどな……………ククッ。狙いはつけさせていなかったがやはりこんな結果に繋がるか。事象の収束。偶にはおもしろいじゃないか？ク、ククククッ」

笑いもそのまま矢を放り、春蘭を蹴り飛ばす

「ぐふっ！」

「操」

またも体の自由を奪われ、今度は地面に膝を着き、首を投げ出す形を取らされる

日本でいう介錯の姿勢。口の自由も奪われたのか掠れた声しか出ていないようだ

「さて、趙雲。お膳立てをここまでしてやったのだ。早々に片を着ける」

「……………」

無言で槍を構え、春蘭の側に立つ

「星!！」

勝てぬ……

この場に置いては左慈とやらは全てを掌握している

空気。立ち位置。生殺与奪を含めて

逆らえば迷い無く紫苑を殺すだろう。それこそ蟻を踏み潰すような
気軽さで

「……………貴方自身は手を出さないのですかな」

精一杯の抵抗

よもや怖気づいているわけではないだろうが、どうにも気になった

夏侯惇を殺す時は首を綺麗に残せ

殺すのは私達五虎將軍の一員のみ

接敵して間もなく、この妙な条件を付加され疑問を抱いていたからだ

なにが壺に入ったのか、無表情に近かった左慈は先の笑いから更に
大きく歪んだ笑みを見せる

「クク、貴様らだから意味があるのだ。どうせなら悲劇はいろんな人間を巻き込んだほうがよりドラマチックになるじゃないか」

(!?!?こやつ…天界の言葉を……)

以前聞いた覚えのある単語に過去の記憶が再生される

確か感動的とかそういう意味合いだったはず

妖術といいこの男、もしか主に関わり合いのある人間では……

疑問を口に出そうとして息を呑んだ

左慈の視線はこちらに、手は張飛を向いている

「な、ななな何なのだ!」

「早くしろ。最後通告だ」

狂笑と冷酷 切り替えたかのように表情が入れ替わっていく

従わなければ無理にでも実行させる

暗にそう言っているようなものだ

「……承知」

「星っ!」

許せ鈴々。おぬしはこんな所業は見合わぬ

意味も無く、強要される殺人の咎を負うのは私だけで十分だ
構えた槍を大きく振りかぶる趙雲

「……………すまぬ」

「がっ……………ハぁ……………グ……」

首を動かせず声も出ないというのにまるでこのまま飛び掛ってくる
のではないかと錯覚するほどの殺気が放たれる

しかし心を決めた趙雲はそれ全てを受け止め、指先に力を込めていく

恨むならこの男と私だけにしてくれ

ゆっくりと息を吐く

狙うは首筋。握る掌に汗が滲み出し、数瞬の躊躇いの後

「ハッ！」

避けられなかった悲劇の刃が、垂直に落ちた

ゴトリと不快な音を残して

「北郷？ 一体どうしたのじゃ」

馬超と馬岱の部隊をうまく誘導し、順調に雑木林を駆け抜けているとふいに違和感を感じた袁術は前に座る一刀に声をかけた

トロンベ（セキト）は乗馬に不慣れな袁術の負担を最小限にする為と、迫る追撃を出来る限り引き付けるために普段より大分スピードを落としている

なので聞こえないはずは無いのだが、一刀はまるで反応を示さず正面を見つめたままだ

「返事をせぬか！ こらっ！」

無視されたのが気に障った袁術は器用に背中によじ登り、顔を伺った

「……………北郷？」

肩越し見えるのはどこか青ざめた表情をした一刀

あまりの真剣さに袁術は言葉を失い、無言のまま元の位置に戻っていく

(突然何が起こったのだ?)

その疑問は一刀自身にも分からなかった

ただ胸の中に去来する正体不明の焦燥感が先を急がせ、思考が痺れた様に緩慢になる

いくつもの木々を抜け、丁度風が予想した春蘭が留まるであろう場所の半ば、張飛が陣取った橋に差し掛かった辺りで目の覚めるような甲高い激音が響いた

「これは……………剣戟?」

矢継ぎ早に鳴る音は規模こそ規格外だが訓練などで聞き慣れた金属音によく似ている

まさか戦闘が起こっているのか?

だとするなら一人は確実に春蘭だろう。…………嫌な予感がする

音源に近づくにつれ、手綱を持つ手が震え、どんどん気分も悪くなってきた

悪寒さえ伴うこの感覚、以前何処かで…そうあれはまだ聖フランチ

エスカにいた時

夕暮れの道場で一人素振りをしていたところに押し寄せた、突端にしておぞましいまでの殺気と同質のもの

つまりこの先にいるのは

「……………ぐっ」

まだ姿は確認できない

やがて剣戟の音が止み、辺りに配置された蜀軍の数が多くなってきた

まずい、まずい、まずい！

予感が現実へスライドしていく

「セキト！」

演技も陽動作戦も何もかも捨てて大声で叫ぶ

「全速力だ！ 俺達に構わず全開で敵陣に突っ込んでくれ！！」

「北郷！？」

「袁術、君は馬具の方をしっかりと掴んでおくんた。いいか、絶対力を緩めるなよ」

「ま、待たんか！ 理由くらい話してもよかるっ」

「後にしてくれ。セキト行けるな？」

俺の焦燥感さえ感じ取ったのか、応えるように嘶くセキト

制限した走りから本来の走りへ急加速

踏みしめる地面は一步進む度に抉れ飛び

流れる景色はあまりの速さに尾を引き、視認すら出来ない

上半身が後ろに引つ張られる感覚はまるでジェットコースターのようだ

それは後ろから追いかける馬超達ですら諦めてしまつほどの速度を出している

まさに赤い竜巻、馬中の赤兎馬 歴史に名を残すに相応しい走りだ

群れ成す蜀軍を吹き飛ばし、徐々に悪寒のする場所へと接近していく

やがて一際層の厚い人垣が遠目越しに見えてきた

あそこが現場か！

突入しようにも人が多すぎるな…だったら

「袁術！思いっきりしがみついでろよ」

「ええい。どうとでもなればいいのじゃ！」

反ばヤケクソ気味に答える袁術の返事を聞いて自分の覚悟を決める

「セキト 頼むぞ!!！」

足で腹を蹴り合図をする

再び嘶くセキト。更に加速していく蹄の音は先の剣戟にも負けない程の炸裂音を叩き出し、人垣に突っ込んでいく

そのおかげで静寂に支配されたはずの蜀の兵士達は自分に迫る脅威によつやく気付き、おもわず道を開ける

当然全ての人間が避けられるわけではなかった。進むほど前方の霧囲気に吞まれ身動き出来ない人が増えていたからだ

だが、一刀は止らない。また戸惑う様子も見せない

やがて腰を抜かした兵士が恐怖のあまり動けず進路を防ぐ手前で、もう一度腹を蹴り檄を飛ばす

「 飛ぶぞっ!!！」

「ぬわあああ!?!」

以心伝心したセキトはその巨軀をもともせず飛び上がった

横に流れていた景色が斜めに走り、胃が持ち上がる程の浮遊感に包まれる

蜀の兵士はあまりに非現実的な光景に目を奪われるだけ

人の身長を軽く超える2メートル強の大跳躍はぐんぐんと距離を伸ばし人の群れを上から横断していく

途中、木の枝が頬を打ち血が滲むが気に止めずに前だけをはつきり見据える

ジャンプの頂点を越えた辺りでようやく木々を抜け、一気に視界が開けた

橋の手前に広がる開けた空間

そこを囲む軍勢と中央にいる数人の男女が見える

この場に似つかわない小さな少女が身を縮こまらせ、白い男が眺めるように立っている

横にはしゃがみ込んだ女性のすぐ脇で槍を天高く構えたまま静止する青い髪の女性

確認できたのはここまで

だけど心が叫んだ

舌を噛むのも構わず大声を上げる

正体不明の焦燥感の原因はこれだったのだ

頭で思考するより早く、反射で叫んだ

「止めるおおお!!! 星イイイイイイイ!!!」

それは絶叫

絶望をはらんだ雄叫び

目の前の男が望んだ悲劇への開幕ブザー

2秒にも満たない短い跳躍は決定的で、セキトが着地したその時

「止めるおおお!!! 星イイイイイイイ!!!」

この声が耳に入ったその瞬間

私の両腕はびくりと動きを止めた

誰からの声だと判断する前にだ

左慈の妖術によって操られた夏侯惇殿のように己の意思とは無関係に力が一気に逆方向に動こうとする

強制ではない胸の奥で何か在必死で訴えかけているからこそその奇跡故に理解より圧倒的に早く、体だけが脊髄反射を起こす

びきびきと筋肉と神経が裂かれる異音と苦痛を無視して全てを振り絞る

この者は斬るべきではないと

全身全霊をかけて抗ってみせた

だが、もう 遅い

振り落とす槍の勢いは止らない

せめて苦しませよう全力で力を込めた一撃は加速し続け、後はそのまま慣性によって落下する

それが道理

打ち下ろしの基本である最初の加速はとうに終わっているからだ

後悔と驚愕は槍が首に触れるまでの時間を引き延ばし、槍の軌跡がはつきりと視認できる

目に映るのは我が愛槍と首を投げ出す夏侯惇

ゆっくりと刃は首筋に近づき、肌に食い込む

次の瞬間、いや私にとってはごく短い時間とはいえ理解できてしまった

切り離された肉塊が

ゴトリと不快な音を残して

目の前に転がる様を

舞台は混迷、色はとりどり。

緑と紫、金に赤

紫犠牲の 曹操軍

緑は凶られ 劉備軍

金は傀儡 袁紹軍

赤は一体 何意味するものぞ

赤は赤でも それは深紅

人体に流れる赤い血潮

不快な音の前に鳴り響くは金属音

趙雲の槍は吹き飛ばされ、遙か後方へと投げ出される

あまりの唐突さに、次に聞こえたゴトリという音は殊更よく耳に入
った

血溜まりに沈んでいく人の腕

続く音は流水、否、血飛沫の水音

この場にいる全員が呆気に取られ、呆然と視界に入るのは真っ赤に
染まる白装束と地面に落ちた 男の片腕

だが男だけは自分のものである腕を見ていない

不可避の斬首が回避された原因を忌々しく見つめるのみ

赤は赤でも それは深紅

大陸全土に名を轟かせる武人の御旗

この場を支配していた左慈の思惑の外から放たれた流星は地面に突
き刺さり、存在を主張した

惨劇回避の正体は彼女の代名詞とも言える武器であり、運命すら切
り裂いてみせた天下無双の大業物

其の名

方天画戟。

二十二話 長坂橋の顛末 再び因縁が迫り来る 前編（前書き）

空前絶後に関係無いけど、

這いよれ！ニヤル子さんのハス太君が可愛い過ぎて生きるのがつらい

白熊の着ぐるみ着せて後ろからモフリまわしたい作者はきつと正常

二十二話 長坂橋の顛末 再び因縁が迫り来る 前編

それは如何なる御業でしょうか

老黄忠と呼ばれた私の目に映ったのは自分の弓手としての自信を打ち砕く程、繊細であり豪快な神域の一投でした

まずはそこに至る前の話を致しましょう

みんなの援護の為蜀領側に陣取った私は突然現れた白装束に捕らわれてしまい、続いて指し示したように現れた袁招軍に引き渡されてしまいました

彼らは前後左右、八人もの兵士で嚴重に私の周りを取り囲んだのです

誰もが手を出せないこの状況の中、唐突に現れた一人の小柄な兵士が遮るように立ち塞がりました

顔は見えませんが背の高さからいって少年兵でしょうか、随分と丸みのある体軀をしています

その子はこちらを恐れず歩み寄り、声だけでも注意しようとしたところで袁招軍の兵士によって強制的に制止させられました

彼らは私の首元に刃をつきつけ人質であることを主張し追い払おうとしたのです、ですが少年兵は意に止めずに武器を構え

一閃。

突風が巻き起こったと思えば、ただの一薙ぎで彼らをなぎ払ったではありませんか

それは四人をまとめて吹き飛ばし、続く残りの人間も反応する前に彼によって瞬く間に刺し、穿たれてしまいました

周りには手が出せなかった私の部下達が啞然と立ち尽くしています

「あなたは……………」

よくよく見てみれば鎧からはみ出した赤い布と握られた巨大な武器に見覚えがありました

だから私は彼を、いえ彼女に声をかけようとして手を伸ばしましたがしかし

「……………!?」

いきなり橋の対岸に向かって走り出したのです

「待つて頂戴！」

私もすかさず追いかけてようとしました

とはいえ予想が正しければ桁外れの身体能力を持つあの子の速度に追いつけるはずはありません

けて私の体が鈍ったとか身が重いかかそういった理由ではありませんよ？
分かっていますね

心配をよそに彼女はすぐに止ってくれました

息を切らしながら視線の先へをやると、対岸に槍を振り被る星ちゃんの姿がなんとか視認できます

まさか……

嫌な予感とは総じて当たるものです

何か良くない事が起ころうとしているのではと

心配して駆け寄ろうにも、声をかけるにしてもこの位置は遠すぎました

長坂橋におけるこの橋はもっとも大きく、私の目を持ってしてもなんとか星ちゃん達が確認できる程度の距離が離れています

加えて吹き上げる谷間風も激しく、声が届きそうになかったのです

そんな見守るしか無い状況でぐっと力を込めたように星ちゃんの体が少し沈んだ姿を見た直後

あの子、そう恋ちゃんは諦めず自らの武器を振りかぶったのです

結果は皆さんが知っている通り

投擲された戟は流星のように真っ直ぐ飛来し見星ちゃんの槍を跳ね除け、地面に突き刺さりました

言葉にすると単純のようですが弓に携わる私から言わせて頂かせてもらいますと、正直いってデタラメの一言に尽きますわね

だってそうでしょう？ 矢と違って戟という武器は投擲にまったく不向きな武器です

それが直進するだけですでおかしいのです。しかも方天画戟という獣の顎のような形状を持つ巨大な得物が谷間風をもともせず飛んでいったのですよ？

尚且つ狙いも正確で、その後で聞く限り敵将すら手傷を負わせる程の精度を誇ったらしいのです

それはさながら流星のように一瞬の出来事

邪魔立てする空気抵抗さえ、かつ喰らう超速度による遠距離狙撃は一投はまさに神技といって差し支えないものでした

さすがにここまでやられてしまうと昔ご主人様が仰っていた天界の言葉 チート チート を思い出しますわ

ズルイとか規格外の性能とかそんな感じでしたでしょうか

まさにそういった表現が適切だと思っ程でしたね

まあチートといえば夜のご主人様も、ですが……ふふっ

「恋ちゃん。来てたのね」

ひとしきり感動と若干の嫉妬を整理した後、私は彼女の横に並びま

した

「.....」

相変わらずの無表情、でも少しだけ安堵しているのが分かります。
付き合いは長いですからね

「どうして黙って付いて来ちゃったのかしら？ お留守番は寂しかった？」

「.....違っ」

「じゃあ、どうしてかしら」

「.....」

無言で戟の着弾場所、橋の対岸を指差されました

「？」

そこには星ちゃん、鈴々ちゃん、それに夏侯惇さんかしら.....それともう一人いるのは、白装束。あの者達の仲間かしら

最低限の言葉しか喋らなかった彼らと違い、どこか違っ印象を受けるわね

「でも、それがどんな理由になるの？」

疑問に思って再度尋ねてみると恋ちゃんの指が少しずれているのに気がつきました

「……………もう少し、右」

「右？ええつと……………ああ、あれね。なんだか随分と大きい馬…が…」

視線の先、そこには赤い巨躯を持つ馬に跨る一人の青年の姿が見えます

見覚えのあるおかしな仮面を被つてはいますが見間違える事など有り得ない程、強く心に残る横顔

心なしか精悍さの増した尊顔は記憶とぴったり合致しました

あの方こそ、天の御使いとして我らの御旗となった心優しき主

今は確か十文字の北郷として活躍なさっていましたね

ようやく……………ようやくお会いできました……………ご主人様……………

あまりの感動に年甲斐も無く涙が溢れそうになる私

目元に指を添え、ぐつと堪えていると同じ気持ちのはずの恋ちゃんは表情を変えません

そこで、はっとなって気がつきました

朱里ちゃん達の話によれば洛陽での一件で恋ちゃんとねねちゃんはすでにご主人様と再会を果たしていたはずでした

ですがどういうわけか口を噤むばかりの彼女達にやがて愛紗ちゃん以外の人間が質問を止めましたが、もしかしたら恋ちゃんはご主人様となにか密約をしていたのではないかという疑問がここにきて浮かび上がってきました

「もしかして知っていたのかしら。ここにご主人様が来る事を……」
首をふるふると振って否定しています

「……………匂い」

「……………えっ？」

「……………違った、気配」

「あまり、意味が変わらないわね……」

どっちも不確かな表現だから違いが分かりにくい、というか恋ちゃん
の感覚はよくずれてるから

「……………?」

「そこで不思議そうに首を傾げられても困るのよねえ……」
とりあえず他意が無いことだけは分かります

恐らく野生の勘でこの状況を嗅ぎ取ったのでしょね

苦笑してあまり難しい話を続けるのもなんなので、取り合えず自分の無事を伝えようと橋の対岸へ移動しようと歩き出した時

さっと、恋ちゃんに腕を掴まれました

「? どうしたの恋ちゃん」

「..... まだ、駄目」

「まだ?.....何かあるのかしら」

「.....ご主人様は、まだ頑張らなきゃ駄目」

この子なりに必死に言葉を選んでるのが伝わってきた私は焦る気持ちは抑え、しっかりと耳を傾けます

聞き逃す事や間違えないように確実に

たどたどしい説明は要領を得ないものばかりでしたが、伝えたい内容は理解する事が出来ました

ご主人様の意思を尊重し、私達から何か強制するような事があってはいけません

本来なら先の投擲もしてはいけないそうらしいのですが、恋ちゃん曰く

「ご主人様から助けてって、言われた気がした」 だそうです

先の言葉には恋ちゃん以外の誰かの意思が混在しているのは明らかですが、この子が信じているのです。私も納得する事にしました

この状況で別段すぐいなくわけでは無いでしょうから。お話と、そうね一夜を過ごすくらいはいいでしょう

そもそも何故ここにご主人様がいるのかも分かりません、なぜ天の御使いではないのか、国家間の問題があるにせよなぜすぐにでも私共の元へ来て頂けないのか、と疑問も尽きませんが

まずは成り行きを見守ろうと思います

………とはいえ

「気付いてないのね………あの二人」

「………それは、恋も同じ感想」

どういうわけか仮面をつけただけのご主人様に気付かない様子の星ちゃんと鈴々ちゃんを見て溜息をつく私達

決心してすぐだけど、何か取り返しのつかない事態だけになるのは避けてね

もう一度、祈るような気持ちで手を合わせます

ただやはり、嫌な予感とは総じてよく当たるもので

結局のところ。この場における私達の再会は果たされる事はありませんでした

しかも、この事件が終わった時には四人もの仲間と袂を分かť事態になっていたのです

惨劇は回避された

何時の間にか涙で霞む視界にそれが確認できたのはどうしようもなく嬉しい

全力の跳躍での影響か、がりがりとトロンベ（旧セキト）は勢いを殺しきれずに地面を滑走してしまうはその振動も今は気にもならな
い些細な出来事だ

突き刺さる方天画戟は間違いなく恋のもの

どこにいるか分からないけど、心配して来てくれたんだな……
ありがとう恋

感動で更に目が滲み、ぐっと手で拭き取ると

「……………ん？」

「いまだ振動は止まらず、どんどん近づいていく犯行現場といまだスライドし続ける俺達」

「ああ、あれか車は急には止まれないってか H A H A H A」

「って、退いてくれエエエエ！！？」

「にゃー！？」

「なんと！」

「……………」

「驚きのあまり動こうとしない彼女達に危機が迫る！」

「い、いったいどうしたらいいんだ！？」

（ザ・ワールド！！ 時は止る。）

「変な声が耳に響いてきた」

（諦めては駄目デース。こんな時こそ落ち着くデース。一刀ボーイ）

き、君は一体誰なんだ!?

突然視界が白で覆われ、自分以外の人間が消えてしまう

(怖がらなくて大丈夫デース。ナーストミーチュー、もう一人のボク。私は華蝶に宿るあなたの分身デース)

俺か!？ しかもよりによって俺の方が王様側かよ

口調はミレニアムなアイな人なのに。あと実は英語苦手だろ

(さすがは千日華蝶仮面に選ばれた勇者なのデス。素晴らしい推理力と褒めてあげまショー)

歴史浅つ！ ギリ三年かよ

(そんなミーにナイスな策を授けてあげまショー)

……一応注意しておくが、ミーじゃなくてユーな

(……………)

いじけんなよ!?

(オー。アフターケアはしっかりとしてください。傷付きやすいもので…………)

こいつ絶対、オーとかアハンとか言えば外人っぽいと思ってる口だな

本当にこいつはもう一人の俺なのか?

(嫌がる強気な彼女にコスプレをさせてた後、なぜか水を被って服が透けてしまい真っ赤になって恥ずかしがりますがそこから動こうとせずに関か訴えかけるように上目遣いになる姿が萌えデース。衣装は巫女と魔法少女系、反論は認めませーん)

間違いないねえ！ こいつ俺だ！？

(納得してもらえて幸いデース)

ギャップ萌えの同士よ！

姿は見えないが硬く拳を握り締める

帰ったら風とかに頼んでみよう。衣装はすでにあるしな (私財を投げ打ってますね。分かりマース)

(それはそうとまずは直下の問題を片付けるのが先デース)

む、そういやそうだ

このままだと大惨事になりかねないからな、何かいい案でもあるのか？

(おまかせくだサイイ。ワタシの特殊装備 ボンゴレダブルオーリングを使えば普通の思考能力が二乗されマース)

手広くパクるな

(死ぬ気で頑張りマスから許してください。ちなみに発動時は卍

解と叫びマース)

全然真剣さが伝わってこない口調だし、さらにパクんなよ頼むから……きつと読みはマンジカイ。他に一切の意味など無いはずだ

(……………む、むむむ……………)

どうだいい案は出たか？

(……………止るのが駄目なら飛べば良いじゃない)

なんで女王口調？

(勢いを逆に利用するのデース。今ならまだ人を飛び越える余力が有リマスから)

おお、結構まともな意見だ。こういう時って大概中途半端な案だったり、役に立たなかつたりするんだがやるじゃないか

(ところがギツチョン、問題がありマース)

あ、急に不安になってきたぞ

(嫌な予感とは総じてよく当たるものデース。この話の前半でも言っていましたからネ)

そついうメタはいいから、早く問題を教えてくれ

(すでに張飛さんが反応しだして蛇矛を構えてマース)

死んでしまっ!?

(このままなら間違いなくミート。痛恨の一撃してしまいますヨ、お気を付けくだサーイ)

そこの対処も考えるよ!! 諦めんなよ! どうしてそこで諦めんだよ! 頑張れ!頑張れ!出来る!出来る!

(オウフ、まさか炎の妖精が出てくるとは思いもありませんデシタ。さすがはもう一人のボク、やりますネ)

だから頼むよ!

(仕方ありません、今回だけのサービスですヨ)

キターーーーー!!!

(……………勝利の鍵は 恥じらいデース)

はっ?

(これ以上はナッシング。それでは御機嫌よう、シーユートウモロー、バイバイ)

なんでラジオ調!?

待て!意味がわかんないですけど!

声は届かなかったのか、次第に視界が戻っていく

くっ、このままじゃ！

焦ったところに小さい声がまだ聞こえていた

なんとというツンデレさんだ

（最後に一言。デースって何度も言っていると梨花ちゃんまの気分にな
ってくるのデース にはあ
）

心にA・Tフィールドがあれば、俺はもう二度とこいつを中に入れないだろう

そんな決心をよそに戻る世界

そして時は動き出すってか！？

眼前にはすでに蛇矛をフルスイングで構える張飛ちゃんが控えている

飛ぶにしたってこのままじゃ打ち落とされてしまっぞ

くそっ 恥じらい…… 恥じらいだって？

それはあれか、それで気を逸らせという事なの？

見る限りこの子そんなのと無縁な気がするんだが

なんかこう芽生えてないというか、ギリギリアウトの領域というか

ああ！ もう駄目だ！ 張飛ちゃんの上半身がこれでもかかってぐら
い体が引き絞られている

畜生……もうどうとんでもなっつてしまえ！

「あああああ！？ パンツ丸見えだああああ！！！！」

……最悪だ

我ながら最悪だ

大事過ぎるので三回言おう 最悪だ

よりによってパンツって。小学生かよ

……俺この戦いが終わったらアグネスに捕まるんだ…

なんかそんなフラグを立てたくなってきたぞ。激しく自己嫌悪に包まれる

けれど

「にゃ？……ふにゅううう？！？」

いきなり蛇矛を手放し、顔を真っ赤にして下半身を押さえつける張飛ちゃん

効いた！？ しかもパンツで意味通ったんだ！

驚きもそこそこに急ぎセキトへ合図する

「もう一度飛ぶぞおお！」

「ヒューーン……」

「……………ちよつちよつと待たん…か……………ぐふつ」
なにやら背中では呻き声があるがセキトはもう止らない

大地を踏み締め、勢いを活かしたまま跳ね上がる

持ち上がった巨体はまたも人の身長を大きく超える跳躍を見せつけ、短い浮遊感の後、再度着地した

相変わらず地面を掘削しながらの減速だったが、もう要領を得たのか体重を後ろずらし力を込めるセキト

本当ハンパないスペックだな 俺には勿体無いくらいだ

ようやく停止した頃には、目の前に腰が抜けた兵士が並んでいた

セキト越しの上から目線で彼らと目が合う

貴方達さつき対面にいませんでした？

ふるふると首を振って否定する兵士さん

ああそつか、モブさんはみんな顔いっしょだったね。リアクション同じだったから勘違いしてしまったよ

一昔前のゲームだったら俺も多分顔なしグラだったから気持ちは分かるつもりだ。許してくれ

謝罪もそこに反対側へセキトの向きを変える

そこに並ぶのは蜀の武将である趙雲さんといまだ顔を顰める張飛ちゃん、そして救出対象である春蘭がおかしな体勢で平伏していた

……ここから先は俺の出番だな

おちゃらけた雰囲気飛ばす為、自分で頬をひっぱたき気合を入れ直す

「セキト、事が済むまで袁術を頼むぞ。それと後の事を考えて足を休めといてくれ」

「……………ぶるる」

頷くような鳴き声で返事が返ってくる

俺はセキトから飛び降りゆっくりと空けた空間、彼女達の前に歩を進めていく

あえて思考の外に追いやっていた男と対峙する為に

「……………」

緊迫の雰囲気の中、俺と左慈、互いの距離は無言のまま縮まっていく。趙雲さんは空気を読んだのか、張飛ちゃんと動けない様子の春蘭を体ごとを引いて少し下がった位置で見守っている。

俺は腰に下げた剣を抜き放ち、いつでも戦えるよう右手に握り締めているが、それに対し左慈はこちらを見据えるだけ。あれほどの出血はすでに止っており不気味さだけが増した表情で佇む。

「久しぶりだな、左慈。こっちで会うのは初めてになるな」

「……………」

無言。返事は返らず更に距離は詰まり続けていき、三メートルほどの距離で俺は停止した。

「会わない間随分と好き勝手やってくれて…そんなに俺が苦しむのを見たいのか？」

疑問はまたも黙殺されたまま。ゆっくりと構えを取り戦闘態勢を整えていく。

「華琳……いや、曹操は俺の仲間の手引きで逃げ果せているはずだ。」

もう彼女には手を出させないぞ」

構えは正眼。正面に切っ先を突き立て準備万端と対峙したところで、ようやく左慈が口を開いた

「……………なぜここにいる。……………貴様は呉に身を置いていたはず。どうしてこの人形共を助けようなどと思いつた」

すでに華琳への興味は失せたと言わんばかりの素っ気無い態度

こいつ何が目的なんだ？

「なぜと言われてもな……………親切とは言い難い、記憶を取り戻させてくれた知り合いがいてね。そのおかげでここに足が向いたんだよ」

きつとあの晩の件は無ければ、俺は思春の願いを無視出来ず曹操達を見捨てていたかもしれない。その点に関しては干吉には感謝しないといけないだろう

「……………記憶だと……………。もしや貂蝉…か？いや、奴は俺の影響で再構成にまだ時間がかかるはず、干渉しようにも身動きは取れまい。だとするなら……………道中で擦れ違いかけた卑弥呼？ そちらのほうはまだ可能性は高いな……………ちっ、忌々しい」

なにやら一人で納得している左慈は歪んだように顔を顰めるが、一瞬で無表情に戻りまるで俺への興味を無くしたように無警戒に足元に落ちた右腕を拾う

「貴様の命、預け置いてやる」

「……………なに？」

どういう意味だ？ 油断を誘うでもなく言い捨てられる

こいつの目的は俺を殺す事のはず。いくら状況が悪いからってこんなにも簡単に引き下がるなんてまだ何か隠しているんじゃない……

怪しむこちらの意思とは無関係に左慈は表情を変えないまま、？げた右腕を手に歩み去ろうとする

「くっ……………こっちは用は終わってないんだ！！」

この男の思惑がどうあれ、ここで俺が倒してしまえば全てうまくいくはずだ。躊躇なんてしてられない！

「はあああああっ！！」

踏み込み、上段からの面を放つ

刀と違い両刃の剣は峰打ちなんて芸当はできない。だから俺は左慈を殺すつもりで振り被ったんだ。自分で自分の責任を取る為に

だけど、そんな決心など知った事かと言わんばかりに俺の剣閃より遙かに速く牙のように鋭い一撃が剣を打ち付ける

「ぐっ！！……………っっ…！？」

襲ってきた衝撃の正体はノーモーションからの上段蹴り。それはいつも簡単に剣をへし折り、すぐさま俺の首元まで戻ってくる。

構えた剣の切っ先は半分に折れ飛び、手に残るったは無残に残る刀身と柄のみ。

獣の蹴りは今まで出会ったどんな武人のそれより速く、軌道の読めない攻撃だった

「粹がるなよ、貴様は相応しい舞台まで生かしておく決めているんだ。わざわざ死にくるようなまねは止しておけ」

「……………くっ」

「それともなにか？、正史のようにこの長坂橋で活躍して張飛代わりの名声でも得たいか？。最近は正義の味方なんて道化が随分似合うようになったらしいからな」

「……………あれは必要に駆られての事だ、俺個人の人気取りが目的じゃない」

左慈は俺の仮面に目を合わせ、嘲笑う

「そうか、俺はてつきり肩書きの無くなった貴様が新しい偶像崇拜の象徴をアピールしているものと思っていたぞ」

ようやく嘲笑いとはいえ感情の籠った表情で左慈は蔑んできた

「だとするなら貴様がここへ来たのも納得できるんだがな。この場所ので仁王立ちでもすればきつと人形共からもてはやされ、歴史に残る大活躍間違い無しだ」

話を打ち切ろうとしていた先程とは打って変わって、裂けたように

口が歪んでいく

長坂橋の仁王立ち

確かに三国志で有名な武将、燕人張飛の活躍を語る上で欠かせない出来事の一つだ

逃げる劉備軍の殿を務めた彼（彼女？）が大軍を誇る曹操軍を相手取り、百にも満たない手勢で一步も引く事無く橋を死守した有名なエピソードは誰もが知るところだろう

逃げる役、追う者こそ俺の記憶と違っけど舞台は凶ったようにここを選んだ

貂蝉の奴も言っていたけど、その原因として事象の収束とやらが働いているんだろう。以前の定軍山の時もそうだった

あの時は時期こそ違ったが、結果として俺が介入しなければ秋蘭の命が危い事態になっていたんだ

外史ってやつは正史の出来事に影響されて結果と場所が違おうとも事件そのものは引き起こすらしい

今回の件は左慈自身の事も含め、かなり引つかかるところはあるが基本は同じなんだろう

ともあれ俺はあくまで華琳を救出に來ただけだ。それを利用して歴史に名を残そうなんて気はまったく無い

まして今更、天の身遣いなんて肩書きに頼って事を成そうとも思わ

ない

こいつも自分で言うっておきながら戯言だと分かっているのだろう、片足を上げた不安定な姿勢で声を押し込めたような低い笑いを堪えている

完全に舐められている。そんな態度に俺は首元の脅威も忘れ、反論の言葉を返す

「名声だけ求めて此処に来るほど俺は酔狂じゃないよ。さつきも言った通り華琳の救出以外は頭になかったぞ。第一に歴史なんて後から遅れて来た人間の批評だ、それを今生きてる俺が気にするなんてバカげてるじゃないか」

「!?」

俺が話し終えた瞬間、横目越しなぜか身を震わした趙雲さんが映り、真っ直ぐこちらを見極めるような視線を向けてくるのに気付いた

なんだろう？ その瞳にさつきまでとは種類の違う真剣さを感じてしまう 特におかしな発言はして覚えはないんだけど、何か気に障ったんだろうか

「まあそう言うだろうな、元よりこの世界に先は無い、真相を知っている貴様がわざわざ歴史に名を残そうとは思わんだろう。全ては泡沫。虚偽の世界。なにもかもが決められたルールを走る予定調和の連続ループだからな」

先の蹴りとは真逆の緩慢な速度で足を納める左慈

姿勢こそ戻ったが表情だけが更に歪み、徐々に顔を顰めて怒りを露にする

これこそが本来の感情だといわんばかりに

「だが今回はそれを利用する。以前の外史では無理に介入しようとして貴様を屠り損ねたが、代わりに外史という世界そのものが俺のような観測者の介入を拒むという事がわかった！ならばどうするか？簡単だ！世界が俺の邪魔をするというのなら世界そのものを創造し、制御すればいい！！」

噴き出す執念は臨界を超え、堰を切ったかのように溢れ出していく

「その為に俺は耐え忍び、長い時間想念を蓄えていたのだ。貴様への復讐を胸に秘め、くだらぬ外史が発生していくのを見ながらな！」

声は大きく辺り一面に響き渡るがあまりに荒唐無稽な発言に誰もが理解できない。だけど俺は一人、向けられた言葉とそこに込められた感情を受け止める

「だから簡単には殺さん！あれだけの代価を払い、今ここで殺すのはあまりにおもしろくない！それでは積もり積もったこの怨嗟晴らす事などできないだろうっ！、外史の象徴である貴様は苦しみ抜いて死ぬべきなのだ！！」

激情に駆られた恨みは狂乱の域にまで達している。……さっきまでの無表情は必死に俺への感情を押えてたって事が、それにしても代価っていったい？

「斬殺、刺殺、絞殺、轢殺、圧殺、焼殺、惨殺、抹殺、屠殺、全殺、

完殺、どれでも選べ、どれかを選べ。 全ての絶望を味わってから
俺自らが介錯してやるう」

「……………お前は」

その姿に、

あまりに深すぎる怨念に身を委ねた左慈の姿に俺は……

なぜか

悲しいと、そう思わずにはいらなかった

「 左慈さんっ!!! 」

場の空気を突然切り裂いたのは人垣の方から聞こえる金切り声

驚いてそちらに顔を向けると兵士の壁が何時の間にか左右に広がり、
奥からやたら金ぴかな鎧を着た女性、その後ろに配下であろう二人
がこちらに向かって走ってくる

「な、なんという事ですよ!？」

左慈に駆け寄った人物 確か袁紹が顔を真つ青にして千切れた腕を心配して、あたふたしている

そりゃあ知った人間の腕が無かったら誰でも驚くよな ……今更だけどこいつなんで大丈夫なんだ？

「こんな事になるなら無理を言っても貴方に付いて行くべきでしたわ! わたくしの浅慮を許してくださいまし」

「ちよつと姫、ぜえ、ぜえ…一人で先走りすぎ………って、うおっ!? なんで頭下げてんすか!」

「麗羽さま! あの、他の兵士の前でそういう姿はちよつと………って、きゃあああ! こっこの人左腕で右腕掴んでるよ文ちゃん!」

「おいおい斗詩、それは別に普通……………って、ぎゃあああああああ! 本当の意味で持つてるウウウ!」

………場が一気に騒がしくなったな

「喧しいですわよ! 顔良さん、文醜さん! そんなお下品な態度はどうでもいいですからさっさと冀州に帰還する準備を致しなさい!」

「ちよつ、ここまで来てもう戻るんすか!? 目的の曹操まだ見つけてないってのに!」

「そうですねー。左慈さんが私兵を率いて先行しすぎるから今の状況もよくわかってないんです。何で両軍がこんなに入り組んで、しかもそこにいるの夏侯惇將軍じゃ……………」

当初の目的を果たそうと顔良が袁紹に説得をもちかける

だが錯乱したかのように取り乱す彼女はあまり聞く耳をもっていないようだ。しきりに左慈の容態を心配している

「あーもー。こいつが絡むとすぐ姫の調子が狂っちまうんだよな！。ほんと勘弁してほしいぜ……………ん？」

よくある事なのだろうか文醜が諦めたように視線を漂わせ、ふと目の動きが止まった

「ヒヒン？」

「……………なあ、斗詩。すみつこにやたら大きい馬とやたら小さい曹操が見えるんだけど、あたいの見間違いかな？」

目を「し」と擦って、再度確認するがそこには追い求めている曹操がいるようにしか見えない

「もう文ちゃんってばそんな都合の良い話があるわけ……………ほんとだあああああ！…？」

彼女達は叫ぶのが仕事なんだろうか

「麗羽さま！　すぐそこにあいつが……………って、ああもう！　聞いてねえよ！　こうなったらあたいらだけでやーってやるぜ！…！」

どこかのダンクーガさんのように気合を入れる文醜

「しまった！ そっぴや囲まれたまんまじゃないか！」

「うわっ、こつちにはおかしな仮面被った変態までいやがる！ どうなってんだ！」

君らが来るまでは存外シリアスだったんだけどね

「……………興が削がれたな」

なぜか袁紹に揺さぶらせたままの左慈がポツリと呟く

「どの道、幾らかの抵抗をしたところで次善策はまだまだある。焦って機そのものを失わないようにしなくてはな。……………この場は貴様の勝ちだ。もう曹操軍の連中に手は出さん」

「……………お前の言葉だけで信じられるかよ」

「フンッ……………タネの割れた仕掛けを再度使おうとは思わんさ、あの人形へも、この女もな……………さっさと行け、俺の気が変わらんうちに」

「あっ、ちょっとお待ちになってくださいませ！ 左慈さん！」

ぶっきらぼうに視線を外し、駄々っ子のように引つ付いた袁術をそのままに林の方へ歩き出す

「ん？」

その振り向き際、掴まれたせいなのか服がはだけて地肌が見える。引き締まった胸筋の箇所なぜか煌く光　それがなぜか気になった。

「ようやく見つけたぞ、このやろう！！　よくもたんぽぽを傷ものにしやがったな！！」

一瞬の思考の直後、一際大きい声とともに馬に乗った馬超がこちら目指して突っ込んできた

しかも過剰な勘違いをして

腰まで届く長いポニーテールは、速度に見合ったように激しく上下し、彼女の鬼気迫る表情に拍車をかけている

「潮時だな……」

後続の兵士達もこちら向かって次々と雪崩れ込んでいるし、ここが引き際だろう

「よし………トロンベよ、今こそ駆け抜ける時！」

「ぶるるるっ！」

こちらの呼び声に反応して控えていたトロンベ（旧セキト）がいまだ気絶したままの袁術を乗せて走ってくる

「それと、ごめんよ」

「じゃっ？」

「ぬっ！？ この動き……………ト！」

病んでさえいなければ……………いやいやそんな死の灰を浴びた記憶は無いから

話に付いてこれなかった二人のスキを突き、思春を参考した動きで気配を絶って春蘭を掠め取る

疲労懇狼なのかどこかケガでもしたのか浅く息を吐きながらこちらに目だけを寄越してきた どうやら本能的に状況を察して身を委ねてくれるようだ

そのまま間を抜けた。本家と比べれば未熟も良いところだろうが、この動きは何度も見てきたんだ、コツぐらいわかる。それに相手の機微を読み取るのは得意なんだ。状況次第なら天下の武将相手でもなんとかかしてみせるさ！

「おい何する気だ！この変態野郎、そいつはあたいらの獲物だぞ！」
こちらに気をやっていた文醜だけが素早く対応し、抜け出そうとした俺の進路を阻もうとするが俺が回避するまでもなくそれは阻まれ
てしまう

「あいや待たれい。先程からこの御仁を変態、変態と、連呼されているがまさかこの美々しい仮面を原因に考えておるつもりではあるまいな」

「そこ以外に突っ込むとこないだろ！ なんでお前そんなに真剣なんだよ！？」

予想外の物言いに勢いを失う文醜を尻目に、もうすぐまで迫ったトロンベに手を伸ばす

「ぐっ！」

急加速に耐え切れず掴んだ腕が悲鳴を上げるが、我慢して春蘭を引っ張り上げ、背中の方へ座らせる

「……待てえ！」「」

四方からの制止を聞き流し、全方位囲まれたこの場を脱出するためある一点を目指す

「うにゃー！ 止まるのだ、タイト着込んでそうな兄ちゃん！」

だから何でそつちを思い浮かべるの！？ パピヨンな人じゃないって言ってるでしょ、錬金できないから！

「はらわたをぶち撒けるー！！この野郎ー！」

心の突っ込みが繋がった！？

なぜか誤解しまくっているヴァルキリー馬超は叫びながらまだこちらに向かってきた

だが

「ここまで追って来れないだろっ！ 春蘭、聞こえてたらしっかりと背中を掴んでくれよ！！」

唯一、人の防壁が薄い箇所を目指してジャンプ

そこは袁紹軍ひしめく北でもなければ馬超の部隊が詰め寄せる南でもない。ある一点へ覚悟を決め　ダイブする

「「「「「なっ!?!」「」「」」」」」

その場にいる全員の度肝が抜かれた

男が向かったのは西

しかも　橋のかかってない崖に向かって飛び降りたのだ

その姿は一瞬で掻き消え、張飛達の位置からは確認できなくなったが対岸にいる黄忠側の人間には良く見ている

あまりにも非常識な光景の連続

落下していくものばかりと思われた身投げは馬が器用に崖の出っ張りを足場にする事で、見事駆け下りているのだ

谷間風に吹かれ、舞う十文字の羽織がきらきらと光を反射し、落下する

これこそが風の指定した脱出方法

それは一刀が泗水関で見せた『逆落とし』を再現するという危険極まりない作戦だった

橋のかけられた本当の崖である長坂はかなりの高度がある

減速してでも落下位置が調整しなければ下で突き出す岩にぶつかってしまう

これが始めてだったら俺はすでに気絶している

功か幸いか、以前の経験のおかげで意識を飛ばす事もなくしっかりと手綱を握り締めれた

恐怖二乗増しのスプラッシュマウンテンはどんどん下へ向かって降下していく

「ぶはっっ!!」

爆発のような水飛沫とともになんとか川に着水。なんとか無事のようだ

「うっっ………急に気持ち悪く……」

「………気絶しててよかったな」

間違っても水を飲ませないように胸の高さまで袁術を担いで、反応の鈍い春蘭にしっかりと俺の腰を掴んでもらう

「もう少し頑張れよ！　すぐに華琳に会わせてやるから」

回された手を掴み返して、安心させるよう言葉をかける

水流は激しく思ったより体力の消耗が激しいが、一番つらいのはセキトだ。本当、この子には感謝してもしきれない

そんな思いを胸に北郷一刀こと百式華蝶仮面はどんぶらこ、どんぶらこと川を下っていった

「あのセリフ、言動……………まさか……………？」

「どづしたのだ星？」

「……………いや、何でもござらんよ」

「？」

「それよりも鈴々よ、ちとお願いがあるのだが」

「なんなのだ星からお願いなんて珍しいのだ」

「紫苑殿をこちら側へ連れて来てくれぬか、私には少々他用ができてしまつてな、彼女ならうまくこの場を納めてくれるだろう」

「呼ぶだけなら簡単だけど、用つて一体なんなのだー？」

「話すとき長い。とりあえずお願いできるか？」

「むむーまあいいか！ 鈴々ちよつと行つて来るのだ」

了承するや否や、土煙を巻き起こしながら疾走していく姿は馬にも

劣らないようなスピードだ

そのすきに趙雲もまたこの場を後にする

彼女の視界の隅、そこにはそれぞれの事情で同じ方向を目指す顔見知り達がすでに小さくなつていく

「どつやら正解のようだな」

手ごころな馬を拝借し駆け出す趙雲は一人確信した

余談だが今回の一件は瞬く間に広く噂されるようになった

単騎で居並ぶ四万の兵を相手取り、見事夏侯惇將軍、牽いては魏そのものを救った快男子の活躍

それは後にこう語られる

長坂橋の大立ち回り　と

期せず左慈の言つとおり事象の収束は起こつたのだ

「おお！！！　ほんまきおつたであいつら！！　思わず川に洗濯しに行くところやったわ」

「おおー！　あの人すごいですねー霞さん！　洗濯の意味はわかりませんが」

「隊長！！　私は山に芝刈りにいくところでした」

打ち合わせ通り、下流で待ち構えていた風達の前に赤い馬が流れてきた

周りには合流した魏軍がまさかとばかりに騒ぎ立てる

「……………本当に帰ってくるとは驚愕を通り越して呆れる事くらいしかできないわね……………秋蘭、あの赤い馬以外に人間は確認できる？」

傍に控えていた青髪の彼女は指示通り上流に向けて目を細める

「どうやら生き延びたのは彼らだけのようですね。北郷と袁術、…姉者も無事のようです」

実際にはあの男に寄り掛かり、ぐったりしているが命に別状は無いだろう

「ふふー、やっぱり風の言つとおりでしたねー。わーい勝ったー」

「こら風！ 曹操様に失礼でしょ！」

「……………ちっ、そのまま死ねば良かったのに」

少し開けた川原で華琳、風、稟、桂花、少し離れて秋春が控え、川岸では風と霞、それに季衣が兵に指示を飛ばして何かを準備させている

皆が奇跡の生還を喜び、嬉々として作業を進めていく

「風、といったわね。なかなかやるじゃない。皆を代表して礼を述べましょう」

「いえいえー、お褒めに預かりきよー悦至極です。でも風は指示を出したただけなので本来褒められるべきはお兄さんなのですが」

「あら？ 人材は使ってこそ意味があるのよ。その性能を把握した効率の良いやり方でね。あなたなかなか見所があるし、そうね あんなブ男は放つて置いて私の元へ来ないかしら？」

「……………」

「？」

「……………ぐっ」

「起きなさい！」

すぱんっ！

「おおっ？」

小気味良い突っ込みが稟から浴びせられ、どこかしこに飛んでいった意識を取り戻す

「おはよう。それで貴方の返事を聞かせて貰いたいのだけど」

斬新なりアクションを気にも留めずに華琳は返答を促すが、当の本人は横にいる稟に意見を求めた

「どうですか稟ちゃん、一応このお誘いは我々が求めていたものですが、ここぞとばかりに仕官してみますか？」

「私は……………いえ、それよりも風、あなたの意見を聞かせてください……………返事は何となく分かりますが、私はそれに従おうと思いません」

「おや、もうデレたのですか？ ツンデレはツン七割、デレ三割の黄金率らしいのですが」

「そういうのじゃない！ た、ただ私は……………」

ちらりと遠慮がちに華琳を覗き見るだけで稟の顔は沸騰したかのようになり赤色に染まり

「ぷふう……………」

真っ赤な大輪の花を咲かせた

「ちよつと何なのこの子！ また血を噴き出したわよ！ 明らかに致死量超えてるでしょ！」

突然の惨劇に桂花が叫び、蝉が鳴きそうになったが風は慣れた様子で稟を介抱し始めた

「はい稟ちゃん。とんとんしましょーねー、なんか一気に悪化してしまいましたね……………原因の一つはこれですか、そろそろ新しい対処方法を探さないといけませんねー」

「うう…なぜけない……」

湯水の如く溢れる血溜まりの中で落ち込む稟は落ち込みながらも風に返事をするよう促す

「そうですね。曹操さん、残念ですが風達はお兄さんについて行きたい思っています」

「さっきの口振りから予想すると、以前は私の元に来るつもりだったのではなくて？」

「まあそれも運命、巡り合わせが悪かったという事で。先にあの人と出会ってしまったものですから」

ぺこりと器用に彫像を落とさないよう頭を下げると華琳は呆れたように溜息をついた

「本当、手が早いねあいつは……」

川岸では流れてきた北郷をセキトごと引き上げる為、多数の兵士が川の両側に控え急ごしらえの網で捕縛しようとしている

「……まあいいわ」

一人愚痴りながら彼らを迎えるようと足を進める彼女は断られたのも関わらず、どこか嬉しそうに頬を少しだけ緩ませた

……ともあれ春蘭を救ってくれてありがとう。……一刀。

恐らくは面と向かってはしないであろう感謝の言葉を心の中で述べ

る華琳だった

そんな光景を眺める二人の男

一人は画体が良く人も良さそうな青年。もうひとりには画体の良すぎ
て逆に気持ち悪い変態で、並び立ったまま会話を交わしている

「あの男が貂蟬の言伝にあつた北郷一刀か？」

「ふむ……万人受けしそうな顔に若々しくも張りのある肌と肉体、
受けも攻めも両立できそうなあの気配は間違いなく貂蟬好み、あや
つで合っているだろうな」

判断基準はいささか不穩だが同意する変態

「どうやらケガをした人間もいるようだ。本人もふらふらだし、こ
こは医者としても見逃せないな」

「おお、さすがはダーリン！ その無償の愛を是非にもワシへ！」

「ん？ 別に卑弥呼は健康だろ。特に治療の必要は無いと思うんだが……」

「相変わらず鈍感な奴じゃな華佗は！だがそこがいい！ 実に良いわ！！」

「?? 取り合えず先に行くぞ。患者が俺を待っている！」

ダツと駆け出す華佗に続いて卑弥呼もまたそれに倣う

川では助けられた一刀が安堵の為かその場に倒れ伏せ、辺りにいる女性が騒ぎ出している

どうやら出番は早いようだ

新たな出会いがまた一つ。彼の元へ集まっていく

巡り巡った思いに感謝を込めて

一先ず安堵の北郷一刀

けれども左慈の怨念その身に受けて

胸中過ぎるは幾らかの疑問

解が得られるのはまだまだ先で

今はゆるりと休みなさい

二十三話 長坂橋の顛末 再び因縁が迫り来る 後編（後書き）

次からはようやく置いてきた蓮華の元へ帰還するお話です
なんかすごい迷走中、作者の明日はどっちだ……

二十四話 平原への帰路 新たなる問題と仲間（前書き）

最近ネタ分が多いので調整中

小説の方向性が零時迷子だ（むしろ人生のコンパスがほしい…）

二十四話 平原への帰路 新たなる問題と仲間

「うっ、うっ……」

意識が朦朧とする中で、俺は突然の寒気を感じて思わず呻き声を上げた

一体何だよ、人がせつかく良い夢見てたのに、これじゃあ目が覚めてしまっじゃないか

目を瞑って布団を掴み必死の抵抗をみせるが誰かが俺を起こそうとしているのかぐいぐいと引っ張り返してくる

待ってくれ、今いいところなんだ！

夢の中では華琳と蓮華という二人の王が嫉妬心で対立しながらも一緒になって夜のお相手してくれるという垂涎必死なもの

ぐいっ！

「うおっ寒！！」

下衆な妄想を戒めるように突然下半身が捲られ素肌が剥き身で晒される

なんだ一体何事だ！？

身を縮こませようとしても誰かが邪魔しているのか一向に体が動かせないぞ

ぐっ、落ち着け本郷一刀。焦っても状況は変わらない。クールになれ一刀

今生きてるなら長坂橋からは無事脱出できたってことだ。近くに風達がいるだろうから身の危険は取り合えず無い

ならこれは誰かの悪戯だろうか？ 袁術？ それとも風だろうか

いや待て！ 天啓が舞い降りる

そうこれはきつとあれ。神様がお目こぼしに正夢を起こそうとしてくれているに違いない！（錯乱中）

朝+悪戯+エロゲとくれば、ある系統のゲームで欠かせないシチュエーションの一つ、朝の生理現象を治めてくれるアレだろ！

キターーーーーー！

我が世の春が来たーーーーー！！！！

感涙にむせび泣き、一体誰だろうと逸る気持ちを押さえつける

もし風だったら

「その、隊長が苦しそうだったので……………僭越ながら、あの……………治療……………」

なんて言ってくれるのかな？

それとも風、稟のコンビだったらどうだろう？

「おうおうお兄さん、なかなかのもん持ってんじゃねーか。久しぶりにあたいの女が目覚めちまつたぜ」

「くっ……これはあくまで後学の為です。か、勘違いしないでくださいー！」

ダブル？ ダブルなの？

もはや辛抱堪らず目を見開くとそこには

メリハリのある肉体に突き出した胸部、すぐ目に留まるのは立派なお髭

「む？ 目が覚めよったか」

.....

白ひげのおっさんがドアップで迫っていた

「ですよねー」

「なんじゃいきなり、起き掛けに真っ白になるとはおかしな奴だのう」

黙れホワイトドール（暫定）

密かな夢を返せ、そして黒歴史に帰ってしまえ

「……………あなたは一体どちら様ですか？」

ぶつけようの無い怒りを堪えて状況を把握しようと話しかけるがふと違和感

まだ足元でもぞもぞ動いている感触がするな。まさかまだ何かあるのか？

「ワシの名は卑弥呼。漢女道の求道者にして貴様の手助けに来た者だ。うなされておったので熱の一つでもはかつて」

「いわゆる貂蝉の仲間ですね。分かります……それは全力で置いて、だ。まさかとは思いが下半身の感触にお前は関与してないよな」

「ぬ？ それは遠回しにワシに奉仕してもらいたいというアピールと受け取ってよいのか、その心意気やよし。すでにダーリンという思い人はいるがここは人助けと割り切って全力で介抱してやるう」

言うや否や服を脱ぎ、はちきれんばかりの筋肉を露出させる変態。畜生！ 何でどの変態も勝手に勘違いして迫ってくるんだ！

「いやあああああ！助けてー！ 犯されるーーー！！」

「人聞きの悪い事を言うな、若造がっ！ 全新を系列させてやるうかっ！」

天破侠乱するつもりは無い！

東方が赤く燃えそうな気配だぜ

「だ、誰かいないのかー！ー!?」

「ここに居るぞーっ!」

足元の感触が離れた瞬間、下から飛び込む影が卑弥呼を横殴りにすつ飛ばす

「だが甘いわ、小童がっ!」

空中で身を捻り、ポーズを決めて着地する卑弥呼だが残念な事に誰も見ていない

「馬岱ちゃん!?!」

遅れて、変態を無視し勢いもそのまま彼女は俺の首に手を回し密着してくる

「えへへ、ご主人様だあ」

なんでここに? 寝そべった俺の胸にぐしぐしと顔を擦り付けてくる馬岱ちゃんはさっきまで戦っていたはずの相手に警戒するでもなく全身を委ねてくる

嬉しそうに足をばたつかせ、むふーとかにししとか言ってる姿は懐いた子猫みたいだ。明らかに機嫌が良い

でも理由は? あとご主人様って一体?

首を傾げていると馬岱ちゃんはそれに反応して、今度は頬を膨らま

せる

「ノリが悪いよご主人様！　せつかくたんぼぼと再会できたのに何でもつと言んでくれないの！」

「再会？……って　ちよつ、く、首が絞まる！？」

本人は悪ふざけのつもりみただけど、回された腕が的確に頸動脈を圧迫してくるもんだから意識がどんどん遠ざかっていく

タップするように頭にぼんぼんと手を乗せるとなぜか更にきつく抱き締めてくる　なんでさ！？

再び助けを求めて視線を彷徨わせると隅にグラグラの実の能力者が無意味にダブルバイセップスフロントでアピールしているが黙殺しておく

人類は同じ過ちを繰り返す程愚かじゃない

マリンフォードに沈め

「たじか」

いかん。血液が圧迫されて正常な言語も発声できなくなってきたぞ。なんとかしてこの子を引き剥がさないと地球が、いや命が危ない

「　　そこまでにしておけたんぼぼ。それ以上続けると主が新しい性癖に目覚めてしまっぞ」

くやしい。でも感じちゃ……ビクンビクン。やばい、これは脳に血

が回らなくて痙攣してきた証拠だ

「うわっ、ご主人様がどんどん恍惚の表情につ！」

トリップという意味では間違っていない

ようやく自分が危険行為を行っていたのに気付いたのか馬岱ちゃんは慌てて手を離す

い、今のうちに袴を上げておこ

「やれやれ会えて嬉しい気持ちはわかるがいささか焦りすぎだな、こついう場合は雰囲気が重要なのだぞ」

助け船を出してくれた女性が寝台の隅に腰掛けてしなだれかかってくる

「随分と久しいですな、主。この時を一日千秋の思いで待っておりました」

「ちよ、趙雲さんまで……まさか俺、蜀に捕まってるの？」

ありえない話ではないけど、それだと春蘭や袁術の安否が気になってくる

まんまと蜀と袁術軍を戦わせる事に成功させた今、俺達は蜀にとつて怨敵に違いない

まさか夙達と合流したのは夢だったとか？

不安に襲われ尋ねようとすると趙雲さんは可笑しそうに口元に手をやる

「捕えるとは心外なご感想。そのような乱暴なマネをするはずがありません。長坂橋の事件で貴方の存在を知った我らがここまで馳せ参じているのです。席を外しておりますが恋と陳宮殿も随行しておりますよ」

「恋とねねがいつしよって事は……」

「はい。この場所を見つける直前まで恋が黙っていましたから知りませんでした。既に事情は聞いております。主の事情、使命、そして過去の記憶の事も……」

「記憶………もしかして君は過去の事を……」

「はい、このたんぽぽも含め、蜀には主を忘れている者はありません。ですから君などといつれない呼び方はお止めください。以前のように星と、我が名を呼んでください」

口元に当てていた指を俺の唇に重ねる

「主が忘れていたのならもう一度名乗りましょう。我が名は趙雲
字は子龍 真名は星。過去に貴方と共に乱世を駆け、命も含めた全てを捧げていた者です」

もう一度指を自分の唇に這わせ、真っ直ぐ視線を投げかける

曇りない眼とはこの目の事を表すのだろうか

彼女の言葉は重く、俺には勿体無いが今までと同じようにどこかの気持ちに心当たりがあった

記憶は無くとも、感情が再会を喜ぶ

吸い込まれそうな瞳を見据えて俺は無意識に言葉を返した

「……………命まではかけてほしくないな、星」

一瞬、ハツとなった表情を浮かべるが趙雲さんはすぐに表情を戻し、微笑む

「それは承服しかねますな。我が無二の主よ。既にこの身は愛も魂も貴方にかけているのですから」

馬岱ちゃんの時とは違って、慈しむような抱擁で首に手が回り密着される

この体勢じゃ顔は見えないけど、なぜか彼女が少しだけ泣いているような気がした

「ああー！ 星お姉さまずっるーい！ 抜け駆けだあー！」

負けじと馬岱ちゃんも再びこちらへダイブ

またもやハグされまくってしまふ

どうやらこの娘達は過去の記憶が戻っているとみていいんだろう

心に安堵を感じ、二人一緒に頭を撫でると趙雲さんは恥ずかしいの

か身を擦っているけど、胸元にいる馬岱ちゃんのせいですがま
まになっっている

しばらくそうしているとなんだか幸せな気分になって頬が緩んできた

こつこつ甘々な展開今まで無かったからなあ

すごい癒される

エロは無かったけど萌えはあった今日この頃

「……………完全にワシを除外するつもりか。良い度胸じゃのう」

まだ居たかアロウンに仕える賢者

女の子特有のふよふよした感覚を名残惜しみつつも顔をそちらに向
ける

「出来れば関わり合いたくないが、そもいかないんだよな？」

「とことん失礼な奴じゃな。まあ良い、これがツンデレというもの
じやろつて。その通り先も言ったがワシは貂蟬から言伝とお主を手
助けしてくれと頼まれておる。我が弟子たつての願いとなれば聞か
ぬわけにはなるまい、存分に力を貸してやろつぞ」

「俺への感想は極力どうでもいい。用件、言伝の内容を先に教えてくれ」

変態への対処は簡単に済まずに限る……感謝はしてるけどさ

「むっ！、一瞬デレの気配を感じたがお主やはり……いや待て、なぜ娘つ子どもが身構える」

二人が振り向いて卑弥呼相手に敵意を飛ばす

「ご主人様は渡さないからね、この変態！！」

「そうだとも。主の性癖を問うつもりは無いが、ここは我らに譲ってもらおう。……後は主の懐の大きさ次第だが」

「待つんだ星。君は俺が同性愛を容認できる人間だと言いたいのか」

背後になぜか二人の小さい軍師が見えるのは気のせいだろうか？

はわわ。

言いたい事は山ほどあるが話が進まないなので先を促す

「内容はいくつかあるが、まあ今は関係あるものだけを話しておこう。お主が置かれている状況も含めてな」

変態は時々、妙に人が良いから困る

卑弥呼の話はこうだ

現状として俺はあの長坂橋の事件後、華琳と合流した風達に助けられたところで倒れてしまい、寝たきりのまますでに三日が経過したらしい

目立ったケガをした覚えは無いけど卑弥呼の連れに医者がいるらしく、彼の診断によると普段からの疲労が重なり急に気が抜けて体が一気に休息を求めた結果、目が覚めなかったという

確かに最近仕事や訓練が多くてあんまり寝てなかったし無理が祟ったって事なんだろう

心当たりを言ったらなぜか女性二人が「またまたー」みたいな顔をしていたのはあえてスルーした

ちなみに風や風達は偶々席を外しているらしい……なぜ微笑む馬岱ちゃん

で、一番重要な貂蝉からの言伝の内容はかなり深刻な事実を含んでいた

脇に控える趙雲さんと馬岱ちゃんに聞かれるのを一瞬躊躇ったが、秘密を打ち明けずもう煮え切らない態度を取らない為に過去の記憶といった全ての事情を説明し、そのまま聞いてもらう事にした

左慈を止める為に必要なファクターが足りない、それが無ければこの外史は必ず滅びてしまう

そう、外史には寿命ともいえる物語の終端が必ず存在する

世界が役目を終え、崩壊とともに幕が下りる不可避の現象

貂蟬はそれを見越して新たな世界を創造出来るよう今まで手を尽くしてくれたらしいが、どうにもおかしいらしい

必然である世界構成の鍵、ファクターが 最初から 存在していない

このままでは世界が物語を終えてしまった瞬間、誰も彼もが生き残れず正史から断絶される

いまだ貂蟬が現れないのはいまだ搜索を続けている為、卑弥呼が出てきたのはその肩代わりだそうだ

「ワシの場合は別件も兼ねての干渉だな」

「別件？ 難しい問題じゃなければ手伝ってもいいが……」

助けしてくれるというなら、変態といえど協力は惜しむわけにはいかないだろう。それが礼儀ってやつだ

「やはりデレ……………ええい三人揃って睨むでない、至極まともな目的じゃわい。……………ワシは今、とある『鋼』を探しておるのじゃ」

「鋼って……………観測者であるお前が探すぐらいだから結構な代物なのか？」

「うむ、ワシが捜し求めているのは炭素含有量の多い希少なものでな。それを使って刀を打ちたいのじゃ」

「刀って……………打てるのか？ この時代に製造技術はまだ無かったと思うけど」

あっても大陸と同じ鑄造の剣だろう

「片腹痛いわ。ワシは卑弥呼。日ノ本の技術なら過去未来全て習得済みじゃ。不可能など無い！」

「……………そうか。それでそっちの手がかりは有るのか？」

「ダーリンとともに探してはおるのだがな。許昌辺りで一度売られたらしくその者に会って譲ってもらおうとは考えておる」

「どんな人物なんだ？ なかなか難しそうだが……………」

「なにやら乳の大きい童顔の娘っ子が買っていったらしいが心当たりは無いか？」

「ん……………」

さすがにそれだけだと判断に困るな。大きい胸が特徴だって穏と比べたら大概の人は小さく見えるし、童顔の子は山ほど居るしなあ

悩んでいると卑弥呼は何を思い出したのかカツと目を見開いた

「そついえば貴様。刀を使うらしいが居合いや中段構えやら動きに一貫性が無いようじゃな。流派はなんという？」

「む？ それは私も興味がありますな。相手がたんぽぽとはいえ一介の武将を手玉に取る実力。どのようなものでしょう」

「別に大したものじゃ……………って……………あつ、痛たつ……………うそうそ、大

した事あります！馬岱ちゃんが負けてもしょうがありません！」

謙遜のつもりがプライドを傷つけたのか抓られてしまった 地味に痛い

「いてて……一応小さい頃に祖父から習ったのはタイ捨流だけど、今は正道剣術しか使っていないぞ。居合いはあれだ、格好良かったからそこだけ教えてもらった」

まさかこの世界で必殺技扱いになるとは夢にも思わなかったが

「随分と節操が無いのう、まあ良い。タイ捨流に心得があるワシが直々に指導してやるうぞ」

「本当か？ 嘘だったら性質が悪いぞ」

「侮るなよ小僧、いやバカ弟子よ！ だから貴様は阿呆なのだ。かつては日ノ本不敗と呼ばれたこのワシがつまらぬ嘘など突くものか！」

こいつ素手で機械獣を倒した事あるだろ

「だったらよろしく頼む、……………俺は自分の手で奴と決着をつけたいんだ」

撫でていた手をぎゅっと握り締め決意を新たにする

まったく手が出せなかった長坂橋の対峙、あそこで自分の未熟さを思い知ったんだ、だから俺はもっと強くならなくちゃいけない。心も体もだ……

「ならば私も主も訓練に付き合いますよっぞ」

「たんぽぽもー！」

「二人とも……」

「正直、主を前線で戦わせるのには抵抗がありますが、そこまで強い意志を持っているのでしたら文句は言えません。全力で手助けさせて頂きます」

さっきと同じ迷いの無い瞳に感謝の念が絶えない

でも待てよ？ まだ重要な質問をしてなかった

「趙雲さんって蜀の武将だろ？ そもそも俺の傍に居ていいのかい？」

当然の疑問に気付き聞いてみると、抱きついていた彼女は突然居住まいを正したかと思うと寝台の隅で正座の姿勢を取った

「こほん………主に抱かれ続けるのも一興ですが、ここからは真面目にお話すべきですな……この世界における蜀の現状と、我らがここに居る理由を」

迷いの無い瞳がこれまで以上に真剣さを増してこちらを見据える

それに釣られてか馬岱ちゃんも反対側で同じように真面目な態度で座り込む

「先も言いましたが蜀の者は皆誰一人として貴方様を忘れておらず、記憶が戻った当初から各地で搜索を開始しておりました」

横でうんうんと首を振って頷く馬岱ちゃん

「ですが再会は今日この時まで適わず仕舞い。洛陽の騒乱、泗水関では敵将としてのお姿をちらりと拝見しただけでその後の消息はどうしても掴む事ができませんでした」

確かこの時は干吉が姿を消して雪蓮と助けに来てくれたんだっけ

「それより数カ月後に主の居場所が知らされた時は驚きましたぞ。恋の時はいざ知らず、まさか呉の将として身を立っているとは予想外も良いところでしたな」

「しかも変な格好して人気者になってるしー」

そこは触れないでほしいなあ 触れられたくない過去ってやつだ

「後で折檻だな、たんぼぼよ」

「何で!?!」

同時に突っ込むが趙雲さんは答えてくれない。そのまま話は進む

「そしてその情報が入った時、すぐにでも主を迎えに行くべきか、国家の地盤を整えてからにするかで大分揉めましてな。話し合いの末、まず国力を高め、天下泰平の為の足がかりをしっかり整えようという結論に至りました」

自分で言うのもなんだけど確かに俺個人と大陸の平和を天秤にかけたらそりゃあ国として後者を取らざるを得ないだろう

しかもこの時期って華蝶仮面としての噂が先行してたから本当に北郷一刀本人か判断付きにくかったんだろうな

「ですがそれが原因である異変が起きてしまいました……愛紗、つまり関羽が主と再会したいが為に乱心したのです」

「……………穏やかじゃないな」

「はい。本人からしてみればただ純粹に会いたい一心なのでしょうが、どうにも手段がまずい。あれの兆候は泗水関の頃より感じていました。愛紗は諭す我らに武器を取り、力づくで押し退けようとしたのです。主への忠義はそんなものか、と」

「あの時の愛紗ね、まさに鬼そのものって感じだったよ」

「なんとか押さえるのには成功しましたが愛紗はその後情緒不安定になりました。な、事ある度に御主人様、ご主人様と呻くような素振りばかりするのです」

「それにねこつちがご主人様の話をするとものすつごく反応するんだよ」

「ですから私はもし次に再会する機会があるのならば、愛紗が落ちてくまで逆にお傍に付こうと考えておりました」

「たんぽぽ達は会いたいから来ただけ！」

右手を天井へ大きく突き上げて自己アピール

「って事は、今回の件は蜀公認？」

首を傾げるとまたも趙雲さんは破顔し、笑い飛ばす

「まさか。此度の行動は完全に独断。今頃は四人もの将が居なくな
っててんやわんやでしょうな。はっはっは」

「おいおい。仮にも五虎大將軍の一人が言うセリフじゃないだろ…
…」

「よろしいではないですか。結果として主の真意に気付けたのです。
無駄な行動ではありませんし、あの場に居た紫苑ならばうまく事後
処理をしてくれるでしょう」

「でもこれから蜀は袁招軍と戦争するんじゃないのか？ 戦力差が
あんまり無かったはずだから苦戦すると思っただけど」

その状況で実力も知名度も高い恋と趙雲さんが抜けるのは蜀側にと
ってかなり痛いはずだ

兵の動揺もあるだろうし

「そちらは心配ありませんよ。既に北方の勇、馬騰殿。盟友である
白れ…公孫贊殿が共同で遠征した袁招軍のスキをつく手はずになっ
ています。まず負ける事は無いでしょう」

「……あー、そこらへんも最初から計算済みだったって事か」

「はい。もし攻め込まれても即座に対応できる策を用意しておく。我らの軍師は優秀ですから」

「馬騰様とか二人とも協力してくれてよかったよー」

「ま、そういうわけでこれからは主の下にお世話になるつもりです。以後手足のようにお使いください」

「不束者ですがよろしくお願いしますっ！」

同時に頭を下げ、恭順を示される

これほどまでに強い彼女達の思い。俺はしっかりと受け止めなくちゃいけないんだろう

背筋を伸ばして精一杯の誠意を表した

「たぶんこれからは過去の記憶とは違う事件が数多く起こるはずだ。それは世界の終わりに関する問題、放っておけば全ての人間が不幸になってしまう。だから」

俺も彼女達同様に頭を下げた

「力を貸してくれ。星、たんぼぼ。俺には君達が必要だ」

額が布団に着く位深い姿勢で土下座をすると、星はそつと俺の手を握って体を起こしてくれた

「頭を下げてしまうのがいかにも主らしいですな。ここはもっと尊大に構えても良いところですよ」

「でもそういう謙虚なご主人様も大好き！」

繋がれた手のひらにたんぽぽの手も重ねられる

「今後ともよろしくな」

「はい。何処までもお供致しますぞ」

「たんぽぽ頑張っちゃうんだから！」

「……………ここで水を差す程無粋では無いぞ」

誓いも新たに仲間が増えた北郷一行

これより待ち受けるのはどんな事件か

明日をかけた戦いが今始まる

ボタンっ！！！

「隊長っ！！」「ご無事ですか！」

感動のシーンを突き破って部屋に闖入してきたのはなぜか葉っぱまみれの凧

すごい息切らしてるけどなにかあったのかな？

「げっ。もう抜け出てきたんだ……もうちょっときつく結んでおけば良かったかな？」

「あああっ！？ やっぱりここにいたな馬岱！ あれほど療養中の隊長に近づくなと言っておいたのに！ しかも趙雲殿まで！」

……… 最初の方の笑い騒いでたのに誰も来なかったのはこのせいか

「曹操殿が許可するから特に拘束もしてなかったのに……仕方ありません。ここは一度灸を据えた方がよさそうです」

凧の両手に気が収束していく

「待った！ 待つんだ凧！！ 星とたんぼは純粹に俺を心配して………」

二人を庇うべく制止の声をかけると凧は一瞬動きを止め、冷たい視線で口だけを動かす

「そうだ隊長。先に用件だけを伝えておきましょう。無事お目覚め

できて大変嬉しく思います」

「あ、ああ、どうも」

なぜか汗が頬を滑り落ちる

「それと曹操殿が気がついたのなら外に一人で来るようにとの事です。早めに行ってください」

ならなんで後ろ手にドアを閉めるんだろう

「自分の用件が済んでから」

気がつねり、螺旋の球へと形状を変化させる

「…………… 凧さん、あのね」

「随分と仲がよろしいのですね…………… 真名を呼ぶほどに」

「…………… 予定調和ですな主」

「いつも通りだねご主人様」

さっきまでの忠誠が行方不明だ

「すまない凧…………… 多分あと二人増える」

球が大玉になった

以外にやきもち屋さんな凧ちゃんは氣弾こそ撃たなかったが、しこ

たま説教された

その後で一人華琳の元に向う

そこには珍しい組み合わせ

華琳と恋がセキトを挟んで会話していた

長坂からの帰り道

目覚めてみれば見知らぬ天井

首を回せば見知らぬ顔ぶれ

されどこの出会いは必須の条件

懐かしき仲間は新たな道を指し示し

後を残すは魏の霸王

二十四話 平原への帰路 新たなる問題と仲間（後書き）

愛紗はいわゆるヤンデレ化してます。

..... 監禁までなら作者は許容できる

次は恋姫達の事情 魏編です

別離の果て再会した華琳はどんな姿を見せるのか

作者のやりたかったとこだし

ぬるりといくぜ

二十五話 恋姫達の事情 魏編 Side 曹操

風の説教もそこに寂れた宿から外に出る

「んっ……」

空は蒼天、雲も無く

手をかざして見上げてみれば視界一杯に青空が広がる

「んー、良い天気だ」

両腕を上には伸ばしてつま先立ち、三日間寝たきりだった体をほぐす

どうせ今行っても華琳の事だ、遅れて叱られるのは確定してるし、
ここは開き直って短い平穩を謳歌しよう

場所指定されてないし 多分春蘭いるし 絶対命狙ってくるし

若干へこみながらストレッチを開始する

筋を伸ばして間接をパキパキ鳴らせると気持ち良いんだよな

宿の庭先でしばらくそうしていると聞き慣れない男の声と見知った
声が近づいてくる

「おお！ ようやく目が覚めたのか。良かった良かった」

赤い髪で白衣風の装いをした青年の後から軍師二人が顔を出す

「まったく人騒がせな人ですね。……あまり心配させないでください。その……あくまで風がですが…か、勘違いしないでくださいね」

「「ツンデレ乙」」

「二人とも！」

真っ赤になって怒る稟の前でしてやったりと二人でハイタッチ

その勢いのまま風がぴとつと脇に張り付いてきた

「お元気そうだなによりですお兄さん。無事目的を果たす事ができましたね」

上目遣いで目を細める風、うーん最近ギリアウト勢によく懐かれるな

「それもこれも君達のおかげだよ。…ありがとう、風、稟」

頭を撫でるかわりに顎をくすぐってやる

「はふ…。なかなかつぼを心得てますね。良きにはからえー」

ごろごろと嫌がる様子も無く喉を鳴らす

「礼など要りません。私達は策を労しただけで命をかけるほど頑張ったのは貴方でしょう」

稟はまだ少し赤い顔のまま恥ずかしながらも褒めてくれる

今回の働きのおかげか長坂橋に入る前の怯えた雰囲気は感じないな
前回と違って種馬とかの妙な先入観が無い分態度が柔らかくなつて
るし 良い兆候だ

照れ隠しにメガネの位置を直す仕草がすごく可愛い

思わず笑いかけると更に首を背けてしまう

「はははっ、仲が良いんだなお前達」

そんな俺達を愉快そうに眺める青年は一人頷く

「？ そっぴや聞き忘れてたけど君は誰なんだ？」

「おおっ！ 俺も名乗り忘れていたな、すまない。俺の名は華佗。
五斗米道を継承した流れの医者だ」

「もしかして卑弥呼が言っていた医者ってのは……」

「俺だな。気を失った君と負傷した夏侯惇殿を治療させてもらって
いる。あまりに起きないから心配したがその様子なら回復は順調の
ようだな」

安心したとばかりに片手でガッツポーズ、体育会系のリアクションだ

そうかこの人が卑弥呼のダーリンだな。………かわいそうに。横文字
の意味が分かったら卒倒するかもしれない

「おかげさまで大事無いよ、ありがと。それと悪いな迷惑をかけて、卑弥呼達のせいで苦労してるだろう」

「なに特に問題は無いさ。俺も医者として当然の行為をしているだけだからな」

まさに好青年といった健やかさで言い放つ

「それと医者としての所見を言わせてもらっぞ。夏侯惇殿のケガはともかく君は疲労が重なって倒れたんだ、これからはあまり無理をしないように心がけてくれ、体力の低下は万病の元だぞ」

「そこはまあ、適当に折り合いをつけるさ。それより夏侯惇のケガってどの程度のものなんだ？」

脱出時もその後も気絶やらで結局どこにキズを負ったのかも知らなかった

話し振りからして命に関わる問題じゃなさそうだけど嫌な予感がする

「外傷は深くなかったからすぐにでも直ると思うんだが、その、失った左目までは治療出来なかった……」

「……………そうか」

的中、してしまった

場所と時期は違えど、彼女はまたも光を奪われ隻眼となった

もっと早く俺が駆けつけていれば未然に防げたかもしれない

後悔の念が胸中で渦巻く

「落ち込まないでくださいお兄さん、どうあっても阻止できない事態は必ずあるものなのですよ」

「風の言うとおりです。そもそも貴方がいなければ命自体無かったのですから、ここはむしろ幸運だったと無理にでも解釈したほうが良いでしょう」

傍に居た二人が落ち込んだ雰囲気を読んで慰めてくれる

……そうだな。ここで悔やんでも状況は変わらない

俺は俺にしかできない事を成し得て彼女に報いよう

「夏侯惇殿といえは、さつき異様に怒りながら君を探していたが何かしでかしたのか？」

「……………心当たりはあるな」

「なら早く会ったほうが良いだろう。ケガを未然に防ぐのも医者のお務めだからな」

このままいけば負傷確定か……………嫌なお墨付きだな

「……………はあ、覚悟を決めて会いに行くか」

いまだしがみ付く風をやんわり引き剥がして溜息をつく

「頑張ってくださいねー。残念ながら風達はまだ華佗さんに稟ちゃんの鼻血解決のご用があるので協力できないのです」

「まあ自業自得だと割り切ってやってみせるさ」

「ご愁傷様です、やっぱり星ちゃんの言うとおり、お兄さんは良い意味でも悪い意味でも女性にもててですね」

「同意。旅をしていた頃の沈着冷静な彼女があんなにも乙女な表情をこの人に向けていたんだから、それだけ器が大きいとも言えるわ」
過大評価な気もするなー

眠っている間に顔なじみである彼女達の再会は終わったらしい

「ではお兄さん、命があつたらまた会いましょう」

「ん、後でまたな……ってそうだ」

とっさの思いつきが頭に浮かぶ

「私達に夏侯惇殿の相手はできませんよ」

「そつちじゃなくて…風、セキトのプリンカー…変装用の仮面持つていったろ」

風の説教中そんな話があつた気がする

「はい。確かに持っていますけど何でしょう？ 格好いいので改造して風のにしようと思ったのですが」

「悪いけどさ、返してもらえるかな。ちょっと使いたいんだ」

首を傾げられるが特に抵抗も無く、懐から出されたプリンカーを受け取る

「ありがとう。じゃあちょっと準備してから行って来るよ」

急がないといけないのは分かっているけど、一度宿に戻って細工をしておこう

「いってらっしやい北郷殿」

「いてらー」

「くれぐれもケガはするなよ」

三人の送り出しを受けてこの場を後にする

うまくできればいいんだけど…

小一時間ほどしてようやく準備と華琳の発見ができた

宿からちよつと離れた木の下でセキトが繋がれ、向かって右側に華

琳、春蘭、秋蘭がその反対側に恋がいる

珍しい光景だな、恋と華琳が顔を付き合わせているのにもとにかく、いつも一緒なねねがここにいない

……あつ居た。しかも桂花といっしょに木の陰でなぜかビクビクと顔だけ覗かせている

もしかして怖いのか？

怖いよなあ

確かにこの場にいる全員が特Aクラスの闘士レベルだし、気持ちはよく分かる

……そこに今から分かって突入するんだけどな

「おい探したぞ曹操」

覚悟を決めて手を振りながら近づく

「……あら」

「……む、北郷殿か」

「貴様っ！今頃のこのこと来おってからに！」

「……ご主人様」

四者四様の反応が返ってくる

片目が包帯で覆われた春蘭なんかはすでに戦闘態勢だし、正直このまま逃げ出したい

「華琳様をお待たせするとは何事だ！ さっさと来い！」

ほらね。逃げたらもっと酷い目に合わす、そんな気配がピンピンする諦めて歩み寄っていくと誰よりも早くアプローチしてきたのは春蘭ではなく恋だった

「……………ご主人様」

恋が俺めがけてダイブ

セリフは変わらないけど口調は重く噛み締めるように、ぎゅっと抱きつきながらの一言が胸を打つ

「また会えたね、恋。長坂では助かったよ」

「ん……………役に立てて良かった」

感謝の気持ちを通つ直ぐ伝える

この子と触れ合うのも随分と昔な気がする

頭の触覚ごと髪を撫でつけるともっとしてくれと言わんばかりに更に密着してきた

本当、甘えんぼな娘が多いな

思わず癒されているとなぜか感心するような驚きの声がかかる

「……あの呂布がこつも懐くとは……先程までの態度が嘘のようです
すね」

「……北郷だからではないかしら。女の扱いは得意らしいじゃない」

「どうやらさつきまでの恋は華琳達に良い印象を持っていなかったらしい」

「以前は敵同士だったし、当然といえば当然か」

「出来れば仲良くしてもらいたいただけだな」

「なにをイチャついておるか！ 貴様は華琳に呼ばれて来たのだろ
うが！」

春蘭が激昂した口調で指摘してきた

「分かってるって、そう急かさないでくれ」

諦めの境地からか存外な言葉が出てしまう

当然それを春蘭が聞き逃すはずはなく、彼女の怒りが瞬間沸騰する

「それが遅れてきた者の態度かっ！」

「うおっ！？」

こちらに食ってかかろうと手を伸ばすが、それは一瞬で阻まれてしまふ

「うぐっ!？」

「やめる……………」

手を掴んだのは恋。同一人物とは思えないほど冷たい声色で、顔も振り返らずに受け止めてみせた

「ぐっ、離せ呂布!」

「ご主人様に、手を出すな……………」

ぎちぎちと掴んだ手を捻り込む

「あぐっ!」

「スッ、ストップ! 止まるんだ恋! 大丈夫だから危害を加えないでくれ!」

「……………でも」

「守ってくれるのは嬉しいけどさ、ここは遅れてきた俺が悪いんだ。彼女に非はない、だから離してやってくれ、な?」

「……………分かった」

若干の間を経て、ようやく掴んだ手を開放してくれる

「すまないな夏侯惇。うちの子が粗相をして、ほら恋も」

撫でていた手で恋の頭を緩く押さえつけて謝らせる

「……………悪かった」

言葉だけとはいえ恋の謝罪は珍しい

「ちつ、とやかに言うつもりは無いが部下の手綱くらいキチンと握つておけばバカ者！」

許してくれたのか怒気を収める春蘭

でもそのセリフは如何なものだろう？

君の上司が耳が痛いといわんばかりにこめかみを押さえつけている

秋蘭にいたっては姉を傷つけられたおかげか目線がかなりキツイ

のっけから雰囲気が悪いな……………よし、いきなりだが用意してきたモノを渡して空気を濁そう

「夏侯惇。おわびってわけじゃないがコレを受け取ってもらえないか」

「おわびだと？……………何だコレは？」

手渡したのは眼帯

蝶をモチーフにしたプリンカーのアクセサリ部分を外して紐で結わえた品だ

完成品はちょうど過去の春蘭が付けていた眼帯とほぼ同じ意匠で我ながら良く出来た偶然だと思っ

「眼帯。似合うと思っただけど、どうかな？」

「な、なぜこんなものを都合良く……いや、悪くはないんだが……」

「じゃあ貰ってくれる？ 良かった。手作りだからボロはあるかもだけど一応不器用なりに頑張っただ」

真っ直ぐに彼女を直視し、見つめる

眼帯に寄せた視線は俺の注視に気がつき、目と目が合う

サプライズに余程驚いたのか、ゆっくりと頬が明るい朱に染まり、口元がふるふると波打つ

「て、手作りだと!？」

「ああ君の為を想って作ったんだ」

「わ、わたしの………っつ!」

慌てふためきだした春蘭はあちこちに視線を彷徨させた後、咳払いを一つしてから眼帯を装着してくれた

「ま、まあ貰って困る代物では無いし、おわびというなら致し方な

いな、うん、仕方ない」

何度も位置を直しながら一人頷く

良かった。喜んでもらえたみたいだ

ここで変に過去の記憶を出したり、引き目を感じた発言をしたら、怪しまれて素直に受け取ってもらえなかったかも知れないからな

「秋蘭っ、どうだ!」

バツとにこやかな顔のまま振り返り、秋蘭に見せ付ける

「あ、ああ……………似合っているぞ姉者……………」

「そうか! 似合っているか! うむ、主にどのあたりだ!」

「いや、その……………なんだ。……………姉者なら何でも似合つと思つぞ……………」

「そついつのを聞きたいんじゃない! もっとこつ……………色々あるだろ!」

「む、むつ……………難しいな」

「さあっ!」

ご機嫌な春蘭は怒りも忘れて秋蘭に詰め寄り、細かい感想を聞き質している

うーんあんなに喜んで貰えるのとは嬉しい誤算だな

夏侯姉妹が眼帯談義に花を咲かせていると、彼女達の主である華琳が、はあ……とあからさまな溜息をついた

「北郷………あなたはこの子まで自分の傘下に引き入れるつもりなのかしら」

「？ どういう意味だ」

「どうもごうも目の前で春蘭を口説いているのはあなたでしょう」

「くどっ！？ そんな気は無いつての！」「」

「信じられないわね。そういう思わせぶりな態度で色んな女を泣かせてきたのではなくて？」

顎を上げ、ほんの少し見下したような視線が突き刺さる

酷い言いがかりだ

幸い渦中の人物は妹との会話に夢中でこちらに気がついていない

もし聞かれていたら間違いなく斬りかかってきたはずだ

「これ以上、私が目をつけた人材を取られるのは癪なのよ。ここに居る呂布もそうだけれど、郭嘉も程？ も物好きというか男の趣味が悪いわね」

「……………あれ？ 風と稟は君に仕官したがってたから、連れて行けば喜ぶと思うんだけど……………」

「とつくの昔に断られたわよ。世界が変わっても相変わらずの女殺しね。ある意味安心したわ」

「世界って……えっ？」

「あら？ 驚いたのかしら。貴方の行動と新しい退却進路を知らせに来た楽進達や趙雲の話を推測したのよ、私が以前見た夢は過去の記憶だろうと。そう信じていなければ趙雲や呂布を野放しにするはずないじゃない」

「……………」

時期はともかく、以前って事は長坂での一件ではすでに俺の存在に気がついてるんだよな

だったら何であんな態度を取られたんだろう

魏の一員として生きていたあの頃からは考えられない拒絶ぶりだったぞ。確かに俺の言い方が悪かったのは有る。彼女の誇りを傷つけてしまったのは俺の落ち度だ。でも何だろう、この違和感は……

本質は変わっていないのに、まるで彼女を知らない誰かに感じてきた……

衝撃の告白に暫し放心しながら物思いに耽っていると、華琳は痺れを切らしたように口を出す

「じれったいわね…貴方にも過去の記憶があるから、わざわざ私を助けにくるなどと言い出したのでしょうか？ でなければ顔も合わせ

た事の無い相手を救う理由に説明がつかないじゃない」

「え……いや、だってさ……それにしても態度が辛辣過ぎやしないか？前はもつと柔らかかった気がするんだけど……」

「あのね……分かって言ってるの？この世界じゃ私は貴方には負けてないの。以前のような捕虜ではないのだから恭順を示すはずがないでしょう。いつまでも大陸の覇者気分でない事ね」

ふんつと鼻を鳴らして、顔を背ける華琳

……ますますもって話が分からなくなってきたぞ

華琳が捕虜？俺が大陸を制した？………まさか……

「なあ、確認なんだが君の記憶だと俺は一体どんな立ち位置だったんだ？警備隊長だったり軍師だったりしてないか？」

俺の質問に眉をしかめて「何言ってるの？」なんて返してくる

「貴方は王でしょう、自らの名を冠した『北郷』の国主。今で言う劉備の立場になるのかしら………北郷？」

「………詳しくその話を聞かせてくれ」

違和感の正体はこれだったんだ

そこから俺達は互いに持つ記憶を擦り合わせていった

天の御遣い・外史・三国・大戦の終結

そのどれもが俺の記憶とは異なる事実を含んでいる

俺は劉備のいわば代役として蜀軍を率いて、孫権や華琳と大陸の覇権をかけて争い合っただけ

間違いない。

華琳の記憶はこの外史に降り立って直ぐ貂蝉から説明を受けた、経験したはずの四つの記憶。その内突端となった始まりの物語だ

「……なるほどね。こちらの予想以上に入り組んだ問題のようね。でもまあ、ふふっ、あの北郷が私の配下として働いていたなんて、実感はないけど少し胸が空いたわ。だからここまで来ていたのね。随分な忠犬ぶりじゃない、それに免じてこの前の無礼は不問にしてあげましょう」

彼女曰く、怨敵ともいえた俺が恭順を示していた事がいたく気に入らな

だが機嫌が良くなってきたと思いきや、またも表情が曇っていく

指を口元に当て、なにかに思いを巡らせている

「これで話は理解できたけど……なるほど。私達はまだ左慈の掌で踊らされているという事ね。ふんっ、忌々しい。前の決戦でしっかり止めを刺しておかないからこうなるのよ」

「それに関しては記憶が無いから、素直に謝れないけど……もう一度確認させてくれ、干吉は左慈の仲間なのか？」

一番気になった疑問は俺をこの場にけしかけた人物の詳細だ

「間違いないわ。あいつはこの私に怪しげな道術をかけて魏を崩壊させた張本人。あれがなければ運命はいくらでも変わったでしょうに。」

忌々しげに唇を噛む華琳を尻目に、ふつつつと俺の胸中に焦燥感が浮き上がってくる

平原に残してきた孫権

彼女は今もつとも干吉の側にいる

華琳の救出が成功しても、あいつらの狙いはまだまだ終わってないって事かよ！

考えたくも無いが最悪、怪しげな道術とやらで操られていたとしたら………つつ！

「悪いっ曹操！俺はすぐに行くよ！」

「……………ご主人様？」

居ても立ってもいられなくなった俺は胸で大人しくなっている恋の腕を掴んで、帰還の準備をしようとした

今回だって間に合ったとは言い難い。出来うる限り早く彼女の元に

振り返る視界がぐらりと歪む

平衡感覚が機能を失い、天と地があべこべになって足場を安定させてくれない

一瞬のブラックアウト

足がもつれてみっともなく腰から滑り落ちる

臀部と、遅れて頭の中にも鈍痛。こんな時に！？ くそっ！

「……………当然でしょう。心労と過労が重なって倒れたのよ。その上三日も動かなかつたのだから急にまともな活動が出来るわけないじゃない」

「そんな事言つてられ……………ないんだっ！」

異常信号を発し続ける体に鞭打ち、立ち上がるうとするが膝が笑って体重を支えきれない

恋が慌ててフォローしてくれるがそれでも体はいう事を聞かず、視界はいまだどろどろと濁ったままだ

「……………」

「行かなくちゃいけないんだ！ 俺は彼女の元に！ 左慈達の思い通りにさせない為に！」

「……………それが理由？」

「そうさっ！ たとえ俺がどうなるうとも、嫌われたってもいい。ただど誰も傷つけさせはしない。それがこの世界での俺の役割なんだからっ！」

こみ上げてきた吐き気さえ無理に押し込んで膝に力を込める

そっだ、俺は！！

「随分と小さく纏まったものね、北郷。」

眼前に立ち塞がる少女は怒りと、失望に満たされた瞳で屈む俺を見下していた

あまりに唐突な発言のおかげで頭が真っ白になる

「前言を撤回するわ。今のお前はかつて私に勝った北郷ではない、まったくの別人。忠犬どころかただの野良犬にも劣る畜生よ」

「なっ……………」

「おまえ……………！！」

一刀が侮辱されるや否や、恋は目の前の少女に掴みかかるうとするが、その手が首にかかる直前、圧倒的な迫力が押し寄せる

「下がれ、呂布っ！」

「!?!?」

裂帛の怒気

天下無双の武が思わず身を竦めるほどの迫力は王だけが纏う覇気に
違いなかった

盛り上がっていた春蘭や秋蘭、陰に隠れていたねねや桂花、セキト
さえも全ての動きを止めて傍観するほかない程の威圧感が場を支配
していく

「……………ぐっ」

「真に主の身を案じるのならそのまま話を聞け！」

一歩前に出た霸王は高らかな声で叱責する

「まだ理解できていないか。貴様のそれは 憐み だと言った意味
が！ 相手の尊厳も考えず、ただ助けるだけの無遠慮な慈悲。それ
が憐みでなくて何と言う！ 何が思い通りにさせないだ。何が役割
だ。悲劇を気取るな！！いまだ自立出来ていない半人前の分際で！」

俺の髪を掴み、無理矢理視線が合わせられる

「違わないだろう。貴様は何の権限も無いただの将。与えられた情
報に翻弄され、駆けずり回る道化だ。それが人を救うだと？ はっ
！笑わせるな。とどのつまり全てはあいつらの手中に収まったまま
与えられた役割をこなしているだけの状態で世界など救えるものか
っ！」

迫る互いの瞳に相手が写り込む

「忠告は一度きり。よく聞くがいい」

「……………華琳」

「その様ではいずれ誰かを失う。そうなりたくなければ己を変えよ。以前この曹孟徳を倒した北郷一刀に届く程に」

「……………今の俺は以前より劣っているのか…」

「そうだ。ただしそれは能力云々の問題ではない、……………思い出せ、貴様を王にたらしめた才覚を。答えはそこにある」

絡み合う視線は万感の意を込めて見つめあう

長坂と同じような叱責

ただ俺の心には以前と同じ気持ちは無く、満たされるような心根が湧き上がる

だって、そうだろう？

口調は変わらないけど、華琳は俺を励ましてくれているんだから

記憶や立場、世界が変わっても、彼女は変わらず道を示してくれた

その期待に応えてみせたい

その一心で、俺は自然と頭を下げていた

「……………」ありがとう。」

「……礼は答えが見つかってからにしなさい。これ以上私を幻滅させないためにも……………」

華琳は身を翻し、歩み去る

「か、華琳様!？」

状況を良く理解できていない春蘭達は一刀との会話を怪訝に思いながらも、慌しく主君の向かった方向に続いていく

覇気が遠ざかり、残された恋と一刀の元にねねが恐る恐る近づく

急変した雰囲気について疑問をぶつけようとするが、恋はいまだ華琳の去った方角を見据えて視線を外さず、一刀はしばらく目を瞑ったまま動かなかった

「一体何なのですか……………」

答える者はおらず、呟きは空を切る

かつての主であり、天の御遣いであった北郷一刀と治世の能臣・乱世の奸雄と呼ばれる曹操孟徳

蚊帳の外にいたねねには二人の間にどんな心持ちがあったのかは知りようも無かった

あの叱責は単なる非難中傷にはとても見えない

ただ自分の与り知らぬところで互いが特別な関係を持っているだろうという直感だけが胸の中で燻っている

だからきつと、これは蛇足なんだろう

この後のお話は、一流の脚本家なら添削するだろうとお粗末なシナリオ本来ならば、一刀が華琳に投げかけられた問いに身を持って答えるのはまだまだ先になるはず、けれどもどこかのおせっかいが気を利かせ、ご都合主義のふざけた幻想を用意した

霸王としてではなく、一人の少女としての再会はいまだ済んでいないからと。

こうして差し替えられた記憶は再び彼女の元に舞い戻り、三度目の逢瀬を実現する

それこそが、北郷一刀の物語。彼が求めるエンディングに欠かせない一コマに違いない

さあ、誰もが幸せになるエンディングを目指す為に、ありふれてはいるけれど必然な再会を始めよう……

二十五話 恋姫達の事情 魏編 Side曹操（後書き）

まさかの前後編

最近話が長くなり過ぎるなあ……

ちなみにこの話と次のお話が地味に一刀覚醒回。

この小説のテーマ一つが消化されます

ほう……。ほう……。ほう……

梟の鳴き声が深夜の帳に木霊していく

辺りは一面闇に染められ、視界にはうつすらと獣道が写るだけ

宿から抜け出した俺は散歩がてら近くの森林に、ほろ酔いにも少し遠い浮ついた気持ちで足を踏み入れる

目的は特に無し、あるとすれば若干の酔い覚ましぐらいだろう

昼間の立ち眩みの一件も含め、風を始めとした仲間達に過度の心配をされた俺は療養も兼ねて、数日この宿に滞在することになった

それならばとたんぽぽが発案した再会祝いの宴会が開催。病人であるにも関わらず、随分と飲まされてしまった

まったく星もたんぽぽも意地が悪いよな、痛がる俺に景気付けだどどんどん酒を飲ませるんだから

ああでも、後半はあまりにも酒を強要される俺を庇って華佗が説教してたっけ

「確かに酒は百薬の長と呼ばれるが本来はその後に、ただし万病の元である。が付くんだ。過度の摂取は毒になるに決まっているだろ
う」

本職に怒られてはさすがの星達も口を挟めず、一旦この場はお開きとなり俺は少し一人になりたい、と付いて来ようとする子を断り、宿を後にした

「考えるべき事はたくさんあるからなあ……………」

すでに呉のみんなに黙って出奔してから一週間が経過しようとしている。干吉の件やらで不安の種は消えず一刻も帰りたい気持ちは大きい、焦って体調を崩し、待ち受けているであろう肝心な場面で倒れちゃ元も子もない

焦る気持ちは当然ある、無責任に残してきた彼女達には申し訳ないけど、それ以上に強く感じる違和感がどうも頭から離れない

干吉は一体何を考えているのだろうか？

華琳の記憶では左慈の仲間だったらしいが、洛陽で救出されて以来、俺の側にいるのにも関わらず彼は特にアプローチをしてくる気配がなかった

それは更なる布石か、それともこちらを侮っているのか

どちらにせよ単なる害意だけで近づいてきたわけではないだろう。もしそうならあの段階で長坂橋の情報や魏の記憶を取り戻させたりはしないはずだ

恐らくあいつは俺が平原に帰還するまで待っているだろう。何かを仕掛ける為に……………」

……………っと、ここで悩み過ぎても駄目だな。これ以上の推測は情

報が少なすぎる

割り切って華琳の宿題でも考えよう

落ちた枯れ木を踏みしめて一人考えを纏められる場所を捜し歩く

「左慈の思惑を越える為に必要な条件、それが俺の才覚とはな」

漠然としては分かるがそれを認めて良いものか判断に困る

もしそれを認めてしまったら、俺の今までの努力は無駄になってしまわないだろうか？

そうやって悩みながらどれくらい歩いただろう

いつの間にか通行を邪魔していた茂みは無くなり、水の流れる音とともに辺りが急に明るくなった

俺は足を止め、見惚れるような光景に思わず息を漏らす

「……………小川、か」

空の頂点で月が輝き、数え切れない星の光が開けた小川を照らす、そのおかげで明かりも無いのにこの場所が一段と明るく見える

川は幻想のように美しく流れ、きらきらと朧な月を反射させながら煌く、心地良い滝の音が耳に響く絵画のような世界

一歩踏み出、し月明かりに晒されると自然と過去の記憶が蘇り、無意識に言葉が出てきた

「ああ……」

ここはまるで、あの時の場所じゃないか……

琥珀の月が青い光を放つこの光景は、細部こそ違えど大陸の霸王となった華琳との別れの場所に良く似ていた

北郷一刀が泣かせた唯一の女性

自覚してしまえば、押し込めていた切なさが加速度的に身を苛んでいく

確かに再会は果たした

けれどそれは自分の心奥底で望んだものではなく、互いの立場越しに交わされたやりとり

当然だ。彼女はあの時の別れを覚えていないのだから

「それも割り切らなきゃいけないのかな……」

ああして出会えただけでも奇跡なんだ、望み過ぎは贅沢かもしれない
一人愚痴り、じりじりと川岸の砂利を踏みしめ、前進していく
と微かに人が身じろぐような物音がした

「……………」

……………いや、まさかな。

音はちょうど死角から聞こえてきていた為、ここからでは姿は見えない

思い切って近づくとそこには、月明かりより鮮明に映る女性の後ろ姿があった

金色で独特の髪型が微かな風でふわりと揺れ、しゃんと伸びた背筋、均衡の取れたプロポーションで腕を組みながら佇んでいる

無言であっても溢れ出るカリスマ。間違いない、華琳だ

でもどうして？

先回りや待ち伏せなんてのはまず考えられない

俺は行き先も決めずここまで辿り着いたんだ。偶然、彼女と鉢合わせするなんてどれだけ確立が低い事なんだろう

昼の一件による後ろめたい気持ちも相まって口から言葉が出ない

気がついていのはずなのに互いにしばらくの間無言で静止していると、どこからか聞こえてくる鼻の鳴き声がやけに大きく耳の中で反響する

思考する事も、喋りかける事も無い静寂の時

なぜかは分からない。けど昼間と違い、彼女と二人きりのこの時間はとても尊いものを感じてしまう

それは不快ではない違和感が冷たい空気を通して伝わってくるから
だと思っ

……どれくらいそれが続いたのだろう

更に時間が経過し、無音の世界に侵食され耳鳴りがしはじめた時、
最初に口を開いたの華琳だった

「そういえばまだ正式に礼を言っていなかったわね」

ポツリと一雫の水滴のように清涼な一言

「……礼って、昼に思いつきり憐みだとか叱られた気がするんだけど？」

「違うわよ。そっちじゃなくて、私が話そうとしているのは春蘭の
件、あの子の命を救ってくれたでしょう？」

振り返らずにそのままの姿勢で語りかけてくる

「確かに貴方のした事は私の誇りを傷つけたわ。でもそのおかげで
切り捨ててしまったはずの部下を失わずに済んだもの、当然の行為
よ」

「……………でも」

「言いたい事は分かるわ。けどね、命そのものと比べれば安い取引
じゃない。片目が無くともまだ共に道を歩めるのだから」

「……………うん。君達ならそう言ってくれと思ったよ」

「当然でしょう？ 私の掲げる霸道は、果て無き王へと至る道。勝ち続けるには多少の犠牲は止むを得ないけど、共に来る者は最大限の寵愛を授けているの。……だから失ったら悲しいに決まっているわ、助けられて礼を述べるのは当然」

少しだけ背筋を伸ばした華琳が、手だけを腕組みから下ろす

「北郷一刀。貴方の働きで部下の命が救われた。故にこの曹孟徳、最大限の礼と感謝を貴方に送ります」

「……………ど、どうも」

以前こちらに顔を向けてはくれないが、気持ちは伝わって来る

ただ、彼女から褒められるなんて久しぶりだから、若干声が裏返って咄嗟の反応がおかしくなってしまうた

以前の関係だったら、偶に褒められるぐらいでこんな態度は取られなかっただろうからな

予想外の展開に息を呑んでいると、華琳は更に言葉を続けた

「だから、礼として貴方に問いかけたものの手がかりを教えてあげましょう」

「……………良いのか？ あれって自分で気付かないといけない感じだったろ、だれかに指摘されてどうこうだと問題あると思っただけ……………」

「それで悩み続けて判断が遅れては元も子もないでしょう。それに

私は手がかりをあげると言っているの、勘違いしないで、答えを見つけてるのは私じゃないわ」

出題者がそれでいいなら問題無いのか？

「いい？まずは貴方の求めるものが何なのか、今までのように他者の情報に踊らされず、自分で立脚点となる目標を明確にしなさい。

……そのために質問するわ、この世界で今迄貴方は何をしていたの？」

言われるままに、自分の今までの行動を思い返す

この世界に再臨し、過去の記憶とともに生きたこれまでの道のりを

……

最初は世界に害を及ぼそうとする左慈を倒すという目標を立てた。けど、どこにいるのか、どんな手段を用いてくるのか、情報はつい最近まで耳に入らず仕舞いで、その間、再会した女の子達と思い出を反芻する日々を送っていた

……それは以前、過去の世界で生きた北郷一刀と同じ生き方だったはず

半分近く、魏においては全てを思い出した俺の記憶の中ではどの国においても似たような行動目標を抱いていたからだ

天の御遣いとして拾われた俺は庇護された勢力の中で与えられた職務を果たし、天下を目指す

……

ああ、そうか……

今までの俺は いつも誰かに 目標を立ててもらって生きてきた

王の配下に登用されたり、軍師の才があるからとそれに従った

けどこの世界では誰も俺に何かを強制したり、願ったりはしていない

だから俺は無意識の内に、自分の道を示してくれる存在が出て来てくれるまで、躍起になって行動する事がなかったんだ

北郷一刀は一人では何も出来ず、左慈を倒すという臆な目標に甘えていたから……

自覚すれば、あまりの不甲斐なさに怖気が走る。あれだけの期待を受けて尚、俺の中身は空っぽだ。朝方、星達に宣言した言葉が無責任なものにしか感じれない

こみ上げる思いに身動いでいると、華琳はもう一度、口調は変えず、励ますように優しく言葉を重ねる

「理解出来たかしら？ 今の貴方のは 自身の理想 が無いの。ただ漠然と目標に向かう走狗のように愚かしくも真っ直ぐに歩き過ぎた。それが私の知っている北郷との違いよ」

なら、以前の、最初の俺はもっと偉大だったのだろうか？

記憶の無い自分には判断が付かなかった

「あの時の一刀は天の御遣いという肩書きを最大限に活かし、大陸を平らげていったわ。始めこそ関羽達に望まれて立志したようだけど、その後の行動は貴方の判断によるものが多かったはずよ。でなければ理由はどうあれ、負けた私は殺されて当然だったもの」

「え、……………いくら何でもそれは無いだろ。勝ったからって命を奪う理由にはならないと思うんだけど」

「大有りに決まってるでしょ！まったく……………敗残の将を生かしておく発想自体おかしいの。殺して当然、それを誇りにしてこそ勇名が高まるというもの。それを疑問に思う言葉が自然に出せるなら、なぜ分らないの？」

「いや、そう言われても困るんだけど……………」

「元は同じ人間でしょうに。なら考えつく行き先も同じはずよ。いい？素直に答えなさい。天下を取るのに邪魔になる相手を保護した理由は何だったのかを」

「それは……………」

「もう少し手がかりをあげましょうか。貴方にもっとも近いのは劉備。義を持って大陸を統べようとしている王。けれどあの子は足元が見えていない。いいえ、見る事自体を避けているわ。一度目に留まってしまうえば犠牲となった人を思い、立ち止まってしまうのが分かっているから。だから理想だけを見据えて、現実を直視しない傾向があるの」

ふつと溜息を一つつく

「それは決して悪い事ではないわ。理想は高い程素晴らしいもの。でもね、優しさと理想だけでは物事はうまくいかない。……それは貴方も自覚しているでしょう?」

「……………ああ」

「それを踏まえて考えてみなさい。……もうここまで言ったのだから、はつきりと答えなさい。己の理想を」

今の俺と過去の俺

北郷一刀と劉備元徳

その違いは?

……………

「まさか……………」

刹那の閃き

この場所に来るまでに浮かんだ、漠然とした発想。あれが答えだとしてもいっただろうか

確かにあれなら華琳の出したヒントに該当している。……どころか、万能的答えになってしまう

「思い当たった? ならそれを己の口で宣誓しなさい。想いは言葉

に、形にして始めて世界に認識されるのよ」

どこか自信に満ちた声色で華琳は先を促す

「……………俺は」

「……………俺は？」

弾んだ声、俺の出す答えなど始めから決まっていると云わんばかりの態度だ

ああもう！こんな子供染みた答えが正解なのかよ

半ば自暴自棄な勢いで宣言する

それは誰もが一度は妄想する物語

そこに至るまでに誰もが諦めてしまうような戯言こそが北郷一刀の理想

つまり、だ。

「俺は、北郷一刀は 全てを望む！ 世界と全ての人を救って、思いを繋げた女の子全員を幸せにしてみせる。そのために犠牲が必要であろうとも、俺は諦めない。認めない。たとえ零れ落ちてしまう命があつたとしても、それを理由にして妥協はしない。……………俺が全てを救い、全てに責任を持つために！」

静寂の小川に響き渡る一刀の声明

そう、左慈を倒すのはあくまで目標だ

一番重要なのは、数多くの人々を救い、思いを繋げた女の子全員を幸せする事

天下を取る理想は空っぽでも、この思い、理想は俺の中で満ち溢れている

例えどれだけ世界と人生を繰り返そうとこれだけは変わらなかったんだ

皆が笑って暮らせる世界こそが、北郷一刀の願い

それを見失っていた

「……………正解よ。一刀」

その言葉と同時に彼女はようやくこちらに振り向いてくれる

月明かりに照らされたその表情は儂さを含みながらも微笑を浮かべ、懐かしむように少しだけ目が細められていた

「この私でさえも諦める、北斗を望むような果てしない理想、それを実現するために貴方はここにいるのよ」

ゆっくりと歩きながらこちらに近づき、言葉を紡ぐ

「戯言？妄言？そんな事は百も承知よ。でもね、それをかつての一刀はそれを成し得たの。桃華と同じような道を進みながらも、誰を排除する事無く、世界を救ってみせたわ。しかも新しい世界を創世

してね」

「……………すごいな過去の俺は」

「今回も頑張れば良いだけじゃない。応援してあげるわよ」

一歩手前まで近づいた華琳は、昼間に見せた威圧感のある態度と違って、過去の、男女の仲になった頃に見せてくれた悪戯好きな表情に良く似ていた

「曹操……………」

確認するかのように字で呼んでみると、明らかに不快な顔を向けられ、ようやくここで思い当たった

なぜ、結論を急いだのか

なぜ、こつも心配してくれるのか

まさかという気持ちに突き動かされ、一度だけ唾を飲み込んで、再度目の前の彼女を呼んでみる

「……………華琳」

「……………正解。真名を預けたのだからそれで呼ぶのは当然でしょ？」

「でもどうして……………？昼間は全然そんな素振りが無かったのに」

「思い出したのはその後よ。……………いえ、正確には思い出させてもらったと表現した方が適切ね。……………はあ、あの時は驚いたわよ、突然脳

内である筋肉達磨が喋りかけてくるもの」

ぶるりと身を震わせながら顔を引き攣らせる

それだけで犯人が特定出来てしまった

貂蝉お前……本当、顔と、体付きと、性格と、存在で損してるよな。同情するよ

「……おかげで記憶が戻ったのはいいとして、もう二度とあんなまねはお断りよ。一応貴方の配下でしょう？せめて迷惑を掛けないよう、手綱くらい付けておきなさいよ」

「今回だけは勘弁してやってくれ。……大分世話になってるんだ」

一度くらい奴の頼みを聞いてやってもいいかも知れない

……内容によるが。

若干の雑談で互いの間にあった微妙な隔たりが取り払われ、ようやく感動の再会といったところで、華琳は焦らす様に頬を緩め、右手の人差し指をこちらに向ける

「良いわ、許してあげましょう。でもその代わりこれから言っ事を実行してみせなさい」

微笑みながらも真剣に彼女は告げる

「国を作るのよ、一刀。己の意思を貫きたいのなら」

「……………やっぱりそう来るよな」

「あら？ 予想出来てたかしら」

「ならなんで先の問いが分からなかったの？ みたいな表情をされるが、ここに来るまでは流石にそこまでは考えてなかっただけで、ちよつとした妄想が広がっただけの回答なんだけどな」

「まあ、昼の段階で王っていう前振りもあったし、だろうとは思つた程度だよ。まさか本当に正解だとは思わなかったけど」

「過小評価は止めなさい。貴方には十分な人徳と縁があると過去の世界から見てもそれは証明されているでしょう。やってやれない事ではないわ」

「いやー……………でもなあ……………」

「一度気が抜けてしまつとつい、対応が鈍くなつてしまつた」

「いや、やらないわけじゃ無いんだけどね、こつ、いきなり話のスケールが大きくなり過ぎて戸惑っているというか…」

「じれつたいわね……………。なら私がキチンと援助してあげるわ、だからもつと自信を持ちなさい！」

「……………えっ？」

華琳はおもむろに腕を組み、顔を明後日の方向へ逸らせる

「分かりやすい照れ隠しだった」

「本来なら兵を再編して独自に麗羽を叩くつもりだったけど、せっかく再会した貴方に野垂れ死なれても困るもの。だから出来る限り側にいてあげるわ」

「華琳……」

「あくまで同士、同盟の類よ。恭順するわけじゃないわ。か、勘違いしないでよね」

月明かりに晒されたこの場でも、横顔にほんのりと赤みが差しこんできたのが分かった

「そして貴方はいつか　　のよ」

「……………え？」

提案と更なる指標に驚き、腑抜けた声が出る

全てを救うなんて大言の後に、それはあまりにも大きすぎる

「い、いくらなんでもそれは……………国を作ること自体、うまくいくのかさえ解らない状態のにそんな……………！？」

思わず反論しようとした瞬間、俺の口元が華琳の突き出した人差し指で遮られる

形の整った端麗な指の感触にどきまぎしていると、呆れたような溜息をつかれた

「……………はあ、言ったばかりでしょう。誓いは覚悟を決めてから口に出すべきだと。自信が無いのなら今は胸の内に秘めて、来るべき時にこそ言葉にしなさい。……………それに」

指が離された瞬間、間近で彼女を見た緊張で気を抜いてしまった俺は、突然の彼女の行動に対処できなかった

「んっ……………」

「!?!」

口づけ、口吸い、接吻

俺の胸の中に納まるように滑り込んで来た華琳から問答無用なキスをされてしまう

啄ばむように重なり合った唇同士が体温を交換し合い、ついと顔を離した表情はいたずらっぽく微笑んでいた

「今はもっと言うべき事があるのではなくて？」

それは年相応の、少し小柄な彼女本来の表情、かつて俺だけに見せてくれた少女の顔

こみ上げる愛しさに身を任せ、問いに答える前に今度は自分から華琳の唇を奪う

「ちよっ……………んっ……………もう……………っ……………」

最初こそ若干の抵抗はされたが、一度興が乗ってしまえば彼女から

も催促するようにキスをせがまれて抱きしめ合う

それはありきたりの恋人同士の逢瀬のように情熱的だった

やがて触れ合うだけでは満足できず、舌を絡めて互いを求め合っている
と次第に華琳の頬が上気していく

「華琳……………」

一旦、唇を離して向き合っていると、真っ直ぐな視線が俺を射止める

「……………一刀」

彼女の背中に回した腕をぎゅっと竦めて体を今まで以上に密着させると、華琳もまた、同じように体重をこちらに傾けて離れないように身を乗り出してくる

顔を背ける事さえ出来ない近距離で、互いの瞳に相手が写り込み、世界にまるで二人だけしかいないような錯覚が押し寄せる

徐々に彼女の瞳が潤み、剥き出しの感情が露わになっていくのが分かる

華琳

名は曹操 字は孟徳

三国の時代に覇を唱え、大陸統一を成し得た王であり、治世、戦技に長けたかつての主君

天の身遣いなんて怪しげな俺を拾ってくれた彼女、共に乱世を駆け抜けた

犠牲を厭わない霸道に反発するものは多かったが、志の崇高さに惹かれてそれ以上に心強い仲間も集まっていた

「ただいま、……………誇り高き王」

「……………一刀」

その気高さは誰もが羨む王の気質、あの時彼女に仕えられて本当に誇らしかった

「ただいま、……………寂しがり屋の女の子」

「……………一刀」

激動の時代を共に生き、仲間達と喜びを共有する中でもう一人の彼女に気が付いた

それは彼女自身、どこかに置いてきた少女として当たり前前の気持ち

孤独な時に伏せられた、誰かを好きになるという気持ち

一度はそれを裏切ってしまったが俺はまた彼女の前に存在できている

もう二度と華琳を悲しませない為に俺は宣誓しよう

想いは言葉に、形にして始めて世界に認識される

「……ただいま、愛しているよ、華琳」

「一刀！」

赤らんだ顔は一瞬でくしゃくしゃに歪み、次から次へと涙が溢れ出てくる

頬は濡れ、畳まれた腕は俺の服を力強く掴んだまま離さない

「一刀！……一刀ッ！」

耐え切れなくなったのか、顔を胸元に押し付けたまま嗚咽を繰り返す彼女に、無言で頭を撫でる

「……ばか………ばかあ！……」

艶やかな髪の毛のほのかな香りに身を委ねて、壊れ物を扱うように優しく髪を梳く

「……もう勝手に消えたりしないでよ、……ずっと側にいてよ、約束を破らないで……」

お願いだから……

その言葉が告げられる前に撫でていた手で彼女の頭を上につき寄せ、いつもとはまるで違う、感情を爆発させた顔

俺は安心させるようにゆっくりと、「ここにいる事を証明するように、口付けを交わす」

空には琥珀の月が見守るかのように佇み、闇のしじまが二人の邪魔をしないよう辺りを包み込む中で

霸王と呼ばれた少女と、全てを救うと決めた青年が互いを求め合う

時代を越え

歴史を越え

運命さえ乗り越えて、二人は再会を果たした。

胡蝶の夢は覚めて尚

愛する二人は惹かれ合う

全てを望し北郷一刀

道を示すは曹孟徳

切望の再会は新たな決心を生み

更なる明日へと道は続く

二十七話 平原への侵入 絡まる関係（前書き）

魑魅蒙昧に関係無い話ですが、
アニメの恋姫見てたら、ここに一刀がいれば……みたいな妄想が止まらなくなつた

なんかこう始めての登場シーンは後ろ向きで、振り返った時、思わせぶりに

「おかえり、桃華……」

なんて言つたりして、桃華は桃華で一刀に一目惚れしたり、璃々ちやんにはお父さん言われたり、それが原因でみんなからやつかみの視線を受けるんだけど結局仲良くなつてしまつたりするとか、エトセトラ。 やつべ、テンション上がってきた。

誰か書いてくれないかしら……

二十七話 平原への侵入 絡まる関係

「良いか。強さへの近道は無いが、そこへ至るまでに自覚しておくべき事がある」

「はい。師匠」

「それは己の技量を見極める事。自分の長所、短所も解らぬ者に成長など見込めんからな」

「はい。師匠」

「今回は時間が少ないから特別に指導してやろう、本来ならワシ自ら、ねつとりと鍛えてやりたいところなんだがのう」

「はい。変態」

「北郷。貴様の長所は 相手の先を読む、先見の勘 ということころだ。これは相手がどう動くか、何をしてくるのかを直感的に感じ取れる先天的な才能じゃろうて。貴様の女共にもてる理由はここにあるのやもしれぬな」

「はい。師匠」

「それを伸ばす訓練をこれからは重点的に行ってもらうぞ。内容は簡単。とにかく様々な種類の戦い方をもつ相手と組手を行いそこから自分の勘を磨いていくのだ。ワシは貴様の構えや基礎部分を矯正

してやるっ」

「はい。師匠」

「修行はつらい。だが諦めず、ワシに突いてこい！この名刀『東方不敗』のナニかけて必ずや貴様を新たな階段へと上り詰めてみせよう！」

「はい。誤字はワザとかこの野郎」

「……………」

「はい。師匠」

「……………」

「はい。師匠……………ってなんで服を脱ぎ出す!?!」

場面は変わり、仲間に囲まれる中で一刀が今日も訓練を続けている

振るっ剣閃は右上段から真っ直ぐ軌跡を残し、空を切る

寸前で避けられた為、相手の反撃を警戒しながらすり足で距離を取った

構えは八相

刀を右肩水平辺りで脇を締め、天を突くように両手で掲げる基本の型
攻撃前も後もこの構えを維持するこれがタイ捨流、本来の構えだ
卑弥呼の訓練によって矯正された俺の戦闘スタイルは、後の先を取る
形のまま、幼い頃習った本流の戦い方にさせられた

苦手意識は有ったけど、実際やってみれば以外なほど良く馴染む
自惚れかも知れないが、過去に凧がスジが良いと言ってくれたのは
本当なのかも知れない

「どうした北郷。貴様の實力はその程度かつ！ その様ではこのワ
シから一本取るなど絵空事にしかならぬぞ！」

「ご主人様頑張れー！」

「一刀！ わらわはお主に賭けているのだ。負けは許さぬぞ！」

「なら、今回も倍プッシュでお願いしますねー」

「美羽殿、賭け金はこちらに入れてくださいね」

「ふむ。まさに恋は盲目、今夜も豪華な食事にありつけそうだな、
凧よ」

「!? 隊長！ 自分は隊長の勝ちを疑っているわけではありません

んよー！」

「でも賭けの予想はちゃっかり北郷では無いのです。楽進、恐ろしい子。なのです」

「仲良いなっ、君たちー！」

観戦しているギャラリー達から野次や声援が飛ぶのを聞き流して、訓練に集中、こちらからあえて先手を取るつつこみ紛れの攻撃

地に踏み込み、一気に距離を詰めての斬り込み

牽制の袈裟斬りは当然のようにかわされ、相手から遠慮の無い一撃が襲い掛かる

空を切るどころか、空気を切り裂かんばかり勢いに乗った打ち下ろしを直前で見極め、半身を逸らし回避

当然反撃が来るだろうと予測した相手は振り落とされた得物を掬い上げるように薙ごうとするが、それを実行される前に片足で武器を蹴り飛ばす

「!？」

予想外の行動で得物を握る手が緩み、体勢を崩したところで、再度袈裟斬りを加える

「……………くっ！」

すかさず柄の部分で防御されるが、相手の姿勢は崩れたまま。ここ

が勝負所だ！

防御された柄の部分を支点に相手の反撃を防ぐように刀で押さえ込み、胴廻し蹴りを放つと、これ以上は勝手にさせないとばかりに相手の武器、方天画戟があっさりと抑えを抜けて迫り来る

当然蹴りは空振り、遠慮無い一撃（寸止めはしてくるだろう）が俺の横顔目掛けて一閃

だが、

「……………！」

それこそが狙い。以前洛陽で訓練していた頃よりも俺は確実に強くなっている

予測していた一撃を上半身を逸らして掻い潜り、回避

余波で突風が頬を打ち付け、一瞬恐怖がこみ上げるがそれを無理矢理押さえ込み、空振りしたはずの足をがに股のように地に着けて刀を番える

「ほう、最初から空振りを前提に構えを取られましたか。これはなかなか厄介……………ちょうど恋の後ろに回りこむ形になりましたな」

「せやっ！」

気合とともに無防備な背中に向かって横薙ぎを振るう

前回の手合わせ以上の好条件、これなら！

「……………んっ！」

「うおおっ！？」

だが相手は天下無双の代名詞、呂布奉先

野生の勘からか、危険を察知した恋はその場で高速反転、戟がこちらの一撃を弾き飛ばし、追撃を加えようと更に回転しだした

どれだけチートなんだこの子はっ！

「ご主人様、危ないっ！？」

でもこっちだって成長してるんだ。華琳に窘められたとはいえ、武を磨く事は左慈に勝つためにも無意味じゃない

一か八か、迫る戟に刀を合わせて受け止める

「ぐっ！」

全身が痺れる程の衝撃に一瞬とはいえ耐えてみせた

防ぎ切るなんて考えていない、体の軸をずらし、刀をレールに見立てて押し込まれる力を上へと逸らす

「うまいっ！」

「ほう、あのタイミングで力の掛かり所を見切りおったか……」

三度空を切る互いの武器

恋相手に並みの奇策では歯が立たない以上、この状況で取れる、起死回生の手段は………！！

「………おりゃっ！」

「………？」

両手を大きく開いての体当たり！

では無く抱き抱えるハグ。恋を抱擁する形で拘束し、みんなに一言告げる

「………これで勝ちにならない？」

零距离で抱き合う俺達だが、この体勢なら小回りの効く刀が有利、現に俺の刀はそつと恋の後ろで構えられているし、

この状況で反撃してこないなら、一応勝ちとは言えなくもないだろうか？

「………ふーむ、なら審議しますので少々お待ちをー」

ぞわ……… ぞわ………

ぞわ………

鉄骨渡つたり、限定的なじゃんけんをするように観戦者兼審査員が意見を交わす

その間、若干暇なのでハグした恋をかいぐり、かいぐり、撫で回す

「……………／／／」

すると、くすぐったそうに身を振りながらも、もっと、もっととせがんできた

やっぱり恋は可愛いなあ。強気の女の子が多い中、数少ない癒しだよ顔を赤くする恋に満足していると、討論を終えた審議長である風から判決が下された

両手を上に掲げて、左右に交差。×印を作る

「お兄さんの反則負け。愛という名の凶器使用は認められません」

「若干かつこいいい!？」

勝負に負けて、戦いに勝ったとはこの事言つのではないのだろうか？

今晚もまた、負けた俺となぜか長坂の一件以来、妙に懐いている美羽が夕食代を払わなくちゃいけないのか……とほほ

……………それはともかく、今現在、俺達は孫権のいる平原の町に帰還すべく、手前の村で待機している

なぜさっさと入城しないのか？

答えは簡単、たった一つのシンプルな答えだ

それは

「「「ほああああああ！ほあっ！ほあっ！ほあああああ！
！」」」

「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」

目の前に大きく『最後尾』と書かれた木札を掲げる行列

その先には延々と平原に続く更なる大行列が並び、どこぞの海沿いイベント会場よろしく、人という防壁が入場門までの進路を妨げている

「そう、入城出来ないのでは無い、入場出来ないのだ！」

「とうとう頭に虫が沸きましたか、この妄言男は」

人数が多いと、軽いボケでもすぐ拾われるな…

冗談はさておき、俺達はこの行列が原因で平原帰還への足止めを食らっている

地平線まで続こうかというこの大行列、彼らの目的は張三姉妹による、真・数え役満 姉妹961ライブコンサートだ

長坂の一件と、療養で俺が居ない期間に干吉が兵と人心を掴む為にと、なぜか進言した政策の成果がこれらしいが、なぜか異常なまでの大好評を受けている

まさか干吉にアイドルプロデューサーの才能があるとは驚きだ。…
…なにかティンと来るものでもあったのだろうか？

まあそれ自体は良いとして、問題なのは先も言った通り、これが原因で街へ簡単に入る事が出来なくなっただ点だ

現在の平原はライブ会場都市として普段から入場者制限を行い、多すぎる人の出入りを厳しく管理しているため、姿を隠して進入する事が出来ない

なぜなら、俺の周りにいるほとんどの人間が超が突く程の有名人の集まりで、しかも俺や凧は軍から指名手配を受けているらしく、このまま進めば目立つ事極まりないからだ

故に無用な問題を起こさないよう作戦を立案できるまで、ここで待機する事になった

最初は予想外過ぎる事態に困惑したが、内側からの情報によれば今のところ孫権や他のみんなにも特に異常はないとの事。それだけは本当に良かった

ちなみに平原の現状や指名手配の情報を提供してくれた人物は

「美羽さまー！。何であんな下半身しか自信の持てないすけこましに、真名まで許して誑かされているんですかー！私は悲しいですよ

ー！

「貴様、勘違いするでないっ。北郷は下半身に特化しているだけだ

！！」

「なんのフォローにもなつて無いから!？」

ご存知、七乃、華雄ペアです

いや、別に否定するわけじゃ無いけどさ。もうちょっとこう、オブ
ラートに包んでほしかったな

その後もなんやかんやで皆が喋り始め、場が混沌としてきた

女の子は三人寄れば姦しいというか、ここにいるのは総勢十人。一
度騒いでしまうと手が付けられないから困ったもんだ

しかも魏側の人間は事情をよく知らないという事もあって、最初こ
そ牽制したりして落ち着きの無い日々が続いていたが、そこはあれ、
北郷一刀さんの荒ぶるマール様が活躍して一応の収束は見せた

下世話な話、まさかの11P+魏の子達と7Pという荒療治をもつ
て……

事を終えた直後はさすがに疲労でぶっ倒れたが、そのおかげで過去
の記憶を取り戻した面々は誤解や敵対心も薄れ、仲も良くなったよ
うで大満足の結果に終わった

まあでも、あれだけの乱痴気騒ぎは流石に堪えたので

「あと何回かお願いしたい(キリッ)」

「隊長、また氣弾を受けたいのですか」

凧から放たれる不穏な空気もなんのその、頭に閃いた事柄に思考が奪われる

「……………いや、待てよ？ この編成、小さめの子が多いせいか、若干おっぱい分が足りない気が……………出来れば黄忠さんみたいな巨、爆サイズも来てくれれれ痛い痛い痛いイタイー！！」

いきなり恋から引き剥がされ、その勢いそのまま右腕の間接が外された。何事！？

「随分と失礼な物言いね、一刀」

「華琳！？」

宙ぶらりんな腕を掴んでいるのは、こめかみに露骨な皺を寄せる少女とその配下の面々

「貴様！華琳様の寵愛を受けてまだ不満だとも言うのかっ！」

「言っていないっての！変に邪推しないでくれ！」

「でもそれって、一刀はうちの胸じゃ満足してくれへんかったって事やる？悲しいなー」

喧しいのが嫌だと、列から離れていた魏のメンバー三人が何時の間にか急接近していた

ちなみに秋蘭、桂花、季衣は残存していた魏軍を再編、また流琉を再び傘下に収めるべく、別行動を取っているのでここには居ない

つまり後で腕の治療をしてくれるだろう華佗も合わせて俺の周りには総勢16名。しかも平原に残した二人と秋蘭達が合流すれば魏軍のメンバーは全員集合状態になる

何時の間にかすごい大所帯になったなあ……

外れた右腕をぷらぷらさせながら一人思案に暮れていると、華琳がパンパンと手を叩き皆の注目を集める

「この、人の身体的特徴を卑下する狼藉者はほつといて、情報提供者が帰って来た以上、もう一度話し合うわよ。風、稟、趙雲、それに陳宮と張勳もこちらに来なさい」

流石のカリスマといわんばかりに騒いでいた皆が大人しくなり、指示に従って呼ばれた五人がこちらへ歩み出てくる

見習うべき統率力だけど、その前に誰でもいいから心配の言葉くらいかけてくれて欲しかった

一人打ちしがれていると、駆け寄る足音とともに少女がにっこり笑いかける

「ご主人様、あのね！」

「た、たんぼぼ！」

「じきじ」

「……………」

左腕も外された

「一刀。いつまでも遊んでないで、こちらに来なさい」

「……………ぐすっ」

とほとほと両腕を揺らしながら、涙目で輪に加わる

自分の成長とともに、周りの人間の扱いが存外になっていくのは気のせいだよな？

一抹の不安を抱きながらも近くの酒房に場所を移した

テーブルを囲んだ軍師、賢しい人グループで会議を行うが、なぜか眼前に若干の酒とつまみであるメンマが並ぶ

犯人は明白だが、突っ込むと話が続かないので敢えてスルーを選択

「進行は任せるわ稟。そろそろ具体的な案を纏めて行動しましょうか」

「御意。ではまず目的の確認から」

かつての主に促されて稟が司会を務めて、説明を始めた

「現在我々の目的となっているのは、平原に居を構える孫権殿に協力を仰ぐ為の説得。及びその話し合いが実現できるよう彼女のもとに近づく方法の模索です。説得に関しては、過去我々が孫策殿を暗殺したという誤解を説き、この世界の危機を救うための協力を仰ぐ

重要なものです。……一刀殿、この部分は貴方に全てかかっていますから必ず成功するよう留意しておいてください」

「ああ、そこは任せてくれ」

一番の要である役回りにプレッシャーも大きいですが、ここで怖気づいたら上に立つ者としての沽券に関わる

皆を不安がらせないよう、あえて大げさに頷いて答えると、側に腰掛けた華琳が満足気な笑みを浮かべた

「お願いします。次に一番の問題である潜入方法ですが、張勳殿からの情報によれば、一刀殿は現在、呉の裏切り者として軍内部だけです。通達が行き渡っているとの事。そのため無防備に平原周辺に近づけば問題が起こるのは必至。については確実に孫権殿のもとへ送り出せるよう各人の意見を聞きたいのですが如何でしょうか？」

稟が口火を切り、会議が始まると同時に俺は改めて自分達の状況を整理しておく事にした

まずは呉における俺の立場の変化

長坂へ向かったあの晩から既に二週間が経過し、止む得ぬ状況だったとはいえ、無断で飛び出した俺は不敬罪で指名手配されていた

それを防ぐ為、簡単な書き残し、言い訳を認めたはずだが、さすがにうまくはいかなかったらしい

軍に携わる者に見つかれば即刻通報され、捕縛されてしまうだろう

そんな事になつたら色々と不都合が、いや、大問題が発生する

先の通り、周りにいる人間は華琳や風といった魏のメンバーがほとんど揃っているから非常に不味いのだ

以前から仕官している風や真桜の時は記憶が無い等、特に問題として取り上げられなかったが、記憶を思い出している呉の人間からすれば、以前の世界で魏国は直接的ではないといえ雪連の死去に携わった怨敵だ

その相手がのこのこと雁首揃えてやって来ては、問題が起こらない方がおかしい

華琳達にも説明はしてあるが、今の彼女達にとっては与り知らぬ事。緩衝役として俺が間に入らなければ、どんな行き違いがあるか判つたもんじゃない

一人思い悩んでいると、発言を求められて最初に口を開いたのはねえだった

「ここはむしろ北郷をおとりに……いえ、ここは逆転の発想で我らの存在を主張して別働隊を編成、陽動する作戦が効果的に決まっております。そのスキを狙えば内部への侵入は問題無し。あそこには一度入ってしまったら掃いて捨てる程の人間が密集していますので、その中に紛れてしまえば楽勝なのです」

別の意味で平原な胸を張って、自身満々で答えるねねに疑問を唱えたのは星、メンマを肴に酒をひと飲みして一言

「確かに一番単純で効果は高そうですが、そううまくいきますかな

？町の侵入は容易くとも、城内へは難しいと思うが」

「むっ、だったら街中でも騒ぎを起こして気を引けばいいだけの事
ですぞ！」

文句をつけられたのが気に食わないのか、びしりと指を差すねね

だが、その横から今度は風が反論する

「それはいけませんねー。ただでさえ人が犇んでいる所で暴れたら
大混乱間違い無し。そうなたらまず警備を固めるのは孫権さんの
居るお城ですよ、交渉中に雪崩れ込まれたら厄介だと思つのです」

「だったらお前はどうぞればいいと言つのですか！」

「そうですねー。ここはやつぱり隠密潜入がよろしいかと。兵士さん
の服でかっぱらつてお兄さんに着せればそうそうバレ……」

「あーそつちも無理だと思えますよー」

今度の反論は張勳こと七乃

俺の事を快く思つてないようだけど言つべき所は言つらしい

「この種馬、もとい下半身男は、平原では知らない者がいないと呼
ばれる程、人気者で顔が売れてるんですねー。変に隠しても怪しま
れますし、そつちの案も無理っぽいですよ」

「……………ふむ、主の普段の行動が裏目に出ましたか」

前半と中盤のどっちについてかで大きく意味合いが変わってくるので文句があるが、今更言及はしまい

「星殿はどう思われますか？腹案があるのならお聞かせ願いたいのですが」

「ま、下策とは存じますが、ここはいつそ素直に捕まってみるのも一案かと。少なくともこれなら城内へは簡単に入れますぞ」

「ですがそれで確実に孫権殿の会えるという確証がありませんね……。最悪、見つかった段階で裏切り者として処断される可能性も低くありません。もし何かあった場合の対策が取れないのは問題ですね」

「あくまで私は武官ですからな、参考程度に留めておいてください」
そう言うってから、またメンマを摘む作業を再開する星

うーん、ここまでで三つ案が出たけど、いまいちどれもピンとこないな

この後も、何度か意見交換や討論が続くがどうにもうまく纏まらなかった

しばらくして一応の意見が出揃ったのか、まとめに入ろうとした稟がいきなりこちらを向いた

「それでは一刀殿。判断をお願いします」

「え……お、俺?!」

突然の指名に驚くと、呆れたような華琳の叱責が飛ぶ

「少しは上に立つ者の自覚が出来たと思っただら直ぐこれね。最終的な判断は王が決める。これは当然でしょう？」

いや、まだ国土の一つも無いんですが……

咄嗟に文句を述べようとしたが、ここに居る全員の視線が俺の発言に集中しているのに気がつき、言葉を飲み込む

そうだったな。これからは自分の立場をよく理解して発言、行動していかないと

俺を慕ってくれる皆のためにも、今まで見たいに優柔不断な態度は控えよう

慣れない咳払いを一つしてから所見を述べた

「まず、騒動を起こしての陽動作戦だけど、これは条件付きで賛成だな。街中だと星が指摘したように混乱の度合いが計り知れないから、やるなら街の外周で警備を引き剥がすのに専念してもらいたい。あまり近くで事が大きくなりすぎると、軍の方も動いてより一層城への防備が厚くなると思う。そうなったら本末転倒だろ？」

あくまで警備の人が対処できる程度までに抑えておかないと住人も迷惑が掛かりそうだしな

「風の意見は七乃さんの言う通り、他者に成りすましてもすぐバレる可能性が高い、多分中では以前俺が提案した、一人一人自分がど

この警備担当か確認できるよう名札なりで区別されている方法を取っているはずなんだ。運良く俺とバレなくても怪しまれるのは避けられない。悪いんだけどこの案に関してはまたの機会について事によろしくか」

正史の世界での知識を活かしたつもりがこんなところで足枷になってしまった

しかも予めこういうお客さんでござった返す事態を予測して、警備の人達に指導しておいたのも裏目に出そうだな

「最後の意見は個人的都合で大問題が発生する恐れがあるので、却下させていただきます」

今は鈴の音を聞くだけで非常に恐ろしい

彼女とも裏切る形で離れてしまった以上、出会えば間違いなく一悶着あるだろう

「で、だ。ここまで意見を俺なりにまとめてみると、部隊を三つに分けて行動しようと思う」

「具体的にはどういった編成で行うのですか？」

稟の質問から皆の視線がより強まり、説明を促された

「一つは先の通り陽動部隊。ここには蝶的ななにかに変装した星や卑弥呼とか目立つ人物で騒ぎを起こしてもらいたい。これは俺と別働隊がその混乱に乗じて入場するためだ」

興が乗り過ぎるといけないから、お目付け役も割り振っておこう

「二つ目は俺と一緒に行動する城内への潜入部隊。どう忍び込むか方法はまだ考えていないけど、少なくとも少数による隠密行動になる。ここは腕の立つ人間、城内部を知っている風なんかには同行してもらいたいな」

候補としては、空気の読める霞にも付いてきてほしい

「それとこれは保険なんだけど、もし見つかった場合に備えて、言葉は悪いけど囿用の部隊が必要かな？孫権は部屋に閉じこもっているそうだから一度入ってしまえば、問題は無いはずだ。最悪その時間稼ぎに活躍してほしい」

ここはクセのある、たんぽぽや無駄に騒ぐであろう春蘭が適材だろうか

「……………一応ここまでが皆の意見を聞いた上での、俺の意見なんだけど、最後に一言。誰かを傷つけたり、怪我なんてしないように気をつけてくれ。いくら良い案件でもそこが蔑ろになるなら了承しないよ」

ある程度は許容しないといけないだろうけど、犠牲や代償はなるべく払いたくない

そこだけは徹底してほしい

ざっとまとめたただけだから文句の一つでも出るかと思ったが、全員考え込むように俯き、黙ったままだ

「……………何か気に障ったのかな？」

この発言にまたも華琳がフォローを入れてくれる

「違うわよ。あなたの意見を踏まえて再考しているの。……………まあ条件が条件だから、まだ少し時間が掛かりそうね……………んっ」

「……………華琳」

「ふふっ」

視線がこちら向かないのをいい事に不意打ちのキス

あの夜から積極的に甘えてくる彼女に翻弄される事が多くなった

それは全然嬉しいんだけど、今はちょっと問題ある気がする

「なに？一人前に恥ずかしがっているの？夜はあんなに積極的なのにねえ……………」

「……………場所と時を弁えてるだけだよ。……………これ以上挑発するよ
うなマネは遠慮してくれ」

ただでさえ君は俺の側 膝の上に座っている のにこれ以上彼女達を刺激したら、また血を見るはめになるには自分なのですよ。そこから辺分かってますか華琳さん？

溢れる覇気に誰もが躊躇して、表立っての文句は君に届いていないけど裏では、こっ、色々とあるんだ

無論、悪い気はしないので抵抗した事はないが、更に華琳はこちらを困らせるような発言を告げる

「言い忘れてたけど、孫権の説得には私も同席するわよ」

「は？」

「記憶に無いとはいえ、暗殺などという無粋なマネを見逃した責任は今の私にもある、ならば話し合いに加わるのは道理でしょう？」

……それに一刀が誰の所有物なのか、最初に理解させておかないと後々揉めてしまうわ」

いや、後半の部分は控えてもらいたいのですが

一気に先行きが怪しくなったこれからの騒動に思いを馳せると、頭が痛くなってきた

うまくいけばいいんだけど……

眼下には微笑む華琳、そんな様子を考えるふりをしてこちらを覗き込む面々を薄目で確認し、俺は小さく、けど少し嬉しくも溜息をついた

集う仲間は数多く

北郷一刀を支え集う

目指す孫権伏せようと

優しく起こすは彼の役

遠くで鳴る鈴の音しかり

障害越えて事を成せ

二十八話 平原での戦い 相見える関係（前書き）

前後不覚な程、関係無い話ですが、

この話で大体200000文字キーボードに打ちこんだ事になります。

なのに、未だブラインドタッチが出来ないのはなぜ？
いい加減、首が強くなってきた。

天狗じゃ、天狗の仕業じゃ

二十八話 平原での戦い 相見える関係

「ご主人様、こっち……………」

「……………まさかこんな所に抜け道があつたなんてな…」

夜闇に紛れた作戦行動中、思わず呟くと、後ろの方から文句が飛んできた

「おいっ北郷！ 抜けたのならさっさとそこを退かんか！ 後がつかえる！」

「おおっと、悪い悪い」

すぐさま横に逸れると、一人やっと通れるくらいの壁の穴から、うつ伏せのまま春蘭が出てくる

そこに続いて、後続の人間も思い思いの感想を漏らしながらも、こちら側へ這い出てきた

「うーん。この抜け穴、後で悪戯に使えるかもしれないよね？」

「この私が、何でこんな狭苦しいマネをしなくてはいけないのよ…
…」

無理矢理付いてきたわりには不満たらたらな華琳と、部隊分けの消去法で余ってしまったたんぽぼ、華琳が心配だと無理矢理ついて来た春蘭

そして先導していた恋と俺を合わせて総勢五人。秘密の抜け穴を通じて、なんとか入城に成功した事になる

「それにしても、よくこんな抜け道知ってたな恋」

改めて尋ねてみると、恋はしれつと答えてみせた

「……………桃華とここに居たとき、見つけた」

ああ、そつか。言われてみれば一時とはいえ平原に劉備ちゃんが居たから、その間に発見したのか

確かに霞がかつた記憶の中で、何時の間にか町へ抜け出していた彼女の様子が思い出される

しかし茂みに隠れてカモフラージュされているとはいえ、城に穴が開いてるは問題あるな……

そのおかげで問題だった潜入はうまくいったけど、これが終わったら塞いでおくかな。騒ぎが終わった後ここから、たんぼばや恋が逃亡しないようにしないと後で絶対問題が起こるぞ

城内部を伺いながらそう心に決めた

現在俺達が遂行中の平原侵入は俺の原案がほぼ聞き遂げられ、順調に推移していた

内側への侵入のための陽動に、星、卑弥呼、華雄の三人。今頃は騒ぎを起こすだけ起こして逃げ遂せている頃だろう

次に、万が一の場合に備え、城周辺で待機しているのは俺の草案と違い、内情に詳しい凧と仲が良い霞二人に判断を任せている

ただ若干の問題があるとすれば、ライブ中の張三姉妹になぜか対抗意識を燃やした、稟、七乃、美羽の三人がコンサートに殴り込みをかけた位か？

彼女等曰く、

「くっ………歌では負けてはいられませんね」

「そうじゃー！やつらの好き勝手にさせて堪るか！無知な民共に誰が閣下なのか思い知らせてやるのじゃー！」

「あらあらー。美羽さま、元気一杯で楽しそうですねー」

などと、どこかの候補生のような発言をした後、歌勝負を仕掛けていった

………注目を集める陽動としては成功したけど、なんだろう？天和達の元プロデューサーとしての直感がなにかをヤバイと告げているような気が……

「？ ご主人様、どしたの？」

「ん、いや、なんでもないよ。ただ一瞬今の俺達を表すなら、エージエント夜を往く状態だと思ったんだ」

「??？」

「気にしないでいいわよ。一刀、偶に意味不明な発言をするから
自覚はしているが、面と向かって言われると自己嫌悪に陥りそうだ
それはさておき、そろそろ本腰入れて潜入しますか

「確認しておくけど、囿役の霞と凧は城門前で待機している。騒ぎ
が大きくなれば手助けしてくれるはずだけど、最初からそんな事態
にならないよう皆注意してくれ」

目配せすると全員が頷く

よし。ここまで来て失敗は出来ない。万全を期すためにも、再度要
注意人物に確認しておこう

「それじゃあ孫権の所まで行くとしようか。特に春蘭、無闇に騒ぐ
なよ」

「はっ、私がそんな浅はかなマネをするはずがなかつ。あなどる
な北郷」

そういつて数々のトラブルを巻き起こした前科を彼女は覚えていな
いのだろうか？

「じゃあ、一度例題に答えてくれ。もし道中で警備の人間に発見
されそうになったらどう対処するつもりだ？」

春蘭は自信満々に答えた

「騒がれないよう、……くびり殺す」

「怖ええよっ!?!」

どこのヒットマンだ！ 大方の予想通り、いきなり生死択一に走りやがった

非難の視線を浴びせると、春蘭は慌てて答えを訂正した

「ああ、いや間違えた。仲間を呼ばれないよう、……首を刎ねる」

「一番重要な意味が変わってない!?!」

なにその KILL or DIE、みたいな一見選択の余地があるように見えるけど、実は何も変わってない強制選択肢

もうすでに不安でお腹一杯だ……

「五月蠅いわよ、一刀」

こちらの気も知らずに華琳からの叱責が飛んで来た

「春蘭に煽られて、貴方が騒いでどうするのよ。仲が良いのは知ってるけど、時と場所ぐらい選びなさいよね」

つい最近、人目も阻かず人の膝の上に乗って、他の子を牽制していたのはどこの誰だったのかと問い質したい

「か、華琳様！それは誤解です！こんな人の揚げ足を取るような人間とはまったく仲は良くありません!」

すかさず春蘭が反論すると、華琳はにやりと口を吊り上げて彼女を諭す

「あら、そうなの？ だったら仲の悪くて意地悪な一刀とは口も聞きたくないわよね？」

「と、当然です！」

「なら少しの間、黙っておきなさいな。安易に口を開いたらまた、余計な言いがかりを付けられるわよ」

「……おお！言われてみれば、華琳様の仰る通りな気がします！ふふん、北郷、私が喋らなければ貴様の思うようにはいかないだろう！」

「あー、うん。……そうですね」

「はっはっはっ……って貴様、なんでそんな慈愛に満ちた表情を向けるのだ！」

もはや何も言うまい

ある意味微笑ましい光景に苦笑していると、袖を掴まれている違和感を感じてそちらの方に顔を向けた

「たんぽぽ？」

そこには柔らかかそうな頬をリスみたいに膨らませたサイドポニーの少女が、不満顔で立っている

「ぶー。なーんか最近のご主人様って魏の連中とやたら仲が良いよね。もっとこっちに構ってくれないと、たんぼぼ不公平だと思っつ」
言っつや否や、掴んだ腕を引き寄せて自分の腕と絡ませてくる

まあ、魏と蜀では前回、当主と家臣という立場の違いや記憶の取り戻し具合もあって、それぞれへの接し方が変わるのはある程度許容してほしいんだが、どうもそれが気に入らないらしい

せめてにと、されるがままに抱かれているとすぐさま機嫌を直して満面の笑みを浮かべるたんぼぼ

だがソレを見て、おもしろいと言わんばかりに華琳が口を開いてしまっ

「あら、良く見れば、いじらしくて可愛い娘じゃないの……」
刀。要らないなら、私がもらってあげてもいいわよ

「いやいやいや、いきなり何を言い出すんですか華琳さん？」

静かにしると言った張本人が新たな火種を注いでどうするんだよ

「……………（ギリギリギリギリ）」

「うおおっ」

案の定、新たなライバルが増えるのでは無いかと危惧した春蘭から、凄まじい殺気が俺に向かって放たれてきた

先約の通り口を開かないのは流石だが、何で君たちは事有る事に俺の責任にしようとするのだろうか

「ふふっ、冗談だから安心しなさい春蘭。貴方の事はきちんと可愛がってあげるから」

「華琳様……………」

今度は百合百合しい空気で包まれる俺達

今から隠密行動を取るとは思えないほどの場違い感に、激しく人選ミスが悔やまれた

「まあそれはそれとして、一つ気になったのだけれど。前回の一刀は呉でどんな立ち位置だったのかしら？」

「……………それは今確認しなくちゃいけない事か？」

「ええそうよ。軍師の立場だったのは聞いているわ。でも私が聞きたいのは女性関係、どれだけ親密だったのか、どんな間柄だったのか、争いを未然に防ぐ為にも確認しておくのは当然でしょう」

「あっ、それはたんぽぽも興味ある！」

「……………(ちらっ、ちらっ)」

「……………?」

話を聞いていなかった一名を除いて、三人の視線が集中する

完全に作戦中なのを忘れてるな……

俺は諦めて、せめてすぐ終わらせようとシンプルに答えた

簡潔に表すなら、蜀が恋人。魏が仲間。呉は……

「孫権に関しては記憶が戻ってないから一概には言えないけど、まああれだな。一言で表すと……夫婦、かな？」

もしくは家族だろう

「……！！？」

この場にいる一刀以外全員に電流走る……っ！！

普段割りりと空気を読めるはずの一刀はこういう時に限って、その才能を発揮できなかった

「記憶が途切れたのは戦後数年経ってからだから、三国の中だと一番長い付き合いになるのかな？……そういや、最初雪蓮に呉のみんなへ子供を産ませるのが条件で確保されたんだっけな。いやーでも、本当に一人、一人ずつ子供が産まれるとは思わなかったな」

少し気恥ずかしくなって、頭をぼりぼりと掻く

「こ、子供ですって！？」

「そうそう、全部で6人。戦後処理や政務で忙しかったりもしたけど、守るべき者がいるとなるとメリハリが出たっけなあ……」

うすぼんやりとはしているが、夜泣きや遊び相手で七苦八苦したの
は覚えてる

構ってあげるとすごい笑顔で「父上ー」とか言って飛びついてきた
り、じゃれるように突撃されたりで、やんちゃな子供に振り回され
る日々

でもどれだけ苦勞があろうとも、我が子となればそこが可愛くもあ
り、愛しい部分なんだよね

……

………待てよ。

まさか、この外史でやたら美羽やたんぼぼみたいな小さめの娘に好
かれるのは、無意識に父性オーラが出ていたからなのではなからうか

………溢れる父性。思わぬところで新発見してしまった

「な、なんかご主人様がすごく遠い人に感じてきた……」

「………バツイチ？」

その突っ込みは色々とおかしい

「だから、じゃないけど。呉のみんな俺に頼ってくれるところがあ
るよ。交渉に関しても孫権自身、本心では嫌っては無いと思うから、
特に問題無いはず……」

希望的観測かもしれないけど、ここを出る前の彼女の反応はまんざ

らでもなかった

干吉に変な誤解を植えつけられて無ければ、華琳がいなくてももうまくいくと思うんだけどな……

などと一人思いに耽りながら自己分析していると、次の瞬間。耳を劈くような警声が鳴り響いた

「北郷おおおおっ！！！！貴様ああああ！！！！！！」

声の主はさつきまで頑張って口を噤んでいた春蘭、ものすごい勢いで掴みかかってきた

「な、なんだいきなり！？」

「なんだ？では無いわ！！この不埒者っ！妻子がいながら軟派な行為に及んでいたとは、恥を知れっ！！！！」

「あくまで前回の話だったの！ 落ち着け！」

これほどの剣幕は久しくお目に掛かって無い。そんなに子供がいたのが不満なんだろうか

「こ、子供がいるという事は、既に将来を誓い合った仲という事なのだろう？ そんな……そんな関係に、私は一体どうしたらいいというのだ……」

「……………一刀」

「……………分かってるよ」

そういや見た目と違って純情な性格なんだよな。まあ今回も変に曲解しただけだろう。取り合えず最低限のフォローだけでも入れておくかな

「あんな春蘭、君に誤解するなというのは酷な話だろうがよく聞いてくれ。理解しようとするな、体で感じ取れ」

「……………一刀」

「良いか良く聞け、まずは……………」

「一刀っ！」

「だから、分かってるって言っただ……………ろ……………？」

いい加減華琳の忠告に痺れを切らして、振り返ると、彼女は真っ直ぐ城内を指差していた

「……………あっ」

ゆっくりと、それこそ油の切れたブリキ人形のように指し示された方向に首を向けると、そこには警備の兵士もこちらを指差して硬直していた

うん、そうだね。これだけ騒いで見つからない方がおかしいよね

「っ！ 恋っ！」

「っ……………」

以心伝心。咄嗟の判断で指示を飛ばすと、一拍の躊躇も無く恋が警備の人間に襲い掛かり、鳩尾へ突き刺さるショートアッパーを放つだが、

「ぐっ……………ピイイーーーーー!!!」

意識を手放さなかった兵士が倒れこむ前に異常を知らせる笛の音を鳴らした

直後、どたどたと地面を揺らしながらこちらへ近づく大量の足音が聞こえてくる

「こうなったら仕方が無い！各自散開、プランBだ！」

作戦名はノリだが、いわゆるネットスラングでは無いので要注意

もし発見された場合は、不本意ながら城外周の風達と連動して、彼女達を囷に孫権の元へと急行する手筈になっている

幸い、他の警備兵はまだ俺の姿を確認していない、今ならただの？賊として対処されるだろう

「みんな無茶だけはするなよ！」

戦闘となれば切り替えの早い仲間達、すぐさま頷きが返ってくる

彼女達の腕前なら万が一にも怪我はしないだろうが、早めに終わらせるに越した事は無い

暢気に手を振るたんぽぽ達を残し、俺は孫権が居るであろう寝室目指して、建物内部に駆け込んだ

「ぜえ、ぜえ……」

潜入中なのに騒いで見つかるお決まりのイベント

こういう状況良く見かけるとは思ったが、まさか自分で体験するはめになるとは思わなかった

あの後、一層厚くなった警備を掻い潜り、心臓をバクバクさせながらようやく辿り着いたのは城内中央への渡り廊下

やっとの思いで孫権の寝室近くまで接近出来た

このまま直進してもいいけど、流石に走り過ぎたせいか呼吸が落ち着かない

……このまま部屋に押し入ったら、ただの変態だな……

ぜえぜえ言いながら無断で近づく男。……俺だったら間違いなく通報する

紳士としての嗜みというか、小休止にと端に植えられた茂みで息を整えていると、それは許さんと言わんばかりに、暗闇の中から誰かがこちらに気配が近づいて来た

「……少しは休ませてくれよ」

それだけ警備の人間が優秀だという事なんだろうけどさ

ひゅーひゅーと呼吸を浅く、なんとか相手をやり過ぎそうとするが、不運な事に相手は狙ったかのように俺の隠れている茂みのすぐ側で停止してしまった

そろそろ覚悟を決めないといけないか

音を立てないよう、中腰のまま慎重に鯉口を切る

卑弥呼から借り受けた刀は白鞘の一振り『東方不敗』

ネーミングに難はあるが、以前の刀と同じ反りが深く長い太刀。取り回しに問題は無いだろう

ちなみに、サビた古刀『明鏡止水』も薦められたが、丁重にお断りしておいた

これ以上のネタが散乱したら收拾が着かなくなるからな

改めて精神を集中し、スキを伺う

数は………恐らく三人

違和感を感じたのかここから動く気配は無い

しきりに辺りを見渡しているせいか、鎧の擦れる音がやけに大きく聞こえるが、灯台下暗し。俺はすぐそこにいる

「……………しっ！」

「なっ！？」

地面を踏み込み、見よう見真似の縮地法で一番手前にいた兵士に峰打ちを浴びせる

以前、思春が使っていた歩法を自分なりのやり方で再現してみたが、うまくいったようだ

倒れ伏す彼に心の中で謝りながら、次の相手に意識を集中する

二人目は突然の事態に反応しきれず、構えも取れていない。チャンスだ

飛び出した勢いを殺さず、次を見越したコンパクトな攻撃手段を選択

一歩踏み込み、柄の部分で鳩尾を打ちつけ、昏倒させた

三人目っ！

顔を向けて確認すれば、今度の相手は先の二人とは違い、剣をしつかりと構えている

そううまくはいかないよな

牽制に下からの打ち上げを放つ

警備の人間はそれを迎撃、払い退けて一歩後に足を引いた

そのスキにこちらも体勢を整えて、八相の構えを取って対峙する
交錯する視線

長引けば確実にこちらが不利になるは明白

乾坤一擲、無理にでも攻め立てるか！

担ぎ上げるように構えた刀を握り締めると、ふいに正面の兵士が声を上げた

「……………まさか、北郷殿ですか？」

薄れる殺気と同時に相手の腕が下がっていく

「……………ん？」

正体がばれたのに何で敵意が無いんだろう？俺って指名手配されてたよな

疑問に困惑していると、眼前の相手はとうとう剣を鞘に収めて、膝を突いてしまう

「よくぞ、よくぞお戻りになられました！ 貴方様のご帰還、お持ちしております」

「……………どゆこと？」

聞けば、指名手配の報は呉本国からの通達でなぜここを出たのか、

なぜ叛徒として指名されたのか詳細な説明が無かったらしい

本来なら兵士たるものそこに疑問を感じてはいけないのだが、ここは平原。呉から出向している兵は少なく、元からここで暮らしていた人を多く徴用している。そのおかげか、普段の俺を知っている兵士達は今回の通知を疑問に思う者がほとんどだそうで、捕まえる気はさらさら無かったらしい

「という事は……………」

「無駄に騒ぎを大きくしただけですな」

「ぐふう」

衝撃の事実には膝から崩れ落ちる

後で絶対文句言われるなこりゃ

「ははつ。……………とはいえ、孫権様が伏せておられるのは事実。早く会いに行つてあげてください」

「……………なんか色々とごめんね」

気絶している二人にも頭を下げる

「いえいえ、普段からお世話になっているのは私どもですから。見えぬお上の指示より、一般の兵士にも気にかけてくださる貴方を信用しただけです」

「……………褒めたつて何も出ないよ？」

「事実を述べたまでですよ。……才溢れる将の身でありながら偉ぶらず、誰にでも気さくに声をかけ、民の信頼も厚い。……平原の民は皆貴方が好きなのですよ」

まさか男性の言葉に赤面する日が来ようとは思わなかった

「さっ。露払いは私が致します。どうぞこちらへ」

先導するように歩を進める兵士さん

意外な展開になったが、これはこれでOKかな？

目下の心配事が解決され、安堵の息をついた

が。

「……………(ドサリ)」

「……………」

受難はまだまだ続くらしい

突然倒れた兵士の前方に、闇に紛れつつすらと気配が漂ってくる

この懐かしい殺気は、いうならば必然の事態

成るべくして成った再会、やはり俺はこの試練を突破しなくてはいけない

「いや。これははじめ、だよな」

この事態は以前の不甲斐無い俺が原因なのだから

刀は納めず、握る手だけに力を込めた

そう、思いを裏切った一番の人物は孫権だけじゃない

本当に傷ついているのは、最悪のタイミングで別れたあの日の少女

今度こそ、しっかり話を着けようじゃないか

ちりん……

闇夜に溶ける孤独な鈴の音

静かに近づくその音色に俺は一度唾を大きく飲み込み、己を奮い立たせた

「賊だー！賊が侵入したぞー！！」

城内各所に不審者侵入の報が飛び交い、慌しく人が行き交う中、上官らしき人物が近くの警備兵を呼び止め、声を掛けた

「おいっ、数と目的は分かっているのか！」

「班長！？　そ、それが何と申しますか……非常に不可解というか……」

質問された兵はなぜか、しどろもどろになって答えを濁す

「ええい、さつさと報告しろ！！目的が分からず、後手に回れば取り返しのつかない事態になり兼ねなのだぞ！」

苛立つ警備隊班長の怒気に気圧されて、ようやく兵士が口を開くが、その内容は彼の予測の範疇を大きく逸脱した内容だった

「あの、恐らく賊の目的は食料泥棒、かと……」

「……貴様、ふざけているのか」

「ち、違いますっ！　あれをご覧ください！！」

おちよくられたものかと眉間に青筋を浮かべる班長は湧き上がる怒りを押さえ込み、指差された方向に顔を向けると

そこには大食堂と呼ばれ、テーブルとイスが並ぶ見慣れた光景が視界に入ってきたが、その中央、積み上げられた食器の山が異様な雰囲気を醸し出している

「……………もぐもぐ」

「うぎゃあああああ！ー！」

天井近くまで打ち上げられる警備兵に目を白黒させる

「あつ、恋。そっちの小籠包、たんばぽにも頂戴！」

「……………ちょっとだけなら」

「な、なんだこいつ！？ 肉まん片手に強す……………ぎやいいい！ー！」

後ろに回り込み、スキを突いたはずの兵士も空中を水平に滑空し、弾き飛ばされていった

「ありがと！ んー、肉汁たっぷりでおーいしい！……………ねえねえ、もう一個だけ分けてよ、ね！」

「……………（ふるふる）」

「もう一杯食べたからいいじゃん！ぶーぶー。……………そんなに食べたら太って、ご主人様に嫌われるかもしれないのに良いのかなー？」

「！……………でも……………」

「良いのかなー？」

「…………………………うう……………（口を開けたまま、真剣な表情で葛藤している）」

「なーんて、スキ有りっ！」

ひよいつ

「!？」

一瞬の気の緩みを突かれ、点心を奪われる恋

たんぽぽはしたり顔で小龍包を頬張る

「はもはも……………」
「ごっくん。にゅふふ、油断大敵だよー」

「……………」

「お、おい。あの赤髪の女、こっちを見てないか？」

「うおおい?! ま、待て! 待ってくれ! 俺達は何も関係な……………」

「……………」

「……………八つ当たり」

「「自覚有り!?!……………みぎやああああ!?!?!」」

反発する磁石のように飛んでいく罪なき被害者達に啞然する警備班
長の肩に、ふいに手が置かれた

「まー、恋のあれは天災みたいなもんやから、勘弁したってな?」

振り向いた先には、徳利を担いだほろ酔い顔の女性が微笑んでいる

「き、貴様はっ!?!」

「神速の将こと、張遼ちゃん。やっ!」

騒がれる前に、延髄への当身で昏倒させる霞

その後ろにはもう一人の兵士がすでに気絶させられていた

「うーん、これは騒動が終わった後で全員しごいたらなあかなー。これじゃ使い物にならへんで……」ぐくぐく」

こない目立つのは予想外やったけど、警備の注目を集めるのには申し分ない騒ぎっぷりや、天界の言葉でいう結果オーライ? ってやつやったけ

まあ、何時の間にやら、凧の姿が見えんとなってるのが気に掛かるけど心配いらへんよな?

しばらく見んうちに一刀も含めて成長しとるようやったし、ここは恋達に混ぜたって問題ないやろ

「にしても……にしし、これからおもしろくなりそうやな」

もう一度、徳利に口を付けて上機嫌のまま自分を納得させる霞

現在の平原に彼女達を止める人物はいなかった

「ふう、こういったかくれんぼ。幼少のみぎりにしたきりだから、存外楽しいわね」

場所は変わって城内通路。孫権の寝室近く

そこには追われているはずの華琳が何時の間にか到着し、一刀を待っていた

「でも相手が不十分過ぎるわね。これでは捕まえられるというのが無理な話よ……」

霞と同じような感想を述べながら華琳はぶらぶらとその場を歩き回るとにかくれんぼと表現はしているが、実際、彼女がここまで進んできた道のりで隠れて相手をやり過ごす行為は一度も行われなかった

それはなぜか？答えはとても簡単。華琳はいわゆる正面突破の要領で立ち塞がる兵士を全員気絶させて突き進んできたからだ

勿論それだけではここまで来れないはずだが、彼女の側にはもつと目立つ春蘭がうっぴんを晴らすように暴れていたおかげで周囲の注目が全てそちらに移ってしまった

今では恋と合流し、警備の注目を集めている頃だろう

加えてこの寝室周辺には、引き籠もりの孫権を刺激しないよう最低限の警備しか詰めていなかったのが幸いしたのだろう

特に問題なく此処まで辿り着けた

「とはいえ、暇ね。何か暇つぶしになるような事件、起こらないかしら？」

不謹慎だけど、ただ待ちぼうけを喰らうのも時間の無駄よね……

一刀の到着が遅れている以上、無理に行動を起こして余計な誤解を与えたくは無い

腕を組み、これからの事について思考に暮れようとしたところで、先に一刀が発言した内容が思い返された

「子供、ねえ……」

自分とて女

家庭を持ち、出産、育児に思いを馳せた事は当然あるけれど、現実のものとして真剣に考えた事は今まで無い

だが、あの時の一刀の表情はなんというか、今まで見たことの無い色をしていたせいで、その部分を強く意識してしまう

もしも私が一刀の子を成したら、どんな子が産まれてくるのかしら

名前は、そうね。私の文字を取って曹丕とでも名付けておきましよう。利発で賢い子になるに違いないわ

真名のほうは一刀から一文字使ってとして……………一子？

……………

……………なぜか、打って変わって子犬みたいな印象が脳裏を過ぎったわ。しかも賈馱の声で再生されるおまけ付き

色々と私も毒されてきたのかしら

頭を被って苦笑していると、曲がり角から女の声が聞こえてきた

「そん……………やく……………」

「……………しかし……………」

「あら……………」

振って湧いた幸運というべきだろうか、どこかで聞いた声が近づいてくる

恐らくは渦中の人物、孫権とその護衛あたりだろう

……………そうね。考えてもみれば、無理に一刀を待つ必要は無いわ

余計な誤解をされるのは心外だけど、最低限、必要な忠告だけはしておきましよう

「……………子がいたからといって、大きな顔をされない為にも、ね」
これからの出会いに備えて、悠然と構え立ちふさがる華琳

数十秒後

大事そうに刀を抱き、意気消沈しているロングヘアの少女と、モノクルを掛けた袖の長い服の少女が華琳と鉢合わせする事になる
それは互いに異なる過去を持つ、少女同士初めての衝突だった

更に舞台は変わり、ここは城上部、屋根の峰

この騒ぎを見下ろすように一人の男が佇んでいた

「……………」

発する言葉は無く、ただただ沈黙のまま、事態の成り行きを見守りながら虚ろな瞳を細めている

ここまでは予定通り

悪戦苦闘しながらも、仲間を失わずここまで来た北郷一行に干渉するつもりはいまさら自分に無い

呉における目的は既に果たされているからだ

「……………蒔いた種は発芽を待つのみ段階。これ以上は何もするつもりはありませんし、互いの利益に繋がりませんよ？」

「……………ならばその災いの種子、摘み取ってから辞退してもらおうかの。干吉」

男の後ろに、筋骨隆々とした大男が身構えていた

「あれはあくまで種。芽吹くかどうかは本人達次第の代物です。もう駆除はしたくとも出来ないのが実情なのですがね」

「それを判断するのは貴様ではない。……………ワシと同じ観測者の存在でありながら、この外史に限って干渉し続けるワケ、そちらもいっしょに話して貰うぞ」

はちきれんばかりの筋肉が隆起し、戦闘体勢を整える卑弥呼

この世界の謎を突き詰める為にも、ここでこの男を取り逃がすわけにはいかなかった

緊迫する両者

超常の力を持つ二人が合間見えようという刹那、間を割って少女の掛け声が響き渡る

「……………その役目、自分が引き受けます!!」

軒下からの跳躍だけで数十メートルはあるつかという屋根まで飛んできたのは、銀髪と所々に点在するキズが印象的な人物

「お主……………楽進か、なぜここにいる」

「それはこちらのセリフです、卑弥呼殿。陽動役の貴殿こそ、ここに居るのが不可解に感じます」

視線は干吉に注がれたまま、言葉を返す風

「ですが、それは一時置いておきましょう……………問題はこの男です」

睨みつける眼光はかくも鋭く、猛獣のそれに似ていた

……………おやおや、完全に悪者扱いですね

口には出さず、そつと嘯きながら彼女に意識を集中する

「あの晩、隊長を苦しめた貴様だけは自分が倒させてもらおう!!」

「っ！ 一人で突っ込むでない、馬鹿者がっ！」

屋根板を蹴り、間合いを詰めて襲い掛かる風と、それを止めようと身を乗り出す卑弥呼

干吉は薄く笑いながら迎撃の構えを取る

この私が直接戦うなどは……………

くっくっく、久方ぶりにおもしろい余興です

もし、私を少しでも満足させたのならば、御褒美の一つくらい差し上げて進ぜましようか

こうして始まる三者三様の戦い

果てに見えるはどのような解なのだろうか

結論はもう少しだけ後に引き延ばされる

巡る記憶は過去、現在

未来を開くはどちらの意思か

祭の騒ぎのその奥で

切り結ぶは三つ巴の対立図

零れ落ちたる幸せあれど

掬う御手は既に有り

二十八話 平原での戦い 相見える関係（後書き）

まさかの少年ジャンプ展開

それはさておき、ここらで伏線の確認とおさらいの一部を箇条書き

1・華琳の記憶

無印の記憶を持っていたという彼女の伏線は長坂橋に行く直前、一刀が飲んでいたお酒にフラグが立ってました。純米酒、いわゆる日本酒が出回っているのは以前、無印の頃に一刀から酒造の仕方を聞き、この外史で完成させていたから。なんて理由です。

（真では霞に教えていますが製作には至って無い模様）

2・卑弥呼の探し物

あるキャラクターの初登場シーンにちらりと出てきましたね。いわゆる武装追加フラグ

3・張三姉妹＋七乃、美羽、稟のライブ

ぶつちやけアイドルマスター（声優ネタ）
長坂橋で走り去るセキトにぶつかったのはこの伏線

4・蜀メンバー参入

星の愛紗に対する不信感は泗水関の頃に描写有りでした。
恋の登場は18話の旗の色で示唆。一刀が呉に所属していたのでうまい事隠れ蓑になりました。

たんぼぼは完全に作者の趣味

二十九話 平原での応酬 紐解かれる関係（前書き）

祝・恋姫無双第三弾発売発表！！

新作発表では作者の妄想が止まりませんな！

情報を知った三日目でこんなとこまで行き着いてしまったYO

恋姫無双2 ドキつと禪パイ！

あらすじ

かつて大陸全土を治めたともいわれる北郷一刀

その彼が突然、自分の後継者として一人の幼子を拾って北郷一矢と名付けてしまった

それから数年、一線を完全に退いた一刀達に成り代わりその嫡子達が大陸の平定へと乗り出しはじめた。

だが父親はいつしよでも母はバラバラ、しかも名高い名将の子ばかりで皆我こそは！と主張し合い、争いが絶えない日々が続くもんだからさあ大変

事態の收拾に乗り出したのは元蜀の主要メンバーの娘達と要らぬ面倒事を避ける為に匿われていた北郷一矢。

今再び、北郷という名の種馬が大陸に姿を現す！！

キャラ紹介

阿斗 桃華の娘。一矢が大好き、ほわほわお姉ちゃん。でも色々と駄目駄目だったりする

関平　　愛紗の娘。偉大な母親に反発している不良系少女。ケビンマス…みたいだがツンデレ比率8・200の鬼デレっ娘の資質を秘めている

張苞　　鈴々の娘。超野生児、チャムチャム？天衣無縫な彼女を止められるのはラーメンと関平、そして一矢だけらしい。

曹丕　　華琳の娘。凄まじい才能を秘めているが本人にあまりやる気無し。日長のんびり過ごすダウンナー系。司馬三姉妹というアイドルグループのマネージャーでもある。

孫登　　蓮華の娘。一番の年上だが、実の父親に情欲を燃やす困ったちゃん。むしろ呉の娘は大なり小なり皆そなたとか……。無論手は出していないそうですよ？

やっべ妄想止まんねーっすわ

細かい突っ込みは無用って事で、、

二十九話 平原での応酬 紐解かれる関係

「御機嫌よう、孫権。……この世界で会うのは始めてかしら？」

極めて不遜に、そして威圧感たっぷり華琳が口火を切った

賊侵入の報を受け、普段なら猪の一番に駆けつけるであろう思春より早く孫権の元へ馳せ参じていたのは亞莎

万が一の事態を想定し、主を非難させるため道を急いでいた彼女だが、唐突に湧いて出た予想外の遭遇に思わず足を止めてしまった

「あ、あなたは……………」

なぜここに？、何の目的で？

動揺のあまり、うまく思考が纏まらない

目の前に現れたのは間違いなく、雪蓮様の命を奪う一因となった曹孟徳その人

（まさか、まさか今度は蓮華様を直接亡き者にしようと殴り込んで来たのかもしれない！）

平時ならばそんな一段飛ばしの思考には至らないはずの亞莎だったが、今の彼女は気負いの程がとてつもなく大きく押し掛かっていた

（蓮華様は私がお守りしてあげないと！）

過剰なまでの責任感

それは一刀の一件でショックを受けて以来、覇気を失ってしまった蓮華と自分を重ねながらも、それでも主を守るうという決意から来るものだった

当然、干吉よりもたらされた魏軍への介入の報を亞莎は真っ直ぐには信じていない

一刀様には必ず相応のワケがあるはず。でなければあの方は誰かを悲しませるようなまねは絶対にしない人物なのです

裏切りの報を受けても、自分をしっかりと支えてくれるこの思いを何度も蓮華には伝えていたが、うまく汲み取ってもらえず、歯噛みする日々を送っていた

「曹孟徳っ！ 何の目的かは知りませんが、それ以上近づけば敵と見なします！」

だからこそ、前回の記憶を取り戻し、蓮華の本当の心情を知っている自分が奮い立たねばならない

一刀様と蓮華様はただ、偶然が重なり、思いがすれ違っているだけなのですから

守るように一歩前へと歩み出て、何時でも暗器を使えるよう両腕を突き出す亞莎は怯えず、真っ直ぐに華琳を見据える

「なぜこの平原の地にいるのか、答えてくださいっ！」

当然の疑問、だが、返事は返ってこない

「配下の者に守られて、それでよく孫呉の王などと呼ばれていたものね」

彼女の興味は孫権にしか向けられていなかった

「……………っ」

「だんまり？ はあ……………つくづく煮え切らない態度の人間が多いわね。……………少しでも気負いして出てきた自分が恥ずかしくなるじゃないの」

こめかみを指で押さえつけ、顔をしかめながら言い放つ

「まあいいわ。話し合いは一刀と合流してからにしましょう。さっさとこっちに来なさい孫権」

「……………っ!？」

「一刀様!？……………なぜ貴方がそれを!」

「どうせ一刀と同じように、自分の気持ちに整理が着けられなくて悩んでるのでしょうか?だったらさっさと本人に会って確認なさいな」

「ほん、じつ……………が、帰って来ている、の?」

「……………帰る、という表現が正しいかどうかは一先ず置いておくけど、そうよ。北郷一刀は今この城まで来ているわ」

「あ……………」

無意識に孫権が抱き締めていた刀に力を込める

過剰な装飾を施されているその武器は以前、一刀が修理に出していた一振りだ

銀を基調にした鞘本体、それに沿うように走る荘厳な金細工と各部に埋め込まれた緑、赤、紫、三色の輝石が目を奪う

修理を請け負った小蓮の意向により、姿こそ変わり果てていたが機能はそのままに、まるで宝剣のような威厳を醸し出すに至った一品

新たに 『恋姫無双』 という銘を与えられていた

入れ違いで一刀に渡る事の無かったそれは彼の忘れ形見ともいえ、それを抱える孫権は間違い無く彼に未練を持っていると考えていいのだろう

明らかかな動揺を見せていた

「し……………しかし、あの男……………は……………」

「百聞は一見に如かず。会って話しなさい。一刀がなぜ何も言わず出て行ったのか、私の口から詳細を聞いたとしても今の貴方では到底信じる事が出来ないでしょう?」

誘い出すかのように腕を突き出し、手招きで呼び寄せる

孫権が俯き、考え始めると鮮やかなピンク色のロングヘアがその

表情を覆い隠し、傍らに控える亞莎にさえ反応が窺い知れなくなった

「……………蓮華様」

華琳にとつて一刀と孫権の関係改善はこの先、大陸を巻き込むであろう戦いに欠かせない要素の一つだが、自ら進んでお膳立てしようとは思っていなかった

むしろその手前、相互不干渉程度の誓約が一番効率が良い

二人の対話で話がこじれようとも、最悪、不干渉の関係さえ取り付ければ、袁招軍に身を置いている左慈の搜索と拿捕には問題にならないからだ

それは単なる孫権に対する嫉妬や妬みの類から来る個人的な心情による判断ではなく、その奥に控えたもつとも重要な懸念事項

一刀が話した過去の呉に対して華琳、否、魏軍が行った雪蓮暗殺の件は恐らく、千の言葉を重ねようと互いの溝は埋まる事が無いだろうという予感がある

かつては良好な関係で大戦を終えた魏の記憶と、理由は不明だけれど魏軍を滅ぼすまで戦ったという呉の過去は双方事実として覆せないたとえ華琳がどんな謝罪や詫びを述べようと、その事実が前提としてある以上、陳腐な言葉遊びとしてしか取られないだろう

（話が拗れて問題になる懸念がある以上、結果を得る最短の選択肢として本格的な和解は後回しにしてもらいましょう）

一刀に全てを救えと言った自分が選択しようとしている先送りの回答に我ながら苦笑する

（北斗を望むような果てない理想は、この私でさえも躊躇しているのね。……とはいえ、無理に関係を良くしようとして墓穴を掘っては意味が無い）

一刀と呉の話し合いが万全で済めば、それこそ最良だがこれ位の保険はかけて当然だろう

そんな心の陰りを隠すように存外な言い回しを放ち、わざと一刀との対話を急いだ華琳だが、その真意は目の前の彼女に届くはずもなかった

「……さっきから自分勝手な物言いばかり。貴方に蓮華様の何が解るというのですかっ！」

「……………あら」

「非道な行いで他者を蹴落とし、天下を我が物とせんとした悪鬼曹操！あなたの思惑がどうあれ、これ以上この御方を悩ませるようなまねはさせません！！」

言つちや否や、亞莎の長過ぎる袖から生えるように突き出す武器の数々
長剣、手槍、棍棒、片手斧といったあらゆる剣種、鈍器の類が顔を
出した

「……覚悟してくださいー！」

「…………それは良いのだけれど」

ここで始めて華琳が亞莎の存在を捉えて口を開く

「貴方、名前は？」

「っ！！」

華琳は別段侮蔑の意味を込めたわけではなかったが、怨敵として華琳を強く意識している亞莎にとってその言葉は禁句だった

弾かれたように亞莎は袖を振り回す

袖口から射出される刀剣鈍器のつるべ打ち

直剣が壁に突き刺さり、棍棒が床を叩きつけ亀裂が入る

だが、飛来するのは剣や鈍器だけではなかった、切っ先が尖る鎖の束が合間を縫って上下左右に打ち出され固定されていく

それ自体は速度も狙いも甘いため、何ら脅威でもなかったが、次第に次から次へと降り注ぐ武器が鎖に絡まり、鬱陶しい事極まりない見る見るうちに通路が無骨な鉄の輝きに埋め尽くされる

これだけの武器を貯蔵出来る術を持ちながら、なんと拙い投擲技術か
呉軍はこの程度の力量で護衛を務めるのか

決定打はおるか掠りもしない攻撃の数々に華琳の苛立ちが募ってい

った

ふと相手の表情を隙間見ると、なぜか彼女は焦った様子も無く、鋭くこちらを睨んだままだ

.....

微細な違和感

幾戦の修羅場を駆け抜けた自分の勘が警鐘を鳴らしている

草葉に隠れた罖を察知したこのような空気の変化

この、あまりに粗野な攻撃は本当に相手の力量不足によるものだろうか？ もしや別の目的を実行するための布石なのではないか

聡明ゆえの疑問が脳裏を掠め、若干の気の緩みから華琳の動きがほんの少しだけたじろいだ

「！ そこっ！」

その一瞬を逃さず、亞莎がここぞとばかりに今まで以上の速度で直剣を頭部目掛けて投擲した

「 フン」

だが、それを首を捻るだけの最低限度の動きで回避する華琳

元の位置に首を戻そうとしたところで、突如、眼前に迫る殺気に体が勝手に反応した

「はあああああ!!」

「!!」

繰り出されたのは鋭利な刃物の射出でも、叩き伏せるような重量級の塊を投擲したわけでもない

「ちっ!」

それは一瞬で肉薄してきた亞莎の手刀突き

たたらを踏んで距離を取った華琳の頬に、掠めた疾風のうねりがうつすらと切り傷を残していた

よくもこの私に傷を負わせたわね……

顔を傷つけられた事による憤りと、壁際に移動したせいで密接に感じ取れた背中に刃を察知したところで、ようやく彼女の狙いに思い当たった

「……………こちらが本命、得意の戦闘を生かす為というわけね」

亞莎は答えず、徒手空拳の構えを取った

よくよく見渡してみれば、壁や床の至る所に武器が鎖に絡まり、突き刺さる光景はまるで四方を囲まれた地獄の針山を思わせる

あの中に身が沈めばただでは済まない。あのむやみやたらな投擲はこの為の布石と考えていいだろう

(激昂していたと思えば……よくやるじゃない)

華琳の予想は正しく、この行動範囲を狭めた上での近接戦闘は亞莎が得意の体術を少しでも生かすために考え付いた苦肉の策だった

(自分が傷付く可能性は勿論ある。けどこれなら多少間合いを読み間違っても、拳は届くはずっ！)

眼鏡を掛けたとしても彼女の場合はモノクル。視界が狭窄になるのは否めない

心は熱くとも、頭は冷たく冷静に。長い袖から姿を現した手甲『人解』が本領発揮とばかりに苛烈な牙を向く

正拳、脚刀、前蹴り、肘打ち

狭い通路を更に狭めたその場所で突き系中心の打撃が速射砲のように穿たれる

「ふふっ……以外に頑張るのね、貴方」

肉薄する弾幕のような体術の嵐に晒されながらも、華琳はそつと笑みを零して全てをよけてみせた

「だけれど……」

唐突に、とん、っと激しく揺れ動く亞莎の肩に何の問題も無かったかのように、優しく手が置かれた

「えっ？」

「相手の実力も測れぬ、若輩者が楯突くべきではないわね」

「なあっ！！？」

その撫でるような手つきとは裏腹に発頭の要領で拳底を放ち、肩を打ち抜く

たまらず床へと叩き落された亞莎が簡単に組み伏せられた事によるショックで放心しているところと華琳が冷徹な目をもって見下ろす

「この私の肌を傷つけた罪、償ってもらわないと」

壁に突き刺さったままの長剣を抜き取り、刃を首筋の直上に番えようと握り手に力を込めたところで、今度は先の投擲と比べ物にならないほどの速度を持った銀光が差し迫ってきた

キンツ

甲高い金属音を鳴らして刃と刃が交錯する

それを弾くでもなく、そのまま受け止めた体勢で華琳の瞳に再び笑みが浮かび上がった

「……………お目覚めかしら、孫権？まだ寝惚けているのなら、もう少しつめの眠気覚ましを用意してあげましょうか？」

「随分と乱暴な親切だな。…どんな思惑でここまで来たのかは知らんが、これ以上私の大切な仲間を傷つけるといふのなら容赦せん」

亞沙に命の危険が迫った事で、なんとか自分を奮い立たせた孫権の表情にはさつきまでの揺れ動く少女の面影はなりを潜め、眉間に皺を寄せている

「……………勝手に逆上したのはそっちの部下でしょう。まあ、貴方がまともに会話出来る様になったのなら多少の代価は仕方ないと考えるべきかしら」

「私との会話が目的でここまで来たというのか？国を失い、敗残の徒を辿っている貴様が一体何用だ」

揺れる胸中をごまかすためか、咄嗟に携えた刀は僅かに震えようとも口調だけははつきりとしておく

侮蔑の意が籠ったその言葉を、華琳は見透かしたようにしれっと聞き流す

「簡単な話よ。呉と北郷一刀に不干渉の誓約を立てて貰いたいの。あれの管理は魏が引き受けるから」

「！？いきなり何を言い出すのだ貴様は」

「順を追って話しましょう。まずはそうね、北郷一刀という存在の説明から始めましょうか……………」

紡がれる言葉は荒唐無稽

複数の過去の元にこの世界が創造されているという事実が華琳の口から告げられた

世界の発露がたった一人の男の復讐のためだという事を

北郷一刀がその発端となっている事を

そして、全てを救うべく行動を開始するこれからの指標を……

一言一句を誤魔化さずに語られるそれは孫権にとって寝耳に水な内容ばかり

奮い立つたばかりの彼女が困惑していく中で、とどめとばかりに言い放たれた言葉は更に身を苛む

「……説明はここまでよ、孫権。すぐに理解せよとは言わないけれど、これだけは忠告しておくわ。……一刀との関係。一時の行動で不信がるような間柄であったのなら、即刻身を引きなさい。たとえ遺恨が片付けられようと、あれと共に道を歩むには信頼だけの関係では不十分なのよ」

突き放したかのような物言いは奇しくも孫権の心中に潜み続けた迷いと直結していた

「お前に……なにが……」

底知れぬ怒りが彼女に湧き上がってくる

この女は何も分かってはいない

なぜ私がこんなにも苦しんでいるのか、なぜいままであの男と正面から向き合えなかったのかを

「勝手な口を利くなよ曹操……お前に……記憶とやらが戻っているお前にそれを言われたくないっ!!」

「くっ!」

振り上げ、叩きつけられた『恋姫無双』

突然の凶行に辛うじて対処できた華琳だが、怒りに震える孫権の表情を見てはっとした

「まさか、貴方……」

微かに潤む瞳は激情から来るものだけではない

嗚咽のように発せられる剥き出しの感情に、傍に伏せていた亞莎すらがたじろいってしまった

「口を開けば皆過去の記憶や北郷への思いが足りないのだと、勝手に私の心を決め付けないで!」

「蓮華様……」

「いい加減にして……なぜ、あの男への思いを過去から来るものだけで判断するのよ、そんなの卑怯だわ……」

「……………」

「私は……………」

責任感の強さから語られなかった思いが堰を切ったように溢れ出す

それはどこにでもいる少女のような純粹さを持って

「私は、過去とかそんな曖昧なものに関係なく、ただ純粹に北郷を……好きになりたいだけなのに……」

氾濫する思いはこの場にいた二人にも影響を及ぼす

強すぎる思いゆえの悩み

その激流に思い知らされた華琳がそっと、剣を下ろした

氣弾は確かに干吉の胴体を捉え、その威力を發揮したはずだった

「そんな……馬鹿な……」

「ククツ、そのように驚かなくともよろしいですよ。これは紛れも無い現実の光景、ありのままを受け入れれば何の事はありません」

「そんなわけがあるかつ、この妖め！」

騒がしい城内とは裏腹に緊迫した空気を醸し出す屋根の上、高所ゆえの強風に晒されながらも凧の叱責は大きくはつきりと響き渡る

見上げる視線のその先にふわりふわりと中空を漂う干吉が冷笑を浮かべ、仰々しく振舞う

「これは心外。ある程度は自重したつもりですが、お嬢さんにこの姿は気に頂けていないようですね」

そう言つて手の平にある 自分の足首を くるくる回して弄び、もう片方の腕が頭部まで寄つて来て顎に手を当てる余裕の動作をしながらも、胴体と残る足首は警戒するように凧と卑弥呼の周りを旋回している

「ワシとて願い下げじゃ。頭部、胴体、両手、両足。六分割で氣弾を回避するなど、誰だつて気色悪いに決まっておろつ」

「そうですか？ 臍物を撒き散らさない分、それほどスプラッタな印象は与えていないと思つたのですが、……ふむ、些か価値観の違いがあるようですね、次からは考慮に入れておきましょう」

一人納得した様子干吉は頭部だけを動かして、凧に向かい合う

「随分と頑張りましたね、楽進殿。私がこの術を駆使しなければな

らない程追い詰められるとは、正直想定外でしたよ」

「貴様に褒められても嬉しいとは微塵も感じないな。無駄口を叩く暇があるならさっさと掛かって来い！」

戦闘開始からすでに半刻が流れ、終始余裕に満ちた表情の干吉に対し、凧の顔には言動とは裏腹に疲労が色濃く表れている

（さつきからこちらの攻撃がまるで当たらなくなっている。……残った体力からすればこれ以上の長期戦闘はまずいな）

気取られぬようそっと息を吐き、呼吸を整える

「やれやれ……息巻くのは良いが、もう少しワシを頼ってもバチは当たるまい。一旦下がって休んではどうだ？」

「駄目です。卑弥呼殿の都合もあるのでしょうが、ここは自分に任せてください」

「ふう……おぬしもなかなかの頑固者じゃのう」

「ククツ……」

一刀が魏の記憶を取り戻したあの晩 この男は敵だ という直感を感じていた凧は当初、その憤りから苛烈な攻撃で干吉を追い詰めていたがクリーンヒットといえるものはいまだ一撃も無く、激しい動きから徐々に体力を奪われている

それでも凧は渾身の力を振り絞って両足に活を入れ、干吉を睨みつけた

「なかなか良い面構えになってきましたね。そういった激情に身を任せて、ひたすら突き進む姿は愚かしくもあり、どこか愛しい…非常に私好みで好感が持てます。ふふっ、そろそろ頃合。あなた方に敬意を評し、貴重な情報をお教えしましょう」

「なんじゃと？」

「卑弥呼。あなたの本当の探し物は アレ の力が封じられているであろう玉璽ですね」

「！ なぜそれを!？」

「それくらいは予想は簡単につきますよ。この一連の外史創造、破壊のファクターは本来、北郷一刀とアレでしか触媒になりえません。新生、破壊のいずれにしてもアレは必須ですから。ですが安置されたはずの場所にそれは無く、いや正確には台座しかありませんでした。ならば左慈によって他の何かに移し変えられ、彼にとって都合の良い終端で使用できるようどこかに隠されたと考えるべきでしょう」

「貴様……良く口が回ると思えば、やはり……」

合点がいったとばかりに卑弥呼が言葉を漏らす

「ええ、ご察しの通り。左慈と私は無関係です。こちらの目的の邪魔にならない程度であれば多少の情報は提供致しますよ。彼はこの私がこの外史にいる事すら知らないはずですから」

「なんともまあ、腰巾着のように引っ付いておっただのが嘘のような

振る舞いじやの……何を考えておる」

「色々、ね。とりあえず今のところは敵で無いとだけ言っておきましょう。それより先の答えを伝えておきます」

誤魔化すように干吉が言葉を重ねると卑弥呼もこれ以上の言及は無駄だと悟ったのか口を噤んだ

長坂橋の一件と今回の騒動。確かに翻弄されてはいるがやはり違和感が拭えんな

左慈の思惑を妨害しこちらの手助けになるような行動は本来、外史の破壊を根幹とする役目を持つこやつが存在意義と大きくかけ離れておる

それを無視し、魏の記憶まで取り戻させたのは何の為じゃ？

どうにも左慈と我らを含め、こやつの掌で躍らせられている気がしてならない

早めに真意を聞き出さねば、何時か全員が飲み込まれてしまつやもしれんな……

卑弥呼が悩む様子を気にするでもなく、干吉はたんと言葉を発する

「呉に玉璽はありませんでした。左慈に持ち去られたと推測したのですが、写し身の情報によるとどうやら未だに洛陽に潜んでいそうですね」

「それは真か？」

「私とてすぐバレる嘘はつきませんよ。疑うなら時間は掛かるでしょうがご自身の目で確認してください。そこまでは面倒を見切れませんよ」

「……………玉璽以外に力を移し込んでいるやもしれぬぞ、もしくは他のもの取られぬよう自分自身を贄に……………」

「まさか！幾ら我々でもアレの力は持て余します、それはありえませんが…。まあ、可能性としては神性の低い祭器の類に複数分けているかもしれませんが。候補として呉の『南海霸王』蜀の『靖王伝家』などの宝剣、もしくは何処に紛れた『太平要術の書』、いずれにしても三国志や演義に名を残す著名な代物でしょう」

「ぬづ……………」

こちらもちちらで解決せねばならぬ問題じゃの

「それから、楽進殿。北郷殿へ伝言をお願い出来ますか？」

「なに？」

凧にしてみれば意味不明なやり取りが交わされる中、突如として話を振られた凧が一瞬身を硬くする

「私が呉に蒔いた種子は近いうちに目の前へと現れるでしょう。それは貴方と縁を持ちながらも、世界の意思によって淘汰された存在。それを芽吹く前に刈り取るのか、毒花と知りながら愛でるのかは貴方の判断次第、この私からのささやかなプレゼントをどうかお受け

取りください。とね」

「……………あやふやな物言いをせずにはつきりと答える！」

「それではおもしろくないでしょう？ 多少の娯楽はあって然るべきです」

「くっ」

「まあ、楽進殿にとっては些か面白くない事態にはなるでしょうね。……差異はあれど、色恋沙汰が多くなるとだけ言っておきましょう。彼にとつては本懐かも知れませんが」

ふらふらと空中を浮かびながら、ほくそ笑む干吉の仕草に風が思わず反発した

「人を思慕する感情を人外の貴様に理解できるはずがないのに、知つたような口を利くなっ！」

「……………」

「そんなに人の心を手玉にとって何がおもしろいというのだ。自分はお前のような冷徹な存在は絶対に許さない！」

「……………ふむ」

「！！ いかんっ！」

戦闘の意思を見せていなかった干吉の瞳に暗い炎が灯った

突如、二人を囲んでいた部位の内、右腕が発光しながら風に向かって一直線に飛来する

弾丸めいたそれは恐るべきスピードを伴っている

「なっ!?!」

突然の殺意にたじろぎ、反応が遅れる風

さっきまでこちら話を聞き流していた男がなぜ急に攻手に!?!

ここぞとばかりに光を唸らせながら迫る右腕は更に加速し、指を開いて顔面を狙いを定めた

(やられるっ!?!)

咄嗟に腕を交差させ、防御の体勢を取るがこの間合いでは直撃は免れない

覚悟を決めて踏ん張ろうとした風のすぐ横から、掛け声とともに卑弥呼が突撃してくる

「させんぞ干吉!　　しゃあああく熱っ!　　日輪掌　!?!」

間一髪、卑弥呼の援護が間に合い、炎を纏った右掌が輝く腕を掴み取って空中で激しく鎬を削る

明かりの無い屋外で、その衝突はまるで花火のように明るく辺りを照らし出す

バチバチと火花が飛び散り、極光を挟み込みながら卑弥呼が頭上の頭部に向かって文句を飛ばした

「どういってもりじゃ！貴様の用は済んだのでは無いのか！！」

「……………そのつもりだったのですが……………失敬。如何せん、感情が先走ってしまったようです」

言葉と表情は一致せず、干吉の表情は暗く濁ったままだ

「……………まあ、これからしばらくは顔を合わせる事も無いでしょうから我慢しておきますか」

「干吉…？」

風を見下ろし、独り言のように呟いた

「消
」

干吉が一言唱えると、分散していた彼の体がゆっくりと闇に溶け込むように消え、卑弥呼とかち合った右腕の発光も収まっていく

「お、おい待て！ まだ聞きたい事がっ！」

「後はご自由にお考えください。この私は敵ではありませんが味方でも無いのですから」

次第に朧になっていく干吉を呆然と送る風と卑弥呼

取り残された二人は更に増えた謎に思いを馳せる

恐らく全ての裏で手薬煉を引いているのは干吉で間違いない

左慈すら手玉にとって奴が何を成そうというのかは分からないが、こちらにとって厄介事が増えるのは確實、警戒が必要だろう

絡み合った謎にことさら頭を悩まされるが、為すべき事は二つに絞られる

外史創造に必要なファクターの搜索

そして元凶である左慈の討伐

このどちら一つでも欠ければ、一刀が願う全ての救済には届かない

いまだ騒動冷めやらぬ城内を尻目に、干吉という名の黒幕が一旦舞台を降りていった

闇夜に目が慣れなければ見えない程の視界の悪さで、二つの剣閃が交錯している

一つは赤い軌跡を描きながら正面の相手を狙う、赤色の歪刀『鈴音』
繰り返される斬撃はさながら赤い投網のように四方八方から襲い掛かる

一度絡め取られれば、なすすべもなく押し寄せる刃の波に晒されてしまっだろう

だがその相手

北郷一刀は刀の銀光を閃めかせながらこの予断無き連撃を悉く掻い潜り、受け流していた

多少の被弾こそあれど、それは掠り傷程度のもの

斬り合ってからわずかしか時間が流れていないとはいえ、いまだ一太刀の致命傷も受けていない見事な立ち回りに切り結ぶ思春の脳裏が驚きに満たされる

(……強くなっていると認めざるを得んな)

以前、模擬戦闘をした時よりも確かに勝る手応えを感じる

剣速、裾力こそあまり変わってはいないものの、自分の剣が奴まで届かないのは理合の変化だろうか

見たことの無い、剣を突き立てるような特異な構えは異質でありながらも理に適い、そこから繰り出される迎撃の正確さが群を抜いて高まっていた

何合も打ち合いを演じ、やっと思春が口を開く

「……大人しく制裁を受けるつもりは無いか、北郷一刀」

「……………」

「蓮華様を、呉を裏切り、憎っくき魏軍に組みした長坂橋の大立ち回り。その紛れも無い事実をどう贖う」

干吉によってもたらされた裏切りの報はあまりに突飛で当初は誰も信じようとはしなかったが、間諜、細作から度重なる事件の報告がなされると紛れも無い現実のものとして呉軍に伝染していった

「答えるっ！北郷！！」

「……………思春」

その声はあまりにもはっきりと私の耳に入ってきた

「俺は曹操を助けた事に後悔はしていない。……あの時の行動は正しい判断だと思っている」

「!!!」 北郷おお!!!」

瞬間的な怒り、駆け引きも何も無い力任せの横薙ぎを叩きつける

「くっ!」

「言うに事欠いて正しい判断だと?! 貴様は雪蓮様がなぜ志半ばで倒れたのか、それを忘れたか! あの女は真つ向から戦おうともせず、卑怯にも暗殺を企てた卑劣漢だぞ! 助けるなど言語道断、そんな義理がどこにある!」

いなせないと判断したのか、北郷は正面から私の一撃を受け止めて見せた

互いの武器がギリギリと音を立てて拮抗する

「俺は……………俺には彼女達を助ける理由があるんだ……………っ!!!」
十字に合わさった剣越しに、北郷の瞳がはつきりと私を捉えた

「俺には呉の記憶だけじゃなく、魏軍の一員として大陸制覇を成した過去を持っている」

「……………なんだと?」

いきなり何を言い出すのだ、この男は

「それだけじゃない、俺の中には蜀に所属し呉のみんなと力を合わせて魏と天下を争った過去も含め、全部で三つの結末の異なる記憶

を持っている」

「……………世迷言を。それで己の所業を誤魔化すつもりか」

「そうじゃない。もう俺は答えを先送りにしたり、迷って誰かを傷つけないと誓ったんだ。だから、君に本当の事を打ち明けて向かい合いたい」

その瞳には以前のような揺らぎやどこか思いつめたような色は浮かんではいない。一本の芯が通ったような実直な思いが伝わってくる意を決するように大きく息を吐いた

「思春。……………今ここにいる世界は俺が居た天、正史から派生した、外史と呼ばれる世界なんだ。厳密には違うけど、ここでは何度も天下を競い合って魏と呉、そして蜀が戦い合っている。けどその結末は一つだけじゃない。さっきも言ったように雪蓮と周瑜が命を散らし大陸を制した過去もあれば、天下三分を為す過去や、力を合わせ五胡を打ち払った過去もあった」

これは妄言なのか / それは三国志と呼ばれる外史の理

「だから過去の記憶を持っているのは呉だけじゃない。魏も蜀もそれぞれが主役となった過去を引き継いでこの外史で活動していたんだ。そしてこの異常現象は決して偶然じゃない。一人の男が故意にそうなるよう仕向けて世界を創っていた……………北郷一刀を殺す為だけの舞台として」

これは虚偽の言い回しなのか / それは演者であれば誰もが

知りえないはずの真実

「奴の名は左慈。今は袁召軍の将として偽装しているけど、本来のあいつは観測者や剪定者なんて呼ばれるいわば神仙の類の存在だ。そいつを止めないと世界は役目を失い、跡形も無く崩壊してしまう。俺は、それを止めるために戦わなくちゃいけない」

これは…………… / それは北郷一刀だけが成しえる使命であり、彼が掲げる途方も無い理想

「……………この決心が着くまでに時間が掛かってしまったけど、出来る事ならやり直させてほしい。……………思春。あの時、模擬戦闘で君に打ち明けた悩みの答えだ」

「……………言ってみろ」

「俺の、北郷一刀の成すべき事とは全てを思いを受け止め、全てを救う事。たとえそれが子供が夢見る虚空の物語であったとしても、俺は求めるのを辞めない、どんな困難であろうと諦めたりはしない……………そして」

触れ合うのは剣か心か、あまりにも非常識な物言いに、私は真剣に聞き入っていた

「まだ俺に挽回の機会があるのなら、孫権とやり直させてほしい。零れ落ちてしまった思いがあるのなら、俺はそれを掬い取って先に進むから」

「……………」

何時の間にか合わさっていたはずの剣同士から不快な金属音が消え、辺りには遠くで聞こえる足音や掛け声だけが妙に響いていた

あまりに予想外過ぎる北郷の弁明は、正直私の理解を大きく超えた妄想にしか聞こえない

確かに前回の記憶などという不可思議な現象は身を持って体験している。だが、何度も大戦が繰り返されているというのが気に入らない
それではまるで、我らが見知らぬ観客のために踊る道化のようではないか

理解ではなく、理性が納得を遠ざけた

「……………大した狂言だ。こんな状況でもなければ、演劇家でも始めるのを薦めなくなるな」

「思春……………」

わざと小馬鹿にした態度を取って出方を見る

少しでも矛盾点があれば、即座に問いただし、真実を見極めてみせよう

「随分と壮大かつ、練り込まれた話だが些か疑問点が残るぞ……………なぜ左慈は貴様だけを狙う。なぜそやつは記憶を我らに残した」

なにより疑問点はそこに尽きるだろう

世界を巻き込むほどの怨念をなぜこいつが受ける事なったのか、こ

の話の前提条件となるきつかけはどのようなようにして生まれたのか、一番重要な問いだ

北郷は一言一言選ぶように言葉を重ねた

「左慈が俺を恨む理由、それはこの外史の象徴が俺だからだよ。あいつは破壊を司る剪定者、決められた役目をこなすのが嫌になって何かをするつもりだったらしい……だけど元の、天の世界で俺と一悶着あったせいで結局は外史が誕生してしまった。それがどうしようもなく憎いらしい」

「らしい?」

「思い出せていないんだ。味方側の観測者によればいずれは戻らしいけど、俺には複数の記憶が混在している。そのせいか記憶に霞が掛かっていまいち詳細が分からない。はっきりしてるのは魏にいた記憶ぐらいだ」

よりによってそちらとはな……

「思春?」

「ふんっ……胡散臭いが次だ、そいつはなぜ記憶など戻す?どんな得が発生するというのだ」

「……本人に聞かなくちゃ分からないけど、恐らく、記憶を残したのはそれで仲違いを起こそうとしたんじゃないか?実際、魏の話聞いて思春は俺の正気を疑うくらい拒絶していただろう。左慈はその魏に対する恨みを利用して潰し合いをさせるつもりだったと思う。今は問題が解決したから心配ないけど」

「ふんっ、あの曹操が命を救われたからといって、そういつまでも恩を覚えているとは思えんな。以前も奴は雪蓮様の一件があってもこちらを攻めてきただろうが」

「それはそうだけど……今は大丈夫さ。もし手違いで何かあってもすぐに俺が責任を持って押さえるから」

「……………すぐ、だと？」

「ああ、魏の連中は真桜や沙和を除いてほぼ全員連れてきてるからな。もし春蘭なんか暴れても恋や星もいるし、大事になる前に止めて見せるよ」

今、さらりととんでもない事を抜かさなかったか？

「……………一つ確認したい」

「なに？」

「曹操がここに来ている……………いや、それと同様に趙雲や呂布がいるとは冗談にしても随分とお粗末ではないか？」

「えっ……………別にそんなわけじゃ……………」

心底意外な、みたいな表情を浮かべて眉を顰めている

「……………一気に信憑性が薄れたな」

「そんな!？」

「とはいえ、一度裏切った貴様を信頼しようとは最初から思っていないから関係は無かったな。余計な質問だった」

「……………どうすれば信じてもらえるんだ」

「……………」

突き放した答えを聞いても北郷の目は死んでいない

道を塞がれ、こちらの出方を待つのみ段階にあっても、揺るがぬ信念が確かにそこにあった

何かあったのは確実だな……………

平原を発つ前とは比べ物にならないほどの精悍さは一昼一夕で身に突くものではない

この眼、最後に見たのは前回の

「……………思春？」

……………

……………私までが先延ばしにしては元も子もないな

「……………構えろ、北郷」

さっきまでの攻防が嘘のように、静かに剣を離して距離を取る

「貴様の事情と信念。それを信じさせたくばこの私に打ち込んで来るがいい。一太刀浴びせれば貴様に勝ち、蓮華様への目通りを許そう。しかし、失敗すれば死、あるのみ。……………どうだ？受ける覚悟が貴様にあるか」

「……………もう一つ条件を加えてくれるなら、喜んで受けるよ」

「命乞いか？やはり貴様は……………」

「君に認めてほしい。……………俺達は二人揃って、孫権の側にいるべきだろう、でなきゃ彼女が悲しむ。そこだけはきちんと覚えているから」

「……………構える」

『鈴音』を体の後ろまで回し最大の一撃を加えるべく、腰を大きく落とし、体を捻りこむ

武人として我が前に立つというのなら、見事私を越えてみよ！

「……………分かった」

北郷は一言告げて鞘に剣を収め、またも見たことの無い構えを取った
同じように上半身を絞り込む体勢、違うのは足回りと構えた武器、
納刀したままで静止している

本当にしばらく会わぬうちに変わったな、北郷

奴から放たれる、剣気は徐々に大きくなっていく

「呉軍が将の一人、甘 興覇………参る」

猛禽の四足獣のように身を屈め、前傾姿勢を取る

「 摩利支曳娑婆訶… 天清浄… 地清浄… 人清浄
六根清浄」

以前聞いた精神集中の祝詞を口ずさみ、柄を握り直す北郷

「タイ捨流、北郷一刀。 迎え撃つ」

僅かに鯉口から顔を出す刃が建物から漏れ出す光に反射してキラリと光る

覇気を伴った返事に微塵の躊躇は感じられない。依然、騒ぎの音は聞こえども二人のいる渡り廊下だけは静寂に支配されている

さあ、北郷。余計な言葉はもはや不要、妄言の数々を一撃をもって私に信用させてみせるんだ

機を狙い、更に体を沈めていく

僅かに頬を撫でる夜風を感じながら時間がゆっくりと流れ、やがてどちらとも無く双方の体が動いた

全身のばねを活用し、振り上げられる剣と神速を持って鞘走る刀

交錯するは赤い閃光と銀の流星

「っ!!」

その声は誰のものか

答えは一瞬の合間を挟み、夜闇の狭間に如実な結果を映し出す

三十話 平原での和解 結び直される関係（前書き）

唐突ですがここで第一部が完、一つの大きな節目となります。

うう……そんな重要なところでスラップスティック視点なんかやるんじゃないかったです。頭がこんがらがってきた。

蓮華と一刀の会話は各々で妄想してやってください
もう疲れたよ、クドリヤフカ…… 和風。

………はい、ネガはここまで！ おいら明日から頑張るよ！
次話は作者がこの小説の中で一番書きたかったところになりますん
そう、ついにあの人用に仕込んでいた伏線回収回です

三十話 平原での和解 結び直される関係

見誤った

記憶が無ければ一刀への好意は薄いはずという思い込みが、初歩的な読み間違いを招いてしまった

(記憶が無い上でも、これほどの思いを潜めていたなんて)

しかも押し寄せていたであろう過去からの感情に流される事も無く自分を戒め、正面から一刀と向き合おうとしていた

それに比べて自分はどうか

過去の記憶を思い出し、感情と記憶の一致に突き動かされて行動を共にしようとした思い立ったあの夜

ようやく探し物が見つかったのを喜ぶ幼子のような行動が酷く稚拙に思い返される

……待ち望んだ一刀との再会で少々頭が茹っていたのかも知れない

このままでは自分のせいで、余計に話がもつれ込んでしまっただろう

こちらを見据える孫権に対し、華琳は下ろした剣に一瞥、戦う意思が無いと言わんばかりにそれを放り捨てる

……せめて誠意を表しましょう。貴方の思いを卑下にした私を戒める為にも……

「……………誤解していたようね。一刀へ向けている感情の強さを……………
…この非礼、謝罪を述べさせて頂戴」

「……………曹操」

僅かに霞む視界に映るのは真剣な面持ちで深く頭を垂れる華琳の姿
眩く孫権を他所に、亞莎は先刻の告白に雷に打たれたかのような衝
撃を受けてしまっていた

（毎日お側に控えながら、なぜ蓮華様の孤独に気がつくことが出来
なかつたんだろう）

一刀への好意は当然のもので、過去の記憶は戻った方が良いという
思い込みが彼女の心を苛んでいたなんて

まだ彼がこの平原の地に居た頃、どこか距離を置くような関係を取
っていたのにも関わらず、好意を隠しきれていなかったのは自粛の
末に零れていた純粋な気持ちだったのだ

主君の本意に気付けなかった自分が恥ずかしい

「っ……………蓮華様、お下がりにください……………ここは私が……………くっ！」

痛む肩を押さえながら立ち上がり、蓮華を守るように向かい合う二
人に割って入る

だが、孫権は足元のおぼつかない亞莎を抱き止め、自分の方へと引
き寄せた

「いいえ、亞莎こそ後ろに控えていて。……曹操とは一対一で話したいの」

「しかし……」

「お願い」

「……………承知しました」

燻る責任感から無理に体を起こした亞莎ではあったが、その嗜めるような態度にしぶしぶ了解し、やや後方、半歩下がった程度の位置で控える事にした

大声で本音を吐露したおかげか孫権の言葉に淀みは無い、瞳には吹っ切れたような強い意志が見て取れる

亞莎が従ったのを確認してから、孫権がもう一度華琳の方へと首を向けると、いまだ彼女は頭を下げたままの姿勢でこちらの反応を待っていた

「……………なぜ、そこまでするの。私の北郷への感情は貴方にとって、世界を救うという話の中では関係ないでしょう」

先刻の与太話を信じるとしても、その態度はあまりにも大袈裟すぎる隙を伺うような仕草も見せない誠意ある謝罪

これがかつて肝雄と呼ばれた曹孟徳なのだろうか

去来する疑問と困惑が頭の中を駆け回っていた

「……………それでも無いのよ、孫権。重要な事を私は話していなかったわ」

どちらが言うでもなく頭を上げ、視線を交わす華琳

「あの男は私にとっても……………この世界の未来に行く末に関係無く必要な人間。だから私はあいつの言葉を信じ、力を貸そうと思ったの」

「……………随分と北郷を買っているのね」

「……………ええ。一概に言えばそうかも知れないわ。私をこころも夢中させるのは後にも先にも一刀だけでしょうから」

そのせいで判断が鈍るなど愚の骨頂にも等しい。孫策暗殺の誤解を解くよりももっと重要な事柄が残っていたのに気付けなかった

私の言葉に若干の憤りと動揺を見せる孫権に自分を重ね、本来のあべき可能性を思い出す

北郷一刀の持つ、人の繋がりにおける強さを

それこそが全てを救うという目標に欠かせないものでは無いのかと華琳は何かの覚悟を決めたのか大きく呼吸をしてから神妙に話を切り出した

「孫権。さっきは関係無いと、勝手に省いてしまったけれど一刀が魏に所属していた過去を詳しく話していいかしら？ 主に私と一刀

の関係、男女の仲についてなのだけれど」

「!?!」

「今………なんて?」

突然の告白に動揺する孫権と亞莎に言葉を繋げていく

再び紡がれる言葉は世界の危機とは関係の無い、起伏に跳んだ波乱
万丈な過去における魏の記憶

語るべきでは無いと断じた日常の物語

それは荒野の出会いから、部下の一人として共に生きた北郷一刀の
人生

彼の魅力に魏軍の女性誰ほとんどが好意を寄せていたという事実も
含めて語られる

そしてなにより、彼が自分の存在を犠牲にしてまで華琳に尽くした
という事実を…

「……………」

「……………」

あまりの内容に口が開かない二人に対し、華琳は優越感に浸る事も
無く相手の言葉を待つ

(これで一刀がなぜ呉を裏切るようなマネをしてまで長坂橋に来た

かを理解できたでしょう)

自分の役目はここまで。説明を終えた華琳の胸中に、あくまでこの世界における主役は北郷一刀なのだと改めて浮かび上がってきた

これ以上、私を取り繕いの話し合いをしても、素直な気持ちで一刀と向き合おうとしている孫権と対等な位置に居られない

言葉は悪いが孫権との話し合いは初めから呉に関係を持ち、真心から向き合える一刀に丸投げすべきだったのだ

無論、ここだけではない

暗殺の一件も魏と呉だけで片づく生半可な出来事ではないが、一刀という共通の干渉役がいればなんとかなるはず

北郷一刀の持つ、人の繋がりにおける強さはきつと、私の想像以上に強固なものだから……

一抹の嫉妬と一刀が築いていくであろう思いの高さを胸に、華琳は
いまだ事実を処理し切れていない孫権の出方を待った

飛び込んでいった思春と迎え撃った一刀の立ち位置は入れ替わり、互いに背を向けた状態で静止している

ほんの短い、自らの手応えを把握する無心のひとコマ

最初に異変を告げたのは一刀の足元に零れる血の滴りだった

「……………くっ」

じくじくと斬られた胸板が痛みを訴えてくる

思えばこれだけの怪我をする機会は今迄無かったな

洛陽の戦いで矢を射られた時はあまりの激痛に気を失ったけど、このなんとか我慢できる程度の傷は逆に意識がはっきりしてくるくらいだ

顎を噛み締めて、みっともない声が出てこないよう、努めてゆっくり振り返る

「……………思春」

結果は明白

心の中で急かしながらも彼女の胸中を察し、そのままの姿勢で待機しておく

「……………北郷」

「……………ああ」

振り切った腕を戻してようやくこちらを捉える思春

両者の間にはこの勝負の勝敗を如実に表わす、物的証拠が石畳の上で無造作に転がっている

夜の帳であつても目立つ色、薄暗い視界にあつてもよく映るそれは赤い塊、数瞬前まで『鈴音』と呼ばれていた思春の剣だ

返す刃に打ち落とされ、無残に断ち切られた刀身は元の半分程の長さぐらいだろうか、結構な長さがある

まさか勢い余つて叩き切つてしまうとは予想もつかなかったな

無残に転がるそれを見ても分かるように、この打ち合いは俺の勝利という形で幕を閉じた

無論、そこには幾つかの偶然が重なった結果なのだが、肝が冷える思いをしたもんだ

勝利の要因。まず最初にあつたのは思春の判断ミスだろう

以前の模擬戦闘のように気配を絶った攻撃ならば切り伏せられていたかも知れない

だが彼女は最速の一撃を放つため、あえてをしなかった。そこが運命の分かれ道

泗水関で春蘭の攻撃を防いだ時のように、予め軌道が分かっていたればこちらとしては対処し易いのだ

そしてもう一つの原因は思春が躊躇い無く、全力で攻撃してきた事順手持ちと違い、逆手持ちは引くという動作で肘関節等をフルに活用し、独特のスタイルで相手を斬りつける。その最大の利点は手元で変化するバリエーションの豊富さだ

本来ならば、その変化を見越した斬撃のぶれがある程度生じてくるわけなんだが、本気故の迷い無き一撃が奇跡を起こしてしまった俺の放った居合いと真芯で接触する思春の斬撃

最後に勝敗を分ける事となった要因は武器そのものの性能差、方向性の違いだった

斬る事のみの特化し、ただひたすらに進化を遂げた『日本刀』

兜割りという言葉があるように、その切れ味は術者の腕と条件さえ整えば鋼をも断ち切る剛性と鋭さを誇る

世界においても類を見ない至高の一品は見事、その本懐を遂げたのだ折れた自分の得物に視線を移し、思春が呟く

「貴様の勝ちだ、北郷」

たった一言だけ告げて、背を向け何処かへ去ろうとする思春に驚き、慌てて引き止める

「ちよつ、ちよつと待てよ思春！どこ行くんだよ」

「……………別に貴様に関係あるまい」

「あるだろ！何勝手に自分の役目は終わったみたいなの雰囲気出して
るんだよ。こつちの話はまだ終わってない！」

振り向き際の暗い表情、なんでそんな顔してるんだよ

納得できないが、従おうみたいな感じか、それは？

前に思春が言った、半端な嘘が通じる間柄ではないのはこつちだっ
て同じ事だぞ

肩越しに返事をしている思春に向かって憤りをぶつける

「俺が勝ったら認めてくれるっていうのはどうなったんだ？なんで
逃げるように去ろうとするんだ」

「人聞きの悪い、少し城内の騒ぎを見に行くだけだ」

不満を胸の中にしまい込んで、心の整理を着けておこつてという腹
がバレバレだぞ思春

「だったら問題無い。犯人は俺の仲間達だから殺傷沙汰にはならな
いよ。話し合いが終われば切り上げる手筈になっているから」

「……………呂布や魏の連中の事か？」

「ああ、若干手加減に自信が無い子もいるけど大概は大丈夫だ。そう信じたい」

時折聞こえる、食堂、赤髪、なんて言葉はきつと空耳だ

「……………そうか、信じよう、頑張れ」

「……………絶対信じてないよね」

「……………ふん」

否定するのも億劫なのか、首を戻して空を仰ぎ見る思春

俺も自然と動作に倣う

そこには満天の星々がどこまでも広がり、少しだけ欠けた月が何かを表すようにぼんやりと浮かんでいる

「……………北郷」

「ん？」

少しだけの空白の後、思春が口を開く

「……………お前は複数の記憶を持っていると言ったな。その中で呉の記憶はどれぐらいの位置付けになっている。少なくともろくな説明せずに飛び出すほど大事な魏より低いようだが……………」

「……………そこは全面的に謝る。…だからといって記憶に優越をつけてるわけじゃない。あの時は華琳達の状況が切羽詰まって焦りすぎて

ただけなんだ。俺は俺の関わった全て人を大切にしたい」

それは紛れも無い本音、華琳から貰った俺の願い

けど、はっきりと答えても思春の言及は終わらなかった

「ならば、今後そのような事が無いと誓えるか？貴様のあまりにも現実離れしている志を実現するにはこのような事態は幾らでも起こり得るはずだ、この私を納得させたところで裏切りの報は呉軍に幅広く伝染しているのだぞ」

「確かにこの誤解を説くのは骨が折れると思う。でもそれは呉のみんなに本当の過去の記憶打ち明けられなかった自業自得、難しいからといって今後誰かを蔑ろにするつもりは無いよ」

それが俺の責任であり、成すべき事なのだから

「随分と自信があるようだな」

「そうじゃない、ただ気持ち負けして最初から諦めたくないだけさ」

「……………」

言って再び口を閉じる思春

一体何が気に入らないんだろうか

過去の記憶うんぬんを信じられないというよりも、俺の言葉自体をあまり信じてもらえていない気がする

どうしたのかと思案に暮れていると、思い出したかのように再び胸の傷が痛み出し、思わず声が漏れてしまう

浅いとはいえ、切り傷と服が擦れ合う電気が走ったような痛みがぶり返す

「いっつっ……………」

「む……………」

ここでようやく思春がこちらに振り向き、少しだけ申し訳なさそうな表情を浮かべる

「いてて、まさか斬れるとは思わなかったから油断してたよ」

「それはこちらの台詞だ、まったく…おい、簡単な手当てをしてやるからこっちへ来い」

首に巻いた長布を包帯代わりにしてくれるのだろう、解きながら声を掛けてくれる

「それだけ強くなってどうする……………変わるのはいいが本質を見失っては本末転倒だぞ……………」

「えっ？」

「何でも無い」

ポソリとした咳きは耳に入らず、返ってくるのは思い切り布を締め付ける握力だけだ

「痛い！痛いって！！」

「我慢しろ」

首に布が巻かれつつあるのは我慢すべきところなのだろうか

これで死んだら医療ミスってレベルじゃない

「……………北郷？」

そんな思春のおちゃめ？に苦悶の声を上げていると、まるでどこかの漫画のようにタイミング良く彼女が現れる

「げっ！？」

わずかに光る灯籠越しに見えるのは人呼んで歩くトラブルメーカー、もしくは人間凶器、勘違いの多さなら誰にも負けない武闘派の女性、その名は……

「危ない！ 北郷！」

説明が終わる前に、問答無用で斬りかかって来た

恐らく俺が襲われていると勘違いしているようだが、問題なのは振りかぶった大剣の間合いに 思いつきり俺も 入っている事だ

「俺が危ない！！」

「くっ！！」

ちょうど背を向ける形になっていても気配を察知し回避する思春と、
間一髪飛び退いてかわす俺

更なる追撃を繰り返そうとしている彼女にたまらず静止を掛ける

「待て春蘭！！お前のそれはいつもの勘違いだ！」

生と死が隣り合わせクラスのどじにはもう慣れているが、状況が状況だけにこれ以上の騒動は勘弁願いたい

「なに？ 貴様の悲鳴を聞いて助けてやったというのにその言い草はなんだ！！」

「別に命を狙われてたわけじゃないって！さっきのは治療してもらった時に傷が痛んだだけだ」

「……………本当か？」

油断無く思春に向かって構えを取り続ける春蘭

「嘘を言う必要がないだろ。ほら、傷口に布を巻いてもらってるだろ」

「……………むっ」

若干血に滲んだそれが決定打になったのか、しぶしぶと大剣を担ぎ直す

「せっかく潜入当初から注意してたのにこれじゃあ駄目だろ春蘭。」

もうちょっと落ち着いて行動してくれよ」

「なにをいう。そんな事を言って躊躇していたら、本当に身の危険が迫った時に対処できぬではないか」

「それはそうだけども……」

心配してくれた事自体に咎は無いのでこれ以上言及できない

一歩間違えば更なる混乱を招いていたかもしれないが…

「まあ、なににせよ心配してくれてありがとうな」

「ふ、ふん！勘違いするなよ、お前がいないと華琳様が悲しまれると思ったただけだからな」

割と最近聞いたテンプレだ

「……ときに北郷。呉の連中への説得はもう終わったのか？いい加減手加減して暴れるのには飽きてきたぞ」

「別に戦う必要は……まあいいや。孫権へはこれから会いに行くところだ」

「何？だったらなぜさっさと先に進まん」

「それは……ん？」

ちらりと思春の表情を盗み見ると、そこには敵に対する警戒心というより、まるで見た事の無い、変な物を発見したかのような好奇の

視線があつた

「……本物の夏侯惇殿か？」

「こんな特徴的な見た目と性格の持ち主が他にいるなら見てみたい」

「それは私が特別な存在だからという事か？」

なんとというポジティブシンキング

若干の嫌味は気づいてさえもらえない

「まさか本当に魏軍の将を連れ込んでいるとはな。それにその北郷への素振り。絆があるのは確かのようにだ」

「思春？」

「何の話をしているのだ？」

置いてけぼりの春蘭と突然の空気の変化に困惑している俺が二人して首を傾げるのを他所に、思春の表情が再び引き締まる

「一つ、夏侯惇殿に質問をしたい」

「何だ？」

「北郷といえは何を思い浮かべる」

「はっ？」

「率直な意見を述べてくれ」

ここは俺が信頼出来るとかそういうのを確認をする場面じゃないの？
思春の出した質問の意図が分からない

だが、直情的ゆえの素直な性格をしている春蘭はそこに疑問を感じていないのか、少しだけ悩んだ後、一言で俺を表した

……いやな予感しかしない

「……………下半身？」

「やっぱりか！？」

流れからいってそうだと予想してたがその、これしかなくね？
みたいな顔は止めてくれ

「やはり……………」

「やはり！？」

どうしよう、前半部分の格好良かった俺が霞んで見えなくなってきた

「うむ、こいつは魏の種馬と呼ばれていた位だしな」

「どこに行ってもやる事は同じという事が……………」

もはや完全に見失った。しかも否定出来ない。だが、

「待つんだ二人とも！その見解はそろそろ改めるべきだと俺は声を大にして言いたい！もつとこう、この世界で成長してきた部分を評価してくれても良いと思うんですが、どうでしょう？」

若干尻すぼみなのは気にしない

「そうはいつでもな……」

春蘭は珍しく顔を顰めて考え込んでいる

「正直、記憶が戻った後でお前を見ても特に変わった印象を受けなかったからな。確かに腕は上がっていたし、頭も回るようになったみたいだがそれでも北郷は北郷としてしか感じなかったぞ。やはりどこか抜けているし、すぐ女に色目を使う、手が早い節操無しだ」

「そろそろ泣いていいか？」

なんだろう、今度は視界がぼやけてきた……私、泣いているの？

「しかし……」

「……………」

「ん？」

「お前はその、変わらず優しいという美点があるではないか。それだけで私は十分に満足しているぞ……いくら下半身が立派でもそれだけでは秋蘭や華琳様もお前に好意は寄せなかつただろう？だから私も……………って何を言わせるのだ貴様はっ！！！！」

「うおおい！？ 恥ずかしがるか、怒るかどっちかにしてくれ！」

照れ隠しの唐竹割りをまさかの白刃取りで受け止める

この世界に来てから防御能力だけが桁違いに上昇しているのは必然に駆られてだろう。そこだけは評価してもらいたい

でなけりや目の前の二強プラス蜀の愛紗さんを相手に出来ないからな
生存本能恐るべし

「ええいつ！ 大人しく斬られる！全部お前が悪い！」

「毎度毎度それで片付けようとするな！！」

その状態でいつもの如く春蘭と喧々囂々言い争っていると、突然思春が吹き出し、笑い声を上げた

「くっ……くっくくく」

「な、なんだ？」

「……恐ろしくレアな光景を目の当たりにしてる気がする……本編でも滅多にお目にかかれないのに」

照れはあっても笑い無し、そんなツンデレ比率9・1な思春さんマジパネエっす

カードでいうならホログラム仕様のシークレットウルトラ並の表情がそこにあった

サウザンドな目を持つサクリファイスもその前身がなければ何の意
味も無かったな……

メタな回想に浸っていると押し込む剣もそのままに春蘭が小声で耳
打ちしてくる

「おいっ、甘寧は突然どうしたというのだ。へんなものでも食った
んじゃないのか」

「春蘭や季衣じゃあるまいし……それよりいい加減に剣を H A
N A S E !」

なんとか押し戻してひと心地着く

「くっくく、あの魏武の大剣がこうも愉快的な性格をしているとはな。
しかもその相手が北郷だというのだから傑作だ。本当に節操無しだ
な、お前は」

「そこは笑うところじゃないと思うのですが……」

「ふっ、お前は一応、分別ある節操無しだ。とくに問題あるまい。
……ともあれ安心したぞ。どうやら私の懸念だったようだ」

「……どういう意味？」

笑いを堪え、思春がさつきまでとは異なる真剣な表情をこちらに向
ける

「私はな、北郷。この世界に来てから必死で変わろうとしているお

前が憎かったのかもしれない」

薄目で何かを思い出すように呟く

「さつきも夏侯惇殿が言ったようにお前の本質は武や戦の才ではない。傍にいて誰かを安心させたり、ゆとりをもたらす事が出来る才能だ。なのに呉に来てからの行動はそれを二の次にしたもろばかり、正直人が変わってしまったのかと思うほどの働きだった」

「まさか俺の頑張りが裏目に出てたとか？」

「端的に言えばな。中身は変わっていないだろうと手合わせでも深く言及しなかったが、そんな矢先にあの裏切りの報を受けた。邪推は致し方ないところだろう」

「もしかしてさつきから信じてもらえなかったのは、魏の記憶で俺が本当に変わってしまったと思ったからって事？」

「そうだと言わんばかりに浅く頷き、もう戦闘の意思は無いとばかりに折れた『鈴音』を鞘に戻す

「お前が他国で築いた関係。それ全てが円満であるとは思っていないかった。取り巻く環境が変われば大なり小なり人は変わってしまう。だが話を聞く限りお前はお前のまま、繋がりを持った人間を大事にしてきたようだ」

いつか見た、彼女との間に子を成した時のような慈愛を感じさせる笑みがうつすら写る

きっと思春は本当の意味で俺を理解したかったんだろう

信頼は元より、この平原に来てから過去を共有してくれるのは最初
彼女だけだったから、余計に気負ったのかもしれない

自らがアンチテーゼとなり、俺の心からの真意を探し出す為に

でなければ万が一変わってしまった俺が何よりも大切な孫権が傷つ
けてしまう可能性がある

そんな責任感と過去の思いが乗った両天秤で彼女は俺の前に立つた
んだ

あの晩も素直に話していればこんな問題にまで発展しなかっただろう

「行くぞ北郷。今のお前ならば蓮華様に対面しても良い」

「……ありがとな、思春」

心の底では俺を信じてくれて

彼女への返答に万感の意を込める

踵を返し先導する彼女を追って、事態をいまいち理解していない春
蘭とともに孫権の自室へと向かっていくのだった

本当の意味での再会を果たそうとしている一刀達を他所に、凧を下に見送った後でもいまだ屋根の上で佇む卑弥呼の耳へどこかで聞いた妙に湿っぽい男性の声が入ってきた

（あらん、卑弥呼っ！干吉を取り逃がしちゃたの？ 漢女道亜細亜方面前継承者ともあるう貴方らしくないわねー）

「……………ふんっ。あやつ消える間際まで楽進を狙っておったのだぞ、人命を優先するのならば致し方ない判断じゃわい」

腕をきつく組み直し、声だけが聞こえる貂蟬に返事をする

あやつは無理な介入により実体化出来ないゆえ、ワシを通して物事の見聞きが可能にしておいた

どうやらこの大一番に控えて予めアンテナを立てていたようだ

「それよりも気になる事がある。……………貂蟬よ、この戦いどこから見
ていた？」

(そうねえ…ちらほらご主人様のほうも気にかけていたけど、大体の話の筋は分かっているつもりよん)

「ならば話は早い。先の干吉を見て何か感じなかったか？奴の言い回しではなく存在そのものに」

この質問に少しだけ悩むような間が空き、貂蟬の声が伝わってくる

(……………妙に存在が希薄……………いえ、それにしても臃過ぎるわね。まるで壁一枚隔てたような距離感を感じたかしら)

「うむ、ワシも同じ感想じゃ……………ちょうど今お主に感じている感覚とよう似ておる」

(？ それってどういう事？)

「鈍い奴じゃの、恐らく干吉は大掛かりな術を行使した直後なのじやろう、それで貂蟬と同じように声だけを発して接触せざるを得なかったのではと推測しておる」

(ワタシには体があるように見えただけどねん)

「そこは人形か何かで代用しておったのであろう、そう考えればあの五体をバラバラに分割していた奇術も納得がいく」

(あーら、そゆことね。でもそれがなんだって言うの？あいつの目的は結局分らず仕舞いなんでしょう)

「確かに、だがお主と同様の消耗具合から察するに、術の規模は同じようなものではないか？」

再び間が空き、ありえないとばかりに呟く

(まさか……………演者への介入を？ワタシがセキトちゃんを変化させたり、恋ちゃんをご主人様に巡り合せたような…………)

「無くもあるまい」

短く切ったその言葉の割には妙に自信ありげな様子を浮かべている

白い髭がピクピクと振動し、なにやら触覚のようだ

(それにしたって誰を？ 大半の子は出揃っているのにこれ以上は…………)

「解無き問答故、留意だけはしておいたほうが良いという話じゃ、あまり考え込むでない」

(…………そうね…………でも、もしかしたら…………干吉が呉に干渉した最大の理由は…………)

？

何か思い当たるのか、悩む貂蝉

そこで一旦話を区切るかのように卑弥呼が確認を取った

「それはさりとて貂蝉よ。こちらに戻ってくるのはまだ掛かりそうなのか？だーりんと二人きりになれないのは、ちと不満なのじゃが」

(あん　漢女らしいアンニユイな気持ちなのね、わかるわあ…
でももう少し待ってほしいの、ちよつと大事な用事が出来ちゃったのよん)

「何じゃそれは」

(今は　ひ　みつ　でもこれからもご主人様が歩む道に絶対必要なものの、必ず手に入れて見せるわん　それと　もう一人の協力者　にあなたのおかげで効果は抜群よ！って伝えておいて)

「あやつか…：…　いまだ顔を見せてもおらぬ不屈き者ではあるが、一応承知しておこう。…：にしても相変わらず一途に北郷を思い続けておるのう」

(でゆふふ、恋敵が50人近くいるんですもの、これぐらいは当然よ。ぬふふふふふふふ)

「それほどの思いがあれば何時かワシもだーりんと…：…ぐふふふふふふふ」

夜空に響く奇怪な笑い声

この騒動に謎のあやかし出現という噂が付いてくるのはまた別のお話

何はともあれ、事態は一時の収束を見せ、舞台は大きく広がる

大陸に押し寄せる左慈を裏番とした袁招軍に、今をもって対するは内に関羽という爆弾を抱えた蜀軍

そして久しぶりとなる呉軍中枢との関係は果たしてどうなる事やら

思い渦巻く大陸に、軍を持って干渉する時が今でこそと訪れた

新国家『北郷』

銀の御旗に十文字を掲げるその国は全てを救うという信念の元に、あらゆる逸材が集っていく

笑顔の絶えない城下の民と彼らを守る歴戦の将の活躍

それは何より国主の魅力に惹かれた当然の成果を示していくだろう

君主 北郷一刀

かつての魏王、呉王の協力によって国を動かす彼に過ぎる胸中にはいかなるものか

少なくとも裏で語られるアジアの種馬ぶりは留まるところを知らず、『種』をもって大陸を制覇せんとするのはまたも別のお話である

舞台は中盤折り返しに差し掛かり、

大陸全土を巻き込んだ国家間戦争がこの日を境に始まる事となった

繋がる思いはとくと高く

連なる関係もより強く

零れた幸せを再度汲み取る北郷一刀

明日への為への第一歩は

こつしてしっかり踏み出され

遠き理想へと邁進す

いわゆる第二部へと続くインターミSSION的なお話です。

前半部分での彼女の変化はここに原因があつたわけで、ここがエインディングに向けた最後の大きな仕込みになるでしょう。

真だけでなく、無印を話に組み込んだ作者の真意がここに！

キーンコーンカーンコーン

耳に入ってきたのは授業終了を告げる鐘の響き

本当はもっと荘厳な感じがするチャイムの音なのだが、生憎俺にはその音色を美しく表現するボキャブラリーを、この北郷一刀は持ち合わせていない

あらゆるところに無駄に金をかけて拘る、それが聖フランチェスカ学園なのだ。（多分に誤解含む）

「んー、ようやく昼飯か」

机に座ったままの姿勢で大きく背筋を伸ばすと、それに触発されたわけでは無いのだが、同じようなタイミングでクラス連中の動きも活発になっていった

視界に写るのは素行正しく、見目麗しいお嬢様方ばかり。どこか品を感じさせる仕草が自然と溢れている

とはいえやはり年頃の女の子、一般庶民の娘も混じっているせいか休み時間の行動はあまり大差無いように感じる

そんな光景を目の保養とばかりに眺めていると、突然、横から品の無い男性のテラーボイスが聞こえてきた

「……かずピー、お腹が減って力が出ないよー」

「そうか、だったら飢えて死んだらいいんじゃないか？」

生憎、俺の顔はあんぱんで出来ていないのだ

「ひどっ！？ もっと愛のある突っ込みをしてくれてもええやんか！」

大袈裟にショックを受けたようなりアクションを取っているこの男の名は及川

似非関西弁が非常に気に掛かるが、同じクラスの、まあ友達という括りに入る人間になるだろう

相も変わらずオーバーなこいつに溜息混じりの返事をしてやる

「用件はあれか？ 昼飯をおごれって言いたいんだろう」

「まさにっ 以 心 伝 心 ！ さっすがかずピー話がわかるな
ー」

途端に揉み手で擦り寄ってくる

「ちょーーとばかりし今月は出費が重なってピンチでなー。出来ればお弁当を分けて頂きたいんやけど……」

色々と根性の据わっている奴だ

萌えキャラでもないくせに、腰を低くして上目遣いを向けてくる及川に若干の殺意を覚えたが、彼から溢れ出す本気のひもじいオーラ

に気圧されてしょうがなく了承してやる

「……………量はあるからいいけどさ、お前…………アレに耐えてみせるよ？」

「ふふん！ 男、及川。腹が減ったならなんでもやってみせるで！。だから、無問題！」

キラッ！

手首を返し、妙なポーズを決める姿に やっぱり止めようかななんて思いが浮かび、その考えを口に出そうというしたところで、勢い良く開く扉の音が教室内に鳴り渡る

廊下側に現れたのは、並み居るお嬢様群れの中にあっても一際目立つ容姿をした女性

可愛らしい制服に身を包み、はちきれんばかりに豊満な胸が全ての男性へと自己主張。すらりと伸びたナイスプロポーションと、黒耀石のように美しい黒髪がとても良く映える

その上、キリリとした絶世ともいえる顔立ちがなおそれを鮮やかに彩って、まるで一つの芸術品のように美しく映える

そんな彼女の視線が真っ直ぐに俺を捉えると、途端に花が咲いたように破顔し、こちらに声を飛ばす

「御主人様っ！！ ご昼食をお持ち致しましたよ！」

凜とした清涼な声色にこちらも頬が緩む

「いつもありがとな、愛紗」

「いえいえ、この不肖 関雲長。貴方様のためならば、如何ような苦勞も喜んで引き受けます」

弁当箱を携え、駆け寄ってきた愛紗にねぎらいの言葉をかけると、いつもの謙遜するような、でも嬉しさが隠せないといったばかりの返事が返ってくる

こういつとこ本当に可愛いよな……

彼女の名前は 関羽 雲長。崩壊する外史の果てに、俺がただ一人選んだ愛する女性

新生したこの世界でも変わらずの愛と不朽の忠誠を誓ってくれている

綻ぶ笑顔のまま愛紗は言葉を続けた

「ささっ、昼休みは有限ですからいつも通り中庭へと参りましょう」

「あー、それなんだけどさ。今日はちょっと事情があって……」

「……事情？………よもや他の女と逢引きをなどと……」

ビシッ！

手に持つ重箱のような弁当箱に亀裂が走った

「うおおっ！？ なんちゅう握力や！！？」

以前同じような事があって材質を特注のジェラルミン製に変更したのだが愛紗の力の前には特に意味を成さなかったようだ

耐久力重視の弁当箱の経緯を知っている及川のオーバーリアクションは今だけ正しい

その握力。石炭コークでも握らせたら、何処かの鬼並オーガにダイヤモンドへと変化するかもしれないな

一抹の恐怖をわざと考えないようにして事の真相を説明する

「そういうのじゃないって、その及川が昼飯も食べないくらい貧困してて飯を分けてもらいたいらしいんださ」

「……………またですか」

「関羽ちゃんお願いやってー。ここは人助けと思ってどうかご相伴に預らせておくれやす！」

なぜ京都訛り？

実は初犯では無いこの男が口調はどうあれ、本気で様子倒している

前回はこの外史に降り立ってからそう日が経っていない頃だったか

こう見えても普段からわりと世話になっている相手なのであまり無碍には出来ないよな

「愛紗」

「……………ふう、致し方ありませんね」

片目を瞑り、合図を送ると、しぶしぶといった様子で了承してくれる愛紗

「いいいいいやっほうふう！！愛紗ちゃんの手料理ゲットやでっ！」

途端に及川が元気一杯、飛び上がり歓喜に打ち震えている

初期の愛紗の腕前を知らない無垢な喜びようだな……………ある意味羨ましい

そんな様子を遠巻きに観察しているクラスメイト小声の妬み節が漏れ出す

（くっ、あの野蛮人。またも関羽様の手料理を食べるですってよ）

（なんたる恥知らずでしょうね。恋人である北郷さんとはもかく、憧れの君にあのような原始人が馴れ馴れしくも近づくなんて）

（私達でさえ、恐れ多くて近づくのがやっとというのに！）

良く聞けばその内容はこの教室だけではなく、廊下に居並ぶ非公式ファンクラブからも流れ込んで来ている

「はあ……………またかよ…」

この世界に降り立った後、都合よく戸籍が用意されていた愛紗はすぐにこのフランチエスカヘスポーツ特待生として編入。容姿、身体

能力の高さを如何無く発揮し、瞬く間に学園を代表する存在へと上り詰めた

その流れかファンが急増、組織だって追っかけ等の行動を盛んになっ
っていった

当初、本人も悪い気はしていないようだが、そこで捕まると俺との
時間が減るのに気付कि、それ以降は自粛するように促していたのだ
が、熱心なファンの子は未だに尾け回しているそうな

「ほら、とつとと行くぞ及川。弁当食わせるお礼に人払いくらい掛
って出るよな」

「おおう！ そやな。浪花のSPジョン・スミスと呼ばれた俺にお
任せあれや！」

右肩上がりのままのテンションで扉へと向かい、ファンの群れに突
貫していく

耳に「いやー！ 変態が来たわ！！」とか「うへへ、邪魔する奴は
誰であろうと容赦しいへんで、ほらほらここがええのんか！」と阿
鼻叫喚なBGMが聞こえてくるのは幻聴であると信じたい

「……………御主人様」

「……………うん」

「なぜ、男のご友人は皆一様に変態なのですか？」

「それはこっちが聞きたい」

迫ってこない分、貂蟬の万倍マシだが暴走具合は勝るとも劣らない
及川

男運に関しては異常なまでについて無いな、俺

あれで成績優秀、運動神経も申し分無い上、とっかえひっかえ彼女
がいるという不思議

まあどんな子でも長続きしないようだが……

「……………行くか、中庭」

「そうですね」

貂蟬を筆頭に良い奴は大概心に疾患を持っているのだろうと勝手に
位置付けておく事にした

及川の奇行は一応人払いの役目は果たしたのか、こちらに向けられ
る視線は随分と柔らかい。それでも熱心なファンはまだ諦めていな
いのか、熱っぽい視線の雰囲気はまだクラス内に何となく残ってい
るな

現にその方向へこっそりと目を向ければ顔をほんのり赤くした女生
徒がちらほらと見て取れる

まあ、愛紗ほどの魅力的な容姿を持つ女性が身近にいれば憧れるの
は致し方ないところだろう

そんな子の中で偶然目が合ったクラスメイトに、「独り占めしてゴ

メン」と軽く微笑みかけ、アイコンタクトを送ってみた

「　　っ!？」

だが、意思疎通がうまくいかなかったのか、それとも俺の事を良く思っていないせいなのか一瞬でそっぽ向かれてしまう

「……………またそうやって無自覚に愛想を振り撒かれるのですね、彼女達の真意も知らずに……………」

「え？　今なんて……………」

「いいえ。何でもありません。せっかくの好機ですから疾く中庭に参ると致しましょう」

「あっ、ちょ、ちょっと待ってくれよ愛紗!」

なぜか急に機嫌が斜めになってしまった愛紗が先陣を切って廊下に進み出てしまう

うーん。なにが気に入らなかつたんだろう？　怒らせるような発言はしてないはずだけどなあ

僅かな疑問を胸に、とりあえずどこか不機嫌に先行する彼女の後を追う事にするのだった

「うーん。まさに絶品！　相変わらずの腕前やね、関羽ちゃん」

「それはどうも、ありがとう御座います」

所変わって移動してきたのは学園敷地内中庭の一角

茂みと木陰に包まれたとっておきの場所で三人いつしよに昼食を取る事にした

先ほどから及川の奴がシートに並ぶ弁当を漁りながらその味について褒め称えているが、製作者である愛紗は感謝の言葉とは裏腹に不満の声色を漏らしている

それもそのはず。カリスマ的人气を誇る愛紗は学園にいる間、四六時中ファンの子に引つ張りだこで昼休みは俺と二人きりになれる数少ないチャンスだったからだ

空気の読めない闖入者は人の蜜月を邪魔した事も気にせず欠食児童のようにががつと弁当を掻っ込んでいく

「おい、いくらなんでも貪り過ぎじゃないか？　いまさらだけど一体何が理由で昼飯が食べなくなっただんだよ」

ふだんから相当量のポリウムがある弁当とはいえ、これ以上はこっちの取り分が無くなってしまっ

行儀が悪いが相手の箸を自分の箸で挟みこみ、説明を求めた

「もがー、ふがふふんっ、ふーんふんもーがもごっく……ふんもっふ？」

「口の中を空にしてから喋ると言いたかったが最後はお前、ふざけてるだろ」

「ふもふも……いやいや、そんなこと無いでかすピー。これは一部の軍隊でも使用されているというれっきとした暗号言語や。聞く人が聞けば意味は理解できたはず！」

「生憎と知り合いに軍関係者はいないな。へたなボケは見て痛々しいから早く答えろよ」

「ぐふう、つれないったらありやしないでかすピー。もうちょっと漫才としての機微を感じ取ってやな的確なツツコミを……」

なおも答えをはぐらかそうとする及川が次の瞬間、押し黙る

「……………及川殿。私もその件について非常に興味があるのですがぜひともお聞かせ願えませんか？」

愛紗の手によってチタンコーティングの箸が棧橋の橋のようにアーチを描く

「あ、はい。お話させてください関羽さん。せやから曲がっていく箸と俺を交互に見比べんといて！……………って、合金製の箸が折れたあつ！？ しかも小さく「背骨……」とか不吉な単語吐くとか!？」

まさに魂の慟哭。弁当箱同様、強化された食器の強度を知っている及川の顔が目に見えて青ざめ、だからだと可哀想なくらいの量をもつて冷や汗が噴出す

天下泰平の世にあっても武神関羽の名は伊達ではないという事が

「あーその、あれや。かずピーは知ってると思うんやけど最近、昔の彼女とよりを戻してな。くんずほぐれつの毎日を送ったわけなんやけど、その、朱美ちゃん妙に俺に尽くしてくれるんよ」

「惚気か？」

「ちやうちやう。問題なのはその行動が逐一重すぎるところやねん。朝、寮に着てまでのおはようや、二人一緒の登下校、毎日のデートなどなど、好き好きオーラが出まくとんのや」

今の発言で間違いなく、過半数の男から恨みを買っだろう

リア充爆発しろ

………ちなみに、お前が言（「……」）といった意見はあえて聞こえない事しておく

「で、昼飯が食えへん理由なんやけど。朱美ちゃん料理に凝ってしもうてな。慣れない手つきで毎日手料理を作ってくれるねん………俺のポケットマネーで」

「………まさか」

箸を置いて懐かしむように空を仰ぎ見る及川

「………朱美ちゃん、壊滅的に料理が下手なんや」

咄嗟に愛紗の方を振り向いたら射殺するような視線が飛んできた

「よつするに、まともに食べれる物が出てこなくて食費が削られていったわけか……」

「うう…まさにその通りや。なあ信じられるか？ 炒飯作らせたらなぜか魚の頭が顔出してんねやぞ。正直ありえへんわ」

行き場所の無い憤りをぶつけるように及川が騒ぎ立て出すのを慌てて制する

「お、おい、話は分かったからもう少し抑えてくれ」

言いながら故意に、首を誰もいない関係無い方へと背けておく

「……………ほう」

ぐっ、案の定、過去を思い出してか愛紗からの威圧感ある視線が突き刺さってきた

「しかも加減を知らんのかやたら量があるし、ホント料理上手な関羽ちゃんとは大違いやで」

本人は褒めているつもりなんだろうが明らかに地雷を踏んでしまっている

このままでは穏やかな昼食が戦々恐々とした修羅場に姿を変えてしまっただろう

なんとかして話題を変えてしまわないと！

高速で思考を分割、最適な答えを弾き出そうと頭を捻っているとま

るで漫画のようにタイミング良く、及川の携帯電話から着信音が鳴り響いた

まさに天の助けなう。

「ん、いったい誰からや？ えー、もしもし？ 貴方の及川ちゃんやけど、こんなお昼時にどちらさ………って朱美ちゃんっ!？」

着信画面を見ることも無く通話に応じた及川が目が飛び出るかというぐらい動揺している

「えっ、今どこって？ ちょっ、ちょっこつとだけ内緒な場所なんやけど………うえっ!？ 何でかずピーと関羽ちゃんと一緒なのがばれてんの!？ あ、あつ、待って！ 切らへんで！」

此処に来るまでの代償として奇行に走ったのは彼の中で取るに足りない些末事だったのか

どうやら渦中の人物から電話が掛かり、質問責めを受けてるみたいだ
数分間、誤解とか勘違いなんて言い訳めいた単語が引つ切り無しに口から漏れ出し、やがて及川が放心したかのように動きを止めてしまっ

「………かずピー。いや、北郷一刀君」

「………言っただけ言ってみろ」

「………彼女の飯を食わずに他の女に食事を集るような浮気性な男は願ひ下げて言われてもった………」

人それを自業自得という

「自業自得ですね」

「あれ！？　なんでか二重の意味で心に響くんやけど!？」

口に出さなかったツープラトン。ユニゾンアタックな愚痴を敏感に感じ取られた

及川……その感受性をなぜ恋人相手に発揮出来ないんだ

「どないしょ！　俺ってばなんぞ粗相でもしでかしたんやるか」

慌てふためくこの男をどうしたものかと悩んでいると、ふいに妙案が頭に浮かび上がってくる

「うまくいけば、この状況も打破できるかもしれない……」

「……御主人様？」

「おい、及川。彼女ともう一度仲良くなりたいか？」

「う……それは当然や。けど、仲違いの原因である料理の腕がなんとかならんとまた同じ事になってしまいかも知れへんし、どう切り出したもんか……」

女々しくシートの上での字を書き始めた

「いいか良く聞け。とりあえず料理の件は捨て置いてよりを戻す事

に専念しろ。誤解が原因で拗れたなら一番有効な対処手段はとにかく平謝り。まずそこから始めるんだ」

「おお…なぜか異様な説得力がある気がするで、かずピー」

「……………（ピクン）」

感心するのはいいがこの馬鹿、また地雷を踏みやがった

目には入らずとも聞こえてくるバキバキという破碎音が爆発までのカウントダウンを物語っている

このトラブルメーカーめ、さっさと言い包めなければこっちの命が危ないじゃないか

咳払い一つしてから話を続ける

「ん、んんっ！ 次に重要なのは謝る時に彼女の食事を避けたりしないと約束することだ。謝って仲直りの誓いを立てれば向こうも安心できるだろ」

「いやいやいやいやいや！ あれを毎日食うんわ辛すぎるって、こればかりはかずピーには理解出来へん問題やねん」

怖気づく及川ににじり寄り、愛紗に聞こえないようそっと耳元で囁く

「ヤモリそのままや苺が入っているよりかはマシだろう……それと最後のヒントだ。我慢してでも完食してみせて相手の反応をよく見てみる、彼女が困らせるために食事を用意しているとは思えないはずだぞ。まあ、そこで断るか変わらさず作ってもらっかの判断はお前

に任せるけどな」

「かずピー……そうか、そうやったな。俺が間違ったんや。……ははっ、こんな単純な事に気付かんかったとはな。もう目から鱗とはよう言っただもんやで。困つとる時にはまず恋人から、そう、何もかも朱美ちゃんに頼るべきやったんや！」

「おい待て、後半部分がヒモの常套句になってるぞ」

「そうと決まれば善は急げってな。ちよっくら行ってくるで！」

駄目な方へと勘違いした似非関西弁の男が脇目も振らずに校舎に向かって駆け出してしまった

「……人の恋路にとやかく言うつもりは無いが、まずはあの思い込みの激しさを直さないとまた同じ結果になりそうだな」

「……………そうですね」

邪魔者が居なくなっただのは幸いにしても、愛紗の機嫌は斜めになっただけ

十中八九、過去を思い出して色々と考え込んでしまっているのだろう
さっきまでの殺気はなりを潜め、年相応の少女のように口を尖らせ
そっぽを向いてしまっている

「やはり御主人様は女の扱いに関して是非常に頼りになるようで……
…この関雲長、尊敬の意を禁じ得ません」

あからさまに拗ねた様子の愛紗は以前、戦乱の世において見ることの少ない貴重な仕草だ、それはそれでは可愛いと思うけどやっぱり彼女には笑顔が一番似合うと思うよな

顔を逸らしている隙にこっさりゆっくりにじり寄り、彼女の背中、射程圏内に入ったところで一気に抱きしめる

「あーいーしゃ！」

「きゃっ!?!」

突然の出来事に短い悲鳴が上がるが、それに構わず抱き込むような抱擁のまま口を開く

「俺は君に夢中なんだから変な勘違いはもうしなくていいんだよ？愛紗だけを見つめてる。この気持ちは俺だけの勘違いだったのかな？」

「そ、そのようなことがあるはずがありませんっ!」

「だったらもっとう信頼してくれよ。…………俺は君を選んだんだから」

「…………はい」

嫉妬は愛情の裏返し

相変わらずなこの子に苦笑しながらも、それこそが世界が新生しても変わらず向けられる尊い感情なのだと思います

借りてきた猫みたいに縮こまり、首筋がほんのり赤く染まった愛紗

はたから見れば恥ずかしがっているようだけど、ほんの少しだけ擦り寄るように身をよじってくる

なんていうか、こっ、気恥ずかしくとも甘えたいという無意識な部分が強調されてなんともいじらしい

うーん、軽いスキンシップのつもりだったんだけど、こっも可愛いらしいところを見せ付けられちゃうとどうにもムラムラしてきたな

「……………御主人、様……………」

すぐ横で吐息のように囁く甘い声色で愛紗が体を預けてきた

うう……………そろそろ辛抱堪らなくなってきましたよ？

魔が差す心のままに腕をそっとふくよかな双丘へと伸ばしてしまう

「あつ……………もっ……………」

返ってくるのは拒絶ではなく期待していたかのような許容

嫌がる様子も無くされるがままの愛紗へ安心させるように丹念に愛撫を重ねていく

「愛紗……………」

「御主人様……………」

やがて肩越しにキスを交わした俺はそっとシートの上に彼女を押し

倒した

そしていざこれからというところまで、いつものお願いをしておく

「愛紗」

「……あ、あの……くっ」

何が恥ずかしいのか深紅にまでに顔を染め上げてしまう

「愛紗」

急かすような一言を浅いキスを交わしてから告げる

見上げる愛紗はここまでしてようやく決心が着いたのか、赤い頬のまま潤んだ瞳で呟く

「……一刀、様」

「ああ、そうだよ愛紗……愛してる」

そのまま割りとは頻繁にある真昼の情事へと没頭していく俺と愛紗は互いが求めるままに絆を確かめ合う

数知れぬ犠牲の上で成り立った俺たちの関係をこの身に刻み込むように

熱く、激しく、一つになろうとする

消え去った外史の分まで十全を生きるには二人の縁は切っても切れ

ないものなのだから

戦いの無い外史、その木漏れ日の日差しが降り注ぐ平和の世界で
そう、再確認するのだった

「……………また、か」

浅い眠りの中で反芻するように繰り返し流れる虚空の夢。互いの絆
をいつものように確かめあった追憶の日々

微かな睡眠のせいで眩暈のする頭を揺り動かして意識を覚醒させる
目の前に広がるのは最低限の家具と資料だけが置かれている見慣れ
た自室の光景

我ながら女気の無い居住まいだと自覚しているが、いざ着飾ろうと

調度品の品々を見定めても実直的な部分ばかりが目映り、年頃の女子が好むような品を置く事は無かった

「今となつては関係無い事だがな……」

部屋内に設けられた格子の内側で膝を抱えて一人溜息をつく

御主人様への使いの件で内輪揉めを起こした私はこの座敷牢のような場所で軟禁を余儀なくされていた

「……なぜ、朱里も桃香様も大陸の情勢ばかり気にしてあの方のお側に出向こうとしないのだ」

自由にならぬ心と仲間との関係

不自然なまでの巡り合わせによつて、いまだ間近で尊顔を拝むことさえできない愛しの君は今頃なにをしているのだろうか

普段と変わりなく、息災であれば良いが御主人様の事だ

あの尊いまでの優しさに勘違いした呉の将達に色目を使われ、籠絡されてしまう可能性は捨て切れない

一刻も早く私の元へ、あるべき場所に戻ってきて頂かなければならないだろう

「そう、私達は結ばれる運命にあつたのですから……」

遠く離れた相手へ差し出すように右腕を中空に彷徨わせる

あの時、滅びゆく外史の果てで求め合った契りの拳手のように……
うっとりするように細められる瞳は目の下の隈よりも、薄暗い雰囲
気を感じさせる

「ああ……一刀様……一刀様……貴方の愛紗は此処にあります。
此処にいるのです。なぜ早く、誰よりも強くこの手を握り返してく
ださらないのですか？ 多少の浮気は男の甲斐性と、私は納得いた
しませんよ」

過去の世界で誓ってくださった約束を反故にしないためにも

送り出してくれた 過去の 仲間達のためにも

ご主人様の愛は ワタシダケニ 注がれるべきものなのですから……

「これ以上待たされるのであれば、ワタシも……相応のカクゴを決
めなくてはなりませんか？ ……フツ……フフ、ハハハツ……」

純粹過ぎる思いは心の中で軋轢を生み、磨耗。キリキリと噛み合い
が狂い出す

それは悪意の無い、純然たる好意

北郷一刀が受け止めるべき過去の柵が歪んだ形で現出しようとして
いた

ある一人の男の復讐に利用されているのに本人が気付く事も無く……

そんな妄執に囚われてしまった彼女の暗い呟きに呼応するかのよう

に、武器庫奥へと保管された彼女の得物、青龍偃月刀が人知れず鈍い光を放っていた

誰の目にも届かない密閉された暗闇の中でなおくつきりと映える輝きは何を意味するのか？

龍を模した荘厳な鋼細工の瞳が怪しく、まるで光に反射する鏡のように明滅するのだった……

三十二話 北郷軍の独立 建業・出頭する者(前書き)

何ていうか、冗長？

今回のお話はそんな気がします。

第一部を『北郷』編とするなら

第二部は……

答えは次話の最後で！

三十二話 北郷軍の独立 建業・出頭する者

「雪蓮……………」

「一刀……………んっ……………」

天蓋が据え付けられたベッドの上で剥き出しの体を重ねあう俺と雪蓮暗かった室内はすでに昇りきった太陽の光に照らされ、芸術品のように美しい肢体が艶かしく揺れ動くのをぼうつとした頭で僅かに認識してから一言呟く

「もう……………駄目……………だ……………がくっ」

とつくの昔にライフバーが危険域に差し掛かっていたにも関わらず陽光は黄色に輝き、網膜を容赦なく突き刺して追撃を試みている

うう……………一体どれだけ頑張ったんだろう、少なくとも二十、三十ぐらいは余裕で超えてるはず。数だけなら明らかに自己新

霞む瞳孔を無理やり押し広げてアイデンティティーである種馬つぶりを見事陥落させた相手を視界に納める

「ふふっ、なあに一刀？ 情けない顔しちゃって。これくらいでへばっちゃうなんて貴方らしくないんじゃないの？」

したり顔で微笑む雪蓮

恐ろしい事に彼女はあれだけの回数を重ねてなおお盛んなのか、ね

だるように指先を俺の胸板に這わせてきた

「途中休憩及び食事を五回も挟む長丁場に晒されれば、いくら俺だつて疲れてくるよ……」

「そうなの？ もう一人の貴方はまだやれるって自己主張してるんだけどな」

頬を緩めたままの表情で下半身を弄ろうとしているので慌てて制止の声を掛ける

「それは生命の危機に陥った時に発症する危険信号だよ！ 二日間昼夜続けてはもう無理です！！」

「ぶー、一刀のけちんぼ。久しぶりなんだからもっと獣になってもいいじゃない」

いや、どちらかという俺は貴方に捕食される側の獣だったと思うのですが

溜息一つ付いてやんわり彼女の手を戻す

思い返せば自業自得か

過去の世界で雪蓮と約束した持病、激しい戦闘の後で発症する体の火照りを俺は全力で受け止めていた

目の前の女性は律儀にも、なるべくといった疼きの解消を周瑜や穩に発散することなく俺を待っていてくれたのだ

ただ、積もり積もった性欲めいた憤りは留まるところを知らず、華琳や蓮華の件で建業へと報告に出向いた俺を有無を言わず拘束し、そのまま行為に至ってしまう

もちろん途中でいい加減にしろと周瑜から怒りの檄が何度も飛んできたが、体を重ねるか、食事と浅い睡眠を取るか以外考えられなくなった雪蓮は全て聞き流して俺から離れようとはしない

裏切りの報もなんのその、呉の最高権力者は自分の都合を優先させてしまった

分かってたつもりだけど自由だなー、ほんと。休憩の度に鬼子母神もかくやといった周瑜の視線を受け流すんだから

本当に体力が無くなったのを見切ったのか雪蓮は名残惜しそうにして体を離して着替え始めた

「まーここまで発散できれば上出来よね。うん。ありがとー刀」

軽いキスの後、促すように俺の服を放って用意を急がす

嫌じゃないけど雪蓮にはいつも主導権を握られちゃうよな

上に立つとかそんなつもりじゃないけど子供扱いというか、どこか余裕ぶつた態度が口惜しい

……まあ、他の子にしても大なり小なり優位に立った記憶は少ないけどな

背中に大きく描かれた十文字の羽織を着込んで準備完了

胸衣姿に銀の羽織というこの世界におけるマイスタイルを再確認する襟首、裾の長さや居住まいを正していると雪蓮が少しだけ俺を見つめてから、微笑みを向けてくれた

「格好良くなったね。なんていうかすごく男の子してる感じ」

「……色々背負うものが増えたからね。しっかり自分の足で立たないとみんなに申し訳ない」

「そっか。ふふっ、いつのまにかおつきくなってたんだ……じゃ、また後でね」

軽い調子で感嘆するような返事をして先に部屋を出て行く雪蓮

ドア越しにちらりと見たのは万が一の事態に備えていた周泰とその部下達だろう

情事の声が漏れていたのか、一人顔を真っ赤に染めた周泰が自分の主を追って遠ざかっていくのが印象的だった

ふう…やっと人心地つけたなー

裁判は恐らく正午過ぎ、この世界でいう昼食後ぐらいに始まるかな？

残り少ない体力を回復させるように気だるい体をみっともなくもう一度ベットに投げ出してみる

あー、体力と精力は正しく比例しないもんなんだなー。まだ若干の

元気があるマイサンが恐ろしいよ……

誰も居なくなつたであろう雪蓮の自室で人目もはばからず袴を煽り股間に目を落とす

どうやら生命の危機だけでおつきくなつちやたわけじゃないらしい

……………雪蓮のセリフはこの意味じゃないよね？

上げて落とす展開に良く遭遇する最近のせいで邪推の念が押し寄せ
てくる

気になつて袴をあげたまま視線をなんとなく部屋の中に這わせてい
るとドアの隅にどこかで見たとのことのある猫耳とおかつぱ頭が見え隠
れしていた

「……………なにやってんの二人とも」

「はづつ！？」

「ぐっ、節操なし極まりない変態のくせに私の穩行に気づくなんて
！」

頭かくして猫耳フード隠さずという言葉を知っておくべきじゃない
か、この子は

咄嗟に隠れてしまふ二人だが、なにやら数回の問答を交わすような
声が聞こえた後、さらに一人増えた人物を引き連れてこちらに向か
つてくる

「一昨日からお楽しみだったな、北郷。孫策殿の体はそもそも魅力的だったか？」

「いじわる言わないでくれよ秋蘭。事情は説明しただろ……」

「ふんっ、どうせならそのまま腹上死すればよかったのに。なんで生きてるの？ 死ねの？ 馬鹿なの？ 二回死ね」

「桂花様！？ あ、あの私は兄様の事、流石だと思いましたよ?! 呉王を本当に、その、手籠めにしていた……なん………て………はうっ」

相変わらずの桂花と熟れ過ぎたトマトのような顔色で慣れないフオーを入れる流流

こちら側の護衛として控えていた秋蘭はともかくこの二人は華琳の傍にいたはずなんじゃ？

「ふむ、先にいっておくが華琳様は現在、趙雲殿とこれからについて話し合っておられる。なんでも重要な準備があるそうだ」

俺の心を先取りした秋蘭がすかさず補足を入れてくれる

やっぱり頼りになるな。風の言うとおり、建業に連れて来る人間を選出しておいて良かった

春蘭ではこっちはいくまい

姿は見えないが稟もここまで同行してもらっているし、準備は万端

この前のように余計なトラブルは起こらないだろう

あの日、平原での騒動はなんとか一件落着。互いのこの世界における気持ちを確かめた後、俺と蓮華は和解することができた

その後、行為を結んだことで過去の記憶は彼女の中に蘇り、数日後には秋蘭、桂花、季衣が残存兵と流流を連れて帰還、呉軍への裏切りについて申し開きの人員が整う

「苦勞掛けるな……へたすりゃ全員この場で斬首かも知れないのに付いて来てもらって」

仰向けになっていた上体を起こして謝辞を述べた

「我らは華琳様の命に従うのみ。主の身に危険が迫っているのならば如何様な状況や場所であろうとも馳せ参じるさ」

「そうです！ なにがあるうとも華琳様も兄様も私が守ってみせます」

「……ありがとな。よしっ！ ここまできたら悩むのもしょうがない。軍議まで少し時間があるだろうから食事でも行こうか？ 腹が減っては戦は出来ぬってね」

「ふっ…これから生死の掛かった大一番を前にしているというのに、なんとも剛毅な奴だな」

「あははっ、でもそこが兄様らしいですね」

笑い合う二人に呼応して俺の口元も緩む

「…単に自覚が無いだけじゃないの？ スカスカのざるみたいな脳みそじゃ事の大きさを理解出来てないだけよ」

が、案の定というか、必要以上の距離を取って視界ギリギリまで後退していた桂花だけが文句を垂れる

「桂花はいつも通りだなー」

「当たり前でしょ。なんで私があんたなんかと馴れ合わなきゃいけないのよ。ああ考えただけでもおぞましい！ この変態精子垂れ流しの海綿体めっ！！ 私は華琳様が心配なだけでここにいるのよ、勘違いしないで！」

さすが鬼ツン。最近良く聞くテンプレにもデレの気配が一切ない

「まーそれが桂花だもんな。うん、その調子で華琳の事これからもよろしく頼むよ」

「！？ ばっ、ばっかじゃないの！？ そんなの当たり前よ、なに格好つけてるの！ そんな事よりちゃんと手筈は頭に入ってるんでしょっね」

「？ あ、ああ。風や稟が考えた草案は全部覚えてるつもりだけど、格好つけとか別に意識して……」

「ふんっ！」

単に真っ直ぐ目を見て話したただけなんだけど…

これまた必要以上に首を背けてしまうので表情が読み取れない。どこがおかしかったか？

「桂花様？」

「ふふっ、北郷も色々と成長しているというわけだ」

「秋蘭様まで…あの、兄様？ これはいったい……」

「いや、俺に聞かれてもなにが起こっているのか理解できないんだが」

一向に頭を戻さない桂花と含み笑いのまま見つめてくる秋蘭

状況の掴めない俺と流流の二人して首を傾げていると、不意にドアから人影が飛び出しこちらに突撃してくる

「どーーーーん!!!」

「たわばっ!?!」

鳩尾へのダイレクトアタック

空腹の今でなけりや確実に吐いてたであろう抜群の破壊力は誰によるものか

痛む五臓六腑を押さえながらしがみ付いてくる体当たりの主に目をやると、案の定というかこんな事するのは一人しかいないよなーっという人物が頬をぱんぱんに膨らませて見上げている

「后であるシャオを差し置いて姉さまと情事に走るなんて、夫としての自覚が足りないっ!!」

予想は大正解

小柄でおませな自称嫁、孫尚香こと小蓮が抱きつくというよりは締め付けるといぐらいの強さをもってぶー垂れている

「桂花もそうだけど、シャオも全然変わらないよなー」

久しぶりの再会でも漲る行動力は健在のようだ

懐かしくなって無意識に頭へと手が伸びる

「せっかくお姉ちゃんが必要以上に奥手になって好機だと思ったのに、帰ってきたらまた一刀好き好き状態に戻ってるし………ねえ、シャオはいらない子なの？」

怒り顔から一転、瞳に涙を貯めて上目使いになる小蓮

これが彼女の作戦だと分かっているけど、この切なげな、寂しそうに哀願する表情を無碍には出来ない

「心配いらないよ。小蓮はとっても大事な女の子。構ってあげられなくてごめんな？」

伸ばした手をしなやかに整えられた髪に這わせて撫で付ける

「むふー かーじゅーとー」

すると望んだ反応が返ってきたのが嬉しいのか、すりすりと体を擦り付けて甘えんぼモードに移行してしまう

こうなると気が済むまで時間が掛かるんだよなー

とりあえず彼女のお気に入りであるおんぶの体勢を取ってご機嫌を伺っておくか

慣れた手つきでシャオをリフトアップ。スクランダーばりの合体を繰り出す

「きゃー」

「ほ、本当に流石です。兄様」

「くっ、やっぱりただの変態だったわね。その上幼女趣味まで発覚するなんて汚らわしい、少しでも見直したのが間違いだっただわ!」

「好かれるというよりは懐いている、といった感じだがな」

仲睦まじいはずの光景に三者三様の感想が漏れている

一瞬、記憶の戻っている小蓮と魏軍である三人の間に問題が起きるのではないかと危惧したが、以外にも背中から返ってきたのはいつも通りなセリフだった

「羨ましがっても駄目だもんねー。一刀はシャオの旦那様、一番甘えていい権利は譲らないんだから」

「いえ、全然、まったく、塵芥ほども羨ましくないんだけど」

桂花の視線が痛すぎる。でも大丈夫、大概の罵倒には慣れてるからな
「むしろそのまま絞め殺してほしいぐらいだったわ」

視線が絶対零度クラスまで冷たい。でも大丈夫、これぐらいの罵りでへこたれたりしない

「えっ？ 何で生きてるのか分からないんだけど。この変態は死して大地の肥やしにもならない不要物だし」

人権無視の罵詈雑言。大丈夫、そろそろ気持ちよくなってきた

悔しい！ でもビクンッビク……

「兄様？」

「はっ！？ 俺は今いったい何を……」

まさかのきっかけで新しい性癖に目覚めるところだった。危ない、危ない

「……一刀。シャオが付いてるから安心してね」

慈しむような声色ははたして何に向けられたものだろうか
聞くのも怖いので、それよりも大事な懸念を質問してみる

「シャオ。雪蓮の事……納得できたのか？」

恐らくは呉軍の将、一人一人に誤解を説かなくてはいけないしがら
みをあえてぶつけてみる

背負われた姿勢で表情は窺い知れないがぎゅっと強く肩を掴んだ手
に力を籠めてからシャオは気丈に言い放つ

「一刀が誤解だって言うのならシャオは全部信じるよ。……ほんと
は納得できても許せないけど」

「シャオ……」

「でもそんな気持ちでいたら一刀は困っちゃうでしょ？ だから我
慢する。きつといつか分かり合えると思うから」

「…孫尚香殿」

「た・だ・し！ 一刀だけは譲らないからね。もうとっくの昔から
唾つけてあるんだもん」

秋蘭が感嘆の声を漏らし、感動するも小蓮はふっと悲痛なくらい強
かった握り手は緩ませ、巻きつくように両手をしなだれかける

（強いな、シャオは。ちゃんと心の整理が着けられている）

迷ってた頃の俺と大違いだ

ありがとうと心からの感謝を述べてから、少しだけしんみりした雰
囲気を払ってしまうべくわざと大声を上げる

「んー。やっぱり腹が減ったなー。シャオも良ければいっしょに飯

を食いに行かないか？」

「一刀のおごり？」

「もちろん。っていつかシャオは金払った事ないだろ」

「ぶー。そういうのは雰囲気なの！ 男にいくら貢がせるかで女の価値は決まるって言ってたもん」

前から思ってたけど、そういう悪知恵をシャオに吹き込んだのは一体誰だ。この調子だと色々とシャレにならないんですが

「あー……でも高い食べ物も勘弁してくれよ。あまり手持ちを持たせてもらえなかったんだ」

よもや修練時の賭けの負け分を払ってひもじいとは言えまい。情けなさすぎる

出立時にお金を貸してくれた亞莎にはしばらく頭が上がらなさそうだ

「あつ、でしたら私がお作りしましょうか？」

「？ あんた誰？」

「えと、私は典章と申します。こうみえても料理の腕には自信がありますのでお任せいただければ幸いです」

「んー、ほんとに？」

顔のすぐ横で首を傾げるシャオに頬を寄せて答える

「ほんと、ほんと。流流の料理は天下一品だぞ？ 実際にはっぺが落ちるんじゃないかって言うぐらいすごいぞ」

「兄様つてばもー。それは大げさ過ぎます」

俯き照れる流流だが、まんざらでもないのか緩んだ口元が隠し切れ
てない

「なら私も手伝うとするかな」

「秋蘭様？」

「どうせなら我等の運命を決める大一番に備えてとびきり美味しい食事を用意しておこう。そうなれば色々と弾みがつくだろう？」

「おおー。なんか今から涎が出てきそうなくらい期待してきた」

「存分に応えて見せよう」

ふっ、といつものクールな笑みを見せてから秋蘭と流流が部屋を出て行った

無用のトラブルを避けるために俺達の来訪を詳しく知らされていない城内の人にとって秋蘭達の行動は特に気に障るものではないだろう
過去に食した絶品の数々を思い出し、比喩ではなく涎が零れそうにな
った

「そしてそれが最後の晩餐になるのだった」

「あんまりシャレになってないよ!？」

「ふんっ」

しかもこれから取るのは昼食だ

行き場を無くして残ってしまった桂花に突っ込みを入れるとまたも真面目な口調で小蓮が語りかけてきた

「ねえ一刀。これから姉様達といろんな事話し合っただよね？」

「? ああ、過去の事とか、これからの事とか打ち明ける内容は一杯あるけどそれがどうかしたか」

「うん、それでね。多分話の主導権を握るのは冥淋だと思うの。記憶の戻ってないあの調子だと難癖をいっぱい付けられるだろうから、ちよっとした秘策を授けて上げようと思って」

「秘策? あの周公瑾を出し抜けるような策が貴方みたいな人物にあるというのかしら」

「なんですってー!」

「煽るなよ桂花っ! ったく、シャオ? 気にせず続けてくれ」

リスもかくやといった頬の膨らませ具合を宥めて耳を傾ける

相変わらず敵か味方が悩む存在だ

……永遠のファイフティファイフティな気もするが

「むー。まーいいけどね。秘策はずばり 姉様よ。何だかんだ言っ
て冥淋も姉様には逆らえないもの」

「……えーとつまり、最終的な決定権は雪蓮にあるって事？」

「大正解！」

両足と片手を突き出し、元氣一杯にボディランゲージ

「はあ、どんな奇策が出るかと思えばそんなの当たり前じゃない。
取り正して聞く内容じゃなかったわね」

「いや、そうでもないぞ」

「あんだ、何言って……」

確かに俺の頭じゃ周瑜の考えを見抜いたり、出し抜く事は難しいだ
ろう

けど、彼女の主君は自由奔放が服を着て人間になったようなあの雪
蓮だ

雪蓮の性格上、周瑜からの進言が道理に適っていたとしても気に入
らなければ撤回させてしまふ可能性が高い

「狙うならそこか」

王としての彼女が相手だとはいえ、本質は変わらないはず

なるほど。分の悪い賭けに一枚のジョーカーを手に入れたってところか

「ありがとなシャオ。すごい参考になった」

「むふん、夫に尽くすのは妻の務めだもん。まったく、一刀はシヤオがいないと頼りないんだから」

「うわようじよつよい」

時代を超越した嫌味を華麗にスルーして新しく考えを馳せる

本当なら秋蘭が稟も交えて協議したいところだけど、二人とも急がしそつだしな

しょうがない。ここはある意味、気心の知れた軍師殿に相談してみるか

「桂花。呉軍から協力を得られるとして、あの作戦を実行するには何を要請すればいいと思う？」

「はあ？ それぐらい自分で考えなさいよ。何で私があんたの疑問に答えなきゃなんないのよ」

「華琳の為でもか？ 現状俺達は一蓮托生だろ」

「！？ 卑怯な言い方をして！ くっ、なんてむかつく奴かしら。こんな状況じゃなかったら落とし穴に突き落としていたところよ、命拾いしたわねっ」

気に入ってたのか、あれ

まあ、付き合い長いからどこでどう要求すれば願いが通るか、大体把握出来てるんだけどな

犬猿の仲である猫耳軍師と二人、切り札を使用した場合の状況対応を煮詰めていく

残り数時間

武力だけでは解決できない問題が差し迫ってきていた

追記

仲間外れにされたと勘違いされた小蓮に時間ぎりぎりまで引っ付かれたのは言つまでも無い

……締まらないなあ。

三十三話 北郷軍の独立 建業・台頭する者

「では、此度の件は一切の害意無い。不測の事態が招いた結果だというのが」

「ああ、全ては左慈、そして干吉が仕組んだ罠だったんだ」

厳格な周瑜の声が胸に突き刺さる

昼下がりの陽光が暖かいはずの午後、城の中心部である玉座の間で俺は申し開きを行っていた

本来なら最終的な打ち合わせをしてからこの場所に臨むつもりだったんだが急遽、会議開始が早まったおかげで華琳達が用意しているという準備が何なのか知る時間が無くなってしまった

この場に裁量側として出席しているのは現呉王である雪蓮と大都督である周瑜、そして穩を始めとした複数の文官らしき人物達

対して裁かれる側の俺の隣に華琳が、少し後方に離れて稟と秋蘭、星の四人が控えている

本来なら雪蓮側に蓮華も居なくてはいけないのだが、何かしらの理由でもう少し時間が掛かるらしい

一通りの説明を始めて数十分

何度目かの過去の外史、記憶、三国に渡った俺の軌跡を順を追って証言していく

一部曖昧なところはあるが華琳や星がこの場にいる事が何よりの証拠となると思う

記憶が戻っていても事態を理解できていない穩はあたふたとするだけで援護は望めそうもない

「そして、華琳を、魏を過去の柵関係なく、同盟国として向かい入れて貰いたいんだ。……世界全てを救うために」

頭の中で状況を把握してる内に主題である嘆願を述べる

長坂橋での無断出奔と自己裁量で魏軍を引き入れた件についての説明だけでは話し終えた時に妙な難癖を付けられ、同盟誓約の障害となるかも知れない

そう予想していた稟の提案で要望も沿えて一気に説明を終えた

後はあちら側の判断を待つのみといったところか

周瑜を中心に穩や文官が集まり、話し合いを始めている

耳に入ってくるのは真剣に交わす言葉や意見

それに混じってこちらを馬鹿にしたような嘲りや曲笑も流れ込む

過去の事情を知らない文官からすれば俺の申し開きは戯言にしか聞こえないからだろう

あえて嘘を付く必要も無かったので正直に話したが、穩の表情にも

戸惑いの色が浮かんでいる

呉軍全員が半信半疑の状態に進む軍事裁判。誰もがこちらを疑う視線を浴びせる中で

「……………」

ただ一人、こちらを穴が空くほどの眼光で見定める雪蓮が玉座から見下ろしていた

「……………」

「……………ちゃんとしなさい一刀。ここが男の見せ所ですよ」

華琳とはまた違う王の気迫、その飲み込まれそうな深い重みを持った瞳に気圧されかけるが隣からの一言が牽制となりなんとか踏み留まる

氷のように鋭く、炎のような情熱を秘めた彼女独特の雰囲気

傍に控えるのではなく、向かい合って初めて理解した彼女の凄みを肌で感じていた

「ん……………大丈夫だ。心配いらナイよ」

この状態からいかに自分の有利な状況へ引き寄せられるかが問題

呉で培った軍師の経験を活かす時だ

やがて協議が終わったのか、人の輪が解かれ、元の位置へと戻って

いく

何度も心配そうに穏がこちらを見遣るが上司には逆らえないのか、
済まなさそうな表情で項垂れている

「さて、北郷一刀よ。今回の騒動についての我ら呉軍からの判決を
下す」

仰々しく口上を垂れながら周瑜がこちらに向き直り、言葉を紡ぐ

「自らの職務を放棄し、無断で出奔した件に関しては如何なる理由
があるかと許しがたい。一つ間違えば袁紹軍と敵対する良い理由に
なったであろうからな。一部の臣下と交流が深かろうと一人の勝手
は許せん」

「……………」

雪蓮は喋らない。黙して語らず、視線だけをこちらに投げかける

「だが、魏王と有力な将を捕らえた功績については十分に評価出来
る。よってこの場において曹操の首を刎ねてみせれば先の罪につい
ては不問としよう」

「!？ ちよつ、ちよつと待つてくれ！ 俺はそんなつもりで彼女
達を連れてきたわけじゃない！」

説明時の同盟等の要望を完全に無視した物言いに慌てて異を唱える
事実を事実だけで捉えるのは当たり前前だけど、すぐさま処罰を実行
させるなんていくらなんでも横暴過ぎる

「では何だ？ 本気で敗残した魏と同盟を組めなどと言うつもりなのか。そのような愚考、後顧の憂いを絶つに一理あるうと呉にとつて手を結ぶ利点などどこにも無い。下らぬ過去の記憶などという曖昧な証言だけでは信用出来ぬな。所詮貴様は一介の将、大局を動かせるほどの発言力があるとも思っただか」

「つつ！ でも、その過去の記憶のおかげで星…趙雲や呂布が力を貸してくれるだろ。それが証明に……」

「蜀を取り入れ戦力を増強し、謀反を起こすと？」

「なっ！？」

「確たる証拠が無い上で幾ら講釈を垂れようと欺瞞にしか聞こえぬ。蜀の武将が本当に過去の記憶によって鞍替えしたというのなら明確な証拠を提示してみせろ」

「それは……」

予想はしていた、もっとも痛い部分への指摘に言いよどむ素振りを見せる

利害関係で結託しているわけじゃない俺達の絆は過去を知る人物でなければ非常に歪な集まりなんだろう

天の御使いという代名詞が無い俺はこの世界において周瑜の言う通り、特別な存在じゃない

へたな勘繰りは受けてしょうがないけど、ここは引き下がれない正

念場

何とか雪蓮の気を引いて流れをこちらに手繰り寄せよう

事前に小蓮の助言がなければ実行しえなかった大博打に掛けてみる

「俺達の間にあるのは信頼だ、形のある証拠は出さない。けどこれからの行動で裏切りや謀反の疑いを晴らしてみせる事は出来る」

その一言に周瑜がおもしろそうに顔を歪めた

「ほう？ 何をしてみせるつもりだ。生半可な行動では身の潔白を証明できんぞ」

「ああ、それぐらい俺だって理解してるさ。だから呉にとって有利にしか働かない、大きな目的を果たしてみせるさ」

ちらりと横を見遣れば華琳が「なにを言い出すつもりなの？」みたいな表情を浮かべている

当初の予定ではここで呉軍と和解し、協力体制を取りたかったが予想以上の隔たりがある現状では止むを得まい

万が一にと用意しておいた腹案を胸に、小さく深呼吸をしてからと口を開く

「袁紹を、俺達だけで落とす。それなら成功、失敗を問わず呉に損失はないだろう？」

いずれ必ず敵対する相手だ。戦力を削ぐ事に異存は無いだろう

「一刀!?」「一刀殿!」「……主?」

打ち合わせに無い俺の発言に驚く三人

本当なら冤罪を払拭するだけでなく、なんとしても協力関係を結ばないといけないところだったからな―

直前のすり合わせが出来なかった事が悔やまれる

そしてその突飛な一言にざわめき出す文官達に紛れて穩は目に見えて動揺し、立場も忘れて捲くし立ててきた

「だ、だんな様! い、いきなり何を言い出すんですか!? ね、あれ冷静になつて考えてください。世の中にはやれる事と出来ない事があるんですよ! 三十万を優に超える相手にどうするおつもりですか!?!」

「穩。心配してくれるのはありがたいけど、ちゃんと勝算あつての発言だ。無茶をするつもりは無いから大丈夫だって」

袁紹より先に周瑜との舌戦に勝算があるかどうかだけだな

苦笑交じりに微笑むと、納得いかない彼女は体を乗り出して抗議する

「だ、駄目駄目駄目―です! そんな博打を打つくらいなら、この場で曹操の首を切っちゃってください。だんな様がお嫌なら私が直接―」

「「穩つ」「」

「この手で……って、だんな様と……雪蓮様？」

制止の声は俺だけのものじゃなかった

ほとんど同じタイミングで玉座から雪蓮が発言し、こちらに歩み寄って来る

「一刀、あなた本気でそんな大それた戦いに挑むつもりなの？ 勇気と蛮勇を履き違えるなんてそんな愚拳を教えたつもりはないんだけど」

眉間にしわを寄せて、随分と不機嫌そうだ

「……そんなにこの曹操が大事なの？」

苛立ちというよりか、納得出来ないってところか

流し目で隣にいる華琳へと視線を寄越し、睨みつける姿は自分を殺した相手を見定めるといふより華琳という人物自体を計っているように感じる

「確かに華琳は大切だよ。けどそれだけじゃない。雪蓮も蓮華も呉のみんなだつて大切だから袁紹に挑むんだ」

「その結果、無用の犠牲が多く払われるとしても？」

「それは分かってる。けど今はそれしか無いと思うんだ」

はっきりと正面に立った女性の瞳を半ば懇願するような目つきで覗

き込む

普通ならここで突き放されるか、そのまま了承されるだけだろう

けど相手は勘の鋭い雪蓮

同情を引くようなこの露骨な素振りと暴言に違和感を感じ取ってくれるはず

狙いは冤罪を逃れるだけでなく、周瑜との舌戦を避けて雪蓮の同情を引くという奇策だ

この情け無いようにも見える策に関して雪蓮は何を思っのか。この返答一つ次第で成否が変わる

数瞬の間を置いてから彼女は俺の真意を確かめる前に華琳へと口を開いた

「一つ確認させて曹操。誇り高い貴方が一刀と行動を共にするのは本当に信頼だけ？ 過去に殺された件は誤解だとしても、今回も何も企んでいないとは言えないでしょう」

それまで傍観者の立ち位置で眺めていた華琳がこちらの搦め手に気付いたのか、ふう、と溜息混じりの呼吸をしてから質問に答える

……覚えてなさいと。若干、こちらを睨みながら

「勿論、信頼だけで私は動いていない。打算は当然あるし、一刀の配下になるつもりもないわ、だって……」

「！！ や、やっぱりこの人は危険です！ 雪蓮様ここは強引にでも……！」

「私は一刀と、好いた男と対等な位置で生きたいだけだもの」

「……………ふえ？」

呆気にとられる穏と絶句している周瑜が印象的だ

どうやら俺の真意に華琳も気付いたらしく、雪蓮に言葉を返す

「……………それが本当に理由？」

「ええ。好意を持つ男へ尽くすのは女の性でしょう？ それは私にだって例外じゃないわ」

恥ずかしがるどころか、むしろ余裕を持った笑みで華琳が微笑む

「いや、華琳の場合、他の子より優位に立って俺を所有したいだけじゃ……………っていたたたたっ!？」

抓られた

「……………こほん。邪推はともかく、私は左慈の手引きとはいえずで一度袁紹に破れ、大志を砕かれた身。だからこれ以上策を労して無様を晒すつもりなんて毛頭無いわ」

脇腹を片手でキープした姿勢のまま答え、雪蓮はその返答を反芻するかのように薄く目を細めたかと思うと今度は俺に向き合う

「ねえ一刀。前に母様のお墓での事覚えてる？」

「……当たり前だろ」

俺がまだ絡み合ったこの世界に降り立って間もない頃。過去の記憶に引き摺られ、過剰なくらい雪蓮や蓮華との距離を測っていた躊躇いの日々

平原に発つ直前で孫堅さんの墓、雪蓮が暗殺された場所へと墓参りにいったんだ

…トラウマめいた記憶に突き動かされて

「あの時、私離れして頂戴っていうお願い。一刀はきちんと克服できたみたいね」

「えっ？」

雪蓮は一步下がり、俺と華琳を視界に納めて歌うように言葉を紡ぐ

「人の生き死なんて天命でいくらでも二転三転するもの。まして群雄割拠のこの時代、無念の内に死ぬ事も、大事な人を守りきれずに生き永らえてしまう事も、全部人の身ではどうしようも出来ない大河の流れよ。だから過去に毒矢に倒れたのをいつまでも気にせず、せっかく手に入った新しい人生を謳歌したほうが色々と建設的だと私は思うの」

誰よりも悲しみを背負っていたはずの張本人が笑っている

過去に縛られず、未来の為に生きるといふ思いを胸にしながら

「だから久しぶりに再会した一刀が明日を、今をしつかり見据えようとしていた変化が嬉しかった。一刀が誰よりも明るくて、どんな女の子にも優しい、ちょっぴりだらしないけど頼りになる不思議な宿り木に戻ってくれて」

片目を瞑り、挑発的なウインクで華琳の方へと視線をずらす

「そのきっかけを曹操に取られたのは悔しいけど」

「ふっ、当然でしょ。この男は私の所有物なのだから躰はキチンと施さないよ」

あ、ちゃっかり惚れて尽くしての部分を撤回してるな

「そっか、だったら私も一刀に愛想尽かされないようお願いを聞いていちゃおうかなー？」

「!? 伯符！ お前何を言い出すつもりだ!!」

周瑜の制止も聞かずに、にんまりと口元を緩めた雪蓮が髪の毛をかきあげる

「一刀。本当は何が目的かしら」

「雪蓮!!」

「袁紹を抑えるのは本当さ。ただ、なるべく犠牲を出さない、戦闘以外で戦力差を覆す作戦を実行する為にある条件を飲んでほしいんだ」

「ある条件？」

はつきりと聞こえるよう、一息唾を飲み込んでから口に出す

「俺を、北郷一刀を君主とした国家の設立だ」

「……わお」

「なっ！？……」

「ええええええ！！！」

雪蓮、周瑜、穩の順番で驚きの声上がり、玉座の間を駆け抜けていく

まあ、この状況で切り出すような話題じゃないからな、そういうリアクションは予想済みだ

けど目の前の女性はすでに驚きを通り越して、興味しんしんといった様子で目を輝かせている

「随分と突拍子の無い話だけど、そうする理由はなにかしら？」

「それについては私が述べてよろしいでしょうか」

ようやく出番だとばかりに稟が進言し、発言の許可を求めた

「貴方は？」

「私の名は郭嘉。かつて曹操様の軍師を務め、現在は一刀殿に力を貸すべく馳せ参じている者です」

一礼し、頭を垂れる稟

記憶が戻った後も風と二人、俺付きの軍師として加入してくれるという彼女がなんとも心強い

「ふーん」

その呟きを肯定と取ったのか、気を引き締めるように眼鏡の位置を直してから説明を始める

「まずは現状の戦力比についてご説明を。現在、袁招軍は北方の地、馬騰殿が治める涼州以外のほとんどを手中に収め、民草を無視した強硬な軍拡政略によって規模を増大、大陸におけるもつとも強大な勢力にまで成長しました。これに真正面から戦いを挑んではいくら呉軍の援助を受けようとも相当数の被害が出る上、勝算は高いとは言えません。比率で袁招軍が7：呉軍全ての支援があったとしてもこちらの戦力は3、というこの数字は覆らないでしょう」

「それはおかしくない？ うちだって過去と違って結構を増やしてるし、そこまで差が出るとは思えないんだけど」

「孫策殿の意見はごもつとも。ですがこれは兵の数ではなく戦力についての比率です。無論、呉軍兵士の錬度が低いという意味合いではなく、あちら側には中核戦力である袁招兵の他に白装束を纏った死兵に近い動きをする部隊が多く存在しているからです。死を厭わなければ引くことも、躊躇する事も無く闘い続ける、先の官渡の戦いでこの厄介さは証明されています」

実際に戦った華琳や春蘭が言うんだから間違いない

左慈によって生み出される白装束とは出来るだけ戦闘を避けるべきだ
当然、蜀と連動して戦う案もあつたけど、そうなつたら大陸全土を
巻き込んだ大戦に発展してしまうだろう

俺と左慈が原因で派生してしまったこの世界

関係の無い住人をこれ以上巻き込みたくないんだ

「ですので一刀が考案なされた『国政乱れる袁招軍領地の人間を手
厚く出迎え、こちら側に引き入れる』という策を実行し、民を扇動、
敵兵士数及び、軍隊維持に必要な民衆を減らした上で戦いに挑みた
いのです。本来ならば呉にその受け皿である役目を引き受けて貰う
のがスジですが、不平不満を募らせている袁招領地の民、それに紛
れ、敗北したとはいえ再起の念絶えない元魏領の民を纏め上げるに
は一刀殿を君主とした新国家の方が都合が良いのです」

稟の説明に続けて華琳が言葉を繋げる

「本当は左慈への意趣返しのために北方へ紛れ込ませていた間者もこ
の際だから使うつもりよ。彼らは各州要所に配置してあるからそこ
で袁招軍が悪仙や羅刹の類に唆されているという悪評を流させ、逆
に一刀に対しては ある噂 を流すように仕向ければ一気に人の流
れは加速するでしょう」

「それこそが最大の目的。一刀殿はかつては董卓軍に所属し泗水関
で夏侯惇殿を撃破、その勇名を大陸に轟かせ、呉に仕えた後も平原

での奇抜な政策により善政が評価されています。更に加えれば魏軍を助ける為に長坂橋で立ち回った件も情報統制をすれば立派な武勇伝となります。その風評を活かすは今。人心を集め、新たな勢力として台頭すれば必ずや民は集まってくるでしょう。……そう、『天の御遣い、北郷一刀』の元に。……魏王が援助し、呉王にも認められているという箔が付けば更に、ですが」

「……………そういう事」

もう一度、俺は役者を演じる

予想以上に広まっていた俺の噂を利用したこの作戦は、簡単にいうと過去の世界と同じように俺が客寄せパンダ役を買って出たわけだ

過大評価で祭り上げられるのは正直気が引けるけど、この作戦が一番効率がいい

己の意思で決めた信念と覚悟を持って孫呉の王である彼女と向き合う

「頼む、雪蓮。俺は全てを救いたいんだ」

この外史を守るため

繋がりを持った女の子達を救うため

万感の意を込めた願いを投げかける

「……………」

沈黙

誰もが固唾を呑んで返答を待つ静寂の時間がゆっくりと流れ、答えを待った

やがて、思巡していた雪蓮が突然真面目な顔つきで周瑜を見つめ、謝る

「ごめんね冥淋。私は自分の直感を信じるわ」

「雪蓮！！」

どこか予測済みだったのか周瑜の檄に張りが無い

過去の記憶が無い彼女にとってこれから下されるであろう決断は呉に尽くそうという自分への裏切りに近い判決だ

訴えかけるような弱さをはらんで自らの主であり、断金の友とも呼ばれる生涯の女性へと確認を取った

「……もう、決めてしまったのだな」

「ええ、これから呉は前端的に北郷一刀へ援助をするわ。表立つては策の妨げになるでしょうからあくまで秘密裏になるでしょうけど」

諦めたかのように首を振り、項垂れる

「好きにしる……私は少し休む」

「冥淋様っ！」

退場していく彼女に続いて穩もそれに付き添う

ちらりと見えたその表情は灰暗い雰囲気よりも、一番の理解者であるうとした雪蓮の意思を汲み取れなかった自責の念が移りこんでいるようにも見える

……すまない、周瑜

大望を掲げ、誰も無碍にしないと誓っておきながら、早速、君の呉を思う気持ちを踏み台にしてしまった

その無念は必ず報わせるから、今はどうか納得してほしい

謝罪の一念と同時に、突然、一言の記憶が蘇る

成すべき事を成す

でなければ先に散っていった者へ顔向けできない

……それは誰が放った言葉だろう

脳裏に倒れ伏せた女性の姿が走馬灯のように頭に浮び、正体不明の感情が押し寄せ鼻腔をくすぐる

いや、この言葉と思いはきつと……

かつて確かにあった信頼を思い出し、そのフレーズを忘れないようしっかりと胸に刻み込んだ

奥歯を噛み締め、雪蓮の方へと首を戻す

……つくづく自分は色んな人の助けを借りてるよな

今迄見た事も無いくらい顔を引き締め、佇んでいる彼女は王としての風格を匂わせていた

「北郷一刀。今この時をもってあなたを呉軍から除名します。これからは一人の男として、一人の王としてこの大陸で生きなさい。何をしても、どんな判断を下すかも全て貴方次第、数千数万の人間の運命を受け止める覚悟を持ちなさい」

「……誓うよ。北郷一刀は全てを救う為に尽力し、その責任を負う事を」

信念は言葉に出して始めて世界に認められる

華琳との再会の夜と同じように、思いを形にする儀式めいた宣誓をこの場を離れた周瑜にも届くよう高らかに告げた

その急転直下の決定から半月

新国家『北郷』建国の報は空前といった速度で大陸を駆け抜け、蜀や袁招軍といった縁ある諸侯にも届いた

ある陣営では…

「これは………くっ、北郷め。貴様自ら過去の焼き回しとはやってくれるじゃないかっ!!」

「左慈さん！？ 乱暴にされては腕の御怪我に障りますわよ！」

仇敵がその行動を忌々しく思いつつも、緑の旗を掲げる軍勢に邪魔され不快感を露にしていた

そして、戦の矢面へと立たされ、いまだ開合の時を果たしていない勢力にも動揺が走る

「はわわ！？ ご、ご主人様が新たに国を立ち上げ、君主に！？ ど、どどどという意味なんでしょうか桃香様！！？」

「私に聞かれても！？ うう、もしかして私達の国が嫌いになっちゃったとかじゃないよね鈴々ちゃん！」

「何でこっちに話を振るのだ！？ えーとえーと、翠っ！ どういう意味なのだ？！」

「軍師が分からないのに私が理解できるはずないだろ！ 次っ、紫苑！」

「……伝言遊びじゃないんだから、もうちょっと落ち着きましょうね」

嗜める黄忠の表情に苦笑いが張り付く

「ぐっ、居てもいなくて桃香様を掻き乱しやがって。今度会ったら叩きのめしてやるからな！」

「素直に会いたいと言えんのか、このへそ曲がりか」

「あわわ、皆さん落ち着いてくだひゃいー！」

混乱する軍議の中、ようやく決定したのは『北郷』へ使者を送る事のみ

選ばれたのは果たして誰か？

ざわめき立つ蜀軍の会議を何時の間にか牢から抜け出した黒髪の女性
性が押し黙り眺めていた

更に……

「お前達、北郷監視の任、しかと任せたぞ」

「……はい、冥淋様」

「必ずや我ら姉妹がご期待に応えて見せます」

呉からの監査役として周瑜が選んだ二人の少女

本来ならば舞台上上がる事さえ出来なかった彼女達は这个世界で何を思うのか

雪蓮の決定に不本意ながらも従おうという周瑜をよそに

二喬と呼ばれた演者が悲痛な思いをひた隠しにしていた

かくして道化の如く演ずるは天命帯びた人の支え

巡る噂の真偽は如何に

答えはこれから明かされよう

初めは地を駆け、己を模索し『北郷』の時

自ら掴み取った未来は果たして只の再来か

第二部『天の御遣い』ここに開幕。

三十三話 北郷軍の独立 建業・台頭する者（後書き）

天の御遣いに自分から成る、ここが重要。

ここまで来ると他の作品に浮気したくなってくるこの頃

とりあえず恋姫物だとこんなのを考えてたりしたり

恋姫十学園 エンパイヤーズ

北郷一刀には二人の幼馴染がいる。

一人は財閥の令嬢であり、小学生までの幼馴染 華琳。

家来一号である彼を私有物だと公言して憚らない

もう一人は旧家のお嬢様にして中学時代の幼馴染 蓮華。

自他共に認める世話女房の立ち位置で一刀の傍にいた女性、現生徒会長

高校二年の春。

フランチェスカ学園に転入する事となった一刀を二人は互いを知らぬまま向かい入れる。

だが、問題はそれだけでは無い。

彼の後ろには見たことも無い女性がびつたりと寄り添っていたのだ。それは一刀が財界人の子供だと発覚した後で彼を警護していた 愛紗 という人物。

そして一番の問題は彼女が一刀に一目惚れしていたという事実が更に混乱を引き寄せる。

ここに少しおかしな外史が始まった……

みたいなのも考え中

……まずはこの小説終わってからだね。うん、それは確定だ

一刀が呉より独立して早一ヶ月

彼は平原の居を構え、国の立ち上げに七苦八苦しながらも袁招軍との戦いに向けて様々な準備を進めていた

自分は天の御遣いだと風潮し、袁招軍領下の人々をこちらに迎え入れて戦力を削ぎ落とす策や天界の知識を用い兵器製作を目的とした工作部隊の設立

旧魏軍、呉軍同士の協調や部隊編成、指令系統の統一、街の拡大計画初めとした住民への生活保障などなど

やるべき事を上げればきりが無い

それでもなんとか彼を慕って集まった仲間に使われ、推し進めていた政策が軌道に乗ったある日の明朝

淡いピンクの髪をしきりに気に掛ける一人の少女が忙しなく動き回っている

それは自室に据え付けられた鏡台に背を向けて、短く整えられた後ろ髪を何度もチェックする蓮華の姿だった

「くっ……このままではまずいわ」

つい最近まで伸ばしていたせいか、どうにも違和感が拭えず、朝早くから始めた身嗜みを続けてすでに一刻が流れようとしていた

「……やっぱり短く切りすぎたのかしら？ 今日はずっと一刀と出掛けられるというのに、こんなところで躓いてしまうなんて……」
未練がましく櫛を通してなんとか誤魔化そうとする

一刀の理想に恭順する覚悟と以前の自分とのけじめをつける為に以前のような髪型に戻っていた彼女であったが、今朝に限ってはしつこいぐらいに入念な身嗜みを施していた

「ここにもう少し膨らみをつけて……と」

何といっても今日は久しぶりに一刀と二人きりになれる好機

だらしなな格好で愛想をつかさされるわけにはいかないわ！

「……よし。ここまで撫で付ければきつと大丈夫ね」

ようやく得心いく調整を終えたのか蓮華が満足気な笑みを浮かべて頷く

普段の剛健実直とした彼女とは大きく異なる、花開いたかのような無垢な笑顔が眩しい

だが、鏡に写る自分の表情を確認して慌てて顔を引き締める

いくら久方ぶりの休養とはいえ上に立つ者としての尊厳は普段からきちんと誇示しておかないと

自分を戒めるように軽く頬を叩く

「さて、そろそろ待ち合わせの時間ね。早く城下の大通りに行きましょつ」

逸る気持ちが自然と足取りを軽くする

数秒前の立派な決心も案の定というか、恋する乙女の気持ちの前には簡単に押し流されてしまった

今日はデート

過去にも体験したこのシュチュエーションに胸を膨らませた蓮華が赤と金で装飾された軍服に身を包み、意気揚々と目的地へと歩を進めるのだった

しかし……

「行つたか？」

「はい。身嗜みを終えてこれから一刀様と待ち合わせる模様です」

「うむ、僥倖じゃな。色々とあつた諍いのせいで蓮華様と北郷を二人きりにして差し上げられなかったからのう、ここは我ら忠臣が一肌脱いでより良い逢瀬と仕立ててみせようぞ」

「はいっ！ 私も精一杯頑張らせていただきます！」

「……………ふう、監視役の護衛でこの地にお越していながら随分と自由ですな、祭殿」

「二二に辿り着いた時点で儂らの役目は終わっておるのじゃ。多少の娯楽ぐらい楽しませてもらうてもバチは当たらんわい。のう明命」

「はいっ！ 二喬の方々もお疲れの様子でしたし、しばらくは勝手が利くと思います」

「ではそろそろ追跡を開始したいと思います。準備はよろしいですか？」

「「おおー！！」」

「……………はあ」

記憶を取り戻し、新たに二名を加えた呉軍の将達がまたもおせっかいを焼こうと画策するのだった

……………もう一組の影に気づく事も無く

「……………いえ、分かってはいたのよ。一刀がたくさんの女の子に

優しく魅力的な男性で普段から引く手数多の存在だという事は。でも今日ぐらいは私だけ特別扱いしてほしいって……少しだけ、うん。大いに思っていたのに、こんな蔑ろにされてしまうのは流石に面白くないわ」

「蓮華？ 今なんて……」

「何でも無いわっ!!」

うおっ！？ いきなり不機嫌顔になった蓮華にどやされてしまった

「孫権様、体の調子が悪いんだったら無理せずお城に戻った方が良
いと思うのー」

「それだけは絶対に駄目！」

強い口調での沙和の進言を突っ撥ねる蓮華

大通りで落ち合ってからずっとこんな調子だ

「わわわ、そんなに怒らなくても。私、そんな気に障るような事言
ったつもり無いのに」

「単に虫の居所が悪いか、あの日なだけと違うん？」

霞がぶつきらぼうに答えるが蓮華はそれを無視して口を閉ざして俺
の隣に陣取る

「？ そういや、近衛隊に任命した沙和は納得できるけど、霞はど
うして俺達に連いて来るんだ？ 昼飯をたかるにしてもまだ時間が

あるぞ?」

時計があれば十時ぐらいだろうか

そもそも酒飲みの霞がこの時間に行動しているのが珍しい

「いやいや! 我らの御印、天の御遣い様に奢らせようなんてまったく考えてへんて。うちはあれや、もつと護衛が必要やないんかと心配して同行してるだけやさかい」

「嘘くさい……」

「にやはは まあいいやんか。ほらっ! いちいち細かい事気にせんと前見て進もつや」

「つとと、急に押すな! のっかかるな!」

笑ってごまかす霞がぐてーつと背中に張り付き、体を預けてくる

うーん。沙和といい霞といい、なんか行動がおかしくないか?

妙にこちらに絡んでくるといつか、いつもらしくない。どこか演技掛かっているとしても言うべき行動が目につく

「ほうほう。同じような羽織を着てるせいか、お似合いな雰囲気なの。甘々な恋人臭がぶんぶん漂ってくるみたい!」

「!?!?」

「おお、さよか! うちもようやく女の子らしい行動が自然と出来

るようになったとたんやな。うーん、感慨深い」

俺の肩に頬擦りしながら囁く霞

ある意味、戦闘狂の側面を持つ彼女がこういう仕草をしてくれるのは男冥利に尽きるが、もう少し恥じらいやなんかの部分も学んでほしいもんだ

だが今は許そう。しょうがない。むしろばっちこい。

女性が密着してくれば、当然背中に二つの双丘が当たってくるわけで

ビバ、役得。スパシィーバ、女体の神秘

降って沸いた幸運に思わずにんまり……

「……一刀」

ぐきっ

無常な関節技が炸裂した。

「サブミッションッ!？」

空いた右腕の関節が蓮華によってがっちりと極めている

「……亞莎に教わったの。教育的指導のやり方を……」

「それは違う蒙ちゃんじゃないかな!？」

一騎当千の腕前に驚嘆しながら突っ込む

「ふんっ！ さっきから鼻の下を伸ばしているご身分ね。部下に慕われて羨ましい限りだわ」

顔を背け悔しそうに口元を窄めていじける蓮華。その姿はとても彼女らしいやきもちの姿

だが関節はばっちり極まったまま。そろそろヤバめな音が立ち始め、ぐきっ から ごりっ に変わってきた

何という反比例

助けを求めて直属の部下であり元凶である沙和に目で訴えかける
すると……

「隊長、修羅場？ 修羅場なの？」

超楽しんできた

「目を輝かせてないで、助ける近衛隊！！ いやマジでっ！」

ぎりぎりと締まっていく腕を押さえて叫ぶ

そんなコントめいたやりとりを道の真ん中で繰り広げていると町の人達から笑い声が漏れてくる

「殿は相変わらずですなー」

「ははは、天の御遣い様も女性に囲まれては勝てませんか」

くう、人事だと思って呑気な！

はたから見れば痴話喧嘩にしか見えないだろうが、間接技が極まった右腕の反応がレッドゾーンに突入。肩から先の感覚がなくなってきた

「……………ようし、いい感じなの。このまま任務が成功すれば一日隊長を好きに出来る権利が得られるの」

沙和がなにやら怪しい笑みを浮かべているが切羽詰った危機的状況のせいで言及できない

ぐうつ、やっぱり裏がありそうだな

「霞？ 蓮華さん？ 人目も集まってきたわけですし、そろそろ離してもらいたいんですけど……………」

「ええー。一刀のいけずー。うち悲しくて涙がちよちよ切れてまうわー」

「……………私だつて貴方が不埒な顔を見せなければこんな乱暴なまねしなかつたわよ」

両者ともしぶしぶといった様子で俺から離れ、元の位置に戻ろうとしてくれる

ふー、良かった。このままでは俺の尊厳やら威光、特に右腕が失墜するところだった

まだまだ予定は立て込んでるのに仕事に関係無い部分で怪我するなんて不測の事態すぎる

「おほんっ！ 気を正してそろそろ行くぞ。まずは」

「あっ、御遣いの兄ちゃんが今日も違う女の人連れて歩いてる！ やらしーんだ」

「ちよっ！？」

ごりっ

「！！」

右腕えええ！！！

その後、運良く通りかかった華佗に腕をはめてもらい、事なきを得たがそれ以降蓮華が口を聞いてくれない

多少のトラブルがあったにせよ、せつかく二人で行動できる久しぶりのこの機会。有効に使いたんだけどなあ……

痛む肩を押さえながらそればかりが頭の中を巡って落ち着かない
うーむ……本当はもっといちゃいちゃしたいし、きゅっきゅっうふ
ふな展開も期待してたんだが今は触らぬ神に祟り無し、過度の接触
は控えておいたほうが無難かなー

……

「……ええい、北郷め！　こんな時に日和おつてからに。明命
っ！」

「はいですっ！」

気づかれぬよう尾けていた明命が妄想を膨らませる沙和に襲い掛かる

「　でー、流行の服を買ってもらった後には最近流行ってる甘味
処で新作お菓子を……きゃつぶっ！？」

「でかした！　そのまま轡をはめてどこか人目の付かぬ場所にでも
放っておくのじゃ」

「了解です！」

取らぬ狸の皮算用。憐れ投げ捨てられる沙和であった

「次は張遠じゃな……。よし、亞莎よ。その酒屋で一番強い酒を買
ってくるのじゃ、酔って絡む不届き者には悪酔いさせてご退場願
うぞ」

「……貴方がそれを言いますか」

その後、霞が何時にも増して積極的だったのは徹夜で秋蘭といっし
よに酒を煽ったせいというのが発覚

昼飯の頃にはなぜか顔を真っ青にして吐きそうにしてたから言及してみた

武官である霞は今のところ暇な部類に入るとはいえ程度をもっと弁えてほしいものだ

期せず二人きりなれた俺と蓮華は残りの時間を楽しむために町を再度練り歩くのだった

「……………なぜ今日に限ってこんなに人が寄ってくるの？ 神様はそんなに一刀と私がいっしょに過ごすのが気に入らないのかしら……ああでも、真面目な一刀の横顔を見ていたい気もするし……もうっ！」

「蓮華？ 何か言いたい事あるならはつきりと……」

「今は黙ってて！」

「はい……」

資料が積まれたテーブルを前にして蓮華が吼える

うう、時間が経つ事に機嫌が悪くなつてくなく

道端で今度は人和に捕まったのが不幸の始まり

他の人には任せられない彼女達のライブについて打ち合わせを強要されてしまった

こればかりは芸能文化を色々見てきた俺で無いとうまくいかないからな

大丈夫、今はまだ焦るような時間じゃないと心に言い聞かせ、せめてもと仕事に集中する

視線に怯えながら手元の竹管に手を伸ばすと不意に物音

チリン

……

……なるべく早い段階で対処しよう

このあからさまな主張でバックに誰が見張っているか分かってしまった

そうですね。ここは男である自分がリードしなくてはいけませんよね

「一刀さん？ 急に汗が滝のように流れ出したけど体調でも悪いの？」

「色が赤に変わらなければどうという事は無い」

三倍な速度の彗星さんっぽく言ってみた

「？」

「おほん。あんま気にしないでくれ……ええと、これは会場設営の資材経費か……ここが骨組みで、こっちが外装の値段……っと、うーん……人和。これもうちちょっと安くならないか？ 前はここまで金額は張らなかつたろ」

とはいえ背後に死が迫っていようとこれはこれで必要事項。やる事だけはやっておかないとな

今、人和と相談しているのは袁紹から民を引き寄せる為に行おうとしているイベントの打ち合わせだ

こればかりは芸能文化に多少なりと知識のある俺でないと勤まらないので最近良く彼女と顔を突き合わせている

いくら俺が天の御遣いと謳っても、この世界じゃフランチエスカの制服も無けりゃ、予め広がった噂も無い

人心掌握の補填としてこの作戦は初めから考慮に入れていたからな

魏でも彼女達の影響力はすごかったし、効果は実証済みだ

けど前知識がある分、ここまで金を掛けて準備する必要はないと思う
竹管に記載された概算はかなりの額に上っている

ケチるわけじゃないが、何かと入用になる時期だ。出費は抑えたい
「駄目よ。今回はこの街を拠点にするのだから拡張性も含めて基盤
はしっかりとしておかないと後で必ず泣きを見るわ」

「そういうもんか」

「ええ」

掛けた眼鏡の端を指で押し上げて答える

「なら、思い切ってさっきの広報代も予算を増やしておくか？ 代
金は……うーん、そうだなキャラクターグッズの売り上げを拡充し
ていけば何とかいけそう、か？」

以前、真桜が作っていた華蝶仮面グッズ製作のノウハウを今こそ活
かそう……どの世界でもマニアはいるだろうからな

トレカやフィギュアの構想を軽く書き出し、後で真桜に説明しやす
いようにしておく

「じゃあ次。新しい警備の配置だけど、新規で場所を取るなら専用
の通路を用意したほうが効率が良いと思う、ここも予算を割けない
かしら」

大舞台への気持ちが高まっているのか人和は珍しく身を乗り出してくる

「うーん、現状問題はないからとりあえず空間だけ先に空けて妥協してもらいたいところだけど……」

次々と問題をこなし、これ以上放っておくと拗ね切ってしまうであろう蓮華のためにいつも以上のやる気を出す

待ってる、蓮華。すぐ終わらせて二人っきりの時間を確保してみせるからな！

……

……

午前中の周りに翻弄されっぱなしの姿はなりを潜めて一刀は真剣な表情で書類作業を進めていく

私には内容がさっぱりだが張三姉妹の求心力は絶大だ。この作業はとても大切な準備なのだろう

時折眉をしかめたり、薄目で物思いに耽る横顔はなんというか、この普段の雰囲気との差もあってとても凛々しく感じる

北郷一刀

私が心を許した不思議な男性

心安い空気を持ちながら、たまにはっとするような精悍さを発揮す

るこの国の君主は誰にも好かれる人気者

……でも、だからといって私を蔑ろにしている道理は無いはずだ

「もう少し待っててね」とか「こっちにおいでよ」とか、社交辞令でもなんでも少しくらい声を掛けてほしい

多少仕事が長引いてもそれなら我慢できるというのに肝心なところで気が利かないんだから……

飽きもせず彼を眺める蓮華と彼女の気持ちを履き違えている一刀

いつになく真剣な応答をしばらく眼鏡が似合う妹系女子と繰り広げていると、もぞもぞと一刀の膝が揺れ動き、ある物体が昼寝を終えて声を上げる

「ふぁー………ねえ兄ちゃん、ボクお腹空いてきたんだけど食べるもの無い？」

「開口一番それが。さっき食ったばかりだろ、我慢しなさい」

ぴしゃりと言い放ち、この場にいたもう一人の妹系少女、季衣を諫める

偶然？昼飯を食いに入った店でいっしょになった彼女は忽然と姿を消した沙和の代わりに護衛役を買って出てくれた

「でもでも、あそこに余ってるのってシューマイだね。食べていいしゅうまいだね」

……多少燃費は悪いのが欠点だが

季衣は張三姉妹へのおみやげ用に買った箱をきらきらとした瞳で見つめる

深く座り込んでいるせいか密着するようなこの状況では無碍に目を逸らす事も出来ない

くっ、なんて純粹な瞳なんだ！ 俺じゃなかったらキュン死してしまつところだ

弱点の一つである小さい子おねだり光線に当てられ、思わず了承してしまいそうになる

子供を設けていた過去を持つ俺にとって季衣や美羽クラスの娘はついつい甘やかしたくなってしまふ鬼門なのだ

「……………一箱だけだぞ」

「わーい！ 兄ちゃん大好きー！！」

「……………びくっ」

だからお願い蓮華さん、そんな熱い視線を右腕（関節部）に注がないで

ぴょんこと飛び跳ね、嬉しそうに頬を緩ませた季衣が後にと取っついておいたシュウマイの山に手を伸ばす

だが、その手はなぜか宙を切り、どこかの手品のように忽然とシュ

ウマイの箱が消え失せた

「あ、あれ？」

目を瞬かせ首を捻る季衣

「……………姉さん」

「むー、これは私のだもーん」

「そうそう、これは一刀が ちいの為に 買ってくれたしゅーまいなの。いくら許緒將軍でもこれはあげられないもん！」

「ええーずるいよー」

呆れたように溜息を漏らす人和の後に続いて現れたのは残りの姉妹、天和と地和だ

何時の間にか事務所内に紛れ込んでいた二人はシュウマイの影に隠れて機を伺っていたらしい

食い物一つで大人気ないと注意する

「天和も地和もいじわるしないで譲ってやってくれよ、数は十分用意してあるだろう？」

「何言ってるの。一刀は女心を何も分かってない！」

「そうそう、ここで重要なのは誰が、誰にあげたかなんだよ？」

「？ 兄ちゃん、どういう事？」

やっぱり食い物一つで大人気ないだけじゃないか

季衣相手に嫉妬したって本人は食い気優先だぞ、と口に出したい

でも渦中の人物を他所に三人のシュウマイ争い、もしくは俺争いが
激化していく

「と・に・か・く。これはちいが一刀からもらった贈り物なの、誰
にも渡さないんだから」

「ちよっと、ちいちゃん。さっきから聞き捨てられない単語がちら
ほらと出てくるんだけど、ただの聞き間違いだよね」

「……………ふふん」

「！ このちゃかり屋さんめー、ぶんぶん。お姉ちゃんそんな子に
育てたつもりは無いぞ」

「何言ってるのよ、いつも振り回してるのはお姉ちゃんじゃない。
……………ってじりじりと一刀に近づかない！」

「えへ」

ほんとだ。いつのまにか至近距離まで接近されていた

自覚すれば女の子特有の甘い香りが漂ってくる

「シュウマイ……………」

「姉さん達いい加減にして、あまり騒がれたら仕事にならないじゃない。今の一刀さんは一國を背負う身、公私は分けて付き合っていないと」

「ならー、れんほうちゃんは何で一刀と密着する必要があるの?」

「そ、それは!?!」

指摘されて始めて気が付いたが、人和と俺の距離もまた目と鼻の先ぐらいまで近寄っていた

「シュウマイ……」

「血は争えないって事だね。ふう……よいつしょ、っと」

「勝手に納得して、勝手に一刀に寄り掛からないでよ!」

「えー」

「えー、じゃないわ姉さん。一刀さんが困ってるでしょう」

「そんな事ないよねー。一刀?」

頼むから今その話題を俺に振らないでくれ!

肩に当たるふくよかな膨らみも今は死神の指先にしか感じられない

ってというか君達、かつての呉王がいる状況で何でそんなに自由なの?

午前中の二人といい今日は異常なくらい女性陣がアピールしてくるな
わらわらと三姉妹がこちらへ詰め寄ってきた

「どいて姉さん！ 今日の功労賞はちいものなんだから！」

「それは駄目ー。お姉ちゃんだって一刀を一日自由にしたいもーん」

「あつ！？ 姉さん達それは……」

いきなり聞き捨てならないワードが聞こえてきましたよ？

「天和、ちよつといいか？」

「なーに一刀？ 私を選んでくれるの？」

「質問に正直に答えてくれたらシユウマイに肉まんも付けよう。…

……華琳の指示で俺らを妨害しようとしてないか？」

「うん、そうだよ」

……

……

「「姉さん！！？」」

推理のすの字も始まる前に謎は解けてしまった

華琳、人選を誤ったな

どうやら朝からの騒動は彼女の仕業だったらしい

確かに最近、城に潜入した件もあって蓮華鼻肩というか優先して今回の休みを合わせたからな

本来なら応援こそすれ邪魔をしないであろう霞まで動員してくるなんて流石は魏王。やきもちのレベルが違うぜ！

この発言に反応したのは俺だけじゃない、事務所の外からも聞きなれた声が飛んでくる

「おのれ、曹操。やってくれるではないか！ もはやここから強行突破じゃ、皆の者。北郷と蓮華様を魏の連中から救い出すのだ」

「「おおー！」「」

血気盛んな声の主は恐らく祭さん、明命そして亞莎だろう

まずい……気を回してくれるのは有難いがこのままでは蓮華とのデートが一変、呉と魏の局地的な全面衝突に発展してしまう

そうなる前になんとか逃げ出してほとぼりが冷めるのを待つしかない

決心すれば後は行動するのみ

すかさず椅子から立ち上がった俺は蓮華の手を取り出口に猛ダッシュ、逃亡を計る

手を取る瞬間、小声で「どうせ私は」とか「いや、駄目よ。そんなはしたないマネ。頑張るのよ蓮華」とか、うわ言のように呟いているのが不安だ

下向きで表情も読み取れないし、早く正気に戻ってくれ！

開け放った先に広がるのは援護してくれるであろう呉軍の顔ぶれではなく見知った別の二人組、桂花と春蘭だ

俺の後ろで鉄球と剣がぶつかり合う音と共に悲鳴が響き渡っているが気にも留めていないらしい

にやりと笑い、猫耳フードが勝ち誇る

「あんななんか誰とくつつこうが知った事じゃないけど、これも華琳様の為、大人しくこちらに投降しなさい」

ちっ、正面突破は無理か？ 迂回しようにも相手に桂花がいる以上、絶対にトラップがあるよな。どうしたら良いんだ！？

(……………一刀様、前方三步程先に落とす穴があります)

(明命?)

「こちらの布陣は完璧。破れるものなら破ってみせなさい！」

(後ろはお任せを。今日は存分に蓮華様とお楽しみくださいです)

「……………了解」

渡りに綱。ネタが分かればどうという事は無い

「むっ、気をつける桂花。北郷の奴何か企んでいるぞ、ここは慎重に相手の出方を伺って……」

「春蘭、これ華琳の使ってた下着（嘘）」

「なんだとおおおおおお!!?」

春蘭、魂の叫び

「あっ、馬鹿!? あんたが引つかかってどうすんのよ!」

スチャッ ブンツ! (下着（嘘）を投げる音)

「うおおおおお!!……!!」

ズシャアアアアア (ヘッドスライディングで受け取る音)

「こ、これが華琳様の生下着つつつ!!」

ヒュンツ (春蘭が視界から消える音)

「取ったどーおーおーおーおーおー……」 (エコー)

「深いな、おいっ!？」

「ふんっ、私の落とし穴は百八里まであるのよ!」

地核まで掘り進むつもりか

「だがこれで障害は無くなった。押し通るぞ桂花」

「押し倒すですって!？ このケダモノっ! もしあんたを一日自由にできるならずつと水に顔を沈めてしまいたいわ!」

歯噛みする桂花だが流石に俺を一人で止めようとは思わなかったのか、そのまま素通りできてしまう

よしっ、いける!

このまま人目の無い、恋姫定番の川のほとりへと……

ズボッ!

(地面がなぜか凹む音)

「……………」

ニヤリ

(桂花がほくそ笑む音)

「まあ、今日は一日地面にでも埋まっておいてもらいましょうか」

……………抜かった

最初から二段構えだったのか

流石は魏軍にその人有りと呼ばれるだけあるな　でも……

「ふふふ、これで華琳様もお喜びになられるわ、ああ!!　そんなご褒美なんてっつ!　この卑しい私めをそんなに……」

ズボツ
（穴から抜け出す音）

「……………はっ?」

「……………こつちの穴、桂花が掘つたる……………浅いんだよ」

「しまったあああああ!!!?」

前回に続き、学ばない軍師殿だ

「じゃ、そういうことで」

シュタツ

「あつ、待ちなさいよ、こら——!!!!」

「一刀!?　これはいつたい?」

ようやく戻ってきた蓮華の手を引きながら答える

「たぶん愛の逃避行ってやつじゃないかな?」

「愛!?!」

瞬間沸騰する姿に苦笑して二人、人目の無い場所を求めて駆け抜け

るのだった

所変わって小川のほとり

なんとかかかんとか追っ手を振り払った俺達は荒い呼吸を整えて座り込んでいた

「はぁ……一刀といると本当に次から次へと問題が起こるのね」

「こればかりはなー」

足元の川のせせらぎを聞きながら胡坐を掻いた俺にすっぽり収まった蓮華が穏やかに拗ねる

寄せられる好意は断れないというか、男冥利に尽きるといいますか、とにかく女性関連での揉め事については全面的に頭を下げるしかない

ごめんと謝る代わりにお腹に回した手を動かして蓮華の掌を優しく包む

「すぐ誤魔化すんだから……もう」

言葉とは裏腹に抓むというよりは揉むような強さで俺の手を弄ぶ蓮華
ようやく得られた二人きりの時間はゆっくりと流れていく

「……一刀、あなたの獲物を見せてもらっていいかしら」

「？ 別に構わないけど、どうして？」

「少しね……」

器用に腰に差していた刀を抜き取って抜刀

陽光に照らされた刀身はさんさんと光を跳ね返し、派手な外装を持つ鞘よりも存在感を放っている

「……………んっ」

「あっ、ごめんなさい！ 眩しかったかしら」

「ちょっとだけね……」

なぜか一瞬だけ妙に輝いたような気がするけど……疲れてるのかな？

慌てて刀を仕舞おうとする蓮華を制して真意を問う

「深い意味は無いの、ただ一刀の思いが乗せられているこの武器はどれほどの重みを持つのか知ってみたかったかもしれないわ」

「俺の思い？」

「ええ、以前よりたくさんの人を思う貴方はきっと良い方向に成長している。けどその思いの数だけ護るという事はその分背負うものをどんどん自分も気づかぬ内に大きくなっていくの。……以前、姉様が死んで私は責任に押しつぶされそうになっていたから一刀が心配だったの」

「そっか……」

「だからね……」

肩越しに蓮華が振り向き微笑みかける

「今度も私と一刀二人で守り合いましょう？ つらい事があったなら私が慰めてあげる、悲しい事があったら貴方が癒して。せっかく同じ立場になれたのだから役割分担は二人とも公平に、ね？」

片手を口元に寄せて頬を染める仕草は愛らしい少女としての姿だ

「そつだな……俺は一人じゃないもんな」

華琳から未来へと邁進すべき理想を

蓮華からは過去に自ら背負った思いを鑑みる信念を

俺はそれらを胸に今を生きよう

ぎゅっと抱き締めて感謝の意を示す

「ありがとう、蓮華……………愛してる」

「……………私もよ、一刀」

もたれかかるように上体を逸らした蓮華が瞳を閉じてキスをせがむ

俺は当然それに答え、唇を重ねたわけだが

背後に迫る金髪ツインテールの影が幽鬼の如くゆっくりと迫ってくるのを肌で感じ、本日二度目の冷や汗を流しまくるのだった

繋がる思いは過去、未来

思いの数だけを増やして押し掛かる

それを糧とするのか重荷とするか彼次第

迫る決戦、日は近く

久しき安寧とくと味わう

いつかこの日々が長く続くようにと...

三十四話 恋姫達の事情 北郷編 Side蓮華(後書き)

ラブコメが恥ずかしくなって笑いに走ったの巻

……キャラ多すぎ

でもフラグを一つ仕込んでみたり、ちょっと重要回

三十五話 暗々裏の動乱 袁紹攻略戦 その一 突発する悪意（前書き）

そろそろサブタイトルの縛りがきつくなってきた。
語彙プリーズ。

無限に関係無いけどこの前出張帰りに秋葉原行ったら萌将伝の看板
がデデンとあってびっくり。
ラッピングバス見たかったな

三十五話 暗々裏の動乱 袁紹攻略戦 その一 突発する悪意

ようやく朝日が半分程顔を出したかという早朝の時間帯

ベットでぐっすりと眠っていると自室に誰かがやって来た

「……………い。……………起き……………」

「ちょっと……………しよ……………」

「……………だよ。……………ちゃん」

しかもどうやら三人、小声で何か言い争っているらしい

「……………どくさい。……………うじは……………」

「……………でー？ ………………さいよー！」

「あ、危な……………！」

……………危ない？

心なしか音量と共に嫌な予感がひしひしと浮き上がってくるのは気のせいだろうか

きつと幻聴に違いないが、がちやがちやと物騒な金属音も聞こえてきた

「ええい、止めるな……………！！ ……巻き込まれ……………必殺……………」

………殺？

「逃げてええええ！！？」

反射的に目を見開いて声の方向へと首を向ける

次の瞬間、飛び込んできたのは朝起こしに来た美少女でもなく、無骨な鉄塊、迫り来る『金剛爆斧』……

「本当に死ぬ！？」

咄嗟に枕元に置いてあった刀を掴み取り、鞘ごと戦斧の一撃を受け止める

なんとか防ぐのには成功したがビリビリと腕に痺れが走ってこれ以上は持ち堪えられそうに無い

冷や汗を垂らしながらなぜか笑顔の犯人を怒鳴りつける

「なんで起き抜けに襲ってくるんだよ！ 華雄！」

「む？ 私は目覚めの手段を講じたただけだぞ、何か気に障るようなマネをしたか？」

「したよ！？ どこをどう考えたら斧の直撃喰らわすって発想が生まれたんだよ！」

いくら直情的な思考の持ち主である彼女でもこれは非道い

「むう、張勲の話ではこれが一番だと聞いたんだが……」

首を傾げられた。お願いだから人の話を鵜呑みにするクセを直してくれ

朝っぱらからの暴走に頭を抱えて思い悩む

「なんだなんだ。人がせつかく小用をこなしてやっているというのにその言い草は失礼ではないか」

襲いかかるのは失礼ではないと？

「小用って……そっぴや珍しいな華雄がこっちに来るのは」

気を取り直して考えてみれば会う事自体かなり久しい

凧や真桜、沙和の三人が俺の近衛隊に昇進した事で町の警備は美羽、七乃、華雄の三人に任せてあったからな

進捗状況なんかはいつも七乃さんが報告に来るから城で顔を合わせるのは滅多になかった

「朝方調練場を借りて斧を振るっていたのだが、偶然その二人に出くわしてな、自室までの道が分からぬというので案内しておったのだ」

「二人？」

「……………あの、おはようございます……………」

「……………ふん」

「ああー、なるほど大喬と小喬ね」

彼女達が呉からの監視役として赴任してからまだ日が浅い

増え続ける人民に対応できるよう歪な開発と拡張工事が乱発しているこの城は良く知る者でなければ迷いやすいのだろう

「でも何で俺のところには？ 直接部屋に案内してくれてもよかつたんじゃない？」

「それは無理だ」

「なんでさ」

「わたしも迷ってここが何処だか分からん。とりあえず嗅ぎ覚えのある匂いを追ってここまで進んできたのだ」

フェロモンのな何かだろうか？

「栗のような匂い立ち込める場所へと」

「がはっ！！」

「北郷様！？」

「……………相変わらず節操の無い奴ね」

華雄の場合、邪気無い分ダメージが大きい

「ぐぐつ……反論できないのが辛い。まあ何はともあれ道案内ご苦労さん。二喬を送るついでに華雄も付いてきなよ」

「無論だ」

「少し早いけど朝食もいっしょに取ろうぜ。流流が来てから食のレベルが上がったしおいしいぞ。二人ともそれでいいかな？」

「れべる？……あつ、はい……朝餉については異論はありませんけど」

けど？

「私達がこんな朝早くなにをしていたのか聞かないの？」

言いよどむ大喬に変わって小喬が続きを代弁、なぜか睨まれる

「えつ、なんか企んでるの？」

「ちつ、違うわよ！ただこんな朝から不振な行動をしてたら疑ってかかるのは当然でしょう。私とお姉ちゃんはあるあなたを認めていない冥淋さまの配下なんだから……」

「んー、でもなー」

「言いたい事があるならはっきり言いなさいよ。あなたの真意を聞き出してあいつにも報告しなくちゃいけないんだから」

「小喬ちゃん、言ってる、言っちゃてるよー!？」

「し、しまった！ い、今の無し！ 無かった事に……」

「俺自身は周瑜の事信頼してるしな。いらぬ詮索はしたくないんだよ」

「「えっ？」」

きよとんと大きくてつぶらな瞳をぱちくりさせる二喬

そんなおかしい事言ったか？

「確かに蟠りはあるけどさ、いつかきつと分かり合えると俺は思ってる。だからなんの証拠も無い内に疑ってかかったりはしないよ。それは君達にも失礼だからね」

ただでさえ風当たりの強い位置にいる二人に要らぬ波風は立てたくない

「だからこの件は俺と大喬と小喬、それに華雄だけの秘密って事で」

呆気にとられる二人を無理矢理押して廊下に出る

「器がでかいな、北郷」

ニヤリと笑う華雄に苦笑

「能天気なだけだつて。ささっ、見目麗しいお嬢さん方、朝食へと参りましょうか」

「ちよつ、押さないでよ馬鹿っ！」

「きゃあ!？」

華琳によればこの二人、最初の外史にしかいなかった存在だから注意しろといわれたけど今はそんなの関係無い。何事も信じるところから始めないと信頼関係なんて結べないからな

……後で華琳が蓮華にばれたら怒られそうだけど

「……………こいつ変わってない」

「うん。そうだね、小喬ちゃん。……………でも私たちはこの人を…

…」

内緒の会話は聞こえないふり

沈みかけている二人の気分を晴らすように気楽に会話しながら前進
前進

女の子はいつだって笑っていてほしいものです

「ふと思ったんだが華雄が人の世話を焼く事自体珍し過ぎるよな、
どついう風の吹き回しだ？」

「失礼な。私はただ、この二人が他人ではない気がして思わず力を
貸したにすぎん」

張飛ちゃんじゃなくて？

少しだけ考え込むと

華雄

大喬

小喬

三人とも真……………あっ

「な、なんだ突然。なぜそんな慈しむような笑みを浮かべるのだ！？」

「……………なんか急にむかついてきた」

「わ、わたしも胸がムカムカしてきたよ」

ごめん。君達の共通点を見つけたらちよっただけ目から汗が流れてきた

……………文句はオフィシャルに言ってくれ

「ではこれで仮設住宅の件についてとそれに伴う人員移動の報告を終わります」

朝の騒動は人知れず収束し、今は軍議の真っ最中

少しだけ高めの位置に作られた玉座に座って各部署の報告を受け付けていく

俺から見て左に華琳、反対側に蓮華が佇み、両脇にずらっと部署の関係者が列を作っているいつもの配置。今日は特に春蘭や恋といった全武将を集めた会議だ。人で埋め尽くされた光景を見ながら先の議題を振り返る

人民の引き入れは順調で心配されていた流人と現地の人との衝突も干吉が平原をライブ会場改造していた経緯も手伝って目立った混乱は出ていない

拡張工事の手際の良さ、並み居るファン達を抑え方といい平原の兵士の働きは伊達ではなかった

まるで図ったように干吉の働きは俺達の力となっては事は進んでいく

「次は、うち率いる工作部隊の成果をお披露目する番やな」

真桜からは依頼しておいた攻城兵器の開発進歩状況などが説明されていく

「最初は連装式破城鎚。そいつの開発終了のお知らせや。懸念され

とった れーる も一定の精度を保ったまま量産でけたし、試作機含め三台がいつでも実戦配備可能な状態やね。ほんでもう一件、天の世界でいう ぱりすた の方は弦の部分が最低限分しか材料を確保できませんでした。歯車や滑車は余つとるから手に入り次第の増産予定やけどあのアホみたいな射程を考えたらそう壊れんと思いません、そのまま予備として確保しておきたいんですが、ここらへんどうでっしやる？」

過度な敬語を禁止している議席で真桜が流暢に語る

「バリスタの配備数については当初の予定数めに準備してくれ。でも仕込み矢の数だけは多めにな。どっとかつていうとそっちが要だし」

目で華琳と蓮華に判断を仰ぐが軽く頷かれただけで二人とも視線を戻した

うん、この件については文句無いみたいだ

この後も軍備関連の報告や新しい指令系統の確認が行われていくがここで『北郷』の軍編成について大まかに説明しよう

まず俺を頭とした本隊『北郷』

十文字を牙門旗にいつもの三人組を副官、稟と風を軍師に星や恋といった蜀軍の武将を加えた混成部隊になっている

次は華琳率いる魏軍残党を再編成した部隊

大将に華琳を据え、彼女曰く旧魏軍のメンバー + 流流の将配置らしい

今のところ規模は一番小さいが袁紹軍領地に潜んでいる兵士達と合流すれば心強い戦力になるだろう

最後に蓮華率いる呉軍

副官にいつも通り思春、軍師には亞莎を。将の数こそ少ないが雪蓮が周瑜の説得に成功すれば数は本隊を大きく上回る

都合、三隊。総数五万の兵士が俺の持つ戦力となった

「では続いて、というより今回の軍議における最重要事項について話し合いたいと思います。どうぞ」

いつもより大分長かった各部署からの報告が終わり、いよいよ本題へと話が進む

長くなった原因はこれから発言する彼女達にこの国の内情を少しでも知ってもらえるよう配慮した結果だ

稟に促され、自己紹介と共に懐かしいであろう人物が前に出た

淡いピンク色の髪をなびかせ、人懐っこい瞳と全体的に丸みを帯びたナイスプロポーションを持った女性

一國を担っているとは思えない、はにかんだような笑顔で彼女は微笑み

「みなさん、お久しぶりですっ！私の名前は劉備玄德、今回蜀を代表し……っつてっきゃー！？」

豪快にすっ転んだ

「ちよつと大丈夫か桃香！ どうやったたら何も無いところで転べるんだ！？」

まったく同意見です。どんがらがしゃーんといかなかった分まだマシだろうけど

そんな彼女に真っ先に駆け寄つたのは付き添いで来られた公孫贊さん
第一印象は普通。後、午前中の三人に刺されないようにしてねとい
うメッセージが浮かんだ。普通に

「うづう、痛いよー」

劉備さんが頭を押さえながらふらふらと立ち上がる

「桃香様、我らは蜀の代表としてこの場に出席しておるのです。痛い気持ちはわかりますが堪えてください」

「うー、分かりました」

涙目で頷く彼女に溜息混じりで注意するのは巨大な肩当てと大人の魅力が印象的な敵顔さん。その後ろに隠れるようにもう一人

「あ、あの。お怪我はありませんか……………ひゃう！？」

鳳統ちゃんが心配そうに顔を出したんだが目が合った瞬間、引っ込んでしまった

「これ、軍師殿も。久方ぶりのお館様との再会が恥ずかしいからといって逃げてはしょうがなかるうて。ほれ、桃香様もしゃつきりなさらんか！」

「ふわっ！」

「あわわわ!?!」

ぐいぐいと二人を前に押し込んで発破を掛ける。その様子を見ているとなにか……

「遠くに残した母親の姿が甦るなあ」

塾とか面談の時に本人そつちのけで話を進めていく感じっばい

「……………お館様、なにか？」

「イイエ、ナンデモアリマセンヨ？」

わざとらしく目を逸らす

両脇から「馬鹿」とか呆れたような溜息が聞こえる

「ええと、こほんっ！ 改めまして、蜀を代表して来ました劉備玄德です。おめどつり頂けましてありがとうございます」

「ああ、こちらこそ来てもらって助かるよ。俺は『北郷』の代表、北郷一乃。この国で……って君たち側はみんな俺の事知ってるんだっけ？」

確認するように目で訴えかけると劉備さんは目を細めて頷く

「もちろんだよ、ご主人様っ　　ずっとずっと会いたかったんだからね」

うおっ、すっげえ可愛い

蓮華や華琳みたいに綺麗な印象じゃなくて、どこか幼い無邪気な笑顔と膨れっ面すら愛らしい美貌

清純派メインヒロインを地で行く感じの子だな

見惚れていると横に控えていた華琳が苛立ち紛れの声を上げた

「劉備。シナを売るのは後にしなさい。貴方達の目的は一刀のご機嫌伺いではないでしょう」

「あっ、はい。じゃあお聞きしますね」

一つ咳払いをしてから真剣な表情になる

投げかけられた疑問は当然、この世界の事

いままでの経緯を含め、誤解を招かないように説明していく

世界の秘密、過去の外史、そして袁招を操っているであろう左慈の存在

急ぎ足ながら一通りの説明を終えると劉備さん達は屈託の無い表情

で納得してくれた

「そうだった事情がありましたか……どつりでこちらにお越し頂けなかったわけですね」

「うん、ようやく喉につつかえてた小骨が取れた気分だよ。ご主人様はやっぱりご主人様だったね」

「……本当は私達の事嫌いになってしまったんじゃないかって不安でしたけど……ふぐつ、良かったです」

「おいおい、泣くなよ。……まったく桃香といい、手のかかる奴ばっかりだな」

ハンカチっばい布で鳳統ちゃんの目元を拭う公孫贊さんの瞳はどことなく優しい

「それでなんだけど劉備さん、左慈の行動を止める為に君たちの力を貸してほしいんだ。協力願えるかな？」

「もちろん！……あつ、でも一つだけお願い」

「んっ？」

「私の事、真名で呼んで。そしたら全然問題無いよ」

甘えるような表情で上目使いになる劉備さん

なんだそんな事でいいのか

一瞬、交換条件的な無理難題でも突きつけられるのかと思ったよ

「それくらいなら喜んで、ええと、桃……」

バタンツ

「桃香さま!!」

「ほへ？」

真名を読んだのは予想外の人物、黒髪に混じった白髪と中性的な顔立ちの女性。確か会議前に騒いで締め出された魏延、だったか？

すっごいこつちを睨んでたから印象に残ってるな。……ん？ 後ろに懐かしい顔が二つ顔を出しているような？ あっ、引つ込んだ尻尾があつたらぶんぶんと振っていたであろう劉備さんが呆気に取られた

「貴様！ 王同士の会見に無粋に顔を出すとは何事だ、控えよ！」

華琳の激しい叱責を受けても彼女は気にした様子もない

むしろ劉備さんしか目に入っていないような……

「ええい、そんな事気にしてる場合か、黙ってる！」

「なっ!?!」

すげえ、華琳相手に啖呵切ってるよ、この子

あとでどうなっても知らんぞ

「大変なんです桃香さま！ さつき城壁で暇を潰してたらアレが迫って一大事な感じになりそうなんです！ こんな八方美人なへたれ男はほつといてさつさと国に戻りましょう！！」

慌ててるのは分かるがさらりと罵倒する必要はあるのだろうか？

「取り乱すでない、焰耶！！」

敵顔さんが躊躇無く拳骨を振り落とす

「ぐはっ！」

「急ぎの用件があるのならば、三行で簡潔に述べんか」

なに？ この世界でもそれあるの？

「暇つぶししてたら西側に旗

色は金、数は不明。徐々にこちらへ

袁招軍が攻めてきました

死ね北郷」

三行目だけでいいし、四行目いらないよね？

突っ込みは心の中にしまっておくが一気に場は騒然となった

「お待ちください、この見晴らしの良い地理で目視できるまで発見できなかったというのは些か不可解……」

「たちの悪い冗談は好まん、嘘だと思っなら見張りの者にでも確認を取ればいい。まあ私の目は特別いいからな、発見できるかは分からんぞ」

稟の疑問にふんつと腕を組んで魏延がそっぽを向く

その物言いに再度、厳顔さんの額に青筋が走るがその前に指示を飛ばす

「 風、急いで哨戒の人と共に西門から出て相手の規模を確認。真桜と沙和の二人は七乃さん達と合流して街に避難勧告を」

「『『了解！』『』」

咄嗟の命令に疑問を挟む素振りも見せず三人が駆けていく

「一刀！？ 一度確認を取ってからでも遅くは……」

「駄目だ、本当なら事は一刻を争う。……魏延が嘘をつくとも思えないし、準備しておいて損はないさ」

蓮華の意見をあえて無視。彼女の意見を全面的に信じる事にした

「先手を取られたわね……」

唇を噛む華琳も俺と同じように頭の中を思考が駆け巡っているらし

い。ぱちぱちと瞬きの回数が多くなっている

「春蘭、秋蘭。こっちへいらっしやい」

「はっ」

「警戒と牽制のために手勢を率いて西門前に隊列を作りなさい。こちらに準備が出来ていると見せかけるのよ」

「「御意！」」

「つつ！ 思春！ こちらも兵を出せ。魏軍に遅れをとるな」

「承知致しました」

不幸中の幸いか、この玉座の間に全員が揃っていたおかげで伝達の必要が無い

しかも両隣にはあの曹操と孫権だ。的確な指示がどんどん下されるそんな中、困惑したように蜀の人たちが立ち尽くしていたので玉座を降りて話しかけた

「ごめん劉備さん、こんな事態になって。ここは戦場になる。急いで平原から離れてくれ」

「え、でも……」

なにか言いたげな様子で言いよどむ

すると居並んだ会議の列から蜀に縁のある人物が歩み出てきた

「心配するお気持ちはわかりますが焦りは禁物ですぞ、主」

「星か……抜け駆けして以来久しぶりじゃの、息災か？」

「ふふつ、毒を吐かれるな桔梗殿。それより今急いでここを離れるのは感心しませんな、少し様子を見たほうがよろしかろう」

「何を言っているんだ。ささつ、桃香さま。私がお守りいたしますから早くここを出しましょう」

「あわわつ、そ、それは駄目です焰耶さん、ここは星さんの仰る通りにしないと囲まれてしまいますよ」

「囲まれるって……」

「相手は 西側から 迫っておるのですぞ。蜀はどの地に本拠地を置いているか、地図でも見れば一目瞭然ですな」

「「あつ……」」

ようやく合点のいった俺と魏延

「勘違いして恥ずかしいなー焰耶は。やっぱり脳みそ足りてないんじゃない？ くふふつ」

「たんぽぽ！？ 貴様あー！！」

ひょっこり顔を出したたんぽぽの突っ込みに切れたのか追い掛け回

しぐるぐると旋回する二人

あー、なんか薄く記憶が戻ってきたような気がする。こんな光景確かに見覚えがあるぞ

「まあ、そういった状況ですから避難は戦いが終わってからですな。なに、心配せずともこれだけの将が揃った我らは一当てくらいでビクともしませんぞ」

自信満々に胸を張る星

なんかもう目が爛々としてヤル気充分だな

しかし、西か……

冀州がある北ならともかく、どうしてこっち側からなんだろうな？

蜀領に面した西側に物見や砦を配置しなかったのを狙ってわざわざ迂回してここまで来たと考えるのが妥当だけど

このタイミング。まるでこっちの動向をあらかじめ知っていたかのような動きのような気も……

……駄目だ、判断材料が少なすぎる。ただの偶然かもしれないな

「仕方ない……劉備さん、戦いが終わるまで窮屈かもしれないけど我慢しててね」

一言だけ告げて踵を返す

「全軍、戦闘配置！ 袁招軍を迎え撃つぞ！！」

右手を振り上げ、十文字の羽織が大きく揺れる

高らかに宣誓した言葉とともに、気持ちを戦いへと切り替えた

この一戦から本当の意味でアイツと対峙する事になるんだ。負けてはいられない

決着に向けての緒戦は守る側から始まるうとしていた

一刀達が戦いの準備を進める数日前、薄暗い部屋の中で一人の男が内側から劈く痛みを声を抑え耐えていた

「ガッツ！！……………ギツ！！……………ッ！！」

何度も掻き毟ったのか繋がったはずの右肩は傷だらけで皮膚が捲れ

て痛々しいまでに赤く腫れている

この男こそが一刀達の宿敵。長坂橋で恋に右腕を切断された左慈の姿だった

「ほん……………じゅっっ！…！」

苛立ち紛れに床を蹴り抜き、とうとう怨嗟の叫びが木霊する

この痛みも

この虚しさも

全てはあの日貴様がいらぬ正義感を出した事で生まれたのだっ！！

必ず償わせる！

必ず殺し尽くしてやる！！

身を焼く激痛さえ己の糧にしようとして左慈の瞳が狂気に染まり、その有様はどこかの少女と同じように屈折しているかのように感じられる

「ぐっ……………」

痛む肩を押さえる左慈が何者かの気配を感じ取る

一瞬、かつては仲間ともいえるあの男の姿が思い出されたが自虐するようにその妄想を切り捨て声をかける

「……………貴様か」

「は、はい。左慈さん……………あの、替えのお水を用意しましたわ」

光の届かない室内に入ってくるのは名門袁家の当主として名高い袁紹だった

普段の高飛車な態度はなりを潜め、怯えというよりは困惑した様子で左慈に近づいていく

「また苦しんでおられていたのですね……………やはり一度医者に診てもらったほうが……………」

「……………俺に構うな」

「しかし……………」

「構うなど言っている!!」

苛立った左慈が何かを投擲する

それは袁紹の頬を掠め赤いスジを残して壁に突き刺さる

鋭い破片。歪な輝きを放つ痛みの原因だ

「……………出過ぎたマネでしたわね」

だが袁紹は嫌な顔一つせず頬を軽くぬぐっただけで目の前の男と向き合う

この女はいつもこうだ

傀儡の一つでありながら妙にこちらを気遣い、機嫌を取ろうとしている

しかも最近はこちらの反応を感じ取って引く事を覚えやがった

付かず離れず、それでも世話を焼き続ける邪魔な女だ

「……………で、なんのようだ。くだらない用件ならばくびり殺すぞ」

「汗を、その、拭きに参りましたの。以前も苦しそうにしていますし、これぐらいは……………」

おどおどと忙しく手が動くくせに目だけはしっかりとこっちを見据えてやがる

「ちっ、好きにしろ」

「は、はい!」

何が嬉しいのか桶に汲まれた布を絞って汗ばんだ体を拭い始める

無闇に干渉してくる行動といい、やたらと俺に向ける赤らんだ表情といい、傀儡の行動はまったく理解できない

人形は人形らしく、ただ役目をこなせば良いだけだろうが

俺の不満を知る由も無く、この傀儡 袁招はせつせと汗をふき取る

「……………ちっ」

二度目の舌打ち

軋む体がなぜかこの時だけ鈍く感じられた

「おおー、すっげえ乙女してんな、姫は」

「ちょっと文ちゃん。覗き見なんて失礼だよ！」

「いいじゃんか少しぐらい。ほら見てみるよ、しおらしい姿も結構いけるぜ」

「もー、ばれたりしても知らないよ」

左慈と袁招が密室で籠っているのを文醜、顔良二人は扉の隙間から観察していた

「結構いい雰囲気なんだよなー。うーん、これで相手がもつと良い奴なら喜んで後押しできるんだけど相手があれじゃ、姫が報われな
いよな」

「年齢、経歴一切不明。安心して推挙できる人間じゃないもんね」

しかも真性の残虐さを秘めている

どうしてこんな非道の男に袁招が惚れたのか二人には分からなかった

「どこかで俺達の知らない、感動的な出会いでもあったとかか？
……左慈はともかくそんな光景、破天荒な姫に似合わない気がしねえ？」

「……それは失礼だよ文ちゃん」

確かにあの性格ならどんな良い雰囲気でも高笑いで足蹴にしていそいだね

とは間違ってもいえない顔良であった

「ちい！ もうちよっとくらい優しくしろって……斗詩。押すなよ、苦しいだろ」

「え？ 私寄りかかってなんか無いよ気のせいじゃ……！！」

「どした……お前は！？」

振り向く二人が見たのは ここにいるはずの無い 人物

その者は覗きをしていた顔良達には目もくれず悠然と部屋の中へ入っていく

あきらかに異形。普段の姿とは似ても似つかない幽鬼のような出で立ちに誰も口を挟めない

絶句する袁紹達をよそに左慈だけが亀裂のような笑みを浮かべた

「……ようやくジョーカーが手の内に入ったか。……上出来だ。絶

望の流砂はこれから始まり、引くも進むも必ず誰かを失う蟻地獄。
そこへ招待してやるぞ、北郷一刀」

狂笑する左慈に謎の人物は反応しない

ただくすんだ瞳で愛しい誰かの名前を呟くだけだった

ついに見えし両軍勢

ぶつかり合つは武力だけか

暗躍する左慈と二喬の秘密

混ざり合つてなにぞが出来る

住民ひしめく平原の都で

いざや始まらん、合戦の時

三十六話 試金石の動乱 袁紹攻略戦 その二 絡まる悪意

「工兵隊、柵の製作を急げ！ 相手は待つてくれんぞ！」

袁招軍が攻め入ろうとしている西門前で秋蘭が矢継ぎ早に指示を飛ばす

平原は民を受け入れる『北郷』の本拠地であるが故に防御面でかなり脆弱な部分がある

袁招軍本隊が控える北方の守りはともかく、西側は住民増加に伴なう拡張工事の真つ最中でろくな城壁一つないのだ

現在、無いよりマシ程度の防護柵を作らせているが民が傷つくの嫌う北郷のことだ、恐らく戦いは平地戦になるだろうと秋蘭は予想していた

「建築中の家屋は出来るだけそのままにして矢避けに利用しろ、必要最低限の柵だけを全面に配置するのだ！」

「「「はっ」「」」

命令を受けた兵士達が駆け足で各班に伝達を告げていく

まだまだ敵の姿は霞む程度の距離も開いているが攻城戦の常套手であればこの後、城攻め用に陣地構成を始めるはずだ

攻めてくるのは早くて明朝。それまでに防衛の準備を整えておかななくては

ふと前方に視線を向ければ作りかけの町並みの先に自分の姉である春蘭と呉の將軍である思春の部隊が肩を並べて展開している

平原に侵入したという晩から妙に意気投合していた二人からは険悪な雰囲気は一切感じられない

……人生何があるかわからんな

小さく感嘆し、指示を出す作業を中断する秋蘭

魏と呉、敵対こそすれ強大な力を誇っていた両雄が協力関係を結ぼうとは誰が予想しただろうか

しかも利害が一致したわけではない、ある意味本当の意味での信頼で我らは戦いに挑もうとしている

なんたる奇跡

いや、原因ははっきりしているがここまでとは思わなかった

北郷一刀

過去にその鱗片を見せてはいたが人を惹き付ける力は華琳様の魅力に勝るとも劣らない

人一つ変わっていないのに状況が変わればここまで大きくなるか

かつて野に倒れ、自分達に保護された頃の一刀を思い出し、微笑むのだった

「では敵軍、袁招軍は一万程度の兵力、牙門旗に掲げられているのは『顔』と『文』の二つで間違いないのですね」

「はい。西側における軍勢に伏兵を擁している様子は見受けられませんでした。恐らくこのまま真っ直ぐ進軍してくるものと思われま

す」

哨戒から帰還した風が俺を始めとした軍師一同に報告をしていく

「一万ですか、うーん些かこちらを攻め落とすとしては規模が小さすぎる気がしますね、舐められてるんでしょうか？」

ペロペロと飴を舐めて小首を傾げる風

今が非常時でなければ「よおし、おじさんがもつと飴ちゃんを買ってあげるぞー」と甘やかしたくなる可愛さだ

「舐められるのはこのへちやむくれの変態男だけで充分よ。おおかた蜀領を経由してる時に兵を消耗したんじゃないの」

ぐりんと首を斜めに動かし見上げる桂花

今が非常時でなければ「そして、死ね」と止めを刺す気満々な殺気が漂ってくる

俺は慣れてるけど横にいる亞莎がぶるぶると震えて反論しただ

一途なのはありがたいけどこの場は抑えてもらわないと

いらぬ口論を起こさないようそつと彼女の手を握って先を制す

「あつ……」

すると亞莎は小さく息を漏らして顔を俯ける

うんうん、誰かさんと違って素直な子は可愛いなあ

「……なにか言った？ 変態」

「いいえ、なんでもありませんよ軍師殿」

心の声を読むな

「あの、桂花様のご指摘なんですが偵察の際、相手方に装備に損傷は無く負傷兵もいないようでした。その点から戦闘は行われていないものかと自分は推測するのですが……」

やや自信なげに追加報告を続ける風

「ふむ、となるとよほど慎重にこちらまで進軍してきたか、それとも誰かが手引きをしたのか……そのどちらかでしょうね。とにかく相手の規模は判明しました。後は対策を講じるのみ、一刀殿、布陣はどう致しましょう」

「ちょっと稟、何を血迷つてのかわからないけどこんな奴に意見を聞いたつてろくな結果にならないわよ。時間の無駄、無駄」

あの、俺って一応君主なんですが

片手をしっしつと振る桂花に一度は落ち着いたはずの亞莎が腕を振り上げて噛み付く

「さ、さささつきから言葉が過ぎると思います！ 一刀様は呉において軍師の才を如何なく発揮されたお方、下策なんて講じるはずがありませんっ！」

なんとという過大評価。むしろプレッシャーがきついよ？

「……………だつたら言うだけ言ってみなさいよ、この一大事に女の手を握り合う素っ頓狂男」

「「あつ」

大きく掲げられた亞莎の手には当然、俺の手が握られているわけで

「……………ほん」

「「「「.....」」」」

視線が痛すぎる

「ええつと！ 布陣についてだろ！.....ええと、あれだ」

無理にでも話を進めて話題の矛先を変えてしまおう

前軍を指揮しに行った華琳と蓮華がこの場にいらなくて本当に良かった

「軍の展開については西側を中心に平地戦を挑みたいな。普通なら街を楯に戦った方が有利なんだろうけど、この街は元々防衛に向いた作りをしていないし、作りかけの家屋を壊されたら士気が下がりがやすいからね。相手の兵力も考えて打って出る方がいいと思うな」

作りかけの物が破壊されるのは誰だって辛いからな

この後の事も考えれば出来るだけ相手は近づけたくない

「布陣は今の配置を活かして正面前曲に春蘭、秋蘭、思春。それに恋とねねを配置。両翼には機動力のある霞と星、たんぽぽなんかに適任じゃないかな。今回はこつちが兵数で勝る戦いだし困い込んで両側から攪乱する感じで良いと思う。ああ、万が一の為に季衣と流は置いていってほしいな」

「万が一って、突破されるのを前提に軍を配備するの？ 馬鹿じゃない？」

「そうじゃないぞ桂花。俺が警戒してるのは敵の別動隊、相手はこ

「うちの監視を潜り抜けてここまで来たんだ、この後別方向から攻められないなんて保証は無いだろ」

「ぐっ……」

「ちなみに北や東、南にもすでに斥候は放つてあるよ。すぐに連絡できるように過去に真桜が開発した色煙を持たせてね」

演習の時に使ったあの色の付いた煙が出る矢を全員に配布してある。これなら早期警戒がし易いだろ」

「以上で、俺の見解は終わり。指摘があるならもったいぶらずに言ってくれよ、亞莎は持ち上げてくれたけど本職のみんなより勝つてるとは思わないからね」

辺りを見渡し、意見を募る

歯噛みする桂花はともかく発言する者はいない。本当にこれでいいのか？ と少し不安に駆られたところで風が手を上げた

「将の配置についてですが風は呂布さんをセキトちゃんに乗せて両翼どちらかに回して攪乱してもらった方が良いと思うのですよ。なぜかは分かりませんがすごく活躍する予感がしますねー」

「あー、それは言ってるな。うん、そこは風の意見を採用したいな」

人中の呂布、馬中の赤兎馬 の再来か

楽しみ半分恐ろしさ半分な感じが漂ってくるぜ

「他には意見あるかな？」

再度、質問するが今度は頷くだけで反論は返ってこない

「よし、それじゃあ細かい支持なんかはみんなに任せるとして会議はここまですべて事でいいな。じゃあ、俺は西門の方にも……」

実際の編成を確かめようと歩き出したところで腕が引っ張られてしまふ

「亞莎？」

掴まれた方向に首を向ければ未だ繋がったままの亞莎にぐいぐいと引き寄せられる

「ああああ、あのっ！ 一刀様はここでしばらく指揮を執ってください。進軍戦ならいざ知らず危険な前線に出る必要はありませんから。きつと大丈夫ですよ」

「いやでも、まだ戦いには余裕が……」

「……………うう、一刀様あ……………」

やだ、なにこの可愛い生き物

両手で腕を引っ張りながら上目使いで涙目してくるとか卑怯すぎるでしょう？

「……………まるで最近構って貰えなくて必死に愛想を振りまく犬さんみたいですね」

「!!……………//」

ビンゴなのか亞莎

風の突っ込みに反応して真っ赤な顔でもじもじした

その様子に稟が溜息をつく

「呂蒙殿の心情はともかく、一刀殿が前面に出なくていいのは本当ですよ。今陣頭指揮を執っている華琳様は色々と漲っていますからね。いても邪魔なだけでしょう……はあ、あの真剣な眼差しがまた見られるなんて……ぷふう!!」

「血の噴水!？」

恐らく始めて見た稟の隠し芸(?)に亞莎、驚愕

まあ俺を含めた魏軍連中はいつも通りなりアクションに取り乱す事は無かった

ていうか直ってなかったのか稟

風が「はい、とんとんしまししょうねー」と介抱しながらこっちを向いた

「ともかくお兄さんはここで待機しててくださいね。華琳様ってば張り切りすぎて少し怖いぐらいなんですよ、命が惜しければ近づかない方が身のためだったりしなかったりー」

「そ、そんなにか……」

「……今回の袁招には散々煮え湯を飲まされたんだもの、お怒りになるのは当然よ。蹂躪とか殲滅とか仰ってたし」

「あつ、そういえば蓮華様も負けていられないってものすごく勇んでました。……ちょっと鬼気迫るくらいに」

次々と明かされる王の気概を知った俺はすかさず皆を見渡し、こう宣言した

「よし、俺もうここから動かない」

日本人は保守的なんです

「効果抜群ですね」

「普段からあの覇気に耐えているお方とは考えられませんね」

「やっぱりへたれの変態じゃない。少しでも見直そうと思ったのが恥ずかしいわ」

「……兵達にはこの姿見せられませんね」

「……でも母性本能がくすぐられます」

机に齧りつくように身を硬くした俺に避難、中傷、好意が飛んでくる

こっちからしてみれば二人とも普段から結構怖いんだぞ

しかも相乗効果かやきもちの具合が二倍、いや二乗な感じで迫って
割と身の危険に晒される毎日を送っているんだ

無用なトラブルは避けるが勝ち……

「あのー、会議ってもう終わりましたかー？」

この前の蓮華とのデートの結末を思い出し身震いしていると出口の
方から凶兆の音ではない、ころころと可愛らしい鈴みたいな声色が
聞こえてきた

「ん？ あなたは……劉備殿ですか？ なぜこちらに」

凧が突然の声に振り返り相手を出迎える

「えと、うちの雛里ちゃんがね、ご主人様はきつと城の中でお留守
番するはずだからって言ったの。だから今のうちに独占して唾つ
けてこうかなーなんて思ったり？」

人差し指をちょこんと唇に当ててウインクする劉備さん

こういう可愛い可愛いとした女の子は逆に新鮮だなー

見惚れていると彼女の後ろからぞろぞろ蜀のみなさんも出てくる

……暇なのか？ ……暇なんだろうな

相変わらず鋭い視線を送ってくる魏延を見ない振りして視線を落と
すと不意に息が止まった

「……………えっ？」

そこには見慣れない服装に包まれた二人の少女

確か玉座の間に魏延が突っ込んできた時にちらりと見えたあの子が目の前に居る

ヒラヒラのタイトスカートやフリルがふんだんにあしらわれたメイド服

小さめの身長と愛らしい童顔

一人はきつめの瞳でこちらを見据え、もう一人は恥ずかしげに目を伏せている

ああ、この子達は……

「……………久しぶりだね。月……………詠……………元気だったかい？」

俺がこの世界で始めて戦場に出た泗水関の戦い、その出陣のきっかけとなった董卓こと月と軍師賈馱である詠が並んでこちらに歩み寄って来た

「はい。あの時ご主人様が頑張ってくれたおかげで無事に逃げ遂せることができました。……………再会できてうれしいです」

「ふんっ、あんた国の代表になんかになって元気いっぱいみたいじゃない。心配して損したわ」

腕を組み、首を逸らす詠とそんな彼女の仕草を可笑しそうに見守る月

戦のうやむやでようやく再会できた俺達はしばし三人で語り合っただった

.....

.....

「って駄目ですーっ！」

うおっ！？ いきなり亞莎が噴火した！？

「最終兵器であるメイド服をデフォルトで装備するなんて卑怯です、卑猥です、卑屈です！ そ、そんなにも一刀様の趣味に合わせるなんてあ、ああ、浅ましいです！」

慣れない罵倒のせいか未来の言葉が入り混じってるぞ

「うえ！？ ボ、ボク達こいつの趣味に合わせてなんか……」

「だったら何でメイド服着て準備万端なんですか！ そんな奇抜な服より私服のほうがよっぽど使者としてふさわしいじゃないですか」

「なっ、なによそれ！ 人がなにを着ようと勝手じゃない！」

興奮する亞莎と詠。二人を急いでなだめる

まさか服装について噛み付くとは思っても寄らなかったぜ

空いた片手で若干怯えた様子の月を頭を撫でながら双方落ち着くま

で口を挟んでいく

「……………へう……………ご主人様……………」

む、たぶん撫でられてほわほわになってるであろう月の表情が見れないのが残念だな

ちらりと視線を動かすとそんな光景を達観、もしくは面白がっていた劉備さんが優しい瞳でこちらを向いている

口ではあんな事言っただのにこっちが本題だったのか

したり顔で微笑む彼女に無言でアイコンタクト

(……………ありがとな、桃香)

渦中の人物だった二人を保護するのは一苦労したはずだ

記憶が戻っていないうちはなんとなく憚れる真名での呼び方でこの時だけは誠意を込めて感謝した

「……………気持ち悪い視線を桃香様向けるな」

グサリと

言葉という名のナイフが突き刺さった

なに？　なんでこの子だけ敵意たっぷりで俺を睨んでるの？

軍議に乱入してきた時から感じてたけどもしかして俺の事嫌いなのか

「そうだ」

そうですか……

「風の噂で遅しくなつたと期待していたのに蓋を開ければ以前と同じ女たらしじゃないか、まったくんだ肩透かしだ」

申し訳ない、そればかりはどうしようもありませんでした。むしろ喜んでました。

「ふんっ、そんな奴に桃香様は渡せんな、とつと身を引け」

いや、でもなー、あのおっぱいで求められたら男として断れないと思うんだ……勿論、時と場合はきちんと考慮するつもりだけど、劉備さんの可愛いさは兵器クラスだろ、常考

「お、おっぱ……！？ この破廉恥男め！ そこに直れええ……！」

激昂した魏延が巨大な金棒を振り上げて迫ってくる

「ちよっ！ それはマジでシャレにならないって……！」

当たれば確実に骨ごと拉げる、その重量感

全然びびって無いけど、恐ろしいから戦略的撤退としよう！

逃げる俺。追う魏延。静観するみんな。

オウフ、やっぱりこの手の痴話喧嘩は誰も助けてくれないのか

くっ、凧や凧の視線が痛すぎるぜ

「……………えっと、今のご主人様と焰耶ちゃん、どうやって会話してたんだろ？ ご主人様喋ってないよね」

「ふーむ。焰耶もなんだかんだでお館様と通じ合ってるという事でしょうな」

敵顔がにやりと頬を緩ませる

その瞳には変わらず人の縁を繋いでみせる主を優しく見守る暖かさが籠っていた

……………

……………

「だったら助けて！？ 割と命がストレスでマツハなんだけど！！」

先の亞莎ばりの突っ込みで助けを請う

まだ終わらないよ！？ 今回のお話も俺の命も！

どたばたと逃げ回っていると今度は出入り口の方から切羽詰まった大声が聞こえてきた

「た、大変だー！！ 北郷、北郷はどこにいるー！！」

「この声は……………白蓮さん、でしょうか？ 随分慌てた様子です

ね……」

鳳統ちゃんが首を傾げている

そっぴゃ此処にいなかったな、どこに行ってたんだろ？

おもむろに急停止して扉に注目した

「うわあああ！！？ いきなり止まるなああっ！！！」

この行動を予測していなかった魏延が勢い余ったまま突っ込んでくる

必死に足を踏ん張って停止を試みているようだが、如何せん速度が付き過ぎて情性がものすごい

キキーっと甲高い音を響かせながら滑り込む

どんだけスピード出してたんだよ。この世界の住人はホント規格外が多いな

そんな娘と追いかけっこに対応できた自分を褒めてあげたい

自画自賛するが、危機は変わらず迫っているようだ

すでに目と鼻の先に魏延の顔がある

「お、お館っ！ 退いてくれえ！！！」

せめてもと、握る金棒を横に逸らしているがこのままじゃ彼女と俺の激突は必至だろう

「なら……よっ、と！」

ぶつかる瞬間、腰に差しであった刀で居合いを放つ

目標は大金棒

迫る威力を殺さず、手前へと軌道を逸らす

結果は成功。対象は鈍く底に響くような轟音とともに、したたかに床に叩きつけられた、その反動で魏延が中空へと浮かび上がるがそこは計算内だ

「ひゃあああ!？」

落ちてくる彼女をお姫様だっここでキャッチ

うん。ようやく落ち着いたな

安堵して駆け込んできた公孫贇さんに顔を向ける

「どうしたの公孫贇さん？ 問題でも発生したのかな」

「あ、ああ………すげ………って、違う！ 城下で民の混乱が収まらないらしいんだ。もっと人員を増やしてくれて近衛隊のやつらが………」

まだ足りないってのか？ 防衛戦とはいえ全住人を一斉に逃がすわけじゃない。落ち着いて行動すれば人手は十分なはずだけどな

「……亞莎。人ってまだ回す余裕あるかい」

「え、っと……あまり手配は出来ないかと。残っているのは新兵ばかりですし、場を任せるにはちょっと」

「そっか……なら」

「……ちょうどいいな」

顔が真っ赤になっている魏延を下ろし、刀を納める

「ご主人様？」

「月や詠は悪いけどここにいてね。ちょっと出かけてくるから」

「！まさかあんた、自分から出向くつもりなの！？」

「うん。俺が出て行ったほうが何かと安心感が出るだろ？ 風、付いてきて」

「え、いや、……はいっ！」

さすがわんこ風。すぐさま駆け寄って来たな

後でいい子、いい子してあげよう

「一刀殿！？ 軍の指示はどうされるのですか！」

「騒ぎが落ち着くまでは真達に任せるよ。なるべく早く戻るから」

「そんな無責任な。……風も何とか言って！」

「……………」

「寝た！？ ……………魏の軍師さんはおおらかなのかな？」

「いや、あれは特別な部類に入ると思っぞ、桃香」

感心する劉備さんに公孫賛さんが答える

まあ、うちの伝統芸能とっていただければ幸いです

逃げるようにこの場を後にする俺と風

道すがら風が喋りかけてきた

「隊長、なにか気になる件でもあるのですか？」

「ん。少しだけね」

胸には小さな違和感。なぜか今朝方の出来事が思い返された

「ええい、落ち着け！ 落ち着かんか、馬鹿者どもがっ！！」

ここ平原通用門では突然の敵襲来に対し、逃げ惑う住人が所狭しと殺到

まさか攻められると思っても見なかった彼らの動揺は大きく、七乃や華雄率いる警備隊と真桜と沙和の近衛隊が合流しても混乱を抑える事が出来ないでいた

「なんじゃこやつらは！ 急に目の色変えおって、そんなに主様が信用できぬのか！」

憤慨する美羽。そこへ彼女の従者である女性が憶測を挟む

「うーん。たぶん信用とかの問題じゃないと思いますよ、お嬢様。この街に集まったのは戦が嫌で逃れて来た人ばかり、人一倍危機に對して敏感なんですよ」

実際、七乃の言うとおりだった

一刀を『天の御遣い』として崇めていた民衆にとってこれはあまりに予想外、戦乱の世においてようやく安堵の地を得たと安心していったのにこの始末だ

過剰なまでに動転し、我先にと逃げ惑う

「おいつ！ さっさと手伝わんか、そこの二人っ！！」

「なんじゃこやつは藪から棒に、わらわを誰だと心得ておる。恐れ多くも……」

「いい加減、名前くらい覚えろ！！ 張勳！ どんな教育をしているのだ！！」

「むむ、ちゃんとお教えしてますよ。甘く、優しく、ゆとりを持って、そりゃあもう箱入り娘のように大切にしています。………で、たまに見せる世間知らずなところが堪らなく可愛いんですよねー」

うっとり顔を緩ます七乃

突っ込みを入れない華雄であったが、どうせいつもみたいに言い返されるのがオチなので今回は矛先を変えてみた

「ならば袁術、張勳！ そのな近衛隊の働きを見てみるがいい！ あの働きを見て何も感じないのか！！」

こんな状況では人手はいくらあっても足りない。比較し、見直させる為にも視線を無理矢理向けさせたのだが、そこに映った光景は華雄の予想を大きく裏切るものだった

「おうおうおうー、ビチ糞の中から生まれる価値も無い給料泥棒どもー！ きちんと働いているのかー！」

「『『 イエス、ママ！！！！』」

「こつこつ非常時にこそ日頃の汚名を挽回すべく活躍してみせるのー！ そうすれば糞以下のお前達は便所虫の触覚程度にはましになれると思えー！！」

「『『 イエス、ママ！！！！』』」

「声が小さい！ お前達は返事がましなだけの蛆虫野郎かー！！
もたもたするなら、貴様らの包 ち こを雀り取ってケツに突っ込
むぞー！！」

「『『 イエス、ノー、ママ！！！！』』」

「だったらさっさと行動を開始するの、このまざーふあつかーども
！！ 総員、駆け足！」

「『『 イエス、ママ！！！！』』」

直角の姿勢で人員整理に精を出す近衛隊隊員。その瞳にはどこか恐
怖を感じながらも恍惚の色が混じっている

この独特すぎる応答を恐怖した子供の何人かは言葉の意味も分から
ず立ち止まり泣き始めてしまう

「……………」

「……………」

「……………ひぐっ」

美羽が泣いた

「ああもう面倒だ！！ こうなったらワタシ一人、力づくでも任務
を遂行するぞー！！」

なぜか戦斧を振り回す華雄に真桜が慌てて飛びつく

「力ずくて！ ちよつ、華雄はん。こないなとこで乱心せんといて！？ 近衛隊、押さえつけるん手伝ってや！！」

「「「了解！！！！」」」

そんなこんなで事態の收拾がまったたく落ち着かない頃

民衆の中ではまことしやかに、あるざわめきが渦巻いていた

「くそつ、ここには天の身遣いがいるから大丈夫だつて言った奴誰だよ！ 結局戦に巻き込まれてるじゃねーか！！」

「天は我らを見捨てになつたのか……」

「結局、北郷も他の領主と同じ無能なんじゃねーのか？」

他にも、「裏切られた」とか「君主様は本当に天から来たお方なのか」など、戦いが始まってもない状態にも関わらず、様々な流言蜚語が飛び交っている

「……………これはちよつと、違和感がありますねー」

「……………ふぎゆ、ひひゆかん？」

涙ぐむ美羽を慰めながら七乃は疑問に思った

この状況、いかに新興国で新しい民への信頼を勝ち取っていない『北郷』であつても混乱の度合いが大きすぎる

良く見ればただ一心不乱に逃げる者より、立ち止まり口論やヤジを飛ばしている人間も数多く、そのほとんどの内容が国ではなく一刀へと向いていた

必要以上に高められた期待と羨望が反転し、人心掌握の弊害ともいうべき事態が起こっている

「なんででしょうねー、どうにも作為的な匂いがぷんぷんします。誰かさんが良からぬ事を企み………ん？」

七乃の目に飛び込んできたのは小さな少女、一般人とは明らかに異なる上等な衣に身を包み込んでいる

「あれは二喬、さんですか？ なぜこんな場所に……」

すぐに人ごみへと紛れてしまつたが今横切つたのは間違いなく小喬、大喬の二人だつた

勅使でもある彼女らはまず身の安全を確保しなければならぬはず、それがなぜこんな城下に顔を出しているのか

首を傾げる七乃であつたが胸元に収まつた美羽がまたも愚図りだしたので意識を一旦打ち切り、彼女をあやし始めた

嘆くは己か、己の行いか

悪意は一つと限らず這い寄って

北郷一刀を絡め取る

外と内から蝕まれ

乗り越えられるかこの局面

舞台は急速に進み始める

三十六話 試金石の動乱 袁紹攻略戦 その二 絡まる悪意（後書き）

進みが遅い？ はい、自覚しております。

いやだってヒロイン全員書き切りたいからどうしても進行速度が……

…………… イイワケじゃないヨ？

三十七話 絵空事の動乱 袁紹攻略戦 その三 濁る悪意（前書き）

今回は中途半端なところで終わっていますので、ちょっと消化不良になるかも。

「春蘭、秋蘭、甘寧の部隊はそのまま前へ！ 霞と呂布は手勢を率いて左翼に回りなさい！」

「柵の準備はそこで止める！ 趙雲、馬岱の騎馬部隊は右翼を担当、先行して敵の陣形を広げさせるな！」

砂塵を上げ、目の前に広がるのは金の旗と兵士の群れ。

最速でも明日の朝になるであろうと予測していた袁紹軍の進軍は接敵からわずか数刻、休む間も無く平原の街へと襲い掛かってきた。

防衛戦において砦や柵を利用して戦うのは定石ではあったが、今の段階で攻められては避難途中に住人に被害が及ぶ。

そこで華琳達は無用な殺傷を嫌う一刀の意思を尊重するようにあって部隊を推し進め、街に近づけないよう平地戦に臨んだ。

慌しく戦鬪の準備を進める北郷軍の中で華琳や蓮華が的確な指示を飛ばすが、まさかの電撃作戦めいた侵攻に被害は甚大なものにな

ると誰もが予想した。

しかし、

「……おかしいな」

「？　どうかしたかしら、孫権」

「敵の歩みが愚直すぎる。休息もとらず突撃してくるのも不可解だが、要所攻めのもつと広範囲に軍を展開すべき様子がいまだ見て取れない。これは何を意味するのかわかっているのかと思っただけだ」

人前に立つ存在として威厳ある物言いになっている蓮華が顔をしかめた。

確かに袁紹軍は隊列一つ変えずに歩を進めているが今から戦闘を行う者としては勢いが足りていない。ひどく行軍が遅い。

「そう言われれば違和感があるわね。旗からして軍を率いているのは文醜と顔良でしょうからある程度の戦術の基本は理解しているはず、それでも真つ直ぐ攻め立ててくるという事は……」

「何かしらの策が用意してあるのか……」

「それとも、こちらを正面から突破出来るなにかがあるのか、そのどちらかでしょうね」

そして無策はありえない。と華琳は付け加えた。

左慈が袁紹軍に参入してからの動きは目を見張るものばかりだっ

た。

歴史の一端を知っているとはいえ、左慈は策の先読みや、埋伏兵の使い方。的確な部隊配置と軍師さながらの活躍を魏軍に見せ付けていたからだ。

苦渋を飲まされた過去が甦り、額にしわが寄る。

「孫権。ここで深慮してもらちがあかないわ。とにかく今は一度、一当ての様子を見てから判断しましょう」

「……そう、だな。手招いてこれ以上後手に回るのだけは避けるべきか」

ある種、不気味な攻勢を仕掛ける袁紹軍。

その真意に二人が気が付くのはもう少しだけ後の出来事だった。

混乱の増埒にあるという平原の城下を目指し、駆けて行く一刃と
凧。

内正門を抜け、現場を目撃した二人は大きなうねりとなった感情
の波に晒された。

そこには罵詈雑言が飛び交い、大拳をなして押し寄せる民衆達と
武器を持ち、城内への進入を阻もうとしている兵士が鎬を削ってい
る。

「そこを退いて君主に会わせる！ 俺達の生活を脅かしやがった
野郎はどこにいるんだ！！」

「俺達はここが一番安全だからって移住して来たんだぞ、家が焼
かなくてもしたらどう落とし前を着けてくれるんだ。ええ？！」

「……口からでまかせの、天の御遣い」

そうだ、そうだ。と先頭で文句を訴える三人に同調し、声を荒げ
る街の人々。

「これは、いったい……」

「……逃げ惑って争いが起こるだろうってのは頭にあっただけど、
此処まで抗議に来るなんてのは予想外だな」

啞然とその様子を眺める凧の瞳には若干の悲しみが見え隠れして
いる。

(この間まで街の警備担当だったし、あの信頼がこつも容易く叱責に変わるだなんてシヨックに決まってるよな)

自分と同じ気持ちであろう彼女がとても寂しく映る。

とりあえず、見てるだけじゃ話にならない。前に出て直接彼らから事情を聞こう。

そう決意し、歩き出してすぐに気になったのは町民とは少し違った印象の三人。

(あの人達……どこかで?)

ものすごく見覚えがあるはずなのに名前が思い出せない。むしろ名前があったのかどうかさえ思い出せないのにひどく気になる。

あの全身黄色づくめの三人組。チビと大きいのとアニキっぽいのに面識あつたけかな?

考えながら歩を進めていくところで腕が真横に引っ張られた。

「おわっ!」

「!!! 何奴だっ!」

咄嗟に身構え、戦闘態勢を取る風。けどそこいたのは。

「凧ちゃん、シーツなの。隊長もこつそり沙和に付いて来てほしいの」

もう一人の近衛隊、沙和の姿だった。

彼女に腕を取られ、招き入れられたのは近くの茂み。

急いでしゃがむよう指示された。

「もうっ、確かに応援は頼んだけど、隊長がこんなところに出てくるなんてありえないの！　なんで来ちゃったかなー」

ぶんぶんと頬を膨らませて抗議の視線を浴びせてくる。

どうやら公孫贄さんを使って応援要請したのは沙和みたいだな。相変わらず物怖じしない子だ。

彼女は悲しい半分、怒り半分の心持ちで言葉を続ける。

「みんな、最初の内は沙和達の指示をきちんと守ってくれてたんだよ。でも誰かが隊長を非難し始めてから急に収拾がつかなくなつて、「責任取れ」とか「城に匿え」とか言いながらここまで押しかけて来たの。だから、今更隊長が出てきても役立たず、もとい火に油を注ぐようなものなの」

言い切ってから城門前に視線を投げかける沙和。

人の波は見るからに勢いを増し、警備の人間だけでは押さえつけられないところまで膨れ上がっている。

確かにこのままじゃ、勢いに押されて城内に人が殺到してしまう。

そんな事になったらそう簡単に混乱は治まらないだろう。

(……こんな事になってしまふのは俺の責任だろうな)

この世界、というか時代で領主に噛み付いたりするのは珍しい。みんな悪い意味で権力での圧政に慣れてしまってるから、民だけでの反乱なんて滅多な事じゃ起こらない。

けど、俺『北郷一刀』はかなり特別な部類に入る人間だ。幾ら魏や呉の後ろ盾があるとはいえ、その張本人は出自不明で天の御遣いなんて祭り上げられた肩書きしかない一般人。偶然立てた武勲ぐらいしか証明できるものがない相手にこの人達は信頼を寄せてくれなかったんだろう。

せめて先行して戦果を挙げていれば違った反応を示してくれたはず。

自責の念に囚われ、思い悩んでいると横に居た二人が行動を開始しようとしていた。

「まさかここまで事態が発展しているとは思わなかったな。沙和、応援を呼んでくるからこの場は頼んだぞ」

「了解ー。このままだと暴動になりそうだから、なるべく強そうな人をお願いするの」

「ん。分かった」

二の口で踵を返す風。

「……つて、ちょっと待ってくれよ！」

主そつちのけで話を推し進める彼女達を両手で制す。

「二人とも、街の人たちを武力で抑えつけるつもりなのか？」

睨みを効かす、まではいかないが目を細めて問いかけると風はしよすがないといった面持ちで反論する。

「そんなつもりはありません！……ですが万が一に備え、抑止力としての兵増員は当然でしょう」

「そうなの。街の人達といがみ合うなんて沙和だって嫌に決まってるよ。でも状況が状況なら心を鬼にする必要があると思うの」

二人の真剣な眼差しは間違いなく本心だろう。

守るべき人達が転じて牙を剥く悲しい現実の中で彼女達なりに出した答え。

軍人として、民の上に立つ存在としての責務を果たそうとしている。

「……でもさ。それじゃあ、その場凌ぎにしかないよね」

「それは……しかし、袁紹軍が目下に迫った状況で話し合いの席を設けるには時間がありませんよ」

「ああ、だから興奮している相手にとりあえず落ち着くまで力で抑止するのは当然の行為だと思う。けどよく考えてみてくれ。」

あの人は国という大きな媒介ではなく名指しで俺を非難してるんだ。明確な指標がある以上、怒りの対象はずっと俺に向いたままでと思う。このまま力づくで解散させたら、その仕打ちにある事無い事添付されて他の人に不満が伝染しかねない。軍の指揮は蓮華達に任せておけば安心だから、ここはしっかりと対応しておくべきじゃないかな」

これが不甲斐ない俺なりの責任の取り方だ。

そして、この騒動をきちんと収めなければ、この場に来る前に感じた違和感に対して俺を証明できない。

真剣に彼女達の瞳に向き合い、意思を伝えた。

「……了解です。隊長の支持に従います」

「凧ちゃん！？ わざわざ隊長を危険な目にあわすつもりなの！？」

「そこは自分が全力で守るだけだ。隊長の大儀、しっかりと支えさせてもらいます！」

「ありがとうな、凧」

いつも最後は俺に従ってくれる彼女に礼を述べる。

そして今度こそ、民衆の人達の下へ歩こうとしたところで沙和が騒ぎ出した。

「むむむむむ！ 凧ちゃんのそれはいい格好しいなの！ 抜け駆

けなの！」

……また、この子は……。

「なっ！？　そ、それは違うぞ沙和！　自分はただ主の方針に従ったまでだ！」

「ムキになるのが余計怪しいの！　隊長！　沙和もお供するからね！」

「……………よろしく頼むよ」

心配してくれるのはありがたいけどもう少し齒に衣を着せる言い方を覚えような。

捲くし立てる沙和を宥めながら民衆の押し寄せる城門前まで移動した。

「衛兵のみんな、一旦、矛を収めてくれ。話し合いをしたいんだ」

「北郷様！？　な、なぜこちらに」

振り向き動揺する衛兵達。

まあ、さっきの沙和みたいに君主がここまで出てくるなんて異例すぎて誰も予想してないよな。

俺の両脇に控える近衛二人が兵を促して道を作ってくれる。

正面には民衆を代表するように最前列で声を上げていた三人組が

空けた視界の先に俺がいるのを見て目を見開いている。

「あの十文字の羽織は！？ まさか君主の野郎が本当に出てきやがったのか！」

「ど、どどどつするんすかアニキ！ この展開は聞いてませんぜ」

「？ どうかしたかい？」

「う、うるせえ！ 黙ってる！！」

吐き捨てるように真ん中に立った男性が声を荒げる。

おかしいな……。彼らが今一番会いたいであろう人物が正面に来たっていうのに急に勢いを弱めてしまった。

(まずいぜ、アニキ！ あの二人の話じゃ騒ぐだけ騒いでれば押し返されて終わりだろうってのに、これじゃあ話が違う！)

(なんて言うか、聞いてない)

(ちっ、うるたえんな馬鹿ども。ここでうまくいなさなきゃ、その小娘達から報酬は出ねえんだぞ、腹あ括って気張りやがれ)

ぼそぼそと相談を始めた三人組。

やがて意を決したようにこちらに向かい怒声を散らした。

「やいやい、君主さんよお！ 俺らはここが安全だからって言われて集まったのに敵に攻められるなんざ、どういっ了見だ、ええ？」

「天の身遣い様は全てを守ってくれるんじゃないのかよ」

「どうせ口だけなんだろう？ さっさと無能を認めて俺らを中で匿えよ。そうすりゃ、ちよつとは見直してやるぜ。へへっ」

口々に非難な中傷、暴言が飛び出てくる。

予想外の侵攻に動揺しているというより溜まった鬱憤を晴らそうとしているみたいだ。

息を荒げる彼らに向かって正面から向き合う。

「君らの言い分はもつともだ。俺は天の御遣いとしてこの平原の街が安全だと触れ回って人を集め、国を興した。それなのに敵に攻め入られ、皆の不安を煽ってしまった事に関しては本当に申し訳ないと思っている」

「お、おう！ そうだ。てめえの不手際で命の危険に晒されそうになってんだ。どう責任取ってくれる？」

こちらが下手に出たのに気分を良くしたのか、アニキと呼ばれた男がにやにやと笑みを浮かべている

「貴様っ！ さっきから頭が高いぞ、この方を誰だと思っているんだ！」

「ひいつ！？」

「呷っ！ ……彼らは俺と話し合ってるんだ。怒鳴らないでくれ」

今にも襲い掛からんとしていた風を横目で制し、話を続ける。

「被害が出たところに関しては最大限の補償をさせてもらうつもりだ。それはこの国の代表である俺の責任であり当然の責務だから。ただ、皆を率いる君主としての、もう一つの責任の取り方については君達の力を貸してほしい」

「もう一つ、だと？」

「ああ、それはこの戦の被害を出来るだけ少なくする事。家屋を守り、人を救うには住人一人一人の協力が必要なんだ。……俺は天の身遣いなんて言われてるけどさ、結局は一人の人間で、一人じゃ家も建てなければ、市を興す事も出来ない。一度にたくさんの人を守れる力もない、ただ他の人より人望を多く寄せて貰ってるだけの凡人だから。色んな人に助けてもらって初めて王としての責任を取れると思ってる」

真剣に真つ直ぐに嘘偽りの無い言葉と態度を示す。

「今、不安になって安全を求める気持ちは分かる。けど敵はここへ到達するには時間的猶予があるんだ。ここは落ち着いて近隣の村に避難してくれ、頼む」

「あつ!?!?」

「隊長!?!?」

「嘘だろ……一国の城主が俺ら相手に頭を下げるなんて……」

背筋を伸ばして背中の中の羽織が見えるぐらいまで頭を垂れた。

「月並みな言葉かも知れない。けど、俺を信じてくれ。俺は皆の意思に必ず報いてみせる！」

「北郷様……」

一刀の行動は騒然としていた場を驚くほどの静寂へと包みこんだ。

誰一人として安易に口を開く者はおらず、詰め寄った住人からは急速に熱が冷めていく。

我々はいつたい何の為にここまで来たのか。

ここで駄々をこねても、戦争の邪魔になるのは初めから分かっていたじゃないか。

なぜここまで強気になって責め立てていたのだろう。

その違和感はやがて呆然と立ち尽くす三人組へと注がれた。

「な、なんだよ、俺達が悪いつてのかよ。みんな同じように文句垂れてたじゃねーか」

「……でもよ、始めに文句言い出したのってお前らだよな」

「うぐっ！　そ、それは……」

「何かにつけて北郷様が悪いだの、能力不足だの言いふらしてた気がするな」

波紋は除々に彼らに向かって広がっていく。

ついさっきまでの怒りが全て転化されているようだ。

「あいつらが扇動していたようですね。国を脅して何を要求するつもりだったのでしょうか」

この場にいる全員の非難が集中し、爆発しようとしたところだ。まらず一歩前に出た。

「みんな、彼らを責めるのはお門違いだろ？ この事態は間違はなく俺が生み出したもので叱責を受けるべきは彼らじゃない」

「しかし……」

「これ以上言い争っていたら本当に避難の時間が無くなるぞ。それでも不満があるなら約束を一つしてもらおう」

「約束だって……？」

ひくつくように男が顔を歪ませる。

「この戦いが終わったら直接俺に不満をぶつけてくれ。そうしてもらえれば俺はもっと自分を戒められる。もうこんな事態を起こさないよう心に刻むよ」

目を見て告げる。

いくら集団心理に後押しされたとはいえここまで発展したのは街

の住人にこの国の事を理解してもらえなかったのが最大の理由だろう。

ここで怒りの矛先を変えて場を濁しても、その原因を取り払わなければ、しこりとなって必ず禍根を残す。

それを少しでも和らげ、自分の糧とするにはこれが一番だ。

「だからみんな、とりあえずは解散してくれ。今からここは袁紹軍との戦場になる。何度も言うようだが、一刻も早く近隣の村まで避難しなければ何かあった時に対応しづらくなる」

その声を聞いて一人、また一人を後ろを向いて城を後にしていく。

少しだけの時間が経過し、この場に残ったのは俺と風、沙和や衛兵の人達、それに三人組が放心したようにポツンと立っていた。

それを見ながら風が耳打ちするように呟く。

「隊長、今回こそうまくいったものあのような行動は差し控えてください。王たる者が軽々しく頭を下げては国の威光に関わりませう」

「……わかってるさ、でも、あの場面じゃ、頭を下げるのが一番だと思ってるね」

風だけでなく隣にいた沙和までも、は？ みたいな顔になっている。

「あそこまで興奮した状態の人には並大抵の言葉じゃ静まらないからね。一度聞く耳を持ってもらってから、衝撃的な行動を取って

畳み掛けるのが有効なんだよ。……あれは本心からの行動だったけど、ちよつと悪どかつたかな？」

苦笑いを浮かべ、二人に説明した。

「……………で、だ。俺の行動は眼鏡に適ったかな、二人とも」

「……………」

「……………」

城門の影から現れたのは背の低い女の子二人。

恐らく今回の黒幕であろう小喬と大喬が俯きながらこちらに歩いてくる。

「あ、ああ！ そいつらだ！ あの二人に唆されて俺達は住人の奴らを……………」

「黙りなさい下郎。あんたらの役目は終わったのよ」

「なっ！？」

「北郷一刀様。どうして私たちが手引きしていると思われたのですか？」

三人を無視するように二喬がこちらを見据える。

「虫の知らせがまず一つ。それと、全てを守るといふ俺が誓いを知ってるのはこの国でも限られた人物だけのはず、それをさっ

き小さい人が漏らしてたからね。犯人、は言い方が悪いけど捲くし立てたのは内部の人間だと思った。で、最大の理由は朝見た君達の顔を曇ってたから。何か心配事があるのは確実だろうなと」

「……顔だけで相手を判断されたのですか？」

まるでお通夜の時みたいに表情を曇らせる大喬に心が締め付けられる。

「俺はさ、女の子に悲しそうな顔されるのが一番嫌いなんだ。だからそういう心の機微に敏感に反応してしまう。……けど今回はかりは当たってほしくなかったけどな」

「そうでしたか」

無理に感情を押し込めたように塞ぎ込む大喬。

代わりにというべきか今度は小喬が口を開く。

「あんたの言うとおり、私たちはこいつらを使って騒動を起こした。それはあんたを見極める、器の大きさを測る為よ」

「という事は周瑜の指示じゃあないよな」

「ええ、冥淋様は関係無いわ。私たちの本当の依頼主は……」

「！？ 隊長、危ないっ！！」

「っ！？」

突然の掛け声。

訳も分からず風押し込まれ、態勢を崩す。

その先に見えたのはこの場にもっともそぐわない存在。袁紹軍の

西門、住居拡張予定地前の平地で二つの軍隊が交戦していた。

一方は銀の旗に十文字を描いた北郷軍。

もう片方は金色の旗をなびかせる袁紹軍。

その戦いの火蓋を實際に開けてみれば、苛烈なはずの攻防は一方的な展開へと運ばれ、戦場が戸惑いに包まれていた。

「星お姉様。これって急にたんぽぽが強くなったわけじゃないよね」

「ああ、ここまで疲弊した兵ならば常時の半分も力を出せてないだろうからな。手応えはなかるうて」

右翼を担当したたんぽぽと星は部隊兵に掃討を任せ、戦場を眺めていた。

(やれやれ、少しでも時間を稼ぐ為に敵本陣に斬り込んだのはいいが、随分と呆気なかったな)

こちらの被害はほぼ無し、不意を突かれたというのにこれは如何なものだろう。

袁紹軍は目に見えて疲れきり、目が空ろな者までが武器を取って戦いに挑んでくる始末。

そう、戦いは北郷軍の一方的な勝利で終わろうとしていた。

「あーあ。兵士が疲弊しすぎやな。……なんで行軍して疲れとるはずなのに休憩なりを取らんかったやろな」

「む、張遼殿か。貴殿は確か恋と共に左翼を任されていたのでは？」

「あー、そっちはもうええねん。恋とセキトが全部平らげてしも

うたから」

つまらなさそうに口を尖らせた霞が馬の上から溜息をついた。

「せっかくの実戦やつちゅうのに、相手は疲労懇媒。目立った將軍もいてへん。はー、とんだ肩透かしやわ」

霞の後ろでは金の鎧を身に着けた袁紹軍の兵士が天高く打ち上げられていく。

正体は勿論、恋とセキト。まさに暴風といった勢いで敵を蹂躪し、蹴散らす。

「はっはっは。こりゃあ人中の呂布って言葉の後に、馬中のセキトゆう言葉も加えんとあかんぐらい凄まじいなー」

空元気で笑う霞。

その様子に星も苦笑いし、視線を元に戻す。

「そういえば敵軍には「顔」と「文」の文字がありませんか？ 彼女等ならば少しは齒応えがあると思いますが」

「おろ？ そういや、旗だけで将の姿が見えへんな。どこいったんや？」

二人してぐるりと首を回すが敵軍は総崩れでろくな陣形も組んではいない。

将の一人でもいればもつと整然としていそうなものだが……

「あつ、あそこ！ 街に突撃していく奴らがいるよ！」

「なんだと？」

見れば戦線中央、もっとも防備の厚い守りに向かって突貫する一軍がある。

その部隊はまるでこちらが気を抜いた瞬間を狙ったかのように素早く布陣を駆け抜け、街へと赴く。

「あーら。命知らずな連中やな」。うまく通り抜けても西門前にはうちの大將に惇ちゃんやら甘寧の部隊があるから突破は無理やで」

「うんうん。たんぽぽだったら正面からぶつかるとはなんて考えられないな」。あれじゃあ、まるで目先の事しか考えられない猪じゃん」

今更、一部隊が何をしようと戦局は変わらない。

もはや袁紹軍に戦いの意思を見せるものはおらず、全員が憔悴し切っている。

回復したい状況を聞き出させばと思い始めた星だったが

「……………いや、何か動きがおかしいですな」

「なんやて？」

目を細め、促されるように本陣の様子を見定めた霞。

その先には勢いを緩めず突撃する部隊と華琳、蓮華を始め歴戦の経験のある春蘭達の本陣がぶつかり合い、交戦を繰り広げている場面が繰り広げられている。

しかし、

「突破された！？ あいつ何者や！」

映し出されたのは弾き飛ばされるように宙を舞う春蘭の姿。

その下には白装束を纏った人間が槍のような、偃月刀 にも見える得物を振り回している。

その隙を縫うかのように今度は次々と敵兵が本陣を駆け抜け、門前に殺到していく。

「あかん！ なんやわけは分からんけど、このままやったら街に侵入されるぞ！」

「くつ、たんぼぼよ。ここは任せるぞ」

悪寒は背筋を這い回り、馬を平原の街に向ける霞と星。

この距離ならばまだ間に合つと手綱を握り締めたところで、今度は切羽詰まったたんぼぼの悲鳴が木霊した。

「うええ！？ いきなり目の前にあの二人が出てきたー！」

まるでマジックのように文醜と顔良が忽然と現れ、こちらに武器

を構えている。

「ちっ、ここは離れられんという事か」

本陣を挟んで反対側を見渡せば、砂塵の竜巻を上げながら城門に迫る影が一つ。

(こつこつという時は持ち前の野生が光るな、恋よ)

主の一大事をまたも過敏に嗅ぎ取った恋がセキトを走らせ追い続ける。

「文醜、顔良！ お前らがいながらなんでこないな無茶を押し通したんや。答えてみい！」

「……………」

「……………」

答えは返らず、ただ無言。その状態で各々の得物を大きく担いだ。

「答える気無しってか、随分舐められたもんやな」

「……………すけ。……………すけてくれ」

「？ 張遼殿。二人の様子がおかしい。何か喋りかけてきなんだか」

「……………助けてくれ。……………助け、てくれ」

「助け？ いったい何を……」

「めを、……姫を助けてくれ……！ あ、あ、あああああ
「……」

千切れるような絶叫で打ち下ろされる大剣。

その姿は普段の彼女とは程遠い、悲痛に満ちた苦悶だった。

三十八話 白日夢の動乱 袁紹攻略戦 その四 焦がれる悪意（前書き）

今話からのテーマは、

大どんでん返し。

この展開とこれからの話を予想出来た方には抽選で筆者特製

『嫌々猫耳を着けさせられたけど、何だかんだで嬉しそうな表情
ではにかむ蓮華』のイラストをプレゼント！

服はロゴTシャツにホットパンツ。ちょっとパンクな現代衣装で
どうでしょう？

むしろ率先して描きたい。 が、挿絵挿入の手段が解せぬ……。

「隊長、危ないっ!!」

「つつ!?!」

声と共に風が俺を突き飛ばし、城門入口に向かって拳を振り上げる。

ぶん、と空ごと叩き割るような鈍い腕の振りが一閃すると、同時に空を斬るような鋭音がそれを迎え撃つ。

数瞬、遅れて聞こえてきたのは甲高い金属音と短い悲鳴。

それに呼応するように辺りから悲鳴が溢れ出した。

「うっわああ!?! な、なんだよこいつら、楽進將軍を一撃で!?!
? お、お助けえ!?!」

「敵だ、敵が攻めてきたんだ!! 余計なまねしたばかりに逃げ遅れちゃった!」

「凧ちゃん！」

慌てて態勢を立て直し、状況を確認しようとして振り向けば、さっきまで隠れていた茂みまで吹き飛ばされ、横たわる凧の姿とその横に全身を隠すような白い衣装を纏った……

「白装束!？」

そこには祭司のような出で立ちで真っ白な服装を身につけた人間が直立不動のまま武器を構えている。

言葉と同時に久しく感じていなかった憤りを胸に去来し、無意識にきつく歯を噛み締める。

奴らはこの世界に俺が来て間もない頃、洛陽で月と詠を人質に取った忌むべき存在。有無を言わせぬ物言いと妖術を使い、世界に騒乱の種を蒔いた謎の集団だ。

そしてなによりも、袁紹軍を裏から支配する左慈の私兵が何でここまで！

凧を吹き飛ばしたであろう白装束がゆっくりと布で巻かれた槍を掲げると、その後ろから次々と同じ服装の人間が城門に殺到し、飛び込んでくる。

視認出来るだけでも、数は三十人程度。少なく見積もっても二十は下らない人数。

どいつも顔をマスクのような布で覆い、似たような体型で区別がつきにくいのが正面のこいつだけ明らかに雰囲気が違う。

倒れ伏せた尻に構う様子もなく、ただ一人だけ違う槍の得物を後方高く掲げ、掬い上げるように穂先をこちらに向けている。

「……………」

無言であっても、焼け付くように漂ってくる気当たりは間違いない強者の証、少なくとも尻以上、思春クラスの實力者だろう。

危機感が嫌な汗とともに背筋を這い回り、脳が警鐘を鳴らす。

ここで乱戦になれば誰かが必ず傷ついてしまう！

ほとんど反射で刀を鞘から抜き放ち、慌てる三人組と二喬を庇うように前に出た。

「ここは俺に任せて城内に逃げるんだ！」

言いながら刀を峰側に持ち替え、白装束と対端する。

「つつ！…………お姉ちゃん、行くよ！」

「小喬ちゃん！？ 北郷様を置いていくなんて…………それにあの件を伝えておかないと…………」

「今はここにいたって邪魔になるだけ。おいつ！ そのボンクラ、城の中に逃げるわよ！」

「ひ、ひいいい！…！」

声を掛けられ、はっとした三人はわき目も振らず駆け出し、二喬がそれに追隨する。

小喬、理解が早くて助かるよ。

回り込もうとしていた何人かの白装束が逃げる五人に追い縋ろうと体の向きを変えた。

「そこっ!」

その一瞬の隙を狙ってこちらから斬りかかる。

八双の構えのまま縮地、思春程とはいかないが稲妻めいた速度で一の太刀を浴びせて一人目を撃破、相手が迎え撃つ前に二の太刀、三の太刀で側の白装束を仕留める。

「おおおおお!」

逃げる彼女達から白装束の注目をこちらに移そうと叫び声を上げ、更に追撃を敢行。

恋のような荒々しさで横殴りに刀を振り抜き、強引に二人纏めて吹き飛ばす。

ここまでやれば敵もこちらに対処せざるを得なく、横から隙間を縫うように白装束が迫る。

だが、気を抜けば容赦ない反撃がある事を身を持って理解していた俺は油断なく、攻撃が当たる前に回し蹴りで相手を蹴散らした。

次いで、横薙ぎ、裏拳、逆袈裟、膝打ち……

卑弥呼や女性陣に鍛えられた動きを余すことなく発揮し、全方位から迫り来る敵を無理なく対処していく。

俺はこんな時の為に自分を鍛えてきたんだ。ここで引くようなマネはみせられない。精一杯の実力を発揮するんだ。

「よし、これぐらいの実力なら持ち堪えられる。沙和！ 君は風の安全確保に行け。彼女を回収して円陣を組まれる前に脱出するんだ！」

「で、でもでも隊長一人残すなんて……」

「急げっ!!」

「は、はいなの!」

短く、わざと突き放した口調で先を促す。

持ち堪えられるなんて大風呂敷を広げた以上、ここで弱気な姿勢は見せられない。

弾かれるように泣きそうな顔で表情を引き締めた沙和は双剣を携え、敵の包囲に突撃して突破口を開いた。

風、沙和……無事に逃げ遂せてくれよ。

不安を無理矢理押さえつけ、白装束達から距離を取り様子を伺う。

今の攻防で十人程数は減らしたが如何せん数の差は圧倒的だ。

様子を見るように静かになった槍の白装束に向かう。

八双に構えた姿勢で浅く呼吸をしながらこいつらがなぜここまで来れたのか、疑問が浮かんだ。

まさか袁紹軍のやつら、休息も取らないまま攻撃を仕掛けてきたっていつのか？

それにしても西門から異常を知らせる警報は出たばかりで各方向に放った物見からも合図は出ていない。

単独潜入？ この一団だけで？ 目的は一体？

白装束は無言のまま、この場を後にしようとしている風達を無視して円を描くように隊列を組み、俺への包囲が完成する。

少なくともこっちに用があるのは間違いないな。

いつでも動けるように周囲に気を張り巡らせて呼びかける。

「おい、左慈の手先であるお前達が何でここにいる！ 目的はなんだ！」

左慈最大の目的が俺を苦しませる事である以上、直接命までは狙ってこないはず。だとしたら他に狙いがあるはずだが、そこまでは推測できない。

「……………」

無言の回答。

まあ、返事は期待してなかったけど。

以前会った時のように機械染みた受け答えしか出来ないこいつらに質問しても無駄だったか。

なら、とりあえずはこの場を切り抜ける事だけ考えるようと、握る指に力を込めたところで街の方に円陣を組んでいた白装束が動きを見せた。

割れるように左右へと囲いをずらし、ゆっくりとこちらに向かってくる一人の人物。

そいつは姿こそ他の連中といっしょだが、何かを担ぎ、目の前にいたやつと同等かそれ以上に覇気を漂わせながら指揮を執っていた白装束と並び立った。

「……………えっ？」

担がれていたのは一人の女性。

気を失っているのか、それとも万が一の事態が起こったのか身動き一つしていない。

ボロボロの服に赤い髪、触覚のように伸びた毛がだらりと垂れ下がり、生気が感じられない。

呻き声一つ上げない彼女に何かがあったのは確実。掬われるよう

な不安からあらん限りの声で叫んだ。

「恋っ！！」

天下無双で知られる恋が傷一つ無い白装束に掴まっていた。

「な、なんだこやつは！　なぜ私と秋蘭、甘寧の三人掛かりでこ
うも苦戦するのだ！！」

「油断するな、姉者。隙を見せれば矢が飛んでくるぞ」

「その通りだ、夏侯惇殿。とはいえ、このままでは街の中に入るのは事実だな」

平原の街、西門前

本陣を突破された春蘭達はすでに勝敗が決しようとしている戦いの指揮を華琳、蓮華両名に任せ、謎の集団に追いついた。

セキトを駆る恋は真つ先に追跡を成功させたが、部隊の立て直しをしてから追撃を開始した三人の前にはその動きを阻もうと白装束の一団が待ち構えていた。

「……………」

終始無言。

語る舌は持たないと主張しているかのようにもくもくと春蘭達を迎え撃つ。

「相手の戦力が未知数である以上、ここは一刻も早く街に向かわねばならぬというのにこいつは手強過ぎる。秋蘭殿、貴殿の矢でアレを抑えてはおけぬだろうか？」

「…………… そうしたいのは山々だが、その為にはもう一人の厄介な相手を無力化してもらわねば、対処できないな」

過半数を占める謎の白装束は彼女達の敵ではない。

ただ、たった二人の雰囲気異なる白装束が鉄壁のように街への帰還を阻んでいる。

一人は門に佇み、押し寄せる兵士をもともせず、幾度と無い攻撃を全て捌き切る白装束。

もう一人は街の中に身を潜め、並み居る人垣を縫うように矢を放つ白装束。

突出した実力を持つ両者によっていまだ恋以外の応援が街中へと送る事が出来ず、住人の避難が完了していない今、被害がどれほどまでに及ぶのか想像もつかない。

「くそっ！ 速くしなければ街の連中とかが危ないではないか！
そこを退け！」

「……………」

「言っても無駄か、……………ここは城内の風達を信じて確実に対処するべきだな。出過ぎるなよ、姉者」

「秋蘭！ そんなことではあいつが！」

「……………ふむ。さらりと本音が出たのは可愛いらしいが、姉者が傷ついて悲しむのはあいつだぞ。控えておくべきだ」

「ぐ、む……………」

「惚気は構わんが、両名とも気を抜くなよ。へたを打てば怪我ではすまんのだからな」

思春が呆れたように注意を飛ばし、剣を構えて何度目とも分から

ぬ交戦に身を投じる。

北郷はそれほど柔では無いからな。

無言の信頼を胸に今出来る事に専念する思春。

西門前には背丈を大きく越える槍を持つ小柄な白装束とその奥に控える弓の名手がいる。

顔は分からない。だが、どこかで感じた事のある違和感が確実に積み上がっていった。

「……………貴方様に、御用が……………あります」

後から現れた白装束は他の人物と違い、はつきりとした口調で喋りかけてきた。

女性の声か？ ようやく聞こえた声はくぐもってよく聞こえないが音域はそれなりに高い、体格を見るによっぽどの事が無い限り男ではないだろう。

ようやく話の通じる相手が出てきた事は少しだけ幸運だ。それ以上にとんでもない不運を持参してきたようだけど。

「俺に用件かい？ 随分物々しいけど名前だけでも聞かせてくれないかな」

大切な人を傷つけられた怒りを押さえつけ、油断無く間合いを計る。

くっ、少し近づかれただけで威圧感が跳ね上がってくる。まるで春蘭や恋クラスを相手にしてる時みたいだ。

何時の間にか滲み出た汗を頬を伝い、緊張の渦に巻き込まれていく。

「睨まないでください……………私は貴方様に危害は……………ああ、これが気になるのですね……………ふふっ、相変わらずお優しい方です」

ちらりと恋に視線を送り、女性が薄い微笑みを見せる。

「恋をどうするつもりだ。事と次第によれば俺は君を許さないぞ」
「……………大丈夫です。今は、命まで奪うようなまねは致しており
ませんよ。……………確認してくださいませ」

「うわっ!？」

ぶんと、投げやりに放り投げられた恋を何とか受け止める。

強大な力を持つ恋であっても女の子であるせいか、華奢な体重が
両腕に伝わってきた。

「恋、恋っ! 返事をしてくれ!」

敵の攻撃は予想されるが、構わず呼びかける。

すると謎の女性の言うとおり、微かな反応と息遣いが伝わってき
た。

良かった……………! まだちゃんと生きてくれてる。

安堵が胸を満たし深く息をつく。

長坂橋の時にように身を干切られる感覚がじんわり思い出される。

震える手足に鞭を打ち、恋をそつと地面に横たえて恋を倒したで
あろう女性と向き合う。

「目的はなんなんだ。俺に用があるなら俺だけを狙ってくれ。こ
の子達にまで手を出さないでくれ」

怒りと懇願が入り混じった口調で話しかけても女性はなぜか笑顔のまま表情を変えない。

槍の白装束を手招きすると耳元で何やら話しかけている。

「……………」

どうやら序列でもあるのか、無言で頷く槍の白装束が大人しく後ろに下がっていった。

「……………お強くなりましたね。……………随分と見違えましたよ。少し……………休息が足りていないようですが」

こちらの言葉が届いていなかったのか、淡々と、有無を言わせないように女性は語り出す。

「やはり、ご無理をなされておいでなのですね……………ああ、可哀想な御方。私であればそのようなマネなど一切……………させませんのに」

謡うように呟く様な口調にゾワリと、全身の毛が逆立った。

自然と愛刀を持つ手に力が籠る。

「愛しい、愛しい、我が君。偽りの、騙された、虚偽を中で生きていささるのですね。……………お救いしたい、ああ、私の手でこそお救いしなければ」

なぜか見ていられない。その一念が去来する。

ひどく胸が締め付けられ、さっきまでの憤りが場違いだったかのようにな縮していく。

何時からか、幽鬼のように佇む彼女の片手にはすでに得物が握られている。

あれは………偃月刀か？

柄の部分まできつく包帯が巻かれ、装飾の類や物の程度は分からないがかなりの業物なのだろう、鋭い気当たりが武器そのものから伝わってくる。

先の先。

後手に回れば押し込まれる。

感じたことの無い脅迫観念に突き動かされ、今までの訓練で導き出した動作手順が頭を疾走し、格上相手に最適な攻撃手段を導き出した。

「はあああああ！！！」

絶叫し、大上段からの袈裟斬りを見舞い、続けざまに右、左、右と切り返しと胴斬りを織り交ぜて一気に攻勢をしかける。

くっ、なんで俺はこんなにも焦っているんだ！？

なぜ、彼女からも千切られるような感覚を受けるんだ！

旋風のように連撃を放つても腕に響くのは鈍重な金属からの痺れ

のみ。一撃すら彼女には届いてはいない。

「くっ、らあああ！」

「!？」

その、攻撃が通じないという相手の隙を狙って思考外の足刀蹴り。訓練で培われた反射で攻撃を加える。

避ける動作で僅かに態勢を崩したところに刀を寝かせ、追撃の突きを繰り出す。

だが、それすらも柄の部分で逸らすように受け止められた。

なんて見切りだ。姿勢が崩れた程度じゃびくともしない。

刀が弾かれる寸前、咄嗟に飛び退き距離を取る。

「……見事です。どなたかに師事されていましたか？ 随分……動きに冴えがありますね」

やっぱりこいつも別格だ。動きの切れが違いすぎる。

「覇気に当てられたせいか、腕も不自然に重くなってきた。」

精神から来る疲労感に脚ががくつく。

責めあぐね、すり足でほんの少しだけ後退すると突然、伸びのいい叫び声がこちらに向かってくる。

その声を聞いた女性が始めて不快感を露わにした。

「……………邪魔を」

「退いている、北郷！」

叫びは城の方から。

黒髪に一房の白髪が印象的で熱血な性格をした蜀の武将。

突如現れた魏延が俺を押し退け、宙を舞うようにジャンプ。謎の女性目掛けて大金棒を打ち下ろす。

「おおりゃあああ！！」

ガツンっと、空気ごと振動させ、内臓に直接響くような振動音が響き渡る。

超重量の一撃は確実に白装束に命中した。

「なっ！？」

が、謎の女性は渾身の一撃であろうそれを 片腕 の偃月刀で止めてみせた。

「……………未熟、一撃受けられたからといって気を抜くは愚の骨頂。……………ふんっ！」

「あっ、くううう！！」

受けた偃月刀を揺り動かし、先端に柄を添えると金棒ごと魏延を地面に向かって押し込んでいく。

なんとか持ち堪える魏延だが、その圧倒的な膂力で地面が陥没、今にも押し潰されそうになっている。

その様子に煮えくり返るような思考よりも反射が勝り、彼女の元へ駆け寄ろうとしたところで三度、こちらの動きを遮るように叫びが響き渡った。

「お動き召されるなよ！ お館様、焰耶！！」

大太鼓のような大音量で撃ち出されるのは彼女の代名詞である轟天砲の乱射。

連装式によって高速で打ち出された矢が地面を次々と抉り、強襲者達を襲う。

数発は城側の白装束を撃ち据えたが、偃月刀の白装束と槍の白装束は最低銀の距離分だけ後ろに跳び退る。

「心配になって来たかいましたな。さあ、お館様。ここは我らに任せ、恋とともに後方にお下がってください」

酔の文字を描いた大きな肩当を揺らしながら歩み寄る。

「ぐっ、桔梗様の言う通りだ、貴様は下がって怪我人の世話でもしている」

ふらつく足腰でこちらに歩き、身構える魏延と再装填した轟天砲

を掲げてみせる敵顔さん。

二人とも同じように俺の前で壁になろうとしている。

「こやつが何者かは存じませぬが、戦いとあれば我らの役目。お早くお逃げ下され」

「……駄目だ。やるなら三人でないとこいつの相手は出来ない。周りの白装束も襲ってこないとは限らないだろ」

さつきまで固唾を飲むように静観していた他の白装束から微細な殺気が伝わってくる。

どうやらこちらに援軍が加わった事で敵対心を煽ってしまったらしい。

一触即発の空気が流れる最中、中央に位置しているあの白装束が溜息をついた。

「……残念です、が、ここまでですね。……三人と事を交えるつもりはありません。……不本意ではありますが、最低限の目的だけは……果たさせて、もらいます」

「消えた!？」

ぶんと、掻き消えるように白装束が高速移動。白い残像だけを残して目の前から消失した。

目で追うことは出来ても体を追いつかない。

突然、体が宙に浮き、襟元を掴まれぐいと引つ張られた。その先には謎の女性。俺は瞬く間に彼女の間合いに引き寄せられてしまった。

敵顔さんも魏延もすぐには反応できず、その場で目を疑う。

眼前まで一気に迫られた俺には為すすべも無く、抵抗すら出来ない。

引き伸ばされる時間の中で自分の死を予感し、

「むぐっ!?!?」

やられた。とそう思った瞬間、訪れたのは予想外の感触、唇に触れる生暖かい湿りが押し付けられ呼吸が止まる。

素早い勢いもそのままにむき出しの地面目掛けて押し倒された。

どさりと砂埃が巻き上がり、彼女の顔がアップになる。

いや、それだけじゃない。異変は如実に現れ、熱いうねりが俺を蹂躪する。

なぜか刺客は絡めるように舌を捻じ込んできたのだ。

「……………はア」

官能の吐息。

歯茎の裏まで嘗め回すように艶かしい舌が這いずり回る。口内を

犯し尽くすようになつとりと、丹念に。

あまりの事態にこの場にいる全員の動きが止まった。

なんだ、なんでこの人は俺にキスしてくるんだ!?

衣装のせいと逆光が強くて顔はわからない、それに頭がぼつと
して次第に焦点すら合わなくなってきた。

「こ、のお! 下郎がああ!!!」

この異常事態に正気をいち早く取り戻した巖顔さんが轟天砲を撃ちこみながら突っ込んでくる。

「おおおおお!!!」

砲に据え付けられた大剣を掬い上げるように敵へ打ち上げる。

俺のすぐ横で突風。吹き荒れる刃が殺意を持って真上を通過していった。

「ふっ」

それは嘲笑か。それとも跳ね上がった時に漏れた声なのか。

天を仰ぐように倒れこんだ俺の視界に飛んでいく彼女が映った。

「なんじゃあやつは。まるでこちらの動きを熟知しているような動きではないか」

「!?!? 桔梗様、あれを！」

呟き、警戒する敵顔が顔をしかめていると、突然、魏延が門の外を指差した。

どうも白装束全員が一齐に逃走を図っているらしいが、その先に予想外の存在が映る。

赤い毛に筋肉隆々とした体躯。巨大ともいえる体には以前、過去のいたころとは似ても似つかない面構え。

馬中の赤兎、セキトが四方から縄で押さえつけられ、拘束されている。

白装束は複数の人間で押さえつけてはいるが、嫌がるセキトは今にもその戒めを解き放とうとしているが槍を持った白装束が飛び乗ると事態が一変した。

あれほど暴れていたセキトが徐々に動きを大人しくし、やがて従うように槍の白装束と謎の女性を背に乗せる。

「……………では、後ほど見えますよう。その時、誰が貴方様に必要なのか、しっかりと判断してください」

一言投げかけ、撤退していく白装束達。

セキトの脚ならば街の包囲を楔を打ち込み、突破するのも容易だろつ。

敗北感に包まれていると、ひどく辺りが静かになった。

強かったな……。巖顔さんの腕を持つてしてもまたも攻撃を見切られ、回避されてしまった。

あれじゃあまるで、戦神が軍神クラスの動きじゃないか。

袁紹軍にあれほどの人物がいたなんて予想外だったな

霞む視界で瞼も重くなってきたのか、気が抜けた体では意識が保てなくなってきた。

ぐるぐるとかき回されたように頭が淀み、力が入らない。

「お館様？ どうなされた!？」

その異変に気が付いた巖顔さんがこちらを覗き込み、慌てたように魏延が駆け寄ってくる。

「お、おい、しっかりしろ！ 目を覚ませ！ 貴様に何かあったら桃香様が……。くっ、返事してくれよっ、お館!！」

まどろむ意識の外で魏延の呼ぶ声が聞こえる。

たぶん、だけど体に異常はないだろう。頼むからそんな泣きそうな顔をしないでくれよ。……そういうのホント苦手なんだ。

加えて頭の中、揺れる思考も一大事みたいだ。

脈打つ鼓動が今にも止まりそうになるくらい弱く振動している。

やがて目を閉じているのに関わらず視界が白く染まり、眩しい光に包まれた。

ああ、なんで

フランチェスカの風景が蘇る

んだろう。

突然の来襲に依ってもたらされるは災禍の火種

燻っていた思いは今や張り裂け、狂気に映える

凶兆はとうとう動き始めて彼を襲う

またも伏せる北郷と二喬の真意

巡る運命は再びかしんで不協和音

目覚める先には何が映る？

三十八話 白日夢の動乱 袁紹攻略戦 その四 焦がれる悪意（後書き）

なんかシリアルな雰囲気になってきたので筆者のお気に入りエロゲキャラクターのご紹介。

決して恋姫界隈の小説で一番人気の青山衛さんの後書きに触発されたわけではなく、パクッタというか、オマージュしたというか、インスパイヤしただけというか、まねしてみた。他意はないので、適当に読み流すか、飛ばしてやってくださいな。

- 1・ バットエンド一切無し。後味すつきり。
- 2・ クーデレという属性の極みを終始展開。
- 3・ 日記のシーンで泣いた。
- 4・ ヒロインは一人だけ
- 5・ じんぶ。

正解者には筆者謹製、

『焰耶とバイクのツーリングに出掛けて、海岸線を眺めながら缶

ジューズ一つを分け合う』

という妄想の権利を差し上げます。

……… あっ、そんな毛虫を見るような冷ややかな視線を浴びせな
いでっ！

三十九話 瀬戸際の動乱 袁紹攻略戦 その五 這い寄る悪意（前書き）

ちなみに前回は大どんでん返しの一回転目。

この後、三回転半ひねりの展開があるので、みんな心を強く持つんだ。

筆者との約束だぞ！

今話でアッー！ってなったらたぶんもたない。

「華佗。一刀と文醜、顔良の容態はどうなっているの」

「む。孫権か。程度の問題であれば後の二人は峠を越えている。随分厄介な病魔が巣食っていたが摘出には成功したぞ。……ただ北郷に関しては昏倒しているとしか言えないな。体に別状がない以上、いつ目を覚ましてもおおかしくないんだが」

不意の襲撃から二日が過ぎ、城内の一室に設けられた華佗の診療室に孫権がやってきた。

寝台兼治療台には文醜と顔良が規則正しい呼吸で横たわっている。

「そう。毎度ながら苦勞をかけるわね、華佗。あなたには世話になりすぎてどれだけ恩を返せば分らないわ」

「気にするな。病人の介護は俺の使命だし、それこそ望むところだ。第一、北郷は俺の友だからな。尽力を賭すのは当然だろう?」

にかつと笑い、華佗が治療を再開した。

一刀は本当に人に恵まれているのね。

彼の魅力は間違いなく、他者を救い、自らを助けていく。

今迄、積み重ねた行いが一刀を支えているのを実感した蓮華であった。

先日の戦闘。突如襲来した一万の袁紹軍は平原の街に強襲し、戦いの準備の整わぬ『北郷』へと攻め入った。

その予想外な侵攻による結果は剣呑した雰囲気を持たない蓮華からも分かるように北郷軍の勝利でこそはあったが、袁紹軍兵士の疲弊具合や策も無く兵を進めた不可解さが未だ彼女達にしこりを残している。

一般兵士はおろか、部隊長やある程度名の知れた袁紹軍の将であっても此度の侵攻を真に理解できる者がいなかったのだ。

聞けば、今の袁紹軍は完全なトップダウン型で一切の異論、反論を受け付けない姿勢を取っているらしい。

恐怖政治で国を縛り、強硬な軍略で兵達を指揮する。

変わり果てた袁紹軍と今回の侵攻に件を知るには文醜と顔良、どちらかの証言がなければ真意は読み取れないだろう。

二人の目が覚め次第、尋問を開始しなければなるまい。

一人の軍人として、王として気を引き締める蓮華であったが、やがて毅然とした態度がなりを潜め、落ち着かないように首を斜めに上げて呟く。

「それで、なのだけれど。その、一刀との面会はまだ適わないの

かしら？ いえ、事情は理解しているつもりなのだけれど、やはり最初に目を覚ました時には側に居てあげたいというか、私が居たいというか……」

もじもじと後ろ手に指を絡めて返事を待つ。

「会わせてやりたいのは山々だが、もう少し辛抱してくれないか？ 昏倒というのは以外に厄介でな、些細な衝撃で意識が戻らなく可能性が高いんだ、今は安静に寝かせておいてやってくれ」

「そ、そう……そう、よね。私なんかがいつでも邪魔なだけよね」

「いや、そういう意味ではないんだが……」

「どうせ私は自分に素直になれなくて一刀を困らせたり、皆に迷惑を掛けっぱなしですものね。そんな私が面会なんかしたら何か問題をおこすんじゃないかと危惧されるのは当然だわ。でも、でもよ。私だって時と場合はきちんと弁える事くらい可能なの。好きな相手の傍に居たいというのはそんなにも罪深い事なのかしら」

どんとんと小声になって呟く蓮華に華佗がやれやれと肩を竦めた。

一刀が倒れてから個人に差はあれど、尋ねてくる見舞い人は大概こうして彼への心配を胸一杯に抱え込んでやってくる。

今日だけでも面会希望者は10人を越え、さすがの華佗も彼女達をこのままにしておくのが可哀想になってきた。

怪我人を心配するのは当然の心情だからな、何とかしてやりたいところなんだが。

とはいえ、半端な同情で彼女だけを会わせてしまったら他の者全員に示しが見つからない。

何か良い腹案がないかと思巡し頭を捻っていると、ふと部屋の隅に置きっぱなしにしてあったある物が目に入った。

「！……………そうだ、孫権。王族にものを頼むのは気が引けるが北郷の武器を届けてはくれないか？」

「えっ!？」

突然の問いかけに蓮華が目をパチクリさせる。

華佗はこれは妙案だとばかりに片目を瞑り、言い聞かすような口調で言葉を続けた。

「俺は見ての通り治療に忙しくてな。北郷が担ぎ込まれてから彼の私物を返せず仕舞いだったんだ。いつまでもここに置いておくのもなんだし、君の手から返しておいてほしいんだが」

「で、でも一刀は面会謝絶なんですよ。渡せるのは医者である貴方が一番……………」

「……………見舞いではないぞ、だから北郷の部屋まで行っても問題無い」

「あっ……………」

「ふっ。朝方から押し寄せる連中は皆、血気盛んだったが孫権な

ら大丈夫だろう？ 騒がなければ多少長居しても構わないからな」

「ありがとう、華佗！」

「なに、俺とて医者である前に人間だ。人を心配する気持ちは充分に理解してるから礼には及ばないぞ。今の段階で厄介な症状も出ていないしもしかしたらいきなり目を覚ますかもしれないからな」

打って変わって太陽のような笑顔を零している蓮華に華佗は思いついたかのように一旦、治療の手を止めて部屋の奥で立て掛けておいた一刀の刀『恋姫無双』を手に取り、蓮華に渡した。

「ふむ……。ついででは無いんだが、さっきも言った通りここに北郷が運び込まれてからなし崩しで預かったままの状態でな、不備がないか確認してもらえるとありがたい」

渡された刀の外見上に損傷は見られないが、刀身に僅かでも歪みがあれば修理に出すべきだろう。

と言葉を続けた華佗に促され、蓮華はそつと壊れ物を扱つように鞘から刃を抜き、白刃を陽に晒す。

照り返す光に反射して輝く刀身は持ち主である一刀の本質を表わすように純粹に澄み切った光沢を放ちながら存在感を露わにしている。

何度か露を払つように素振りをすると思とした風切り音が耳に心地良い。どうやら番や刃に異常はないようだと言に注視し、両の手で握りを持ち替えた時。

「……………」

ほんの少しの違和感に首を傾げて蓮華が動きを止めた。

「どうした？ 何か破損でもあったのか？」

「あ、いや、なんでも……うん。きっと気のせいね。問題ないわ」

不審がる華佗に咄嗟に答えた。

この武器はつい先日、一刀とのデートで持たせてもらったばかりだ。この程度の違いはきっと私の勘違いに違いない。

そう結論着けて蓮華はそそくさと鞘に刀を納めた。

これはきつと勘違いだ。あの時はきつと場に飲まれて凶りそこなつたのだと意識を伏せておく。

だって一朝一夕で、刀が重くなるなんていうのは有り得ない事なのだから。

今はともかく一刀の顔を一刻も早く見たいという気持ちが彼女の中で勝ってしまった。

「それじゃあ、私は一刀の部屋にいつてくるわ。ここはお願いね、華佗」

久しぶり、といっても二日だけだが一刀との対面に蓮華が心踊らせる。

両手で刀を胸元で抱え込み、愛しげに目を細めてから出口に向かって踵を返す。

「北郷は幸せ者だな。そんなに慌てなくてもあいつは逃げないぞ」

「逃げなくても、取られる可能性があるのだから気ぐらい急いで当然よ。曹操なんか最たる例だもの」

後ろ向きながら蓮華が不機嫌になっていくのが鈍感な華佗であってもすぐに察する事ができた。

日常である名を馳せる將軍、王を巻き込んだ一刃争奪戦は平原の名物でもあったからだ。

「はははっ、俺にはよく分からんが恋敵がいるというのは大変だな。でもまあ、あまり激しく動くんじゃないぞ孫権。君は他の娘らとは違い、お腹に……………」

「うわわわわわ!!?」

まさに電光石火。突然の爆弾発言に蓮華が思い切り身体を捻り、華佗に掴みかかった。

「こ、こんなところでソレを言わないでちょうだい！ 誰かに知られてもしたらどうするのよ!」

「いけないのか？」

「駄目に決まってるじゃない!」

顔を真っ赤にして激昂する蓮華が必死になつて訴える。

過去の記憶が甦り、当然他の娘達同様かそれ以上に何度も肌を重ねたわけだが、まさか一刀発案、華佗による定期健診で子種が宿っているとは本人でさえ思わなかった。

元は民全体の病低減の政策に伴ない、試験的に行っていた診断だったがこの事実を知る者は当人である蓮華と彼女の忠実な部下、思春だけだ。

広まってしまうばどれだけの大騒動に発展するかは目に見えてい

る。「今はもつとも重要な時。この一大事に戦い以外の懸念を皆に抱かせたくないの。分かってくれるわよね」

必死な表情で詰め寄る蓮華の様子に華佗は真剣に頷く。

そんな思いから将来の夫である一刀に蓮華はこの事実を知らせたくはなかった。

浮かれて優越感に浸りたい気持ちは確かにあるが、それ以上に一刀の周りにある心地良い協調の輪を乱したくないのも本心だ。

なんだかんだで曹操とは仲が良いし、当初考えられていた魏と呉の兵士や将軍らのわだかまりも随分と和らげられている。

それでこそ、ここで世継ぎうんぬんの問題に発展しかねない事実を表出せば、両者間にヒビが入る可能性は捨て切れない。

世間や兵士の間ではいまだ北郷一刀の本質は伝わりきっていないのだから。

「それにしてもよく分かったのね。普通の医者だともっと後からつわりやらの症状が出ないと判断出来ないでしょ」

「確かに普通の検診であれば到底気付かないほどの早期発見だったな。だが俺は五斗米道の継承者だ。一目瞭然で間違いなく着床しているのを確認している」

笑う華佗。五斗米道が本当はどういったものなのか知りたくなる蓮華であった。

「おほん。では、今度こそ行ってくるわ。後はよろしく」

「ああ、任せておけ。この二人も目が覚め次第、連絡を入れるからな」

気を取り直して、一刀が眠る自室へと歩を進める蓮華。

彼女が診療室を出てから数分後、華佗は何かを思い出したかのように呟いた。

「そういえば、小さな侍女二人に北郷の服を着替えさせに行ってもらったが大丈夫だろうか？」

昏倒しているとはいえ身の回りの世話は必要だと、例外的に二名への入出許可を出していたので鉢合わせするかもしれない。

そんな華佗の予想は半刻した後、北郷一刀本人の悲鳴で正解する

事となる。

合掌。

そんなある意味で喜ばしい騒動が起きているのも知らずに平原城内の一室では北郷軍の誇る軍師一同が会し、先の戦いについて物議を交わしていた。

「……ですので実質的な軍や街への損害は皆無といってもいいでしょう。攻められた西門付近の修復は多少工期が掛かりますが今のところ深刻な問題は出ていません」

「唯一の負傷者である呂布さんも今はもう全快したとの報告が上がっていますし、不意打ちを受けたとはいえ戦果としては御の字というところですねー」

「……………一刀様を除けば、ですけど」

「「「「……………」」」」

亞莎の一言に自然と稟と風、特別に参加させてもらっている鳳統が押し黙ってしまふ。

戦闘による被害報告や復旧予定の話は着いたが不安は大きい。

戦いに勝って、勝負に負けたとはこの事だろうか。

二喬が扇動した騒動は混乱する住人の代表を一刀が説得したおかげで、目立った動きをみせなかった。

しかし戦いにこそ勝利したものの、セキトは謎の白装束によって奪われ、代償のように君主である一刀が謎の襲撃者によって床に伏せてしまい、別の意味で住人や軍部への動揺が走っている。

更に、事を起こした張本人である二喬は「北郷一刀が目覚めるまで語ることはありません」と

頑なに口を噤み、事情を説明しようとはしない。

本来であるならば尋問や拷問に掛けてまで詰問すべきだが、それは一刀の主義に反すると彼を傷つけられた事で怒り狂う華琳を皆で何とか押さえ込み、なし崩し的に後回しとされていた。

「で、でもご主人様だったらすぐに元気な姿をみせてくれるはずです。……………私はそう信じてます、から……………今はこの先を考えたほう

が良いと……うう」

鳳統が少しだけ涙目になりながら場の空気を和らげようと声を出すが、どちらかといえば申し訳なさの方が勝り、いたたまれない雰
囲気に包まれていく。

その姿に稟は率先するように息を吐いて気分を切り換える。

「ふう、鳳統殿言うとおり、我らに今出来るのは君主不在の穴を如何に収めていくかです。物的な被害についてはメドが着きました
が問題なのは心理的な方面ですね。風、あなたはどうしたらいいと思
う？」

「む……」

「悩む素振りをみせてから寝るな！」

「おおう？」

もはや伝統芸能に達しつつある突っ込みを受けて風が問いに答える。

「ふむふむ。稟ちゃんも民衆からの争いが起きないか心配なので
すね？ まあ、風も出来る事ならお兄さんに丸投げしたいのですが、
この国の不安はまだまだ根が深そうで目が離せませんねー」

いつものように妙に鋭く言葉の真意を汲み取り、風が眠そうな瞳
で愚痴った。

以心伝心とばかりに頷き合う二人にしかめ顔の亞莎が慌てて異を

唱える。

「民衆の人達からの不安、ですか？ でもそれは一刀様が解消してくれたのでは……」

彼の行動は総じて褒められたものではなかったが、あの時の混乱は確かに抑えられていたはずだ。と思っていた。

しかしながら疑問を浮かべている顔に向かって風が頭の彫像を揺らして注意する。

「ちつちつちつ。甘い、甘いぜ呂蒙ちゃんよー。そんな考えじゃお兄さんの膝は譲れないぜ」

「え、ええ？」

突然の口調の変化に戸惑う。

あくの強い人物が勢揃いしている北郷軍ではいまだ独特の空気を醸し出す人物に慣れない者も数多く存在する、

その様子に一言、凜が突っ込みを入れてから説明した。

「風の言い方はともかくとして。呂蒙殿、民の不安というものはそう簡単に拭い去られる問題ではないのです。確かに此度の働きで一刀殿が活躍したのは明白です。ですがここで暮らす住人は生まれも育ちも違う人間が数多く存在し、それだけ千差万別の思考を持つ人間が居るといふ事にも繋がります。ですからいくら脅威を排除したからといって彼ら全員が全幅の信頼を寄越してくれるとは限りません。という話になってくるでしょう」

「あつ……」

「どんなに小さくても火種は火種ですからねー。燻っていたら何時か燃え盛ってしまうかもって事です」

新興国、大陸全土から人を集めている北郷国にとって名声を得る前のこの事件は大いに留意するべき懸念だった。

「なにかもつと多少の些事では揺るがない、求心力を強固とする腹案がほしいところですねー。うむー」

「風。それは一刀殿が目覚めてからでもいいでしょう？ ……あの人自身、もつと積極的動いてもらわないと……」

取りとめの無い言葉の応酬を聞きながら、ふと亞莎は思った。

それは一刀様の本義とは異なるのではないかと。

あの方の魅力は人を惹きつける力であって自ら進んで人気取りをするようなマネは合っていない気がする。

今、天の御遣いとして大陸に台頭した北郷一刀はそれの実、本当の意味で彼らしさを損なってしまわないか。

一抹の不安を抱えるが、今の段階でそれを払拭するような妙案は彼女の頭に浮かんでこなかった。

「それはそれとして、本陣を突破した何人かの白装束さん達。戦闘力が以前桂花ちゃんから聞いていたものより随分突出してました

ねー。風ちゃん驚きで胸一杯です」

一人がビクリと過剰反応を起こしたが風は続けて己の見解を口に出す。

「華琳様や春蘭様を始めとする強固な本陣を突破する実力者はこの大陸にそうそういないはずですよねー？ 左慈さんが妖術で生み出したと言われれば、推測も何も無い話ですが、もしあの人達が知っている人物 だとしたら厄介だなーと風は思うのです」

「知っている、人物？」

「そですー。前者の妖術云々の話は実際に実現出来るなら魏を滅ぼした時に使用してもおかしくはないのです。ですが後者の場合、どうしても気になる心当たりが一件ありますよね？」

「……………」

意図してではないが全員の視線が一人の人物に注がれる。

鳳統。

蜀から使者としてまかり越した彼女は驚きよりも悲壮といった表情で深く被ったつば付き帽子を更に引っ張り俯いてしまう。

軍内部では本気で解らないといった御仁が幾人も存在するが、知恵の回る軍師一同では意見が一致しているようだった。

でも、と。

せめて間違いであってほしいと全員が思っているのもまた確かだ。

あえて考えようとしなかった事なのかも知れない。

いくら姿を偽ろうと神位の域にまで高められたあの技量。公然とした態度に思い当たるのはただ一組。

あつてほしくない、あるはずが無い。そんな胸中は彼の元に集まった全員に去来している。

無論、確たる証拠など有りはしない。動機も思い当たらない上の状況証拠のみで推測しているに過ぎないが、消去法で可能性を追っていけば自ずと答えは限られていく。

公然と決めつけないにしても、広義において国を司る彼女達にとつては十分留意すべき案件には違いない。

「あの………………。一つだけ心当たりがあるんです」

満を持して静寂を打ち破ったのはおそらく一番懸念をしていたであろう鳳統の発言。

呟きにも似た声は悲壮な色を濃く表わし、心なしか震えているようにも見える。

「心当たり…………。それはもちろん今回の件に関して、ですよね」

「はい…………。今まで他国には知られないよう緘口令を敷いていたんですが、蜀の内部ではある問題が起こっていて、それが原因、かもしれないです…………。」

確認するように稟が尋ねると伏せ目がちなながらも懸命にこちらと向き合おうと鳳統が小顔を覗かしている。

「いいのかいお嬢ちゃん。これからの発言は事と次第によっちゃあ自分達にとつて不利になるかもしれないんだぜ？ 良く考えな」

揺れる宝？を器用に動かしてわざと気を紛らわすような口調でもって話しかける風であったが、鳳統はふるふると首を振った後、意を決したように大きく深呼吸を繰り返して心を落ち着かせる。

言わねばならないのだろうと、確信を持って口を開いた。

「恋さんにも劣らない武力を持ち合わせ、戦いにおける智謀や聡明さを兼ね備えている人物。蜀の重鎮にして誰よりもご主人様との再会を待ち望んでいたあの方を……。我々は拘束していました」

「なっ！？ それはいったいどういった経緯で……」

「たのもー！！」

「！？ 誰ですか！」

それはタイミング良く、予め指し示していたかのように緊張の渦に包まれていた場の雰囲気搔き乱し、意を決した彼女の言葉を遮ってしまった。

会議の間に現れたのは黒と白のコントラスト美しい髪を持つ女性、魏延の姿だ。

事情を知らないゆえに入り口に堂々と立っていた彼女だったが中
にいる人間の冷ややかな視線を一斉に受けて一瞬ぎよっとする。

「な、なんでそんなに睨んでくるんだ？ 私はただ客人を連れて
きただけなのに……」

男勝りな性格の魏延にしては珍しい態度でたじろいだ。

稟はともかく、風や亞莎までもが恨めしげに目を細めている。唯
一、例外なのは呆けるように驚いてしまった鳳統だけだ。

「……はあ。見るからに短慮な御仁とお見受けていましたが、間
の悪さも併せもっていたとは予想外でしたね」

「はあ？ いきなり何を言い出すんだ貴様！」

わけが分からないといった口調で魏延が反発する。

「いちおうの客人である貴殿がいまさら何用ですか。この会合に
は文官にしか理解できない論議をかわしているのですよ」

皮肉めいた稟の言葉であったが、魏延は若干それを理解できな
ったのか眉間にしわを寄せながらも用件を果たそうとした。

「私はただ、ある人物の案内を頼まれたただだ。文句があるなら
その人に言ってくれ」

彼女が促されるように横方向へとずれると微かな足音が聞こえた。

「間が悪かったでしょうか、みなさん？」

音域の高い、幼さを感じさせる声が協議のために設けられた部屋に木霊する。

この間に集まった全員が入口へ注目すると、見覚えのある小柄な少女が静かに歩み寄って来た。

その人物は年端もいかないような子供のような顔立ちに小さな身長。大きく膨らみのある帽子を被っているせいか実年齢より若く見られる風貌だった。

両手を後ろ手に回し、なぜか普段の彼女とは異なる毅然とした雰囲気纏っているのは、蜀軍にその人有りと謳われた稀代の軍師であり、盟友でもある人物。

諸葛孔明、その人である。

「しゅ、朱里ちゃん！？　なんでここに……」

突然の来訪に一番驚いたのは籍を同じとする鳳統だった。

蜀軍の代表者である劉備不在の間、留守を任されていたはずの親友がなぜ遠く離れた平原まで現れたのか、一瞬理解に苦しんだ。

むしろ、つい先まで最悪の懸念を頭に浮かべていた彼女にとってはこの上ない不意打ちとなってしまうた。

「……久しぶりだね、雛里ちゃん。……もうっ、そんなお化けにでも会ったような口ぶりは止めてよ」

くすくすと、漏れ出すような含み笑いで中に入ってくる諸葛亮が苦い表情で疑問を浮かべる鳳統を諫めた。

適当な位置で姿勢を正し、張り付いた笑顔で全員に向き合う。

「北郷国軍師のみなさん。此度の戦については焰耶さんから伺いました。……大変だったようですね。粗末事を含めた痛心、心よりお察しします」

仰々しくも頭を垂れる態度はやや大げさな態度にもみえるが彼女がここにいるのが何よりも不思議で誰も指摘しようとはしなかった。

「むむむ？ 蜀でお留守番をしているはずの諸葛亮さんはなぜ平原にお越しになっっているのですかね？ 風はとても興味があります」

「ああ、それはですね……」

当然の疑問に対して返ってきたのはいちおうは理に適った言い分だった。

まず、劉備を始めとする使者の一行が帰還するまで自国の防衛にあたっていたはずの蜀軍だったが、ある日、領地を横断しようとする袁紹軍を発見。それを阻止すべくすぐさま交戦を開始したが幾ら

かが追撃を振り切り平原まで押し寄せたという今回の発端となった理由が語られ、

そして追走する蜀軍は昨日まで敵の大部分を受け持ち、鎬を削りながらここまで軍を進める運びとなつたらしい。

ならばついでに君主である北郷一刀と顔を合わせ、これからについて話しておきたい。と、本隊を国元に帰還させ、自分だけこの街にいくらかの手勢と共に目通りを願つたとの事。

諸葛亮は一切の淀みなく説明を終えると、なぜか畳み掛けるようにこれからの侵攻と協力関係についての助言と北郷国に対する崇拜を高め方の提案をした。

「参考程度でも納めておいてくれれば幸いなのですが」

「この状況を打破しうる妙案……。それはいつたい……」

偶然の一致か先を見据えていたのか、その提案は先ほどまで頭を悩ましていた問題とも合致する。聞くだけ聞いてみようという興味から臆は思わず聞き返した。

その突破口ともなりえる解決策は諸葛亮口から淡々と語られる。

「玉璽。かつては呉に保管され、漢王朝において選ばれし者しか所持を許されなかつた印を手に入れれば、低迷しかけているご主人様の求心力はより強固なものへと変換され、これからの戦果と共に民の不安は解消できると思います。私達はそのための助力を惜しみません」

それは、

それは誰のために放った言葉なのか、この後も絡めとるような口ぶりで軍師一同を納得させていく。

蜀からの北郷軍への物資及び装備の配給は勿論の事、領地の一部譲渡、難民の受け入れや実際の戦闘における指揮はこちらに全権を委ねるなど破格の提案がなされていく。

加えて袁招攻略中は最低限の連携に留め、出来るだけ両軍との接触は控えれば無用な警戒もしなくていいはずです。と心を見透かしたかのように諸葛亮が付け加えた。

当然、それを不信がる稟や亞莎であったが、これからの提案は蜀にとって首を差し出すような行為であり、万が一の事態が起こっても対処できると協議の上で判断を下した。

その後も諸葛亮は饒舌に語り続け、ほどなくして今しがた目覚めたばかりの一刀の了承も得る事となるのだが……

「……………朱理ちゃん」

彼女の親友である鳳統だけは一樣に頷く事が出来なかった。

禍根は潜まず、顔を出す

厚顔するは獅子身中の虫

二喬と蜀とそして袁

戦いは導かれるように加速して

想いと思惑、そして思慕

運命の時は間近に迫る

三十九話 瀬戸際の動乱 袁紹攻略戦 その五 這い寄る悪意（後書き）

シリアルな雰囲気疲労困憊な筆者が、お気に入りエロゲキャラクターの紹介コーナー第二回でお茶を濁すぜ！

1. 主人公
2. 守ってあげたくなくなるようなか弱い容姿が魅力的。
3. とんでも世界設定（地球が粉々、ヒロインの一人は脳みそだけ）
4. 本当はめっちゃくちゃ強い。
5. 男の娘。

正解者には筆者謹製、

『桃香といっしょにコートに包まって、二人羽織のような体勢でクリスマススイブの雪景色を眺める』

という妄想の権利を差し上げます。

……あつ、そんなミイトロンドリアを見るような冷やややかな視線を浴びせないでっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7643i/>

真・恋姫†無双 真ルート 妄想してみた。

2010年10月8日13時52分発行